

# 椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 5 —

築上郡築城町所在広末・安永遺跡の調査

1991

福岡県教育委員会

# 椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 5 —

築上郡築城町広末・安永遺跡の調査

## 序

福岡県教育委員会は、日本道路公団から委託を受けて、一般国道10号線椎田バイパス建設敷地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和61年度以降実施してまいりましたが、平成元年12月をもちまして無事現地調査完了の運びとなりましたことは、関係各位のご協力の賜であります。

本報告書は、昭和63・平成元年度に調査を実施した築上郡築城町所在の広末・安永遺跡についての調査結果を「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第5集としてとりまとめたものであります。本報告書が、文化財愛護思想の普及並びに学術研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、発掘調査にあたり多大なるご協力を頂いた地元の方々を初めとして、関係各位に深く感謝致します。

平成3年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

## 例 言

1. 本書は、昭和63年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて発掘調査を実施した築上郡築城町広末・安永遺跡の報告書であり、一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第5冊目にあたる。
2. 本遺跡は、昭和58年度に調査を行った安永遺跡と一連のものであるが、地番が異なるため広末・安永遺跡とした。
3. 遺構の実測は、笹田直美・宮尾茂子・塩田幸子・中山紀子の他に中間・小田による。
4. 遺物の復原・整理作業は、福岡県教育庁文化課甘木発掘調査事務所において岩瀬正信の指導のもとに行った。
5. 遺物の実測は、渡辺輝子・松島邦子・小田が行い、図面作成・製図は、豊福弥生・江上佳子（旧姓鶴田）・塩足里美・関久江・小田による。
6. 本書掲載の写真は遺構を小田が、遺物は九州歴史資料館の林崎新二の撮影による。
7. 挿図で使用する方位は、すべて座標北である。
8. 遺跡分布図は、昭和53年国土地理院発行の「中津」5万分の1を使用した。
9. 本書の執筆・編集は、小田があたった。

# 本文目次

## ひろすえ やすなが 広末・安永遺跡の調査

I 調査組織と調査経過	1
II 遺跡の位置と環境	5
III 遺構と出土遺物	10
1. 遺構の概要	10
2. 竪穴式住居跡	10
3. 掘立柱建物跡	21
4. 貯蔵穴	22
5. 土 壙	43
6. 落とし穴状遺構	65
7. 井 戸	69
8. 溝状遺構	70
9. 古 墳	87
10. 土壙墓	91
11. その他の遺構と遺物	93
IV 各 論	
1. 広末・安永遺跡の集落構成	109
2. 落とし穴状遺構再考	115
V 総 括	123

# 図 版 目 次

図 版 1 (1) 広末・安永遺跡周辺航空写真 (西上空から)	5
(2) 広末・安永遺跡周辺航空写真 (東上空から)	5

図版 2	(1) 水路部分空中写真 (東から)	10
	(2) 水路部分空中写真 (西から)	10
図版 3	(1) 水路東半部全景 (西から)	10
	(2) 水路東半部全景 (東から)	10
図版 4	(1) 1号住居跡 (東から)	10
	(2) 2号住居跡 (東から)	12
図版 5	(1) 3号住居跡 (東から)	12
	(2) 石包丁出土状況	12
	(3) 4号住居跡 (西から)	16
図版 6	(1) 5号住居跡 (北から)	16
	(2) 6号住居跡 (北から)	19
図版 7	(1) 1号建物跡 (北から)	21
	(2) 水路西側貯蔵穴・土壙群 (北から)	22
図版 8	(1) 1号貯蔵穴 (西から)	22
	(2) 2号貯蔵穴 (北から)	25
	(3) 3号貯蔵穴 (南から)	26
図版 9	(1) 4号貯蔵穴 (東から)	26
	(2) 5号貯蔵穴 (東から)	28
	(3) 6号貯蔵穴 (北から)	28
図版 10	(1) 7号貯蔵穴 (西から)	28
	(2) 8号貯蔵穴 (東から)	31
	(3) 8号貯蔵穴土層断面 (東から)	31
図版 11	(1) 9号貯蔵穴 (西から)	31
	(2) 10号貯蔵穴 (東から)	31
	(3) 11号貯蔵穴 (東から)	33
図版 12	(1) 12号貯蔵穴 (南から)	33
	(2) 13号貯蔵穴 (南から)	33
	(3) 13号貯蔵穴土層断面 (東から)	33
図版 13	(1) 14号貯蔵穴 (南から)	37
	(2) 15号貯蔵穴 (東から)	37
	(3) 16号貯蔵穴 (西から)	37
図版 14	(1) 17・18号貯蔵穴 (東から)	40
	(2) 1号土壙 (東から)	43

図版 15	(1)	2号土壙 (西から)	43
	(2)	2号土壙土層断面 (西から)	43
図版 16	(1)	3号土壙 (西から)	43
	(2)	4号土壙 (北から)	46
	(3)	5号土壙 (東から)	51
図版 17	(1)	6号土壙 (東から)	52
	(2)	7号土壙 (北から)	52
	(3)	8号土壙 (東から)	52
	(4)	10号土壙 (南から)	52
図版 18	(1)	13号土壙 (北から)	56
	(2)	14号土壙 (東から)	56
	(3)	16号土壙 (東から)	58
図版 19	(1)	17号土壙 (北から)	58
	(2)	19号土壙 (西から)	59
	(3)	20号土壙 (東から)	59
図版 20	(1)	22号土壙 (東から)	63
	(2)	26号土壙 (北から)	63
	(3)	27号土壙 (西から)	63
図版 21	(1)	1号落とし穴 (北から)	65
	(2)	2号落とし穴 (北から)	65
	(3)	3号落とし穴 (北から)	65
図版 22	(1)	調査区西端部全景 (東から)	65
	(2)	4号落とし穴 (北から)	65
	(3)	5号落とし穴 (北から)	68
図版 23	(1)	6号落とし穴検出状況	68
	(2)	6号落とし穴土層断面①	68
	(3)	6号落とし穴土層断面②	68
図版 24	(1)	調査区東端部全景 (東から)	69
	(2)	1号井戸 (北から)	69
	(3)	2号井戸 (東から)	69
図版 25	(1)	1号溝 (南から)	70
	(2)	3号溝 (北から)	72
	(3)	8号溝 (西から)	76

図版 26	(1)	10号溝土層断面 (西から)	78
	(2)	14・15号溝 (北から)	83
図版 27	(1)	1号墳 (南から)	87
	(2)	遺物出土状況①	87
	(3)	遺物出土状況②	87
	(4)	2号墳 (南から)	89
図版 28	(1)	1号土壙墓 (西から)	91
	(2)	2号土壙墓 (南から)	91
	(3)	3号土壙墓 (南から)	91
	(4)	4号土壙墓 (南から)	93
図版 29	(1)	暗渠 (南から)	98
	(2)	暗渠 (北から)	98
	(3)	暗渠完掘状況 (南から)	98
図版 30	(1)	1号住居跡出土土器	11
	(2)	2号住居跡出土土器	12
	(3)	3号住居跡出土土器	12
	(4)	5号住居跡出土土器	19
図版 31	(1)	1号貯蔵穴出土土器	22
	(2)	3号貯蔵穴出土土器	26
	(3)	4号貯蔵穴出土土器	26
図版 32	(1)	5号貯蔵穴出土土器	28
	(2)	7号貯蔵穴出土土器	28
	(3)	9号貯蔵穴出土土器	31
	(4)	13号貯蔵穴出土土器	33
	(5)	14号貯蔵穴出土土器	37
図版 33	(1)	16号貯蔵穴出土土器	37
	(2)	17号貯蔵穴出土土器	40
	(3)	18号貯蔵穴出土土器	40
図版 34	(1)	3号土壙出土土器	45
	(2)	4号土壙出土土器①	46
図版 35	(1)	4号土壙出土土器②	46
	(2)	5号土壙出土土器	51
	(3)	14号土壙出土土器	56



図版 35	(4)	18号土壙出土土器	58
	(5)	24号土壙出土土器	63
図版 36	(1)	2号溝出土土器	71
	(2)	3号溝出土土器	72
	(3)	8号溝出土土器	76
	(4)	9号溝出土土器	77
	(5)	10号溝出土土器	78
	(6)	14号溝出土土器	85
	(7)	15号溝出土土器	86
図版 37	(1)	1号墳出土土器	87
	(2)	2号墳出土土器	89
図版 38	(1)	1号土壙墓出土土器	91
	(2)	4号土壙墓出土土器	93
	(3)	落込み出土土器	95
	(4)	暗渠出土土器	98
	(5)	pit出土土器	102
	(6)	その他出土の土器①	104
図版 39	(1)	その他出土の土器②	106
	(2)	溝・暗渠出土青磁	78
図版 40	(1)	広末・安永遺跡出土石器①	
	(2)	広末・安永遺跡出土石器②	
	(3)	広末・安永遺跡出土石器③	
図版 41	(1)	広末・安永遺跡出土石器④	
	(2)	広末・安永遺跡出土石器⑤	
図版 42	(1)	広末・安永遺跡出土石器⑥	
	(2)	広末・安永遺跡出土石器⑦	
	(3)	広末・安永遺跡出土石器⑧	
図版 43	(1)	広末・安永遺跡出土石器⑨	
	(2)	広末・安永遺跡出土石器⑩	
	(3)	広末・安永遺跡出土石器⑪	
	(4)	広末・安永遺跡出土石器⑫	
図版 44	(1)	土壙・溝出土土錘	
	(2)	溝・暗渠出土銅製品	

## 挿 図 目 次

第 1 図	国道10線椎田バイパス路線図	.....	
第 2 図	広末・安永遺跡周辺地形図 (1/5,000)	.....	4
第 3 図	広末・安永遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)	.....	6
第 4 図	広末・安永遺跡地形図 (1/2,000)	.....	9
第 5 図	1号住居跡実測図 (1/60)	.....	折込
第 6 図	2号住居跡実測図 (1/60)	.....	11
第 7 図	3号住居跡実測図 (1/60)	.....	13
第 8 図	3号住居跡出土土器実測図 (1/4)	.....	14
第 9 図	住居跡出土土器実測図 (1/2・1/4)	.....	15
第 10 図	4号住居跡実測図 (1/60)	.....	17
第 11 図	5号住居跡実測図 (1/60)	.....	18
第 12 図	1・2・4～6号住居跡出土土器実測図 (1/4)	.....	19
第 13 図	6号住居跡実測図 (1/60)	.....	20
第 14 図	1・2号建物跡実測図 (1/60)	.....	21
第 15 図	1～5号貯蔵穴実測図 (1/40)	.....	23
第 16 図	1号貯蔵穴出土土器実測図① (1/4)	.....	24
第 17 図	1号貯蔵穴出土土器実測図② (1/4)	.....	25
第 18 図	2～4号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	.....	27
第 19 図	6～9号貯蔵穴実測図 (1/40)	.....	29
第 20 図	5・7・9・10号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	.....	30
第 21 図	10～13号貯蔵穴実測図 (1/40)	.....	32
第 22 図	12・13号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	.....	34
第 23 図	貯蔵穴出土土器実測図 (1/2)	.....	35
第 24 図	14～18号貯蔵穴実測図 (1/40)	.....	36
第 25 図	14～16号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	.....	38
第 26 図	17号貯蔵穴出土土器実測図① (1/4)	.....	39
第 27 図	17号貯蔵穴出土土器実測図② (1/4)	.....	41

第 28 図	18号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	41
第 29 図	1 ~ 3号土壙実測図 (1/40)	44
第 30 図	2・3号土壙出土土器実測図 (1/4)	45
第 31 図	4 ~ 7号土壙実測図 (1/40)	47
第 32 図	4号土壙出土土器実測図① (1/4)	48
第 33 図	4号土壙出土土器実測図② (1/4)	49
第 34 図	4号土壙出土土器実測図③ (1/4)	50
第 35 図	土壙出土石器実測図① (1/2)	50
第 36 図	土壙出土石器実測図② (1/3)	51
第 37 図	8 ~ 11・16号土壙実測図 (1/40)	53
第 38 図	5・7・9・11・13・14・16号土壙出土土器実測図 (1/4)	54
第 39 図	12・13・21・24号土壙実測図 (1/80)	55
第 40 図	14・15・17 ~ 19号土壙実測図 (1/40)	57
第 41 図	18号土壙出土土器実測図 (1/4)	59
第 42 図	20・22・23・26号土壙実測図 (1/40)	60
第 43 図	21・24号土壙出土土器実測図 (1/4)	61
第 44 図	25・27 ~ 29号土壙実測図 (1/40)	62
第 45 図	4号落し穴出土石器実測図 (1/2)	65
第 46 図	1 ~ 3号落し穴状遺構実測図 (1/30)	66
第 47 図	4 ~ 6号落し穴状遺構実測図 (1/30)	67
第 48 図	1・2号井戸実測図 (1/40)	69
第 49 図	1号井戸出土土器実測図 (1/4)	69
第 50 図	1号溝実測図 (1/80)	70
第 51 図	1・2・5 ~ 7号溝出土土器実測図 (1/4)	71
第 52 図	3号溝実測図 (1/80)	72
第 53 図	3号溝出土土器実測図① (1/4)	73
第 54 図	3号溝出土土器実測図② (1/4)	74
第 55 図	8・9号溝出土土器実測図 (1/3)	76
第 56 図	9号溝実測図 (1/40)	77
第 57 図	10号溝実測図 (1/80)	78
第 58 図	10号溝出土土器実測図① (1/3)	79
第 59 図	10号溝出土土器実測図② (1/4)	80
第 60 図	溝出土石器実測図① (1/2)	81

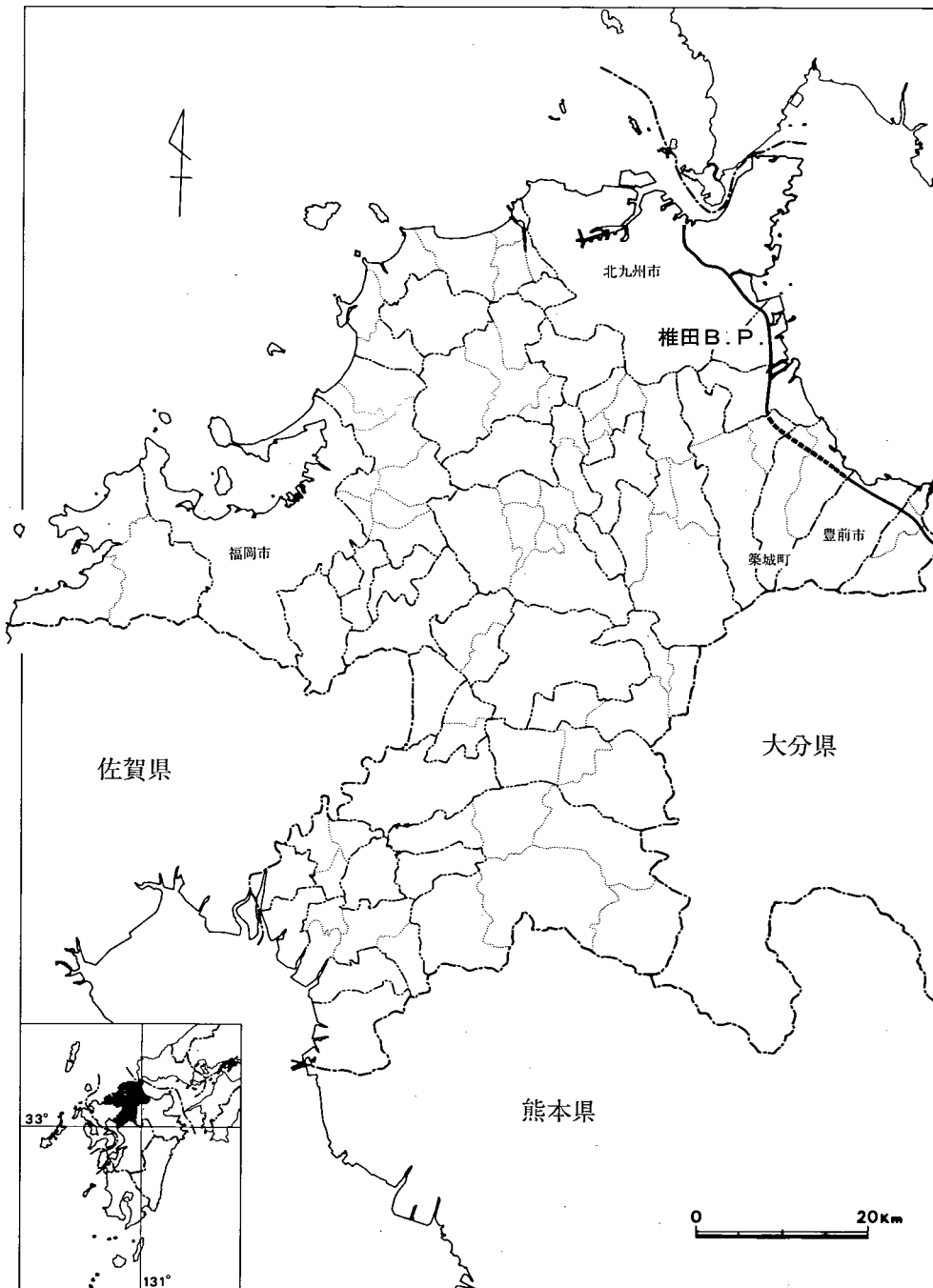
第 61 図	溝出土石器実測図② (1/3)	82
第 62 図	土壙・溝出土土錘実測図 (1/2)	82
第 63 図	11号溝出土土器実測図 (1/3)	82
第 64 図	溝・暗渠出土銅製品実測図 (1/2)	83
第 65 図	14号溝出土土器実測図① (1/3)	84
第 66 図	14号溝出土土器実測図② (1/4)	84
第 67 図	14号溝出土土器実測図③ (1/4)	85
第 68 図	15号溝出土土器実測図 (1/4)	86
第 69 図	1号墳石室実測図 (1/60)	87
第 70 図	1号墳出土土器実測図 (1/3)	88
第 71 図	2号墳石室実測図 (1/60)	89
第 72 図	2号墳出土土器実測図① (1/3)	90
第 73 図	2号墳出土土器実測図② (1/4)	90
第 74 図	1～4号土壙墓実測図 (1/30)	92
第 75 図	1・4号土壙墓出土土器実測図 (1/3)	93
第 76 図	1号階段実測図 (1/40)	94
第 77 図	1号落込み・2号階段実測図 (1/60)	95
第 78 図	1号落込み出土土器実測図 (1/3)	96
第 79 図	1・2号落込み出土土器実測図 (1/4)	97
第 80 図	暗渠状遺構実測図 (1/60)	折込
第 81 図	暗渠出土土器実測図① (1/3)	99
第 82 図	暗渠出土土器実測図② (1/4)	100
第 83 図	暗渠出土石器実測図 (1/3)	100
第 84 図	pit出土弥生土器実測図 (1/4)	101
第 85 図	pit出土弥生土器・土製品実測図 (1/4)	102
第 86 図	pit出土土器実測図 (1/3)	103
第 87 図	その他出土の土器実測図① (1/4)	104
第 88 図	その他出土の土器実測図② (1/3)	105
第 89 図	その他出土の遺物実測図 (1/3)	106
第 90 図	pit・その他出土石器実測図① (1/2・1/4)	107
第 91 図	その他出土石器実測図② (1/3)	107
第 92 図	広末・安永遺跡住居跡分類図 (1/200)	111
第 93 図	温江遺跡・門田遺跡貯蔵穴 (1/80)	112

第 94 図	広末・安永遺跡弥生時代遺構配置図 (1/1,200)	114
第 95 図	落とし穴分類図	117

付 図 広末・安永遺跡遺構配置図 (1/400)

## 表 目 次

表 1	貯蔵穴一覧表	42
表 2	土壇一覧表	64
表 3	落とし穴一覧表	68
表 4	県内落とし穴地名表	120



第 1 図 国道10線稚田バイパス路線図

# I 調査組織と調査経過

## 広末・安永遺跡の調査経過

福岡県教育委員会は、日本道路公団より委嘱された一般国道10号線椎田バイパス（豊津～椎田間10.3km）に係る埋蔵文化財の発掘調査を昭和61年度より行っている。

広末・安永遺跡（第8地点）の調査は、土取り場である広幡城遺跡（第9地点）の土砂搬出路に当たることから広幡城遺跡の調査と一部並行して行った。また、調査地内中央には、鋼鉄製の導水管が横断しており、2月末には水路工事に着手したいという公団側の要望により、西端部に未買収の宅地を含んでいたが、平成元年1月30日より調査を開始した。

水路東半部では、弥生時代の住居跡・貯蔵穴・土壇・溝、横穴式石室墳・土壇墓等を調査した。当初、16号貯蔵穴としていた遺構は、調査区を広げてみたところ、故酒井氏が調査した安永遺跡の溝の先端部に当たることが判明した。水路西半部は、水田による段カットで遺構の密度が薄く、落とし穴状遺構・ピット等を確認したに過ぎない。

4月に入っても懸案の宅地が解決しないため、作業員を赤幡森ヶ坪遺跡（第7-B地点）の方に回し、その間遺構実測等を行う。4月10日、やっと宅地の解体にかかる。作業員を再投入したのは、一月後の5月8日であった。西端部は、宅地による掘削を受け遺構の密度は薄く、落とし穴状遺構・溝・ピット等を調査した。また、調査区西側を南北に平行して走る14・15号溝は、近代に掘削されたものと判明した。1月末より調査を開始して、終了したのは6月3日であった。

### 〈調査日誌抄〉

- |       |                        |         |                   |
|-------|------------------------|---------|-------------------|
| 1月30日 | 機材搬入・テント設営、遺構検出。       | 23日     | 小田富士雄・小池史哲氏来。     |
| 31日   | 1号住居跡・1号墳掘り下げ。         | 30日     | 住居跡下層掘り下げ。        |
| 2月7日  | 水路東半の写真撮影。             |         | 本日で昭和63年度の調査終了。   |
| 15日   | 水路周辺の気球写真。             | 4月6日    | 平成元年度の調査開始。       |
| 18日   | 1/10・1/20遺構実測、1号墳実測終了。 | 8日      | 作業員を赤幡森ヶ坪遺跡に回す。   |
| 23日   | 2号墳掘り下げ。敷石のみ残存。        | 10日     | 小山田小学校生徒の見学（30数名） |
| 24日   | 昭和天皇大葬の礼。              |         | 懸案の宅地に解体着手。       |
| 28日   | 貯蔵穴・土壇・2号墳の写真撮影。       | 11日～29日 | 1/10・1/20実測。      |
| 3月2日  | 暗渠掘り下げ。                | 5月8日    | 調査再開。             |
| 10日   | 東端落込み掘り下げ。             | 31日     | 6号落とし穴のスライス調査。    |
| 21日   | 10号溝の石垣からマムシ出土！        | 6月3日    | 機材撤収、調査終了。        |

調査に当たっては、道路公団椎田事務所佐々木・山口氏、村本・岡崎共同企業体の協力を得た。また、雪の降りしきる中、黙々と作業に従事して頂いた地元作業員の方々には、心から感謝したい。特に、広末地区区長の久保正輝氏には、作業員の手配・土地所有者との交渉等多大なご迷惑をおかけしたことをお詫びしたい。

なお、広末・安永遺跡における昭和63・平成元年度の調査関係者は、次のとおりである。

#### 日本道路公団福岡建設局

局 長	杉田 美昭 (前任)	白井 信	
次 長	吉田 康行 (前任)	進 哲美	
総務部長	安元 富次 (前任)	進 哲美 (前任)	堀 義任
管理課長	副島 紀昭		
管理課長代理	三野 徳博 (前任)	荒木 恒久	

#### 日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所 長	山田 勝正 (前任)	山田 将博 (前任)	大島 勲
副所長 (事務)	佐藤 健一郎		
副所長 (技術)	国本 忠敬		
庶務課長	樫川 敏博		
用地課長	益岡 政夫		
工務課長	佐々木俊治 (前任)	飯田 文夫	
築城工事区工事長	山口 宗雄		
椎田工事区工事長	黒田 義樹		

#### 福岡県教育委員会

##### 総 括

教 育 長	竹井 宏 (前任)	御手洗 康
教育次長	大鶴 英雄 (前任)	淵上 雄幸
指導第二部長	大平 岩男 (前任)	月森 清三郎
指導第二部参事	葉石 勲 (兼任)	
文化課長	葉石 勲 (前任)	六本木聖久
文化課長補佐	平 聖峰 (前任)	安野 義勝
文化課長技術補佐	宮小路賀宏 (前任)	石松 好雄
文化課参事補佐	柳田 康雄	
同	井上 裕弘	



庶務・管理

文化課庶務係長 池原 脩二

文化課主任主事 沢田 俊夫

調 査

文化課調査班総括 柳田 康雄 (兼任)

同 総括補佐 井上 裕弘 (兼任)

同 技術主査 木下 修

同 技術主査 中間 研志 (現福岡教育事務所)

同 主任技師 伊崎 俊秋 (現京築教育事務所)

同 技 師 小田 和利 (現主任技師 調査担当)

同 技 師 水ノ江和同

同 文化財専門員 木村幾多郎

同 文化財専門員 日高 正幸

調査補助員 高田 一弘

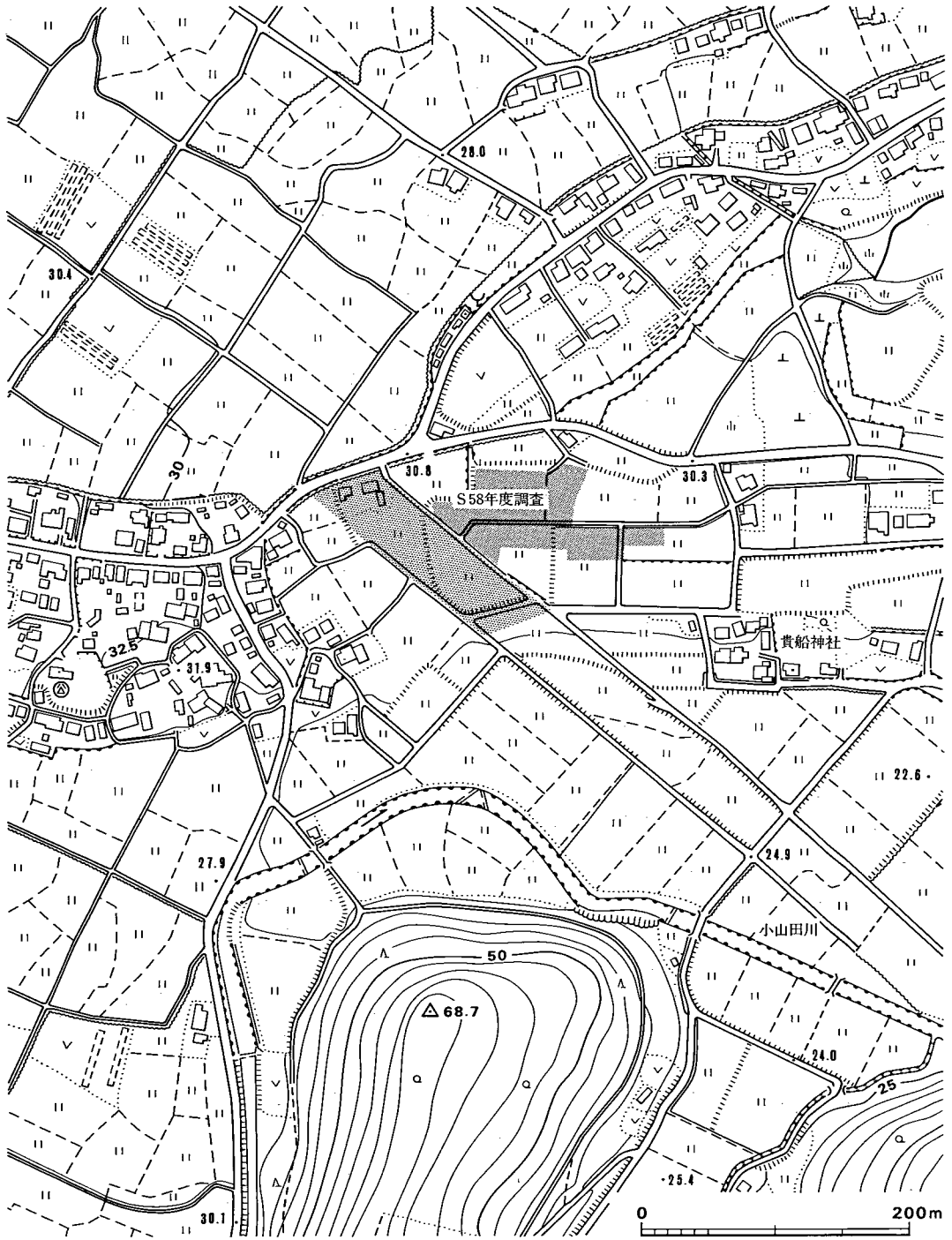
武田 光正 (現遠賀町教育委員会)

〈発掘作業員〉

久保 悟 久保正輝 塩田大一 西村徳彦 永井 守 稲田ヒサ子 稲田芳子  
稲田和子 稲田十九子 笹田明代 末永キヨ子 高橋愛子 谷中さち子 田村シズ子  
田村ナミ子 田村キヨ子 田村初子 平田綾子 平塚クニ子 平塚武子 平塚悦子  
中江スズミ 久保ミヨ子 江本ツジエ 繁永和子 笹田千代子 笹田直美 宮尾茂子  
塩田孝子 塩田テッ子 塩田幸子 中山紀子

出土遺物の復原整理作業は、福岡県教育庁文化課甘木発掘調査事務所において岩瀬正信整理指導員の下に中塩屋リツ子・西奇子・小島佐枝子・石井紀美子・尾花道子・藤井カオルさんが行った。遺物の写真撮影・焼付けは、九州歴史資料館石丸洋・林崎新二・内本浩子氏の手を煩わせた。遺物実測・製図作業は、渡辺輝子・松島邦子・豊福弥生・江上佳子・塩足里美・関久江氏の多大なる協力があった。

本報告書作成に当たり、福岡大学小田富士雄氏、小郡市教育委員会速水信也氏、福岡教育事務所中間研志・小池史哲氏、北九州教育事務所馬田弘稔氏、京築教育事務所伊崎俊秋氏、松下辰章氏、福岡県文化課柳田康雄・井上裕弘・木下修・高橋章・日高正幸の諸氏には有益な御指導・御教示を得た。末筆ながら、記して感謝致します。



第 2 図 広末・安永遺跡周辺地形図 (1/5,000)

## II 遺跡の位置と環境

### 遺跡の位置

広末・安永遺跡は、福岡県築上郡築城町大字広末481～484・496～502番地他に所在する。

当遺跡は、城井川と小山田川に挟まれた丘陵の突端部に位置し(標高32.5m)、平地との比高差は3.7mを測る。

築城町は、福岡県の東部に位置する人口約12,000人・面積約67.9km<sup>2</sup>の農林業を主体とする町である。町域は南北に細長く、東縁は椎田町・豊前市に接し、西縁は豊津町・犀川町と接している。その大半を山間地が占めているため、人口は北側の平地部に集中している。国道10号線・J R 日豊本線が町域の北端をかすめ、航空自衛隊築城基地が行橋市・椎田町・築城町にまたがり、終日F15イーグルが爆音を響かせている。

犬ヶ岳(1130m)・経読岳(992m)・雁股山(807m)・瓦岳(624m)・大平山(597m)と連なる英彦山・犬ヶ岳開析溶岩山地は、八手状に海岸部へ進展し、海岸部に近接するに従い高さを減ずる。その山地間には祓川・城井川・岩丸川・極楽寺川・真如寺川・角田川・佐井川・山国川等の侵食作用により形成された細長い谷底平野がよく発達しており、この地域特有の景観を呈する(註1)。

### 歴史的環境

築城町において本格的な発掘調査がなされたのは、昭和57・58年度に農業基盤整備事業に伴う安永遺跡(註2)の調査が最初であり、今回の椎田バイパス建設に伴う一連の発掘調査の成果は、これまで不明瞭であった築城町・椎田町の歴史解明に一石を投じるものとなった。

ここでは、椎田バイパス関係の遺跡を中心に紹介していきたい。

広末・安永遺跡(第8地点)は、昭和58年度の調査により、弥生時代中期前半の集落跡と判明していたが、今回、終末期の横穴式石室墳・奈良時代の土壙墓、それに縄文時代の所産と考えられる落とし穴状遺構が新たに検出された。特に、落とし穴状遺構の発見は、京築地方において初めてのものとして注目される。

築城インターとして調査を行った安武土井の内遺跡(第6-A地点)・安武深田遺跡(第6-B地点)は、城井川左岸の河岸段丘上に位置し、両遺跡は谷部を隔てている。安武深田遺跡は、弥生時代後期初頭と古墳時代後期の二時期を主体とする集落跡である。弥生時代の遺構としては、竪穴式住居跡10軒・土壙墓4基・甕棺墓1基・井戸2基が検出された。50号住居跡からは東部瀬戸内より搬入されたと考えられる土器群の出土をみた。古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡70軒・掘立柱建物跡34棟・土壙1基・溝等が調査された。また、谷部からは、弥生時



第 3 図 広末・安永遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- |            |            |            |            |          |
|------------|------------|------------|------------|----------|
| 1 双子池遺跡    | 9 山崎遺跡     | 17 葛城遺跡    | 25 幸山古墳群   | 33 丸山経塚  |
| 2 安武土井の内遺跡 | 10 小久保屋敷遺跡 | 18 小原遺跡    | 26 王子ヶ迫古墳群 | 34 原井経塚  |
| 3 安武深田遺跡   | 11 寺尾遺跡    | 19 下清水遺跡   | 27 後谷古墳    | 35 赤幡城跡  |
| 4 塞ノ神遺跡    | 12 中後ヶ谷古墳群 | 20 横井塚古墳群  | 28 後谷池古墳   | 36 釜倉城跡  |
| 5 赤幡森ヶ坪遺跡  | 13 菜切古墳群   | 21 安永古墳群   | 29 合木横穴群   | 37 小山田城跡 |
| 6 十双遺跡     | 14 石町遺跡    | 22 火箱古墳群   | 30 小原横穴群   | 38 馬場城跡  |
| 7 広末・安永遺跡  | 15 笠山遺跡    | 23 堂がへり古墳群 | 31 石堂古墳群   |          |
| 8 広幡城遺跡    | 16 西高塚遺跡   | 24 朝日寺古墳群  | 32 六十六塚遺跡  |          |

代後期の祭祀土器や石器類が、奈良時代のものとしては、木簡・墨書土器の他、木製農工具・杭等が多量に出土している（註3）。特に、木簡・墨書土器の発見は、豊前国府との関連を窺わせる貴重な発見となった。また、安武土井の内遺跡からは、弥生・古墳時代の住居跡、落し穴状遺構30基が調査され、両者は同一遺跡として捉えられよう。

料金徴収所として調査を行った赤幡森ヶ坪遺跡（第7-B地点）は、城井川の氾濫源に形成された古墳時代後期から奈良時代にかけての大集落跡で、竪穴式住居跡105軒・掘立柱建物跡16棟・鍛冶遺構3基が重層的に検出された。住居跡の内には、竪穴のコーナー部にカマドを付設したものがある。出土遺物には、石帯・緑釉陶器・製塩土器・銅鏡・瓦・土製模造鏡等があり、注目される。また、住居跡群下層の谷状遺構からは、弥生時代後期中葉～終末の土器群の一括投棄がみられ、その出土量はパンコン300箱にも上る（註4）。

十双遺跡（第7-C地点）は、赤幡森ヶ坪遺跡に東接する遺跡で、縄文時代後期から奈良時代にかけての複合遺跡である（註5）。縄文時代の住居跡は検出されていないものの、付近に同時期の集落を想定できる。当遺跡の主体は、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の31軒からなる集落跡で、9号住居跡からは銀製の帯状金具が、13号住居跡からは瓦質の漢式土器が発見され、朝鮮半島と交流があったものと推測できる。また、住居跡の分布状況からみて、当遺跡と赤幡森ヶ坪遺跡は一連のものと考えられ、当地における母村的な集落と目される。

広幡城遺跡（第9地点）は、小山田川と岩丸川に挟まれた丘陵突端部（標高60m）に位置し、宇都宮氏が黒田氏の攻撃に激しく対抗した中世山城として知られていた。今回の調査対象地区は、本丸全域と二の丸の一部に当り、防御のための土塁と濠を巡らしている。また、本丸の周辺では、弥生時代前期の住居跡・貯蔵穴も検出している（註6）。当地特有の八手状の丘陵には、宇都宮氏関係の山城が多く築城され、広末・安永遺跡が立地する丘陵にも赤幡城が占地している。

山崎遺跡（第10地点）は、岩丸川の右岸に位置する。縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、縄文時代後期の住居跡・土壇、古墳時代～奈良時代にかけての竪穴式住居跡・掘立柱建物跡、13C後半の掘立柱建物跡群・柵列等の調査がなされた（註7）。当遺跡は、昭和62年度に椎田町浄水場建設に伴い調査された石町遺跡と一連の遺跡で、石町遺跡の4号土壇からは土隅の胸部破片が出土した（註8）。

石堂中後ヶ谷古墳群（第21地点）・菜切古墳群（第22地点）・頭無古墳群（第23地点）は、石堂川と上の河内川に挟まれた丘陵の先端部に位置する古墳時代終末期の群集墳である。

石堂中後ヶ谷古墳群では、16基の古墳が調査された。墳形は5～10m程の円形を呈し、石室は南東方向に開口する単室の両袖横穴式石室である。羨道部は、ハ字形に開き、その前面には外護列石を設けているが、墳丘を全周するものではない（註9）。

菜切古墳群では、6基の古墳が調査された。墳形は石堂中後ヶ谷古墳群同様、5～10m程の円

形を呈し、石室は南東方向に開口する単室の両袖・無袖横穴式石室である。羨道部は、ハ字形に開き、その前面のみに外護列石を設けている(註10)。

当地方の八手状丘陵の先端部には、古墳時代後期になると多数の群集墳が築造される。築城町においては、後谷古墳・辛山古墳群・王子ヶ迫古墳群・横井塚古墳群・安永古墳群・堂がへり古墳群・朝日寺古墳群等が存在していたが、近年の田畑造営や宅地開発に伴いその大半が未調査のまま消滅したことは悔やまれる。

椎田バイパス関係の一連の発掘調査も遺跡破壊を前提としたものであるが、当地の縄文時代から中世に至るまでの貴重なデータを提供してくれた事を感謝したい。それら出土資料を如何に活用するかが、今後の課題といえよう。

註1 福岡県 1970 土地分類基本調査 中津5万分の1

註2 築城町教育委員会 1984 安永遺跡(築城町文化財調査報告書第1集)

註3 平成2年度報告予定。調査担当者の木下・水ノ江氏の御教示による。

註4 1989年に福岡県教育委員会が調査を実施。現在、整理中で、平成3年度の報告予定。

註5 1988・89年に福岡県教育委員会が調査を実施。現在、整理中で、平成3年度の報告予定。

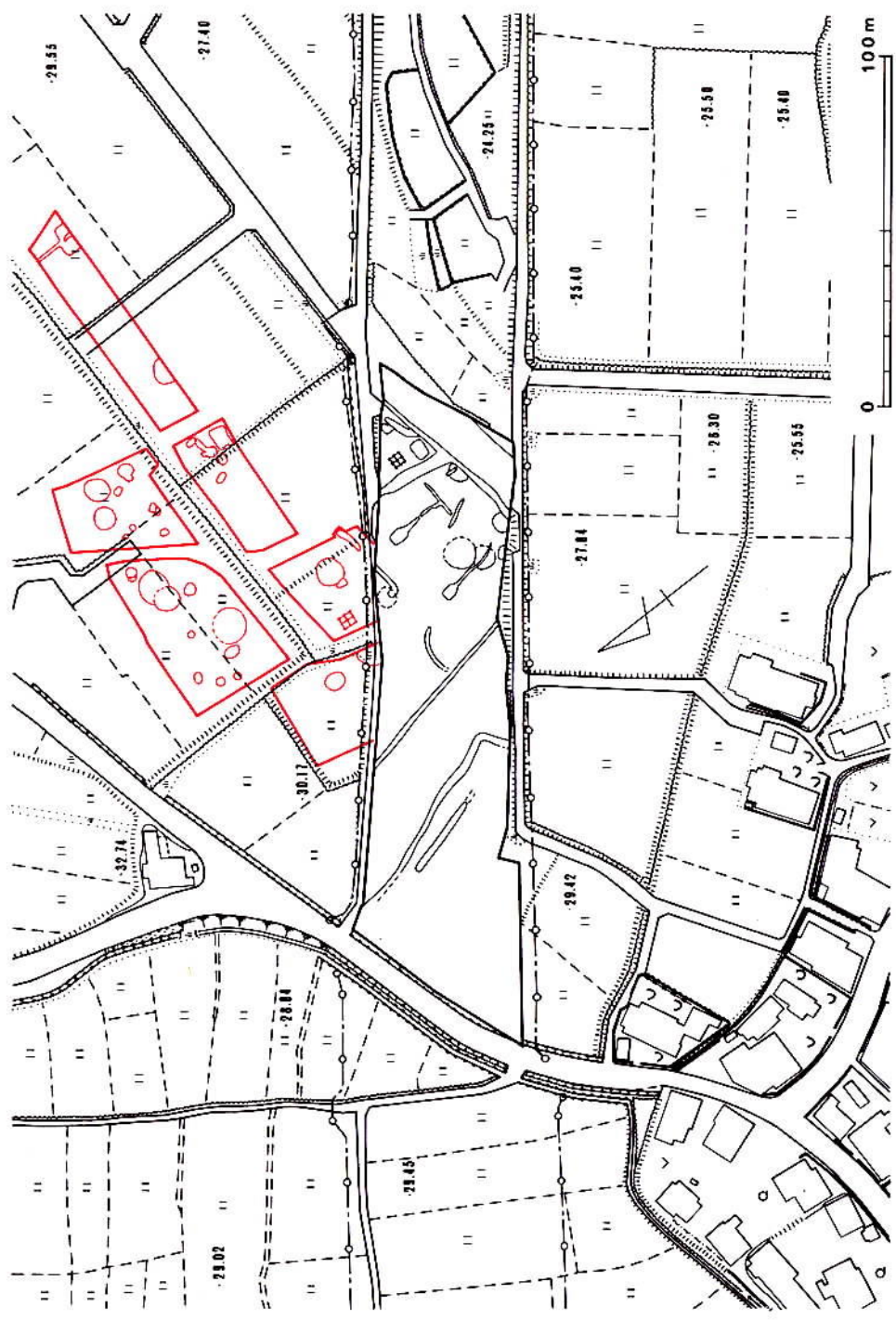
註6 1988・89年に福岡県教育委員会が調査を実施。現在、整理中で、平成3年度の報告予定。

註7 1987年に福岡県教育委員会が調査を実施。現在、整理中で、平成3年度の報告予定。

註8 椎田町教育委員会 1988 石町遺跡(椎田町文化財調査報告書第1集)

註9 福岡県教育委員会 1990 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-2-

註10 註9に同じ。



第 4 図 広末・安永遺跡地形図 (1/2,000)

### Ⅲ 遺構と出土遺物

#### 1. 遺構の概要

##### [昭和58年度の調査概要]

昭和58年度の調査は、農業基盤整備事業により削平される部分をⅠ～Ⅴ区の調査区に分けて実施した(註1)。検出した遺構は、弥生時代中期初頭～前半の住居跡9軒・土壇165基(貯蔵穴・pitを含む)・溝、中期中葉の甕棺墓1基、多数のピットである(註2)。出土遺物には、石鏃・石斧・石剣・石包丁等の他に土錘・土製円盤がある。また、土壇の中には、貯蔵施設―貯蔵穴としてよいものがあり、一軒の住居跡と数基の土壇とでセットをなすものと考えられる。

##### [昭和63・平成元年度の調査概要]

昭和63・平成元年度の調査は、椎田バイパス路線部分である県道(豊津椎田線)からSTA 47+60のカルパートボックス間(長さ約170m・幅約45m、調査面積約7,600㎡)を実施した。調査以前は水田・畑地・宅地であり、調査区を南北に横断する水路周辺の三角地帯が最も高く、その両端は後世の掘削により段階状に下がる。

検出した遺構は、住居跡6軒、建物跡2棟、貯蔵穴18基、土壇29基、落とし穴状遺構6基、溝15条、井戸2基、横穴式石室墳2基、土壇墓4基、落込み状遺構、暗渠等である。出土遺物には、石鏃・石斧・石剣・石包丁・砥石・くぼみ石等の石器の他に土錘・石製垂飾品がある。また、青磁や五輪塔が出土していることから、それらの時期の遺構が存在していたものと思われる。

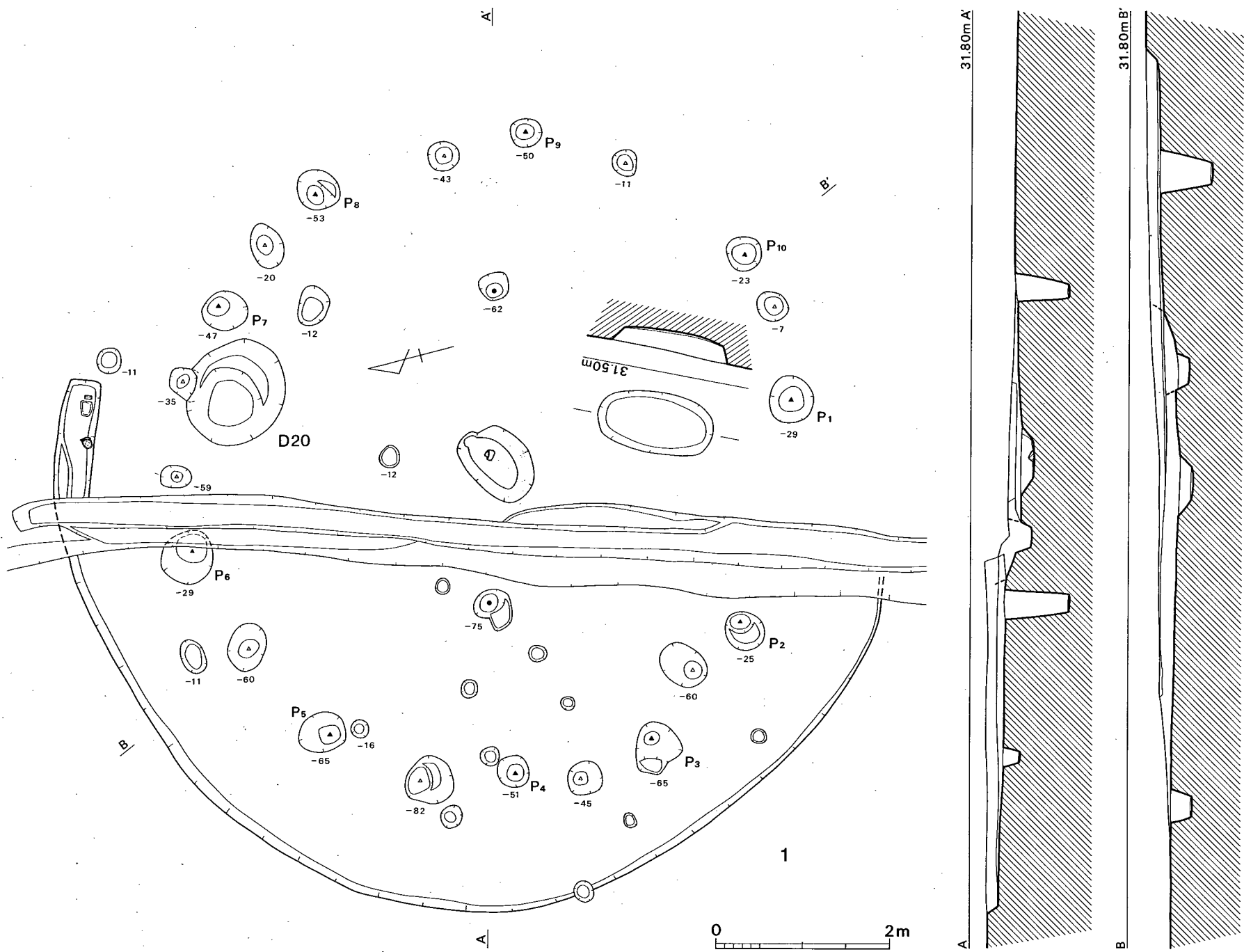
#### 2. 竪穴式住居跡

##### 1号住居跡(図版4-1, 第5図)

水路の東側に位置する大型の円形住居跡である。住居跡の中央に現代の小溝が走り、それより東側は、柱穴を残すのみ。南北径9.6m、深さは西側で13cmとかなり削平を受けている。P1～10が主柱穴で、各主柱穴の中間にあるピット(△印)が補柱穴と考えられ、柱穴は腕が届く深さ(60cm程)掘っている。

炉址は住居跡の中央にあり、長さ96cm・幅68cm・深さ15cmを測る。炉址内には炭・焼土が多く入っていたが、周壁はあまり焼けていない。また、炉址を挟んだ一対のピット(●印)は、棟持ち柱の柱穴であり、補柱穴がないP1-2間を入口部に想定できる。また、貼床を剥したと



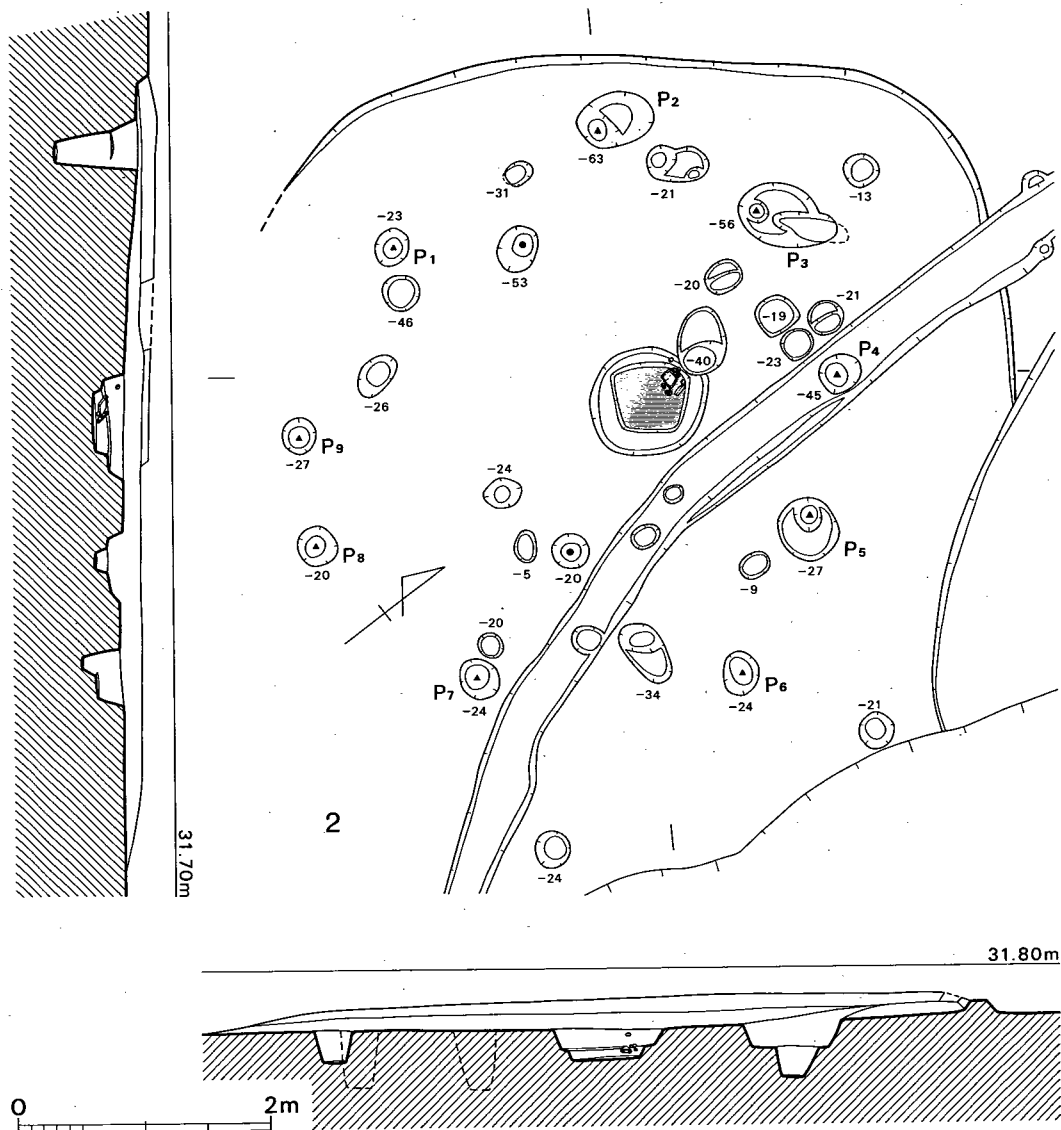


第 5 图 1号住居跡実測図(1/60)

ころ、下部遺構は存在せず、20号土壌を検出した。遺物は、土器小片が出土したにすぎない。

出土遺物 (図版30-1・40-3, 第9・12図)

土器 (1・2) 1は甕の口縁部小片で、肥厚することなく屈曲する。胴部に断面コ字形の凸帯を貼付する。内外面とも黄白色を呈する。2は底径8.0cmを測る甕の底部片で、黄白色を呈することから1と同一個体の可能性がある。住居跡の時期は、弥生時代中期前葉であろう。



第6図 2号住居跡実測図 (1/60)

石器 (1) 1は大型石包丁の半欠品である。紐掛けの孔はみられない。残存長9.5cm, 幅8.3cmで、凝灰岩製。刃部は鋭い。

## 2号住居跡 (図版4-2, 第6図)

1号住居跡の南西に位置し、東壁を1号住居跡に切られる。2号住居跡も削平を受け、北壁と西壁を残すのみである。平面形は隅丸方形を呈し、一辺6m程になろう。P1~7が支柱穴で、深さは20~60cm程である。

炉址は住居跡のほぼ中央にあり、二段に掘っている。90cmの円形を呈し、深さは25cmである。炉址内には炭・焼土が多く入っていたが、周壁は余り焼けていない。炉址からは丸石が出土したが、焼けていない。また、炉址南側の●印を付したピットが棟持ちの柱穴で、P8・9は入口部に関する柱穴であろう。遺物は、埋土中より土器が出土した。

## 出土遺物 (図版30-2, 第12図)

石器 (1~3) 1の頸部はよく締まり、口縁部はく字形に立上がる。肩部には張りがみられ、胴部はかなり膨らむようである。甕と言うよりは無頸壺とした方が妥当であろう。復原口径22.6cmである。焼成は良好で、内外面とも暗赤褐色を呈する。2は復原底径5.8cmを測る壺の底部片である。胎土に1~2mm大の長石・石英・角閃石を含む。3の復原底径は9.4cmで、甕の底部になろう。胎土に雲母粒がみられる。住居跡の時期は、弥生時代中期前葉であろう。

## 3号住居跡 (図版5-1・2, 第7図)

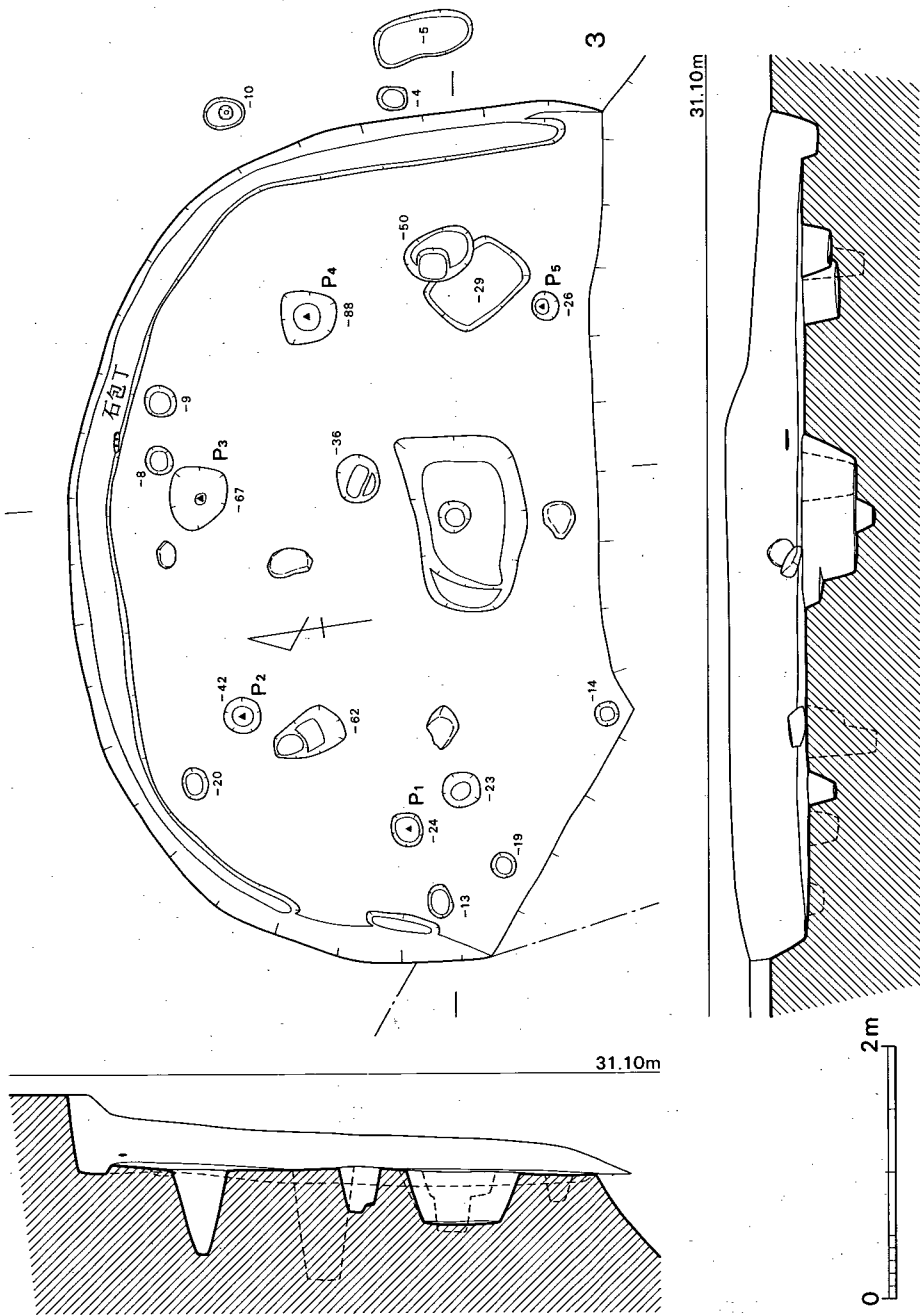
1号住居跡の8m南側に位置する。東西径6.7mの円形を呈し、南半分は後世に掘削されているものの、北壁は55cmと深い。P1~5が支柱穴で、8本柱の住居跡になろう。柱穴の深さは20~80cm程である。住居跡の中央にあるのは炉址ではなく、当住居跡に伴う土壌で、長さ140cm, 幅90cm, 深さ42cmを測る。西側にステップを有し、床面中央に深さ12cmのピットがある。床面と同じレベルで石製垂飾品 (第9図-3) が出土した。

周溝は住居壁を一周せず、コ字状を呈する。周溝埋土中より砥石が、やや浮いた状態で石包丁が出土した。

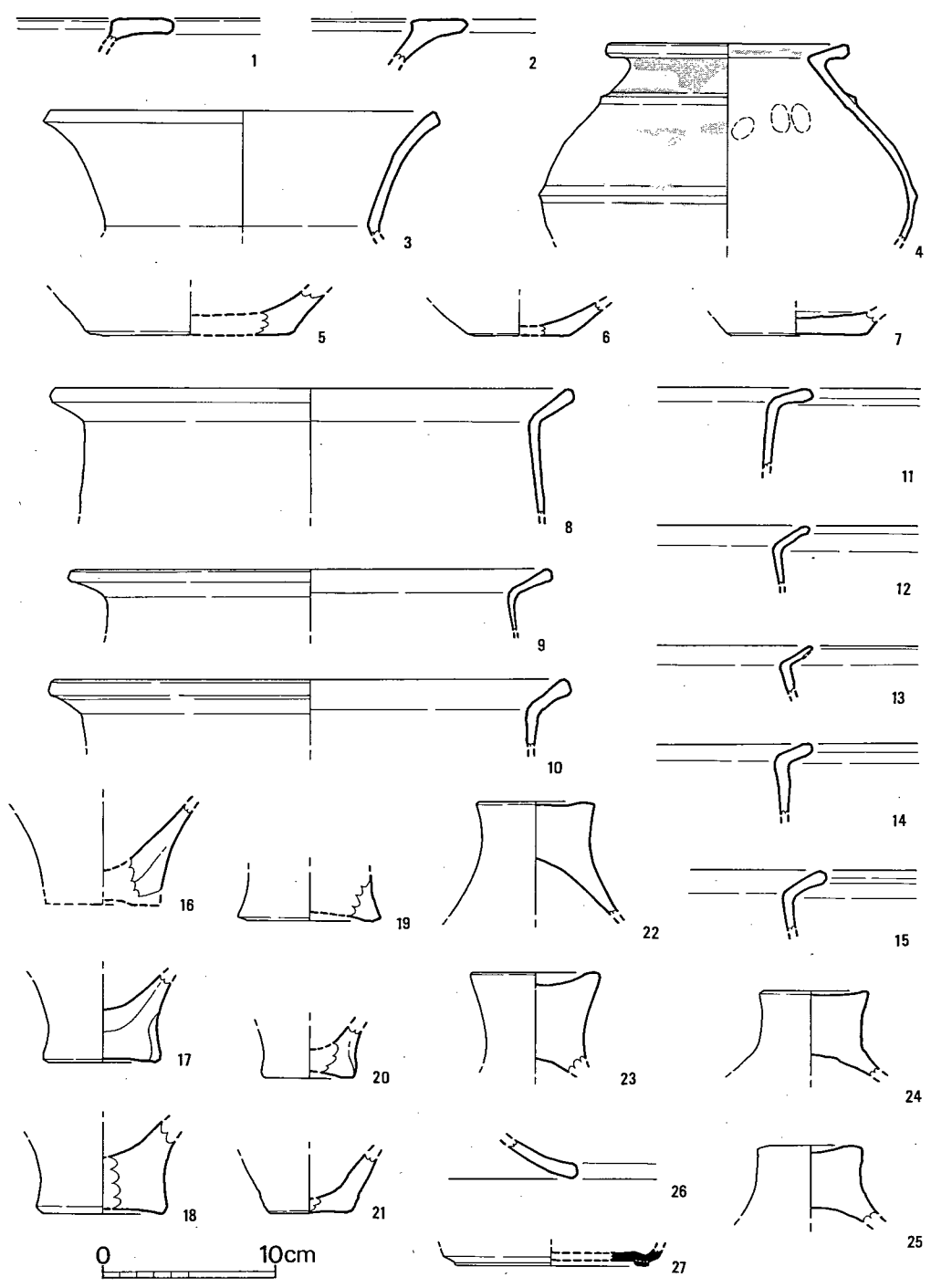
## 出土遺物 (図版30-3, 40-1・3, 41-2, 42-1・3, 43-3, 第8・9図)

石器 (1~27) 1~7は壺である。1・2は平坦部を有する口縁部小片であるが、まだ内側へは突出しておらず古い様相を呈する。胎土は、砂粒を含むものの概して良好である。3は広口壺で、口縁部はラッパ状に大きく開く。口唇部は強くナデられる。復原口径は23cmである。胎土に長石・石英・角閃石・赤褐色粒を含む。

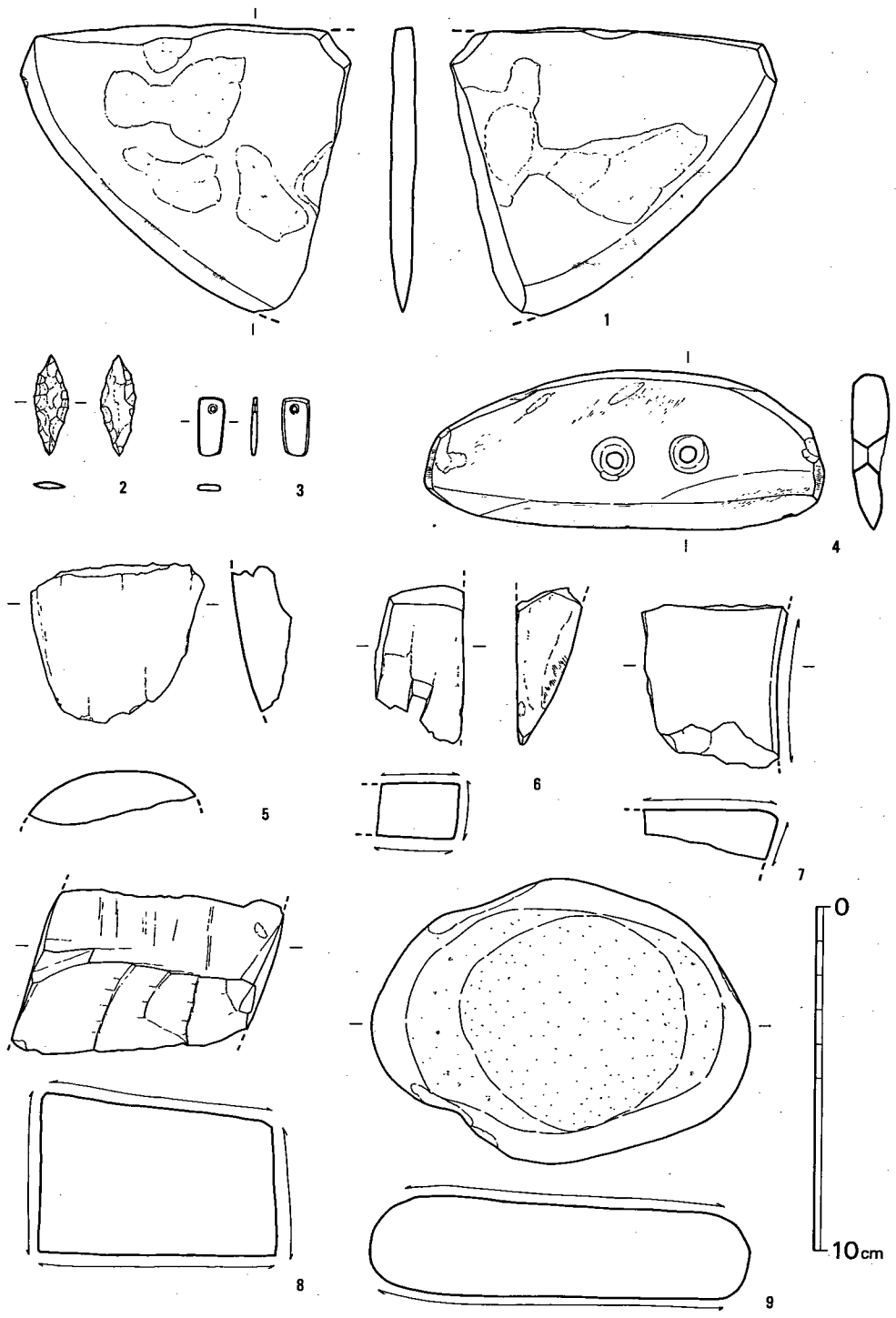
4は丹塗りの無頸壺で、残高11.3cm・復原口径14.2cm・胴部最大径21.6cmを測る。口縁部は内側に低く傾斜し、逆L字状を呈する。頸部はよく締まり、相対的に胴が膨らむ。頸部のやや下



第 7 图 3号住居跡実測図 (1/60)



第 8 图 3号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 9 图 住居跡出土石器实测图 (1/2·9は1/4)

位と胴部最大径の部位に三角凸帯を貼付している。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成はやや軟質である。5～7は平底の底部片である。色調は5が暗黄灰褐色、6は灰褐色、7は暗茶灰色を呈する。

8～19は甕である。8～15は口縁部破片で、く字状を呈する。復原口径は8が30.4cm、9は28.2cm、10は30.4cmを測る。何れも器面の摩滅が著しく、調整は不明。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。16～19は底部破片で、17～19は若干の上底である。17は底部の成形状況が判る資料で、復原底径は6.8cmを測る。20・21も底部資料であるが、底径が5cm程と小さく、小型の甕もしくは壺になるか。22～25は甕の底径よりやや小振り、器肉が厚く、外反していることから蓋の撮部であろう。26は蓋の口縁部破片である。胎土に長石・石英を多く含む。27は須恵器の坏で、低い高台が付く。混入品。住居跡の時期は、弥生時代中期初頭～前半であろう。

**石器**（2～9） 2はサヌカイト製の石鏃で、柳葉形をなす。長さ2.9cm、幅1.0cm、重さ0.65gを量る。3は長方形を呈し、上方に0.15cmの孔を空けた蛇文岩製の垂飾品である。長さ1.7cm、幅0.75cm、重さ0.5g。4は凝灰岩製の石包丁であり、ほぼ中央に両面穿孔の二孔を有する。長さ11.5cm、幅4.5cm、重さ73.3g。5は蛇文岩の石斧片。6は柱状片刃石斧片で、頁岩製か。

7・8は砥石で、7は花崗岩系の粗砥石で、8は頁岩製の仕上げ砥石である。9は床面出土の台石で安山岩製である。両面とも研磨しており、作業台として使用したのであろう。

#### 4号住居跡（図版5-3、第10図）

1号住居跡の16m北側に位置する。住居壁・炉址は削平されて存在しないが、ピットが円形に配されていることから住居跡とした。この部分は、既に調査済みであったが、昭和58年当時の状態でピットや遺構実測用の割付釘が残っており、安永遺跡と広末遺跡の接点となった。3号溝と切合い関係にあるが、何れが前後か不明。

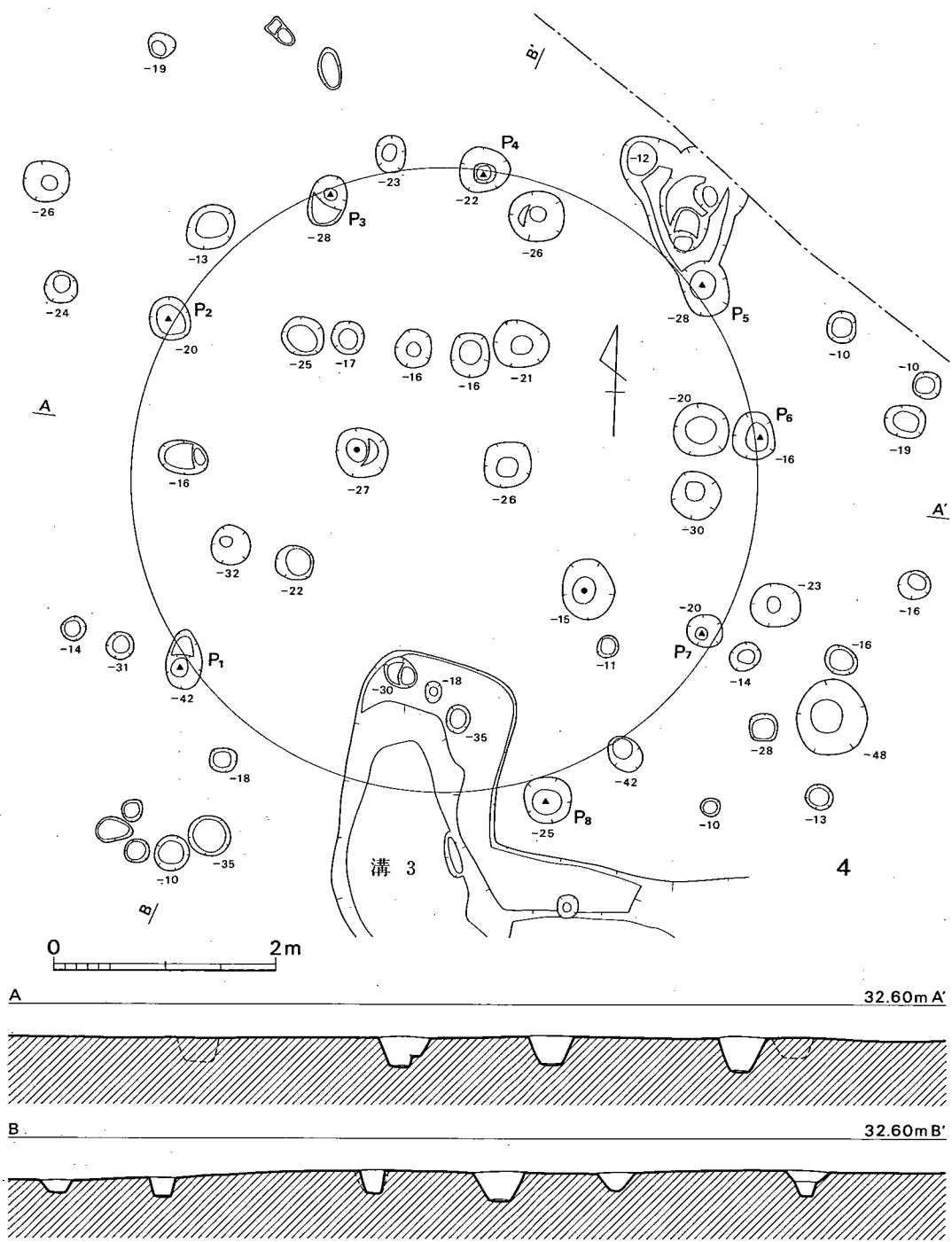
主柱穴はP1～8で、深さは20～40cm程度である。●印を付したピットが棟持ち柱と考えられ、P1～8間は3.5mと広いが入口部になろう。住居跡の規模は8m前後か。

#### 出土遺物（第12図）

**土器**（1・2） 1・2は甕である。1は口縁部を欠くが、頸部下に三角凸帯を貼付し、凸帯間はユビナデされる。焼成は良好で、内外面とも黄褐色を呈する。2は底部片であり、復原底径7.0cmを測る。底部は上底で、二次加熱による赤変部がみられる。胎土に長石・石英・角閃石を含むものの概して良好である。住居跡の時期は、弥生時代中期前葉か。

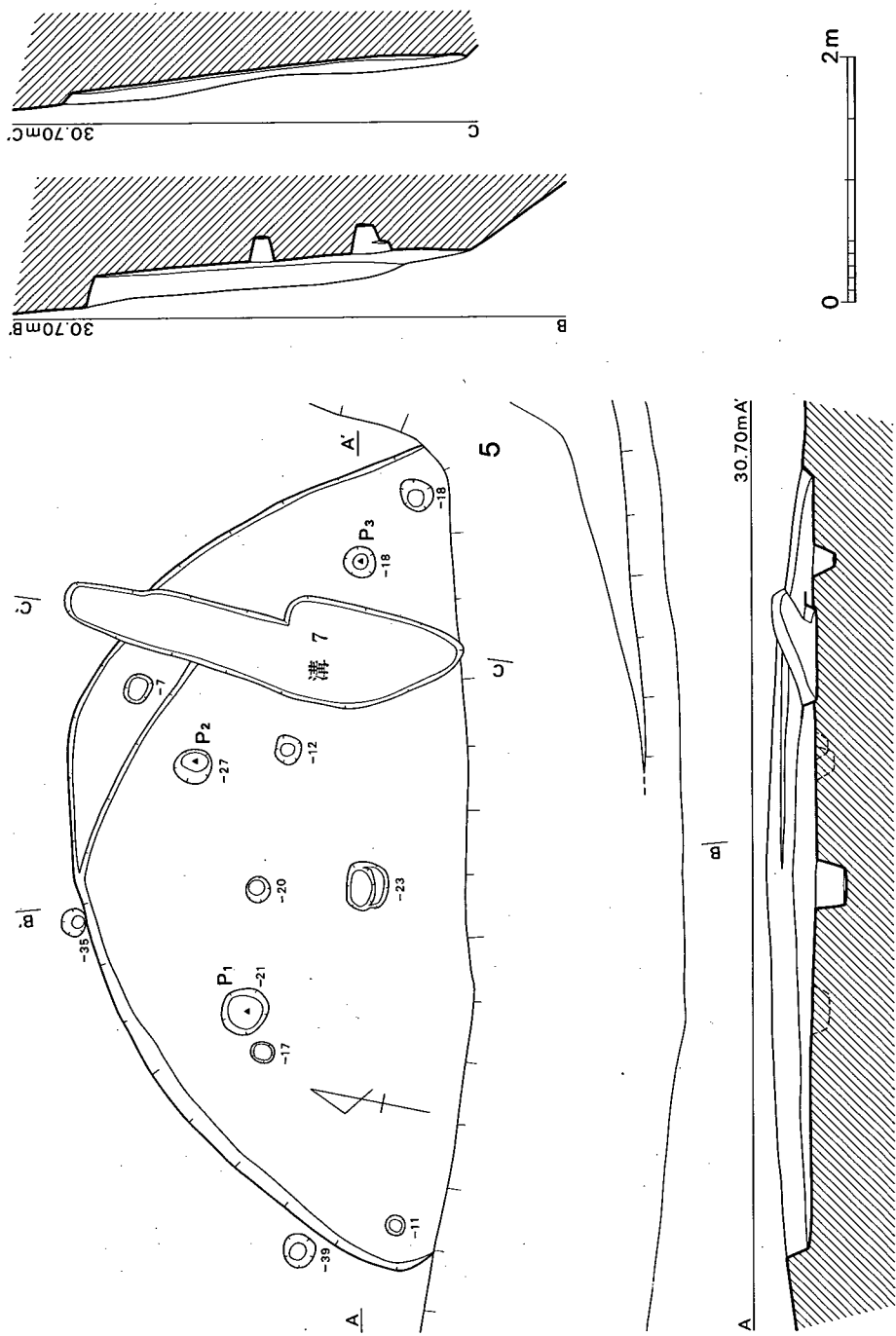
#### 5号住居跡（図版6-1、第11図）

3号住居跡の14m東側に位置し、7号溝に切られる。住居の南半は後世の掘削により存在しない。平面形は隅丸方形を呈し、一片6m程の規模になろう。北壁側に10cmの浅い段が付く。柱穴



第 10 图 4 号住居迹实测图 (1/60)





第 11 图 5 号住居跡実測図 (1/60)

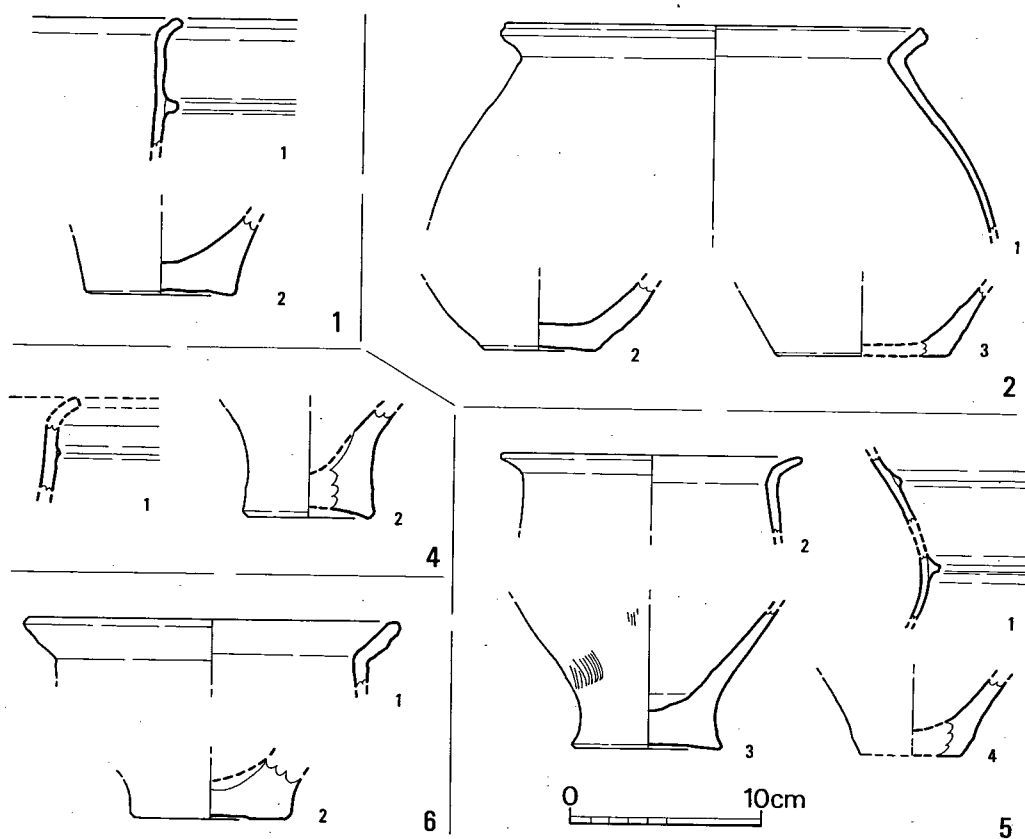
は▲印を付したP1～3で、深さは20～30cm前後である。炉址は不明。

出土遺物 (図版30-4, 第12図)

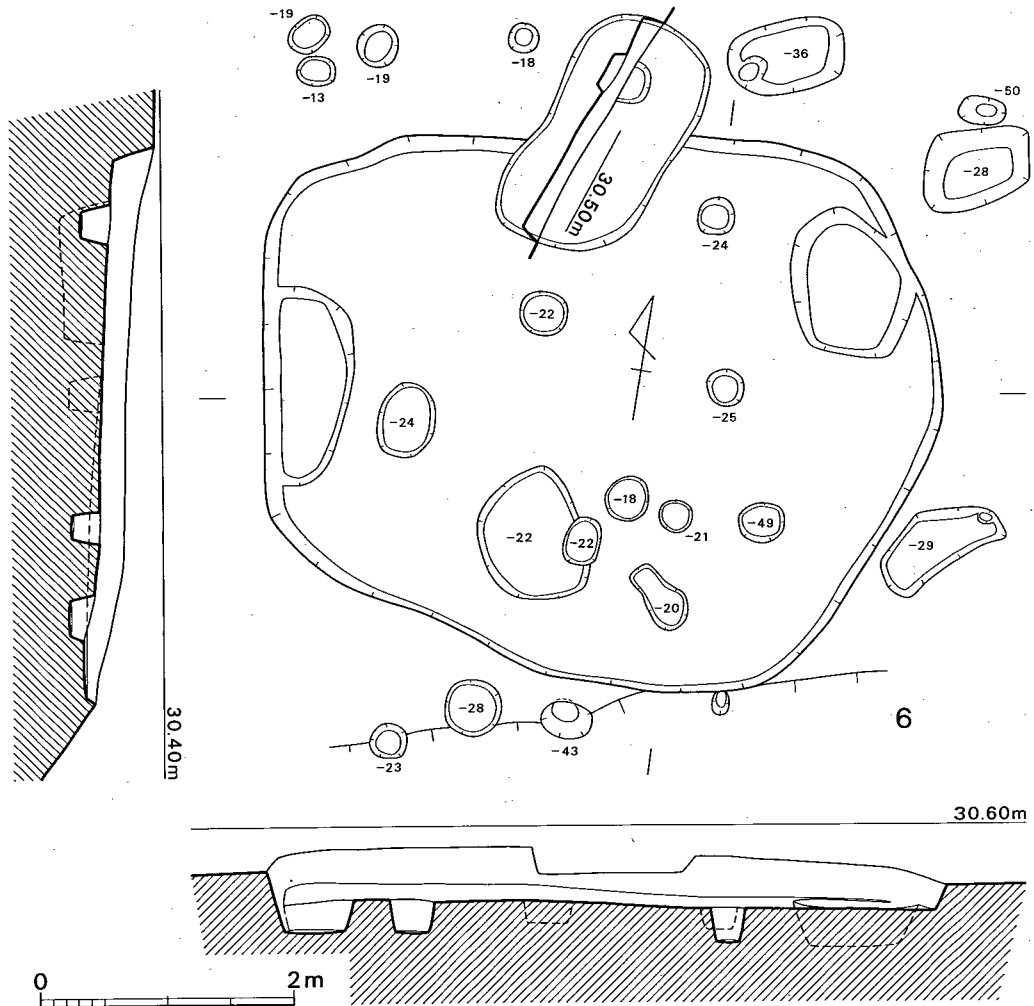
土器 (1～4) 1は胴部破片で、肩部と胴部最大の部位に凸帯を貼付していることから広口壺ないしは無頸壺になろう。2は土師器甕の口縁部小片である。混入品。3・4は底部破片であり、3の復原底径は7.8cmを測る。底部は若干の上底気味である。また、図示してはいないが、2とは別個体の土師器甕の口縁部小片が出土している。住居跡の時期は、弥生中期前半か。

6号住居跡 (図版6-2, 第13図)

暗渠1を挟んで、5号住居跡の6m東側に位置する。炉址・柱穴は不明瞭であるが、住居跡として扱った。長軸5.36m, 短軸4.42mを測る不整形円形を呈し、深さは北側壁で32cmを測る。竪穴部内のピットは20～50cmの深さである。



第12図 1・2・4～6号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 13 図 6号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第12図)

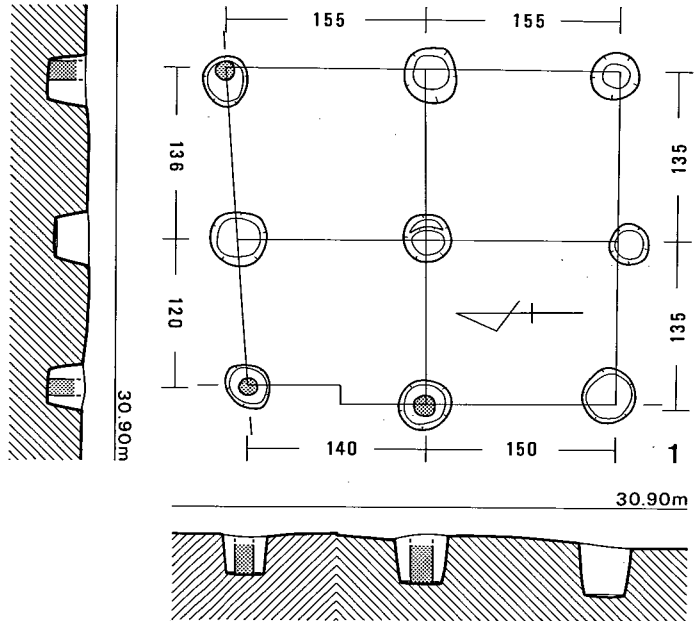
土器 (1・2) 1は土師器甕の口縁部小片で、復原口径は20.0cmである。胴部は直線的な器形を呈するか。混入品である。2は甕の底部破片で、底径は8.5cmを測る。平底で、内面は剝離している。胎土に長石・石英・角閃石を多く含む。焼成は良好で、暗黄褐色を呈する。住居跡の時期は、弥生時代中期前半か。

### 3. 掘立柱建物跡

#### 1号建物跡 (図版7-1, 第14図)

6号住居跡の3m北側に位置する。梁行2間(270cm)×桁行2間(310cm)の総柱の建物跡である。ピットは、径30~40cm, 深さは40cm前後で、柱痕径14~16cmを測る。桁行はほぼ南北方向を示す。

ピットからは、弥生土器・土師器片が出土しているが、時期は不詳。

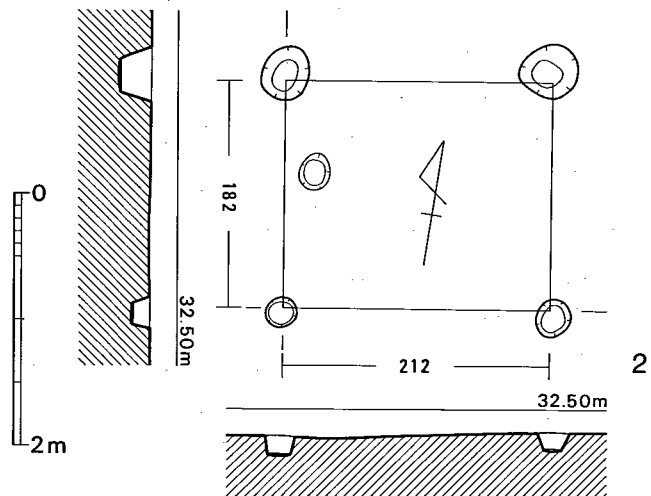


#### 2号建物跡 (第14図)

水路の西半部溝1の5m北側に位置する。ピットが方形に配されることから建物跡とした。梁行1間(182cm)×桁行1間(212cm)で、ピットは径25~50cm, 深さ14~26cmを測る。梁行方位は、N9°Wを示す。

ピットからの遺物の出土はなく、時期不詳。

安永遺跡では、建物跡は報告されていないが、無数のピットがあり、建物として良いものもある(付図参照)。



第14図 1・2号建物跡実測図 (1/60)

## 4. 貯 蔵 穴

水路東西の三角地帯で18基確認した。平面形は、円形・隅丸方形・不整形を呈し、埋土は黒褐色土・暗緑褐色土であった。貯蔵穴どうしの切合いはあまりなく、他の遺構との切合い関係は下記のとおりである（矢印は古→新を表す）。

6号貯蔵穴	→	1号溝	
7号貯蔵穴	→	Pit27	→ 9号土壇
9号貯蔵穴	→	2号溝	
11号貯蔵穴	→	1号墳	
18号貯蔵穴	→	17号貯蔵穴	
	↘	5号溝	

### 1号貯蔵穴（図版8-1，第15図）

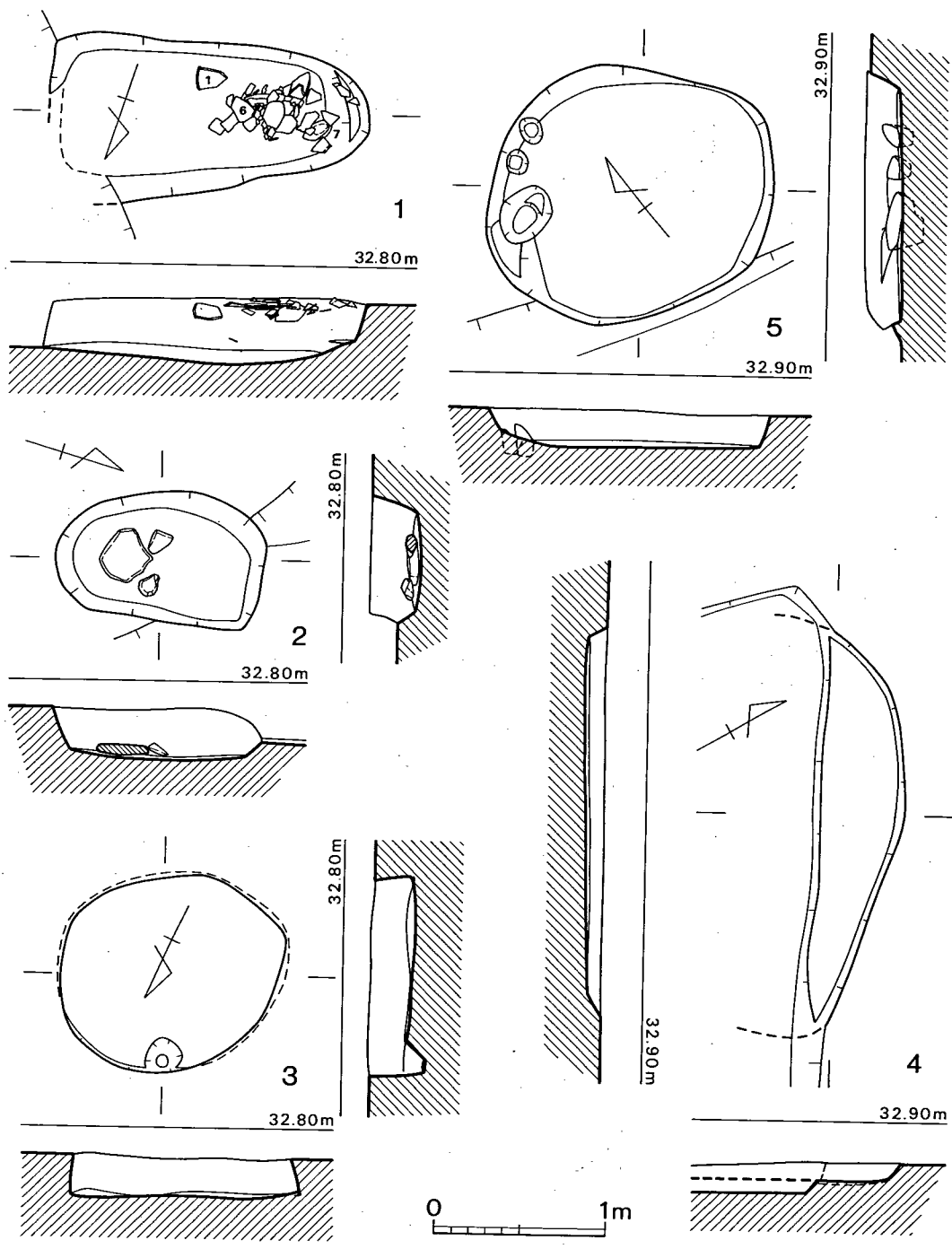
上記三角地帯の最西端に位置する。長軸189cm，短軸100cmを測る隅丸の長方形を呈し，北壁は農地整備によりカットされる。埋土は黒褐色土であり，土器は底面より30cm程浮いた状態で出土しており，投棄したものと考えられる。また，埋土下位には，小礫・炭がみられた。

### 出土遺物（図版31-1，第16・17図）

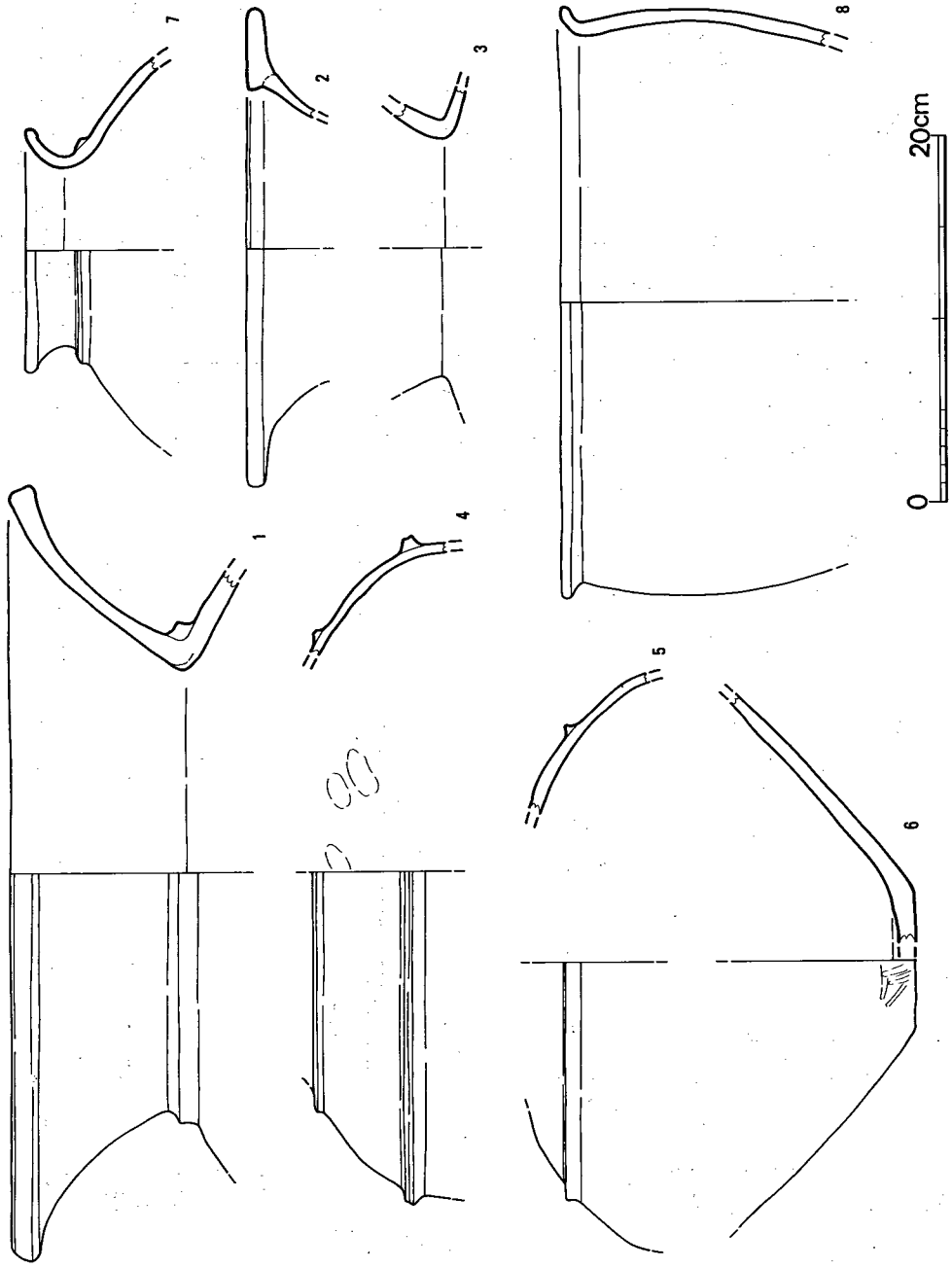
**土 器**（1～13） 1～7は壺である。1は大型の広口壺で，復原口径42.4cm，復原頸部径26.2cmを測る。口縁部はラッパ状に大きく開き，頸部には三角凸帯を貼付している。焼成はやや軟質で，内外面とも黄白色を呈する。2は鋤先状口縁を呈するが，内側への突出度は弱く，古い様相を呈する。復原口径26.1cmである。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。3は頸部破片で，復原頸部径14.0cmを測る。4・5は肩部～胴部にかけての破片であり，4は頸部下と胴部最大径の2箇所にコ字形凸帯を巡らす。5は肩部に三角凸帯を巡らす，胴部にも凸帯を貼付していた可能性が高い。胎土に長石・石英を多く含む。焼成は軟質で，4は黄白色，5は暗黄褐色を呈する。

6は底部破片で，残高9.5cm，復原底径7.4cmを測る。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で，暗黄褐色を呈する。7は短頸壺の口縁～胴部片である。口縁部はよく締まった頸部から短く外反し，その頸部に三角凸帯を巡らす。調整は器面の摩滅が著しく，不明。胎土に1～3mm大の長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成は軟質であるが，橙褐色を呈する。

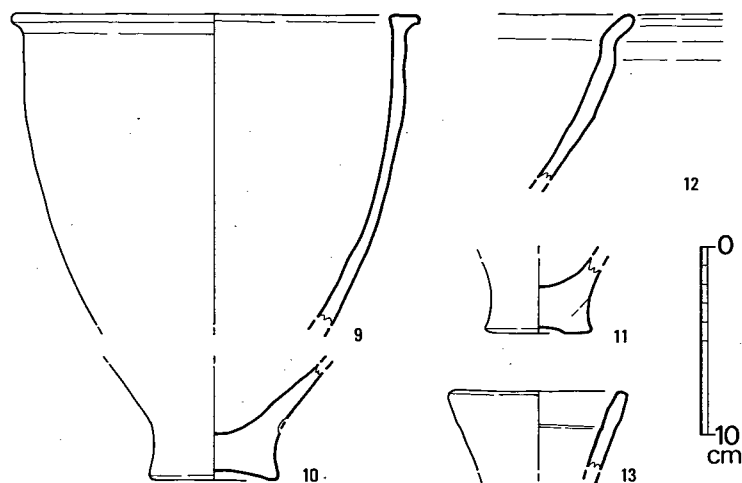
8～11は甕であり，8の口縁部は短く外反する。9は逆L状口縁を呈するが，口縁部の発達度は弱い。復原口径は8が32.4cm，9は21.6cmである。胎土はともに長石・石英・赤褐色粒を多く含む。10・11は底部片で，底径は10が7.0cm，11は5.6cmである。10・11とも二次焼成により赤変部・器面剝離がみられる。調整は摩滅により不明。12の口縁部は短く外反し，頸部は強く



第 15 图 1~5 号贮藏穴实测图 (1/40)



第 16 图 1 号贮藏穴出土器夹测图① (1/4)



第 17 図 1号貯蔵穴出土土器実測図② (1/4)

ナデている。鉢形の器形になるか。13は器台片で、復原口径9.5cmである。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。貯蔵穴の時期は、弥生時代中期初頭～前半に比定されよう。

## 2号貯蔵穴 (図版8-2, 第15図)

1号貯蔵穴の3m南東に位置する。長軸125cm, 短軸78cm, 深さ29cmを測る長円形を呈し、北側は農地整備によりカットされる。埋土は暗黒褐色土であり、埋土中より土器が出土している。底面中央がやや窪んでおり、偏平な石3個が密着していた。

### 出土遺物 (第18図)

**土器 (1~4)** 1は甕の口縁部小片で、口縁部は直立気味の頸部からすぐに外反する。屈曲部のすぐ下位に三角凸帯を貼付し、その間は強くナデられる。口縁部外面には指頭圧痕がみられ、内面はヘラミガキしており、手法的に古い様相を残す。胎土に1~2mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成はやや軟質で、内外面とも黄灰色を呈する。

2・3は鉢で、ともに口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は頸部から短く屈曲し、内湾しながら底部に移行する。2の復原口径は25.2cmである。調整は外面ハケ目、内面ナデによる。胎土に長石・石英を多く含む。焼成は良好で、色調は2・3とも暗茶褐色を呈する。4は底部資料で、底径が4.4cmと小さいことからミニチュアの甕もしくは、蓋の撮部になるか。また、外底面には煤が付着している。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、色調は内面黒褐色、外面暗茶褐色を呈する。貯蔵穴の時期は、弥生時代中期初頭頃か。



### 3号貯蔵穴 (図版8-3, 第15図)

2号貯蔵穴の6m南東に単独で位置する。平面形は円形を呈し、長軸137cm、短軸114cmである。深さは24cmで、かなり削平されている。壁面は若干オーバーハングしており、本来フラスコ形をなしていたものと思われる。北側に径22cm、深さ13cmのピットを有する。底面はほぼ水平である。埋土は暗黒褐色土であり、土器と石剣が出土した。

#### 出土遺物 (図版31-2・40-2, 第18・23図)

**土器** (1~8) 1は復原口径16.2cmを測る壺状の器形を呈する。口縁部は鈎状に屈曲し、口縁部は丸く納める。調整は摩滅により不明。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。2は如意状の口縁を有する小型の甕である。復原口径は16.2cmを測る。器面は摩滅しているが、焼成は良好で橙褐色を呈する。3・4は逆L字状口縁の甕で、3の口縁部外面には指頭圧痕が明瞭である。胎土はともに長石・石英・赤褐色粒を多く含む。色調は3が暗黄褐色、4は橙褐色を呈する。

5~8は底部破片である。5は平底で、薄手である。底径6.4cm。7・8は上底風の底部で、8はハケ目調整による。底径は7が7.3cm、8は8.6cmである。6は厚手の底部で、大型壺の底部になるか。胎土は3~5mm大の長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、暗黄褐色を呈する。時期は、3・4の甕から弥生時代中期初頭であろう。ただ、5・7・8の底部は新しい要素を持つ。

**石器** (4) 4は凝灰岩製の磨製石剣で、埋土中の出土である。側縁には4mm程の面取りがあり、刃部・鏑がみられないことから柄部分の破片かと思われる。両面とも研磨しており、器面には細かい擦痕が付く。

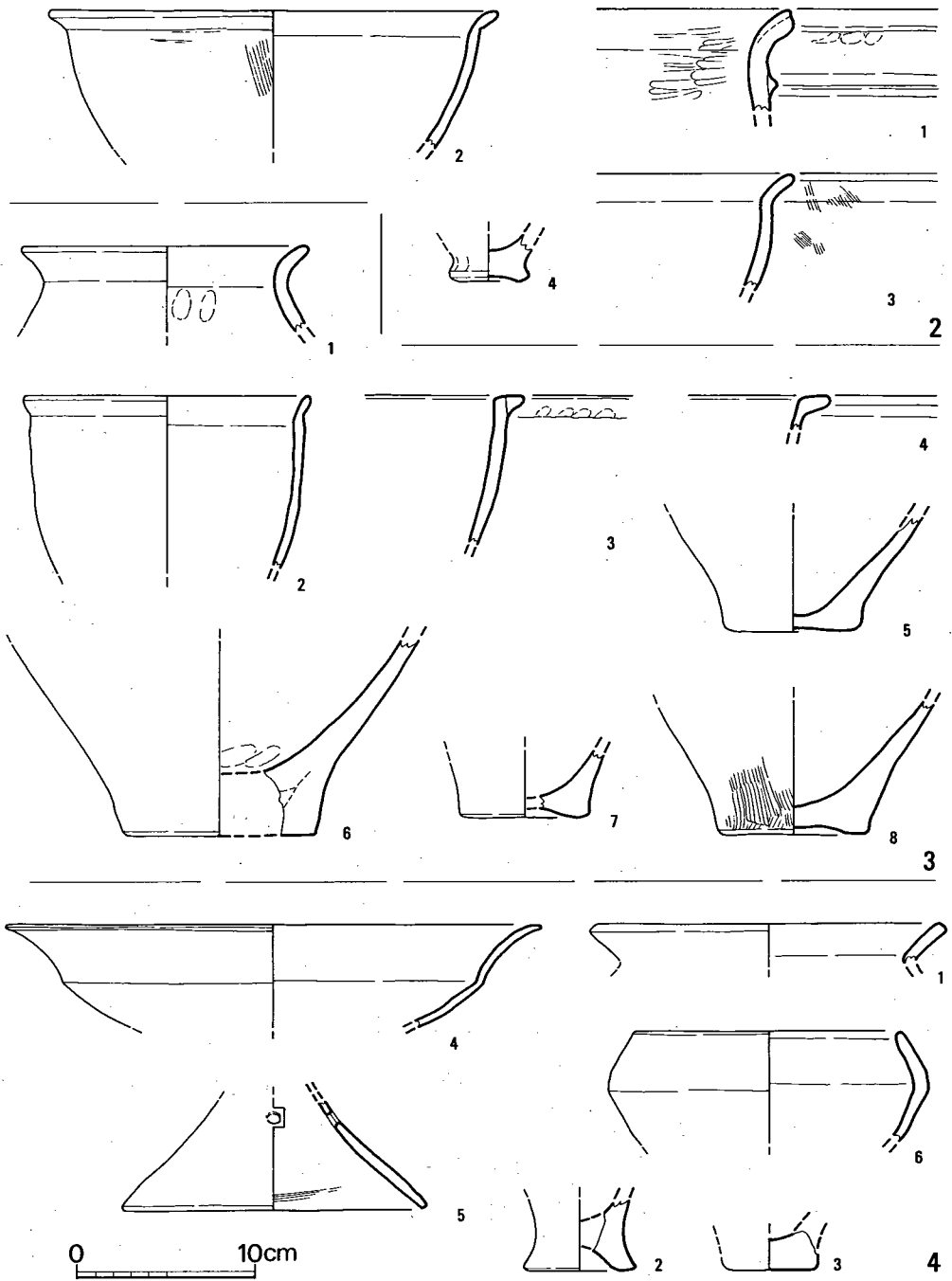
### 4号貯蔵穴 (図版9-1, 第15図)

3号貯蔵穴の6m南東に位置する。畑地による削平を受け、北東壁を残すのみである。規模・形状ともに不明。深さは12cmで、底面はほぼ水平である。

#### 出土遺物 (図版31-3, 第18図)

**土器** (1~6) 1は甕の口縁部小片である。肥厚せず、く字状に屈曲する。2は上底の底部破片で、復原底径は6.2cm。内底部は剥落している。3も底部小片で、或は蓋の撮部になるか。4・5は高坏である。4は二段階に屈曲する坏部を有する。大きく外反した口縁部から明瞭な稜を有する屈曲部へ接続し、さらに内湾気味に脚部に移行する。5の脚部はラッパ状に開き、裾から5cmの部位に焼成前に穿った円孔を2箇所空けている。器面の摩滅が著しいが、内面には横方向のハケ目が残る。また、一部に黒斑がある。胎土はともに長石・石英・赤褐色粒を多く含む。色調は暗黄褐色であり、4・5は同一個体と考えられる。6は逆く字状に内湾する袋状風の口縁部を有し、口唇部は丸く納めている。口径は13.0cmに復原したが、口径・傾きともに自信がない。

4・5は弥生終末期の高坏であるが、2・3等は弥生中期初頭~前半頃のもので、貯蔵穴の残りが悪く何れが混入したのか定かではないが、貯蔵穴なら終末までは下るまい。



第 18 图 2~4 号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)

#### 5号貯蔵穴（図版9-2，第15図）

4号貯蔵穴の1m東側に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸165cm，短軸150cmであり、深さは22cmでかなり削平されている。北西壁側に径36cm，深さ17cmのピットと径14cmの小ピット2個を有するが、当貯蔵穴に伴うのか不明。底面はほぼ水平である。埋土は暗緑褐色土であり、遺物の出土量は少ない。

#### 出土遺物（図版32-1，第20図）

**土器** (1) 1は壺の底部破片で、残存高7.3cm，底径4.7cmを測る。底部は平底で、胴部に比して小さ目の底部である。調整は摩滅により不明。胎土は長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は軟質で、暗黄褐色を呈する。また、器外面に黒斑がみられる。

底部のみなので時期判断に苦慮するが、当貯蔵穴は円形プランなので、弥生時代中期初頭～前葉頃か。

#### 6号貯蔵穴（図版9-3，第19図）

1号溝内東半部に位置する。1号溝掘り下げ時に確認した貯蔵穴である。不整円形を呈し、長軸120cm，短軸93cm，深さ64cmを測る。壁面はオーバーハングして立上がり、3号貯蔵穴同様、本来フラスコ形をなしていたものと考えられる。底面はほぼ水平である。埋土は1号溝(暗褐色土)とは異なり、淡緑灰色粘質土であり、落し穴状遺構のそれに近い。遺物は皆無であった。

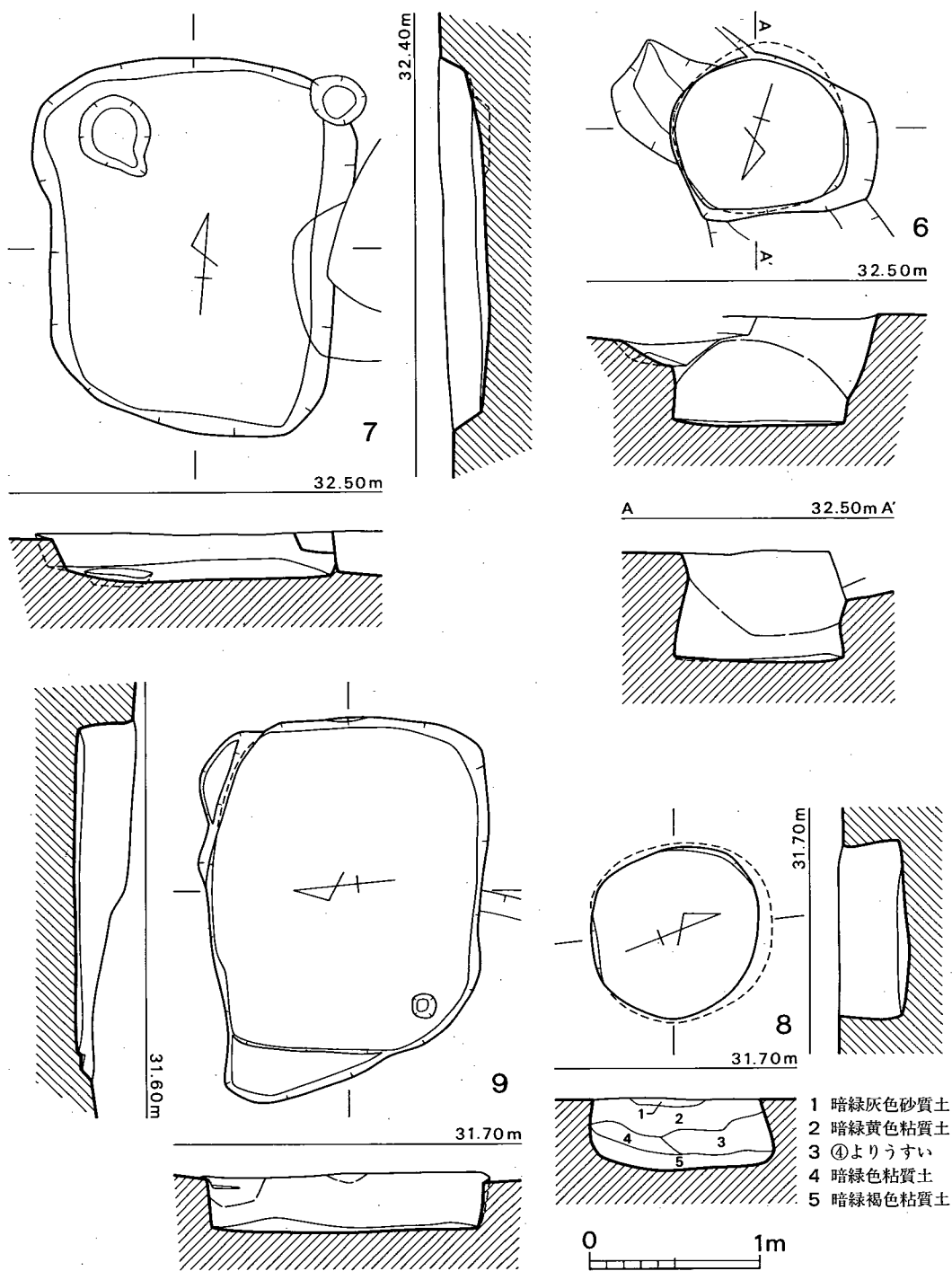
#### 7号貯蔵穴（図版10-1，第19図）

1号溝の2m南に位置し、27号ピット・9号土壌に切られる。長軸222cm，短軸190cmを測る隅丸方形を呈し、深さは26cmである。当遺跡においては、大型の貯蔵穴である。底面はほぼ水平であり、北西側に径40cm程のピットがある。埋土は暗黒灰色であり、土器・石器が出土した。

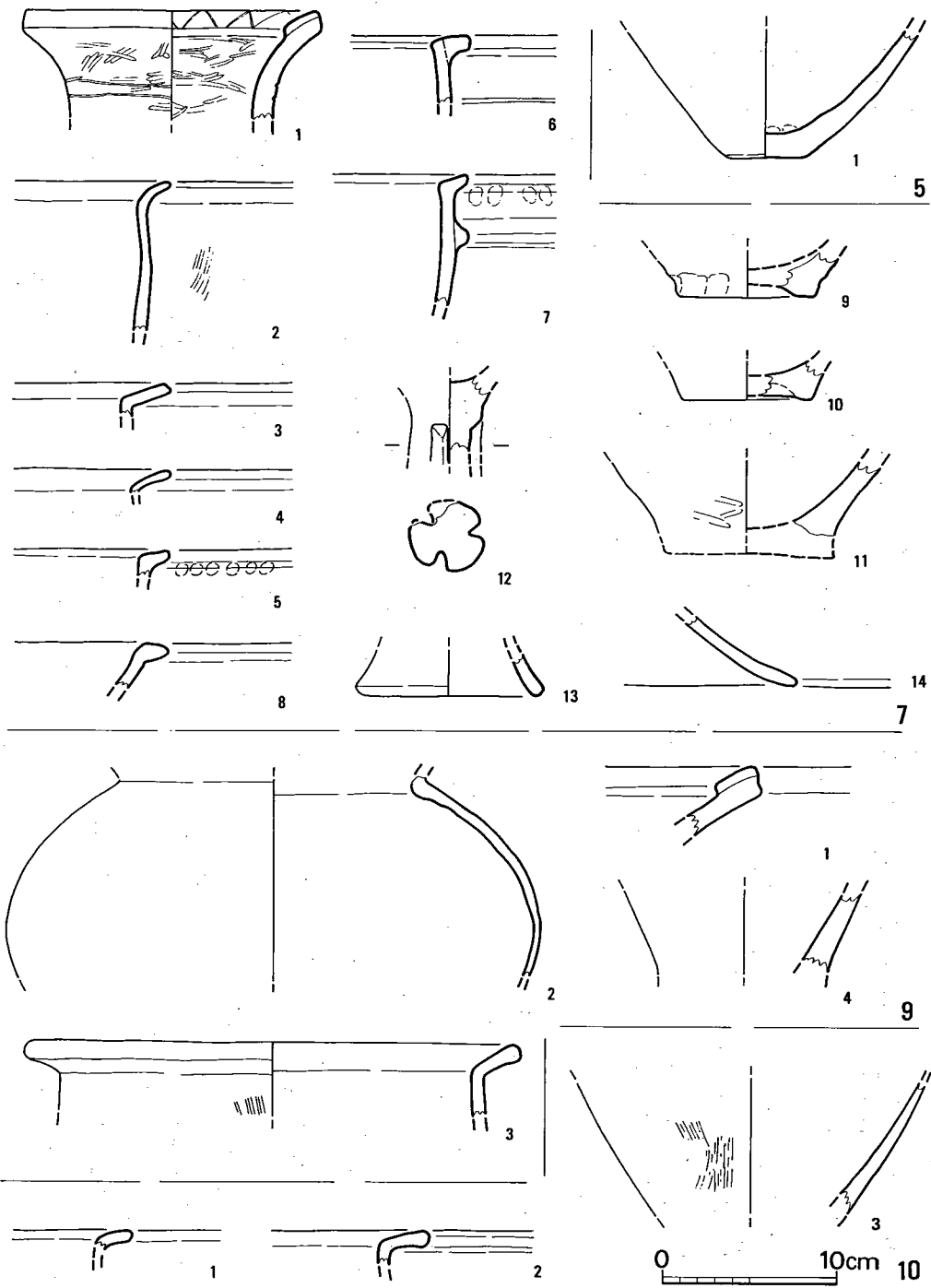
#### 出土遺物（図版32-2・40-1，第20・23図）

**土器** (1~14) 1は壺の口縁部破片で、復原口径17.2cmを測る。緩やかに外反する口縁端部内面に粘土帯を貼付し、さらにヘラ先による鋸歯文帯を施文する。また、頸部には2条のヘラ描き沈線文が稚拙に施文される。調整は内外面ともヘラミガキによる。胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。

2~7は甕の口縁部小片である。2は如意状，3・4はく字形，5~7は逆L字状口縁を呈する。6の頸部下には沈線文が描かれ，7は頸部下に凸帯を貼付している。胎土は何れも長石・石英を多く含み，中には雲母・赤褐色粒を含むものもある。調整は2がハケ目，7は内外面ともヘラミガキによる。9・10は底部破片で，底径は9が7.8cm，10は7.6cmである。11の底部は，9・10よりも底径がかなり大きく，調整はヘラミガキであることから大型壺になるか。8は鉢の口縁部小片で，口唇部は肥厚する。



第 19 図 6 ~ 9 号貯蔵穴実測図 (1/40)



第 20 图 5·7·9·10号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)

12は高坏の脚柱部破片で、3箇所に通かしを入れているが、貫通していない。柱径は4.5cmである。13は復原径10.8cmであるが、胎土は精良であることから高坏の脚裾部になるか。14は蓋の口縁部破片である。口唇部は加熱により黒色化している。胎土に1～2mm大の長石・石英を多く含む。貯蔵穴の時期は、弥生時代中期初頭であろう。

**石器**(2) 2は黒曜石の縦長剥片を用いた石錐である。先端部は折損しているが、残存長3.9cm、重さ2.7gを量る。他に、黒曜石・サヌカイトの剥片が出土している。

#### 8号貯蔵穴(図版10-2・3, 第19図)

7号貯蔵穴の11m南に位置する。円形を呈し、規模は長軸101cm、短軸98cm、深さ40cmを測る。底面は中央がやや低くなっており、壁面はオーバーハングしている。断面形はフラスコ形をなすのであろう。埋土は、暗緑黄色粘質土・暗緑色粘質土・暗緑褐色粘質土であり、6号貯蔵穴に類似する。遺物の出土はなかった。

#### 9号貯蔵穴(図版11-1, 第19図)

8号貯蔵穴の3m南西に位置し、2号溝に大半を切られる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸200cm、短軸168cm、深さ33cmを測る。西壁側のテラスは2号溝によるもので、当貯蔵穴とは無関係。底面はほぼ水平で、壁面は垂直気味に立上がる。また、床面南西部には径14cmの小ピットがある。埋土は暗緑褐色土を主体とし、少量の土器が出土した。

#### 出土遺物(図版32-3, 第20図)

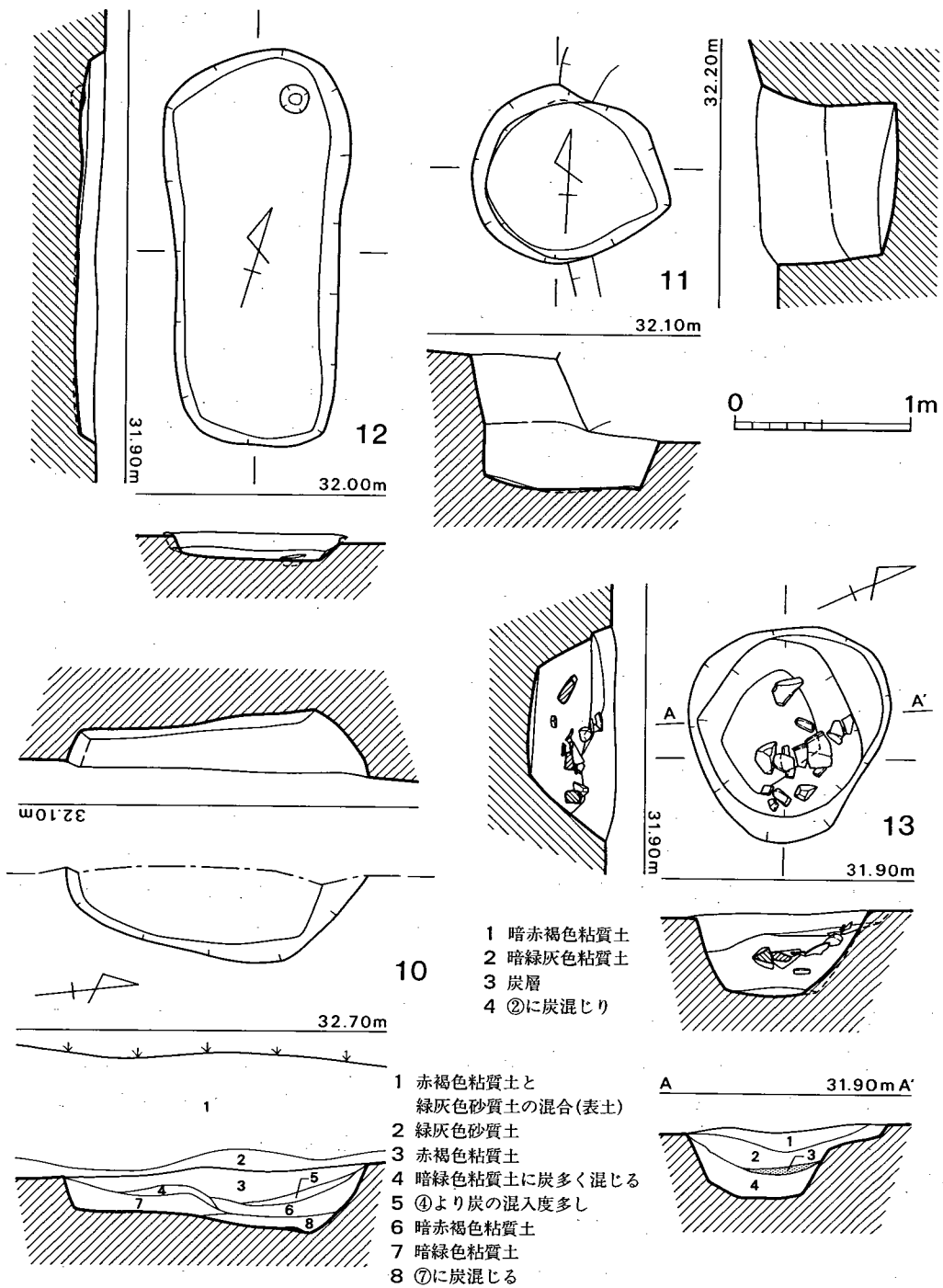
**土器**(1～4) 1は壺の口縁部小片で、外反する口縁端部内面に粘土帯を貼付し、肥厚させている。2は壺の胴部破片で、かなり膨らむ。胎土は粗雑で、5mm大程の砂粒もみられる。3は甕の口縁部破片で、口唇部は丸く肥厚する。復原口径は28.6cmである。4は底部付近の破片で、傾きからして甕になろう。貯蔵穴の時期は、弥生時代中期初頭であろう。

#### 10号貯蔵穴(図版11-2, 第21図)

水路東半部に位置し、9号貯蔵穴とは7m離れている。西側半分は水路で、未掘。長軸は174cmで南北方向にあり、不整形を呈するか。深さは36cmと浅く、かなり削平を受ける。底面は北側に下がっている。埋土中より土器・姫島産の黒曜石の剥片が出土した。

#### 出土遺物(第20図)

**土器**(1～3) 1～3は甕である。1・2は口縁部小片で、もう少し傾くのであろう。3は胴部破片で、外面ハケ目、内面ナデ調整による。胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を含む。焼成は軟質であるが、外面は黒灰色を呈する。当貯蔵穴の時期は、弥生時代中期初頭であろう。



第 21 図 10~13号貯蔵穴実測図 (1/40)

### 11号貯蔵穴 (図版11-3, 第21図)

水路の東側で、10号貯蔵穴の3m北側に位置し、1号墳に切られる。平面形は円形を呈し、長軸108cm、短軸101cmを測る。深さは77cmで、比較的残りの良い方である。底面は北側に傾斜している。壁面はほぼ垂直に立上がり、断面形はピーカー状をなす。埋土は6・8号貯蔵穴と同じである。遺物の出土はなく、時期不詳。

### 12号貯蔵穴 (図版12-1, 第21図)

2号墳の3m西側に位置する隅丸長方形の貯蔵穴で、長軸229cm、短軸106cm、深さ16cmを測る。底面はほぼ水平であり、北側にある径16cmの小ピットは上からの掘り込みによる。かなり削平を受けている割には、土器・石器が出土した。埋土は暗褐色土である。

#### 出土遺物 (図版41-2, 第22・23図)

**土器** (1~4) 1は口縁部片で、鉢型の器形になるか。調整は内面へラミガキで、外面は摩滅により不明であるが、ミガキの可能性はある。胎土は粗雑で、4mm大の砂粒もみられる。2は逆L字状の口縁部破片で、鉢もしくは甕であろう。3の口縁部は短く外反していることから短頸壺になろう。4は甕の底部破片で、底径は7.6cmである。底部は上底で、内底面は6mmと薄い。胎土に2mm大の長石・石英・角閃石を含む。貯蔵穴の時期は、弥生時代中期前葉であろう。

**石器** (6) 6は蛇文岩製の細身の磨製石斧で、長さ11.4cm、幅3.5cm、重さは90.8gを量る。刃部には使用による折損がある。

### 13号貯蔵穴 (図版12-2・3, 第21図)

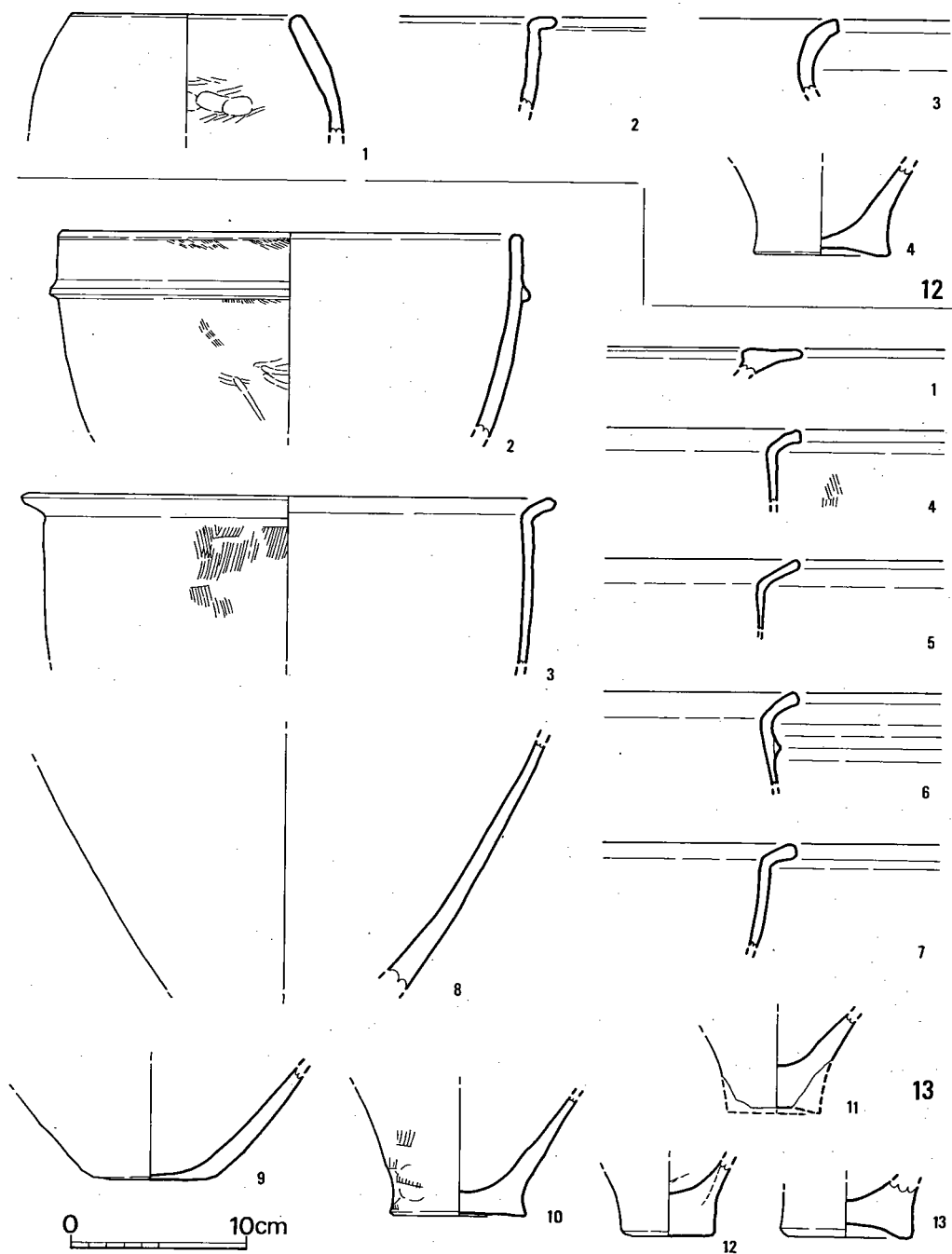
12号貯蔵穴と2号墳との中間に位置する。不整円形を呈し、北側にはステップを有する。長軸124cm、短軸115cmで、深さは50cmを測る。断面形は擂鉢状をなし、土器・礫は炭と一緒に投棄された状態を呈する。貯蔵穴として扱ったが、廃棄土壙とした方が妥当であろう。

#### 出土遺物 (図版32-4・40-1・42-3, 第22・23図)

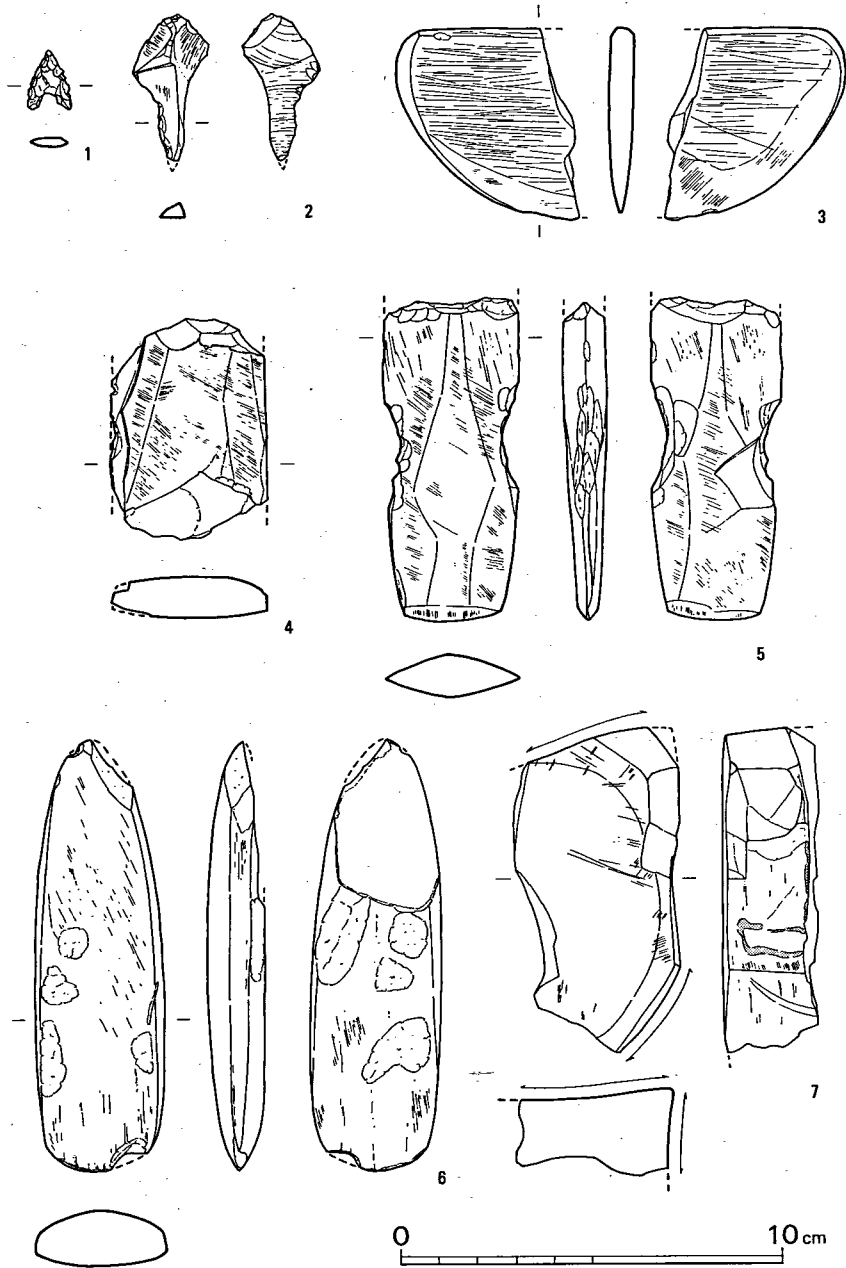
**土器** (1~13) 1は広口壺の口縁部小片である。口唇部は細く延びる。2は無頸の甕で、口縁端部は丸く納めるのみ。調整は外面ハケ目・へラミガキ、内面はナデで、口縁部下の三角凸帯はハケ目調整後に貼付している。胎土に2~5mm大の長石・石英・赤褐色粒を含む。復原口径は26.3cmである。3~6はく字形口縁の甕で、3の復原口径は30.4cmを測る。頸部から直線的に胴部に移行する。胎土に長石・石英・雲母を含み、色調は暗褐色を呈する。6は頸部直下に三角凸帯を貼付する。7は胴部が内湾しているので、鉢になろう。8は甕の胴部破片であろう。

9~13は底部破片で、9は壺の底部。底径は6.3cmで、内底面はかなり薄い。10~13は甕の底部破片で、10・12が平底、13は上底である。底径は10が7.8cm、12は5.3cm、13は7.4cmである。貯蔵穴の時期は、弥生中期前葉であろう。



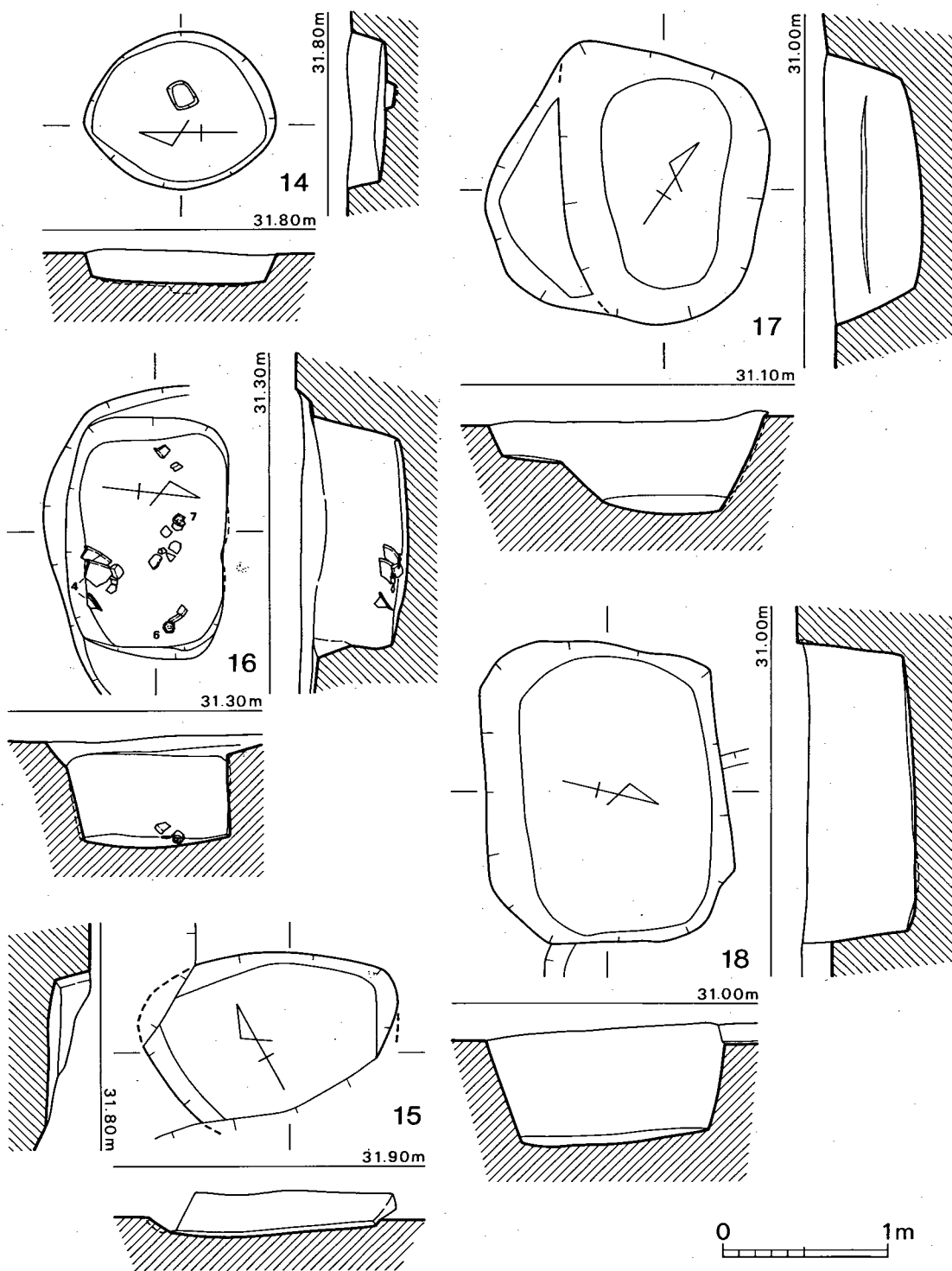


第 22 图 12·13号貯藏穴出土土器実測图 (1/4)



第 23 図 貯蔵穴出土石器実測図 (1/2)

石 器 (1・7) 1は黒曜石製の石鏃で、長さ1.5cm、幅1.2cm。7は砥石である。大半欠損しているが、2面砥面がみられる。側面は二次焼成により黒化している。材質は流文岩か。



第 24 图 14~18号贮藏穴实测图 (1/40)

#### 14号貯蔵穴 (図版13-1, 第24図)

13号貯蔵穴の1m南側に位置する。平面形は円形を呈し、長軸117cm、短軸96cm、深さ23cmを測る。底面は中央が低くなっており、そのやや左寄りに径18cm、深さ5cm程のピットを有する。この中央ピットは梯子の圧痕と考えられ、この点については考察で改めて触れたい。埋土は暗黒褐色土であり、土器が出土した。

#### 出土遺物 (図版32-5, 第25図)

**土器** (1~4) 1~3はく字形口縁の甕で、口唇部がやや膨れる程度である。2・3は頸部のやや下位に三角凸帯を貼付する。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。口径は1が30.0cm、2は32.2cm、3は36.0cmに復原した。4は甕の底部破片で、底径は9.0cmである。時期は、1~3の口縁部が細長く発達していることから、弥生時代中期中葉と考えられる。

#### 15号貯蔵穴 (図版13-2, 第24図)

1号住居跡の1m北東に位置する。北壁は攪乱坑(旧2号墳)に切られ、南側は畑でカットされる。東西軸158cm、深さ26cmを測る。底面はほぼ水平である。

#### 出土遺物 (第25図)

**土器** (1) 1はく字形口縁の甕で、口唇部が若干肥厚する。胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。

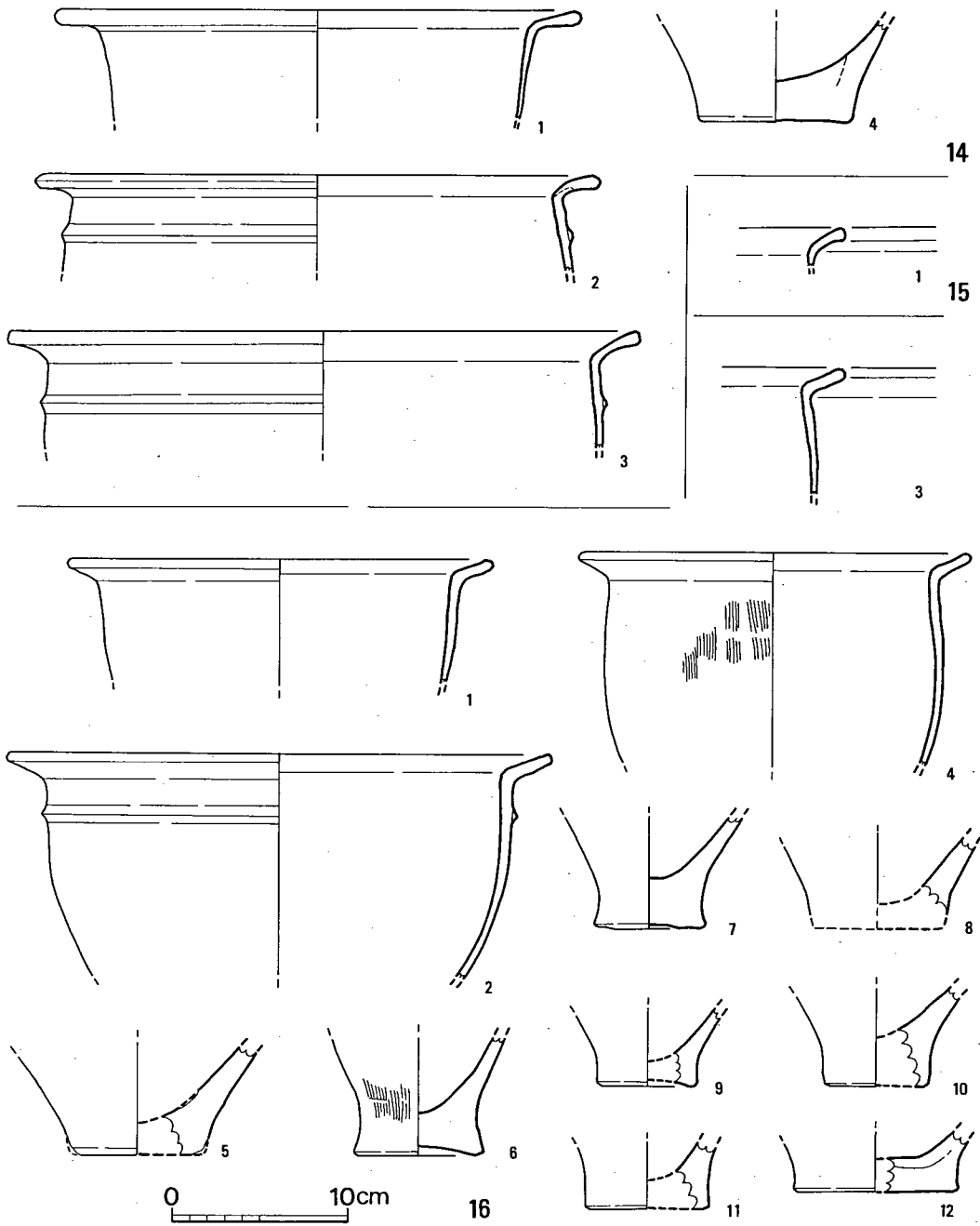
#### 16号貯蔵穴 (図版13-3, 第24図)

1号住居跡と3号住居跡の中間に位置するが、1号墓とは切合っていない。隅丸の長方形を呈し、長軸148cm、短軸98cm、深さは56cmである。底面は中央部がやや窪み、壁面は垂直に立上がる。埋土上位は、黒褐色土であったが、中位以下は暗緑褐色土が堆積していた。遺物は底面から土器・石器が出土した。

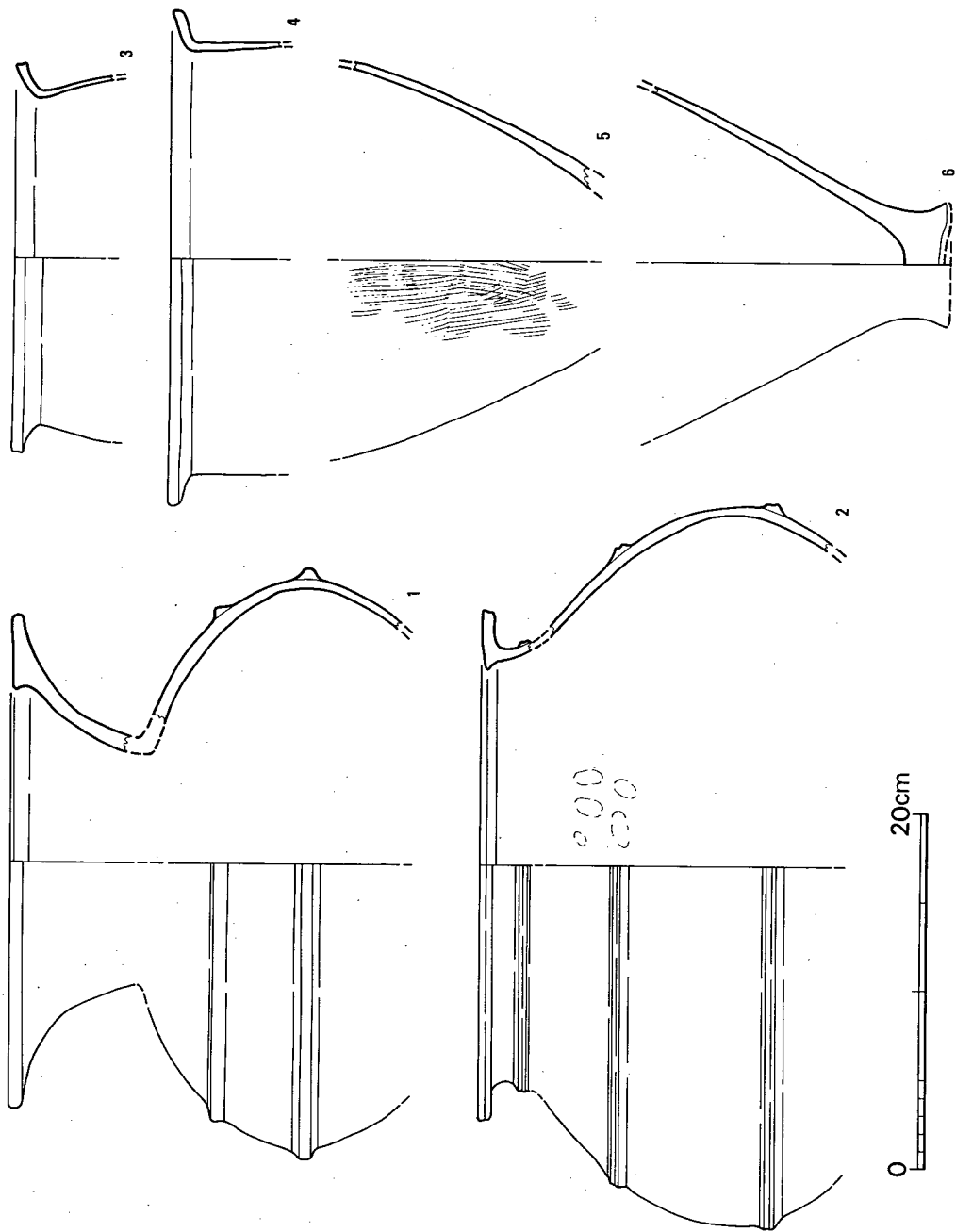
#### 出土遺物 (図版33-1・40-2・3, 第23・25図)

**土器** (1~12) 何れも甕の破片で、1~4は口縁部、5~12は底部である。1・3・4はく字形口縁を呈し、1はもう少し傾くのであろう。4は直線的な胴部から丸みを帯びて底部に移行する。2は頸部のやや下位に三角凸帯を貼付する。復原口径は、1が24.2cm、4は22.2cm、2は31.1cmである。器面の摩滅が著しいが、調整はハケ目であろう。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。6は上底の底部で、7・12は平底である。他は小片であるので、何れとも判断し難い。胎土は粗雑で、4mm大の砂粒を含む。貯蔵穴の時期は、弥生時代中期前葉であろう。

**石器** (3・5) 3は石包丁の半欠品で、凝灰岩製。両面とも線条の擦過痕が著しい。5は磨製石剣で、切っ先を欠失する。刃部と柄との境は、両端より打欠いている。残存長8.5cm、刃部幅3.4cmで、石材は流文岩か。



第 25 图 14~16号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)



第 26 图 17号贮藏穴出土器实测图① (1/4)

### 17号貯蔵穴 (図版14-1, 第24図)

5号住居跡の4m北西側に位置し、18号貯蔵穴を切っている。平面形は長円形を呈し、西側に三日月形のテラスが付く。長軸166cm、短軸128cm、深さ56cmを測る。底面は中央部がやや窪む。埋土は、暗緑色粘質土であり、土器・黒曜石の剥片が出土した。

### 出土遺物 (図版33-2, 第26・27図)

**土器 (1~18)** 1は鋤先状口縁の広口壺で、口縁部と胴部は接合しないが同一個体である。口縁部平坦面は、1号貯蔵穴出土のもの(第16図②)よりも幅広である。胴部最大径の部位それと頸部との中間にコ字形凸帯を貼付する。胎土に2mm大の長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、暗黄褐色を呈する。復原口径27.8cm、胴部最大径32.4cmを測る。2は大型の無頸壺で、1同様口縁部と胴部は接合しないが同一個体と思われる。口縁部は1の鋤先状口縁を逆に折り曲げた様な形状を呈し、頸部と胴部最大径の部位と両者の中間の位置にM字形凸帯を貼付する。胎土は長石・石英を含む。焼成は良好で、暗緑灰色を呈する。復原口径は24.6cm、胴部最大径は40.6cmである。

3~6は甕である。3・4は口縁部、5・6は胴部から底部にかけての破片である。3・4はく字形口縁を呈し、口唇部はやや肥厚する。口径は3が18.8cm、4は24.4cmに復原した。ともに、長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。6の底部は上底で、締りが良い。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。7は口縁部破片で、鉢形の器形を呈するか。8~10は壺の底部破片で、8の内底部は4mmと薄い。9は内底部が剥離しており、ソケット式によるものであろう。胎土は、何れも長石・石英・雲母・赤褐色粒を含む。8の底径は9.1cmである。11~17は甕の底部破片である。14・15は上底で、前段階のそれよりもかなり肉薄である。18は高坏の脚部になるか。裾部の開きは悪い。貯蔵穴の時期は、弥生時代中期中頃に近い前半であろう。

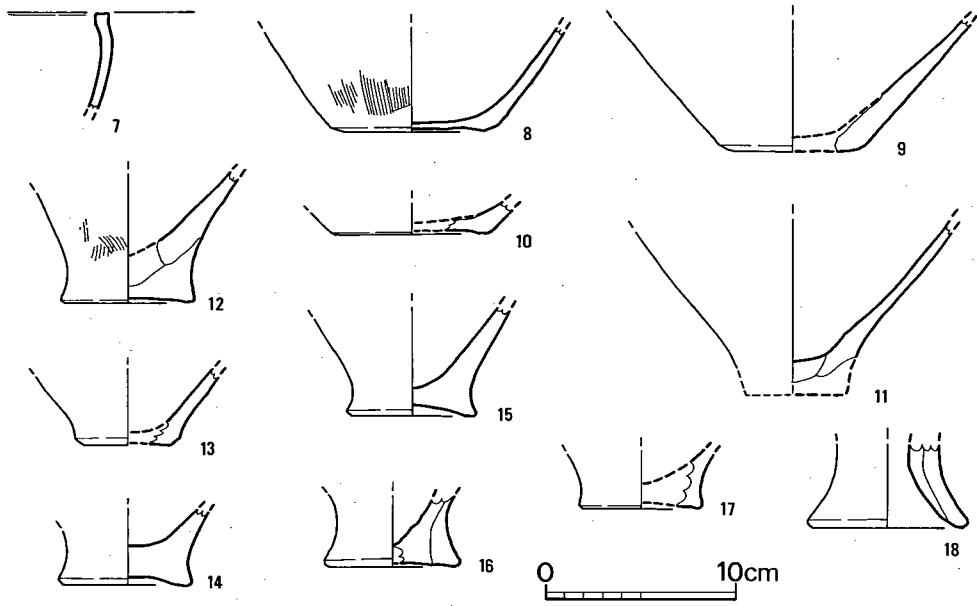
### 18号貯蔵穴 (図版14-1, 第24図)

5号住居跡の5m北西に位置し、東壁を7号貯蔵穴に、北壁を5号溝に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸184cm、短軸146cm、深さ66cmを測る。底面は東側に緩傾斜する。埋土中に炭を多く含んでいた。

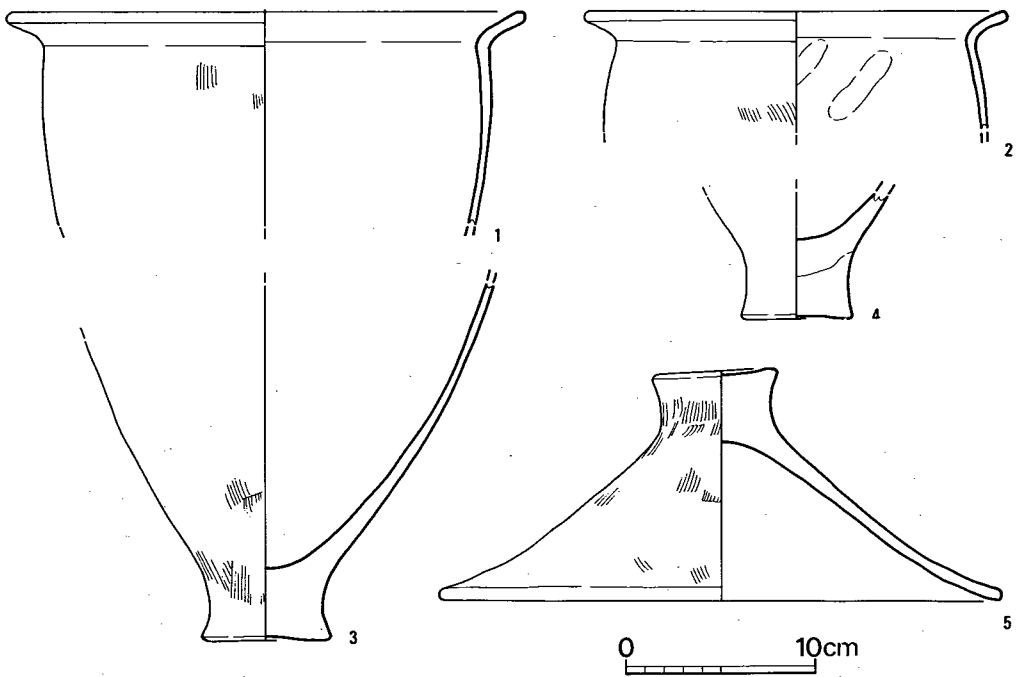
### 出土遺物 (図版33-3, 第28図)

**土器 (1~5)** 1~4は甕である。1・2はく字形口縁を呈し、口唇部は丸く納める。口径は1が27.6cm、2は22.3cmに復原した。胎土には長石・石英・雲母を多く含む。3は胴部から底部にかけての破片で、4は底部片である。ともに平底で、かなり厚い。5は蓋で、器高12.9cm、口径29.8cm、撮径6.7cmを測る。口縁部は大きく開くが、撮は3の底部とさほど違いがない。胎土に2mm大の長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、内外面とも暗黄褐色を呈する。

貯蔵穴の時期は、甕の底部が厚いことから弥生時代中期前葉であろう。



第 27 图 17号贮藏穴出土土器实测图② (1/4)



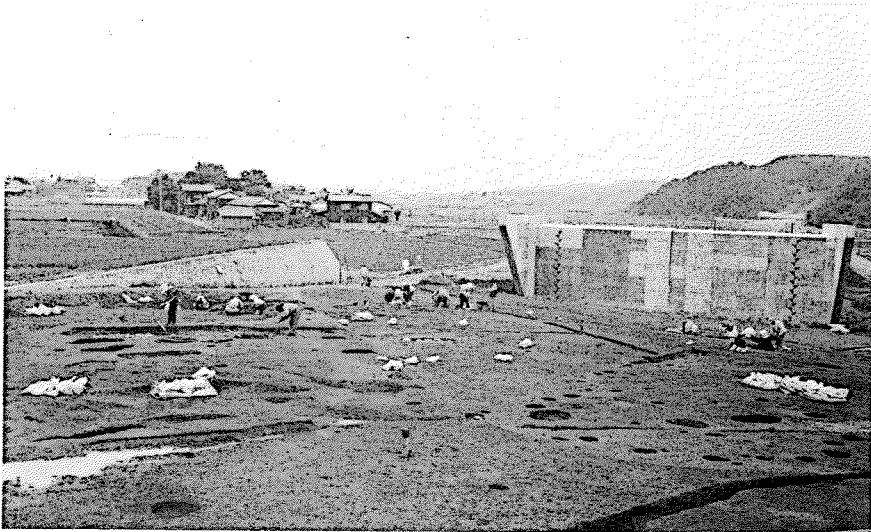
第 28 图 18号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)



表1 貯蔵穴一覧表

(単位cm)

No.	平面形	長軸長		短軸長		深さ	出土遺物	備考
		上面	底面	上面	底面			
1	隅丸長方形	189	157	100	74	36	土器	埋土下位より礫・炭出土
2	長円形	125	105	78	60	29	土器	底面に石(3)密着
3	円形	137	140	114	116	24	土器・石器	ピット(1)あり
4						12	土器	
5	円形	165	151	150	138	22	土器	ピット(3)あり
6	不整円形	120	100	93	100	64		1号溝に切られる
7	隅丸方形	222	207	190	155	26	土器・石器	ピット(1)あり
8	円形	101	106	98	103	40		
9	隅丸方形	200	181	168	156	33	土器	2号溝に切られる
10	不整形?	174	140			36	土器	
11	円形	108	90	101	83	77		1号墳に切られる
12	隅丸長方形	229	219	106	85	16	土器・石器	
13	不整円形	124	73	115	55	50	土器・石器	炭の間層あり
14	円形	117	106	96	85	23	土器	ピット(1)あり
15	不整形	158	131			26	土器	
16	隅丸長方形	148	127	98	86	56	土器・石器	埋土中に炭多し
17	長円形	166	129	128	78	56	土器	18号貯蔵穴を切る
18	隅丸長方形	184	169	146	114	66	土器	埋土中に炭多し



調査風景

## 5. 土 壙

調査区の全域に散在し、29基確認した。平面形は、円形・隅丸方形・不整形を呈する。埋土は貯蔵穴同様、黒褐色土・暗緑褐色土であった。土壙どうしの切合いはなく、他の遺構との切合い関係は下記のとおりである（矢印は古→新を表す）。

7号貯蔵穴	→	Pit27	→	9号土壙
20号土壙	→	1号住居跡		
21号土壙	→	8号溝		
24号土壙	→	10号溝		

### 1号土 壙（図版14-2，第29図）

3号貯蔵穴の2m南側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸208cm、短軸166cm、深さ50cmを測る。底面中央には長さ96cm、幅61cm、深さ14cmの浅い掘り込みを有する。遺物は弥生土器の小破片が出土したが、図示できなかった。

### 2号土 壙（図版15-1・2，第29図）

1号土壙の4m東側に位置し、それよりも一回り大きい。隅丸長方形を呈し、長軸270cm、短軸152cm、深さ52cmを測る。底面中央には長さ120cm、幅71cm、深さ34cmの掘り込みがあり、1号土壙と同様な形態を呈する。当初、木棺墓と考えて土層確認を慎重に行ったが、木棺の痕跡は確認できなかった。また、昭和58年度調査のD31も同様な形態を呈し、3基が東西方向に等間隔で配列することから墓（土壙墓？）としての可能性が高い。埋土は暗緑褐色土を主体とし、弥生土器の他に石鏃・剥片が出土している。

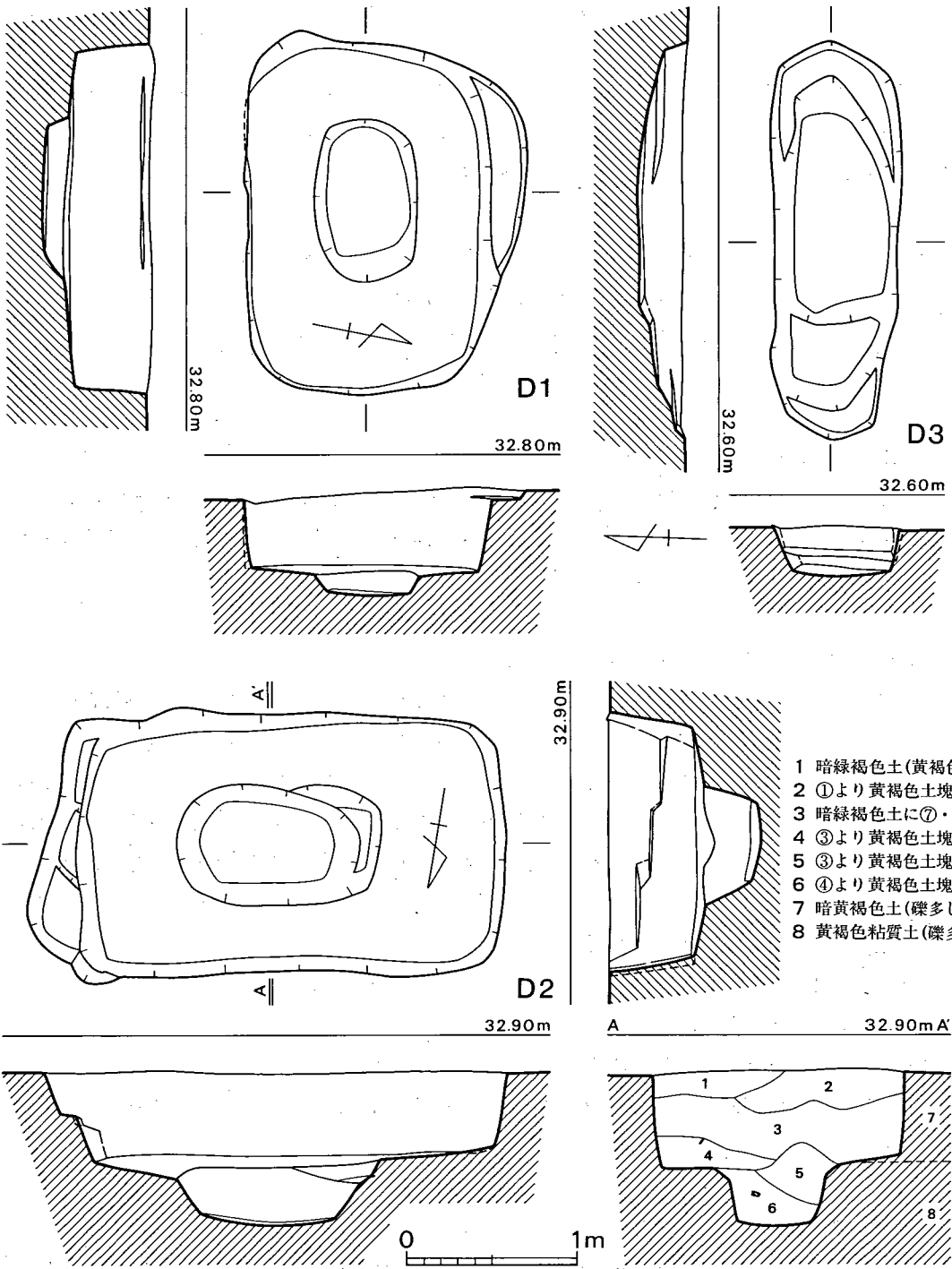
### 出土遺物（図版40-1，第30・35図）

**土 器**（1～3） 1は甕の口縁部小破片で、く字形を呈する。2の口縁部は僅かに外傾することから、鉢形の器形になるか。3は甕の底部破片で、底径は6.4cmである。胎土に3mm大の長石・石英・赤褐色粒を含む。時期は弥生時代中期前葉か。

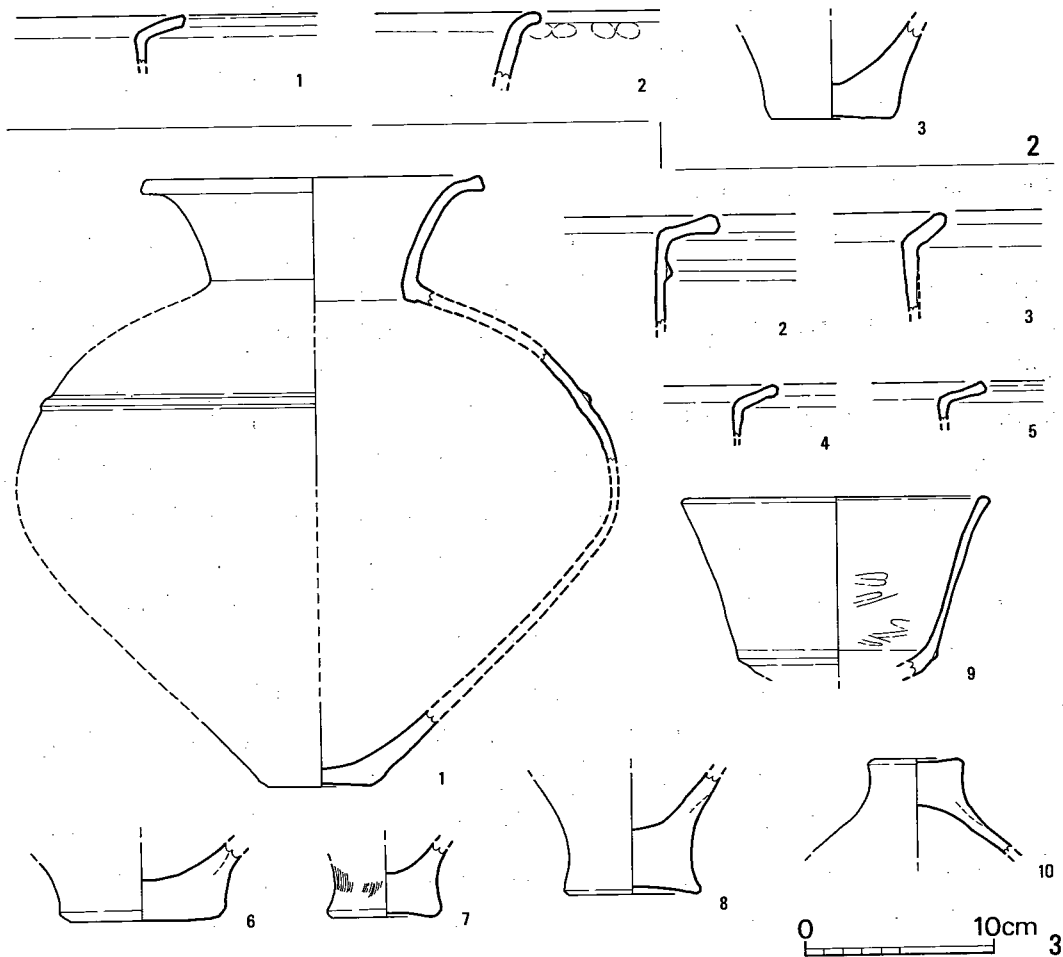
**石 器**（1） 1は黒曜石製の石鏃の半欠品である。他に、黒曜石・サヌカイトの剥片が出土している。

### 3号土 壙（図版16-1，第29図）

1号土壙の2m南側に位置する。長方形を呈し、長軸236cm、短軸72cm、深さ26cmを測り、東側に1段、西側に2段のステップを有する。浅目の割には、土器が多く出土した。



第 29 図 1～3号土坑実測図 (1/40)



第 30 図 2・3号土壙出土土器実測図 (1/4)

出土遺物 (図版34-1, 第30図)

土 器 (1~10) 1は広口壺で、口縁部・胴部・底部の破片であるが、胎土・色調から同一個体として復原した。頸部から大きく開き、口縁端部でさらに水平近く開く。胴部にはコ字形凸帯を貼付している。底部は平底で、底径5.6cmである。全体として、32cm程の器高になろう。胎土に1~3mm大の長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成は軟質で、暗赤橙色を呈する。

2~5は甕の口縁部小片である。3~5はく字形口縁を呈し、2は頸部をL字状に折り曲げた器形で、口唇部はやや肥厚する。頸部のやや下位に三角凸帯を貼付する。また、5の口唇部は跳ね上げ状をなし、シャープである。ともに胎土は長石・石英・赤褐色粒を多く含む。

6は壺で、7・8は甕の底部破片である。底径は6が8.8cm、7は6.1cm、8は7.2cmを測る。9の口縁部は緩やかに広がり、口唇部で若干肥厚する。下位の屈曲部には突出度の低い三角凸帯を貼付しており、高坏状の器形を呈するか。内面はヘラミガキによる。10は蓋の撮部破片であり、径は5.1cmを測る。当土壌の時期は、弥生時代中期前半であろう。

#### 4号土 壙 (図版16-2, 第31図)

5号貯蔵穴の9m南東に位置する。平面形は長方形を呈し、長軸302cm、北壁長114cm、南壁長84cm、深さ55cmを測る。底面はほぼ水平であり、東西壁の立上りに比して南北壁は緩やかに立上がる。埋土中には炭を多く含み、豊富な土器群とともに石鏃・石剣・磨石等の石器類、炭化種子等が出土した。

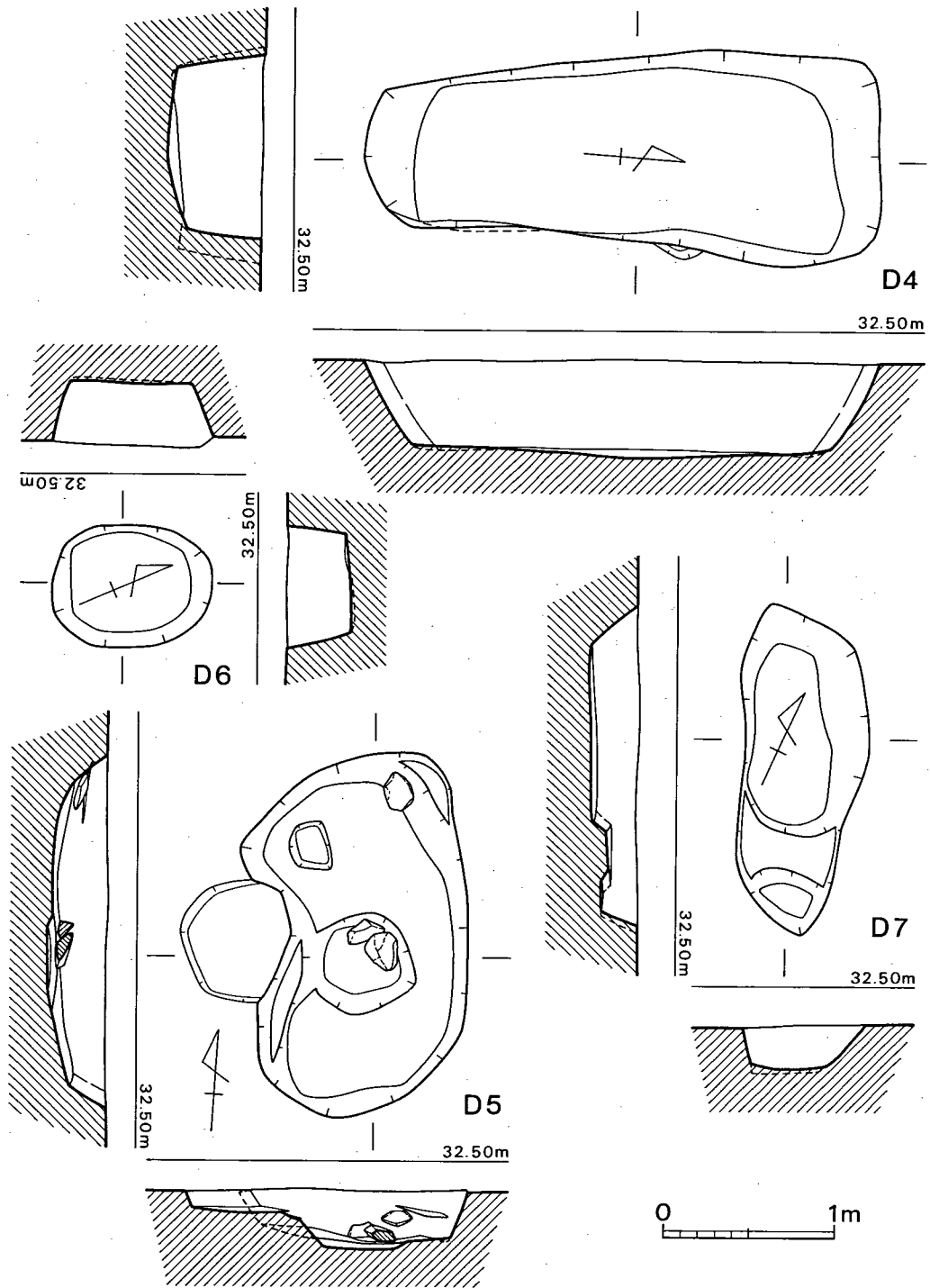
出土遺物 (図版34-2・35-1・40-1・2・43-1・44-1, 第32~36・62図)

土 器 (1~45) 1は広口壺の口縁部破片である。頸部に締りはなく、口縁部は単に開くのみで、古い様相を呈する。2は器高19cm程の短頸壺として復原したが、底部は別個体かも知れない。口縁部は短く立ち、口唇部は僅かに突出する。ちなみに底径は5.5cmである。

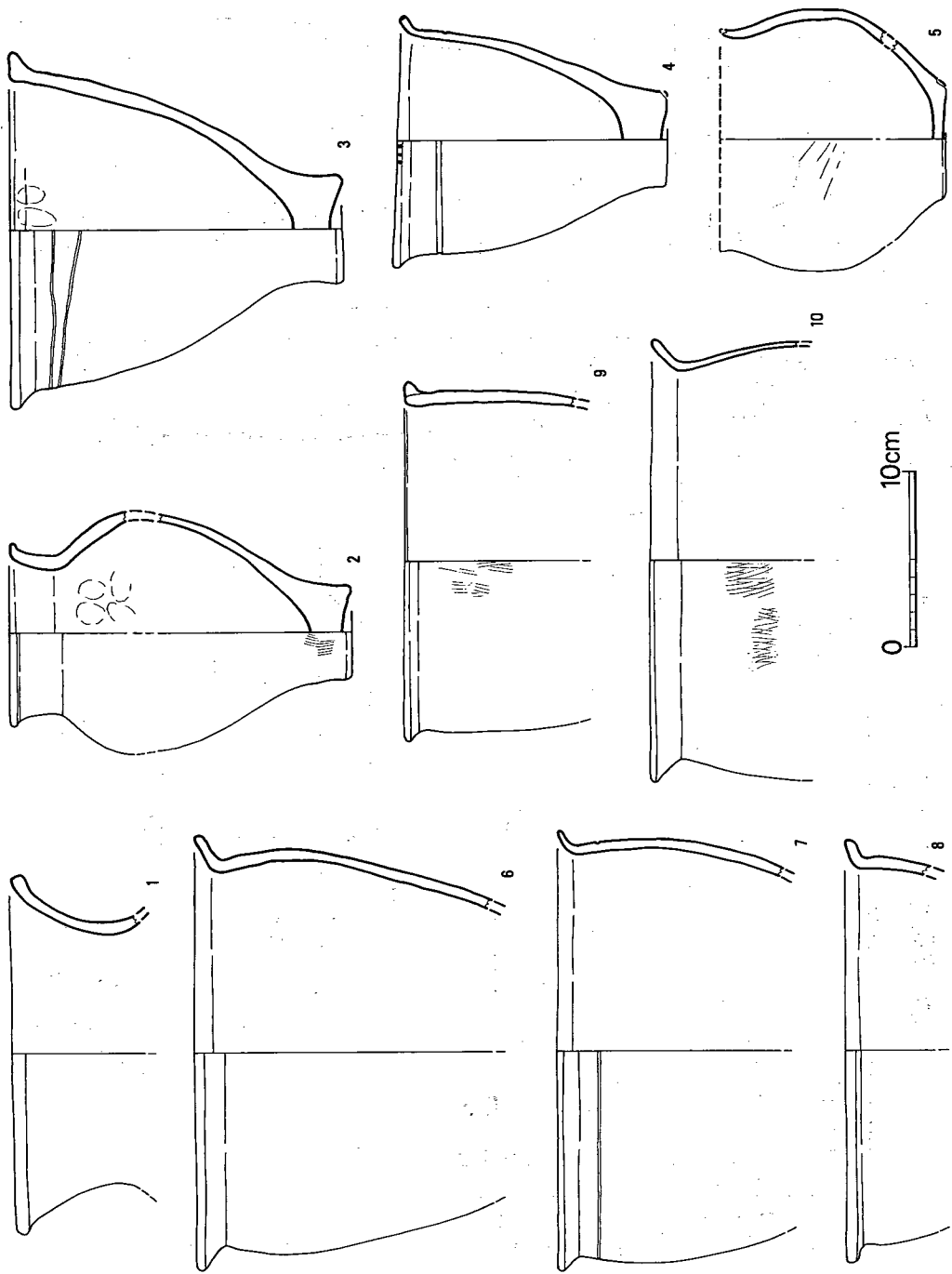
3は甕で、口縁部と底部は接合しないものの同一個体かと思われる。口縁部は逆L字状に肥厚させ、頸部のやや下位にヘラきずみみたいな沈線を2条施文する。内面はミガキ・ナデで、内外面には煤が付着している。4は小型の甕で、器高15.5cm、口径14.4cm、底径5.5cmを測る。口縁部は短かく屈曲し、口唇部にはヘラ先によるキザミ目を施す。また、頸部のやや下位には、沈線を1条施文する。底部は僅かな上底で、器高に比してかなり厚い。胎土に2mm大の長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、暗褐色を呈する。外面は二次加熱を受け脆弱である。

5は無頸壺で、口縁部は短く立つ。頸部との境が不明瞭で、あまり締まらずに胴部に移行する。底部は平底である。全体として丁寧なつくりで、内外面ともミガキによる。焼成は良好で、乳灰色を呈する。6~20は甕の口縁部破片である。6・7・10・16・18・19はく字形口縁を呈し、胴部上位に張りを持つ。口径は6が24.8cm、7は25.0cm、10は25.2cmに復原した。9・13・14は口縁端部に粘土を貼付し、肥厚させたもの。11は口縁部を水平に折り曲げたもので、復原口径は34.6cmである。12はく字形口縁を呈し、口唇部は強くナデられる。頸部下位に三角凸帯を貼付する。15は口縁部を少し外方に曲げただけで、頸部との境は不明瞭。頸部下にヘラ描き沈線を施す。器面調整は外面ハケ目、内面ナデによる。20は口縁端部を肥厚させたもの。何れも胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を含む。

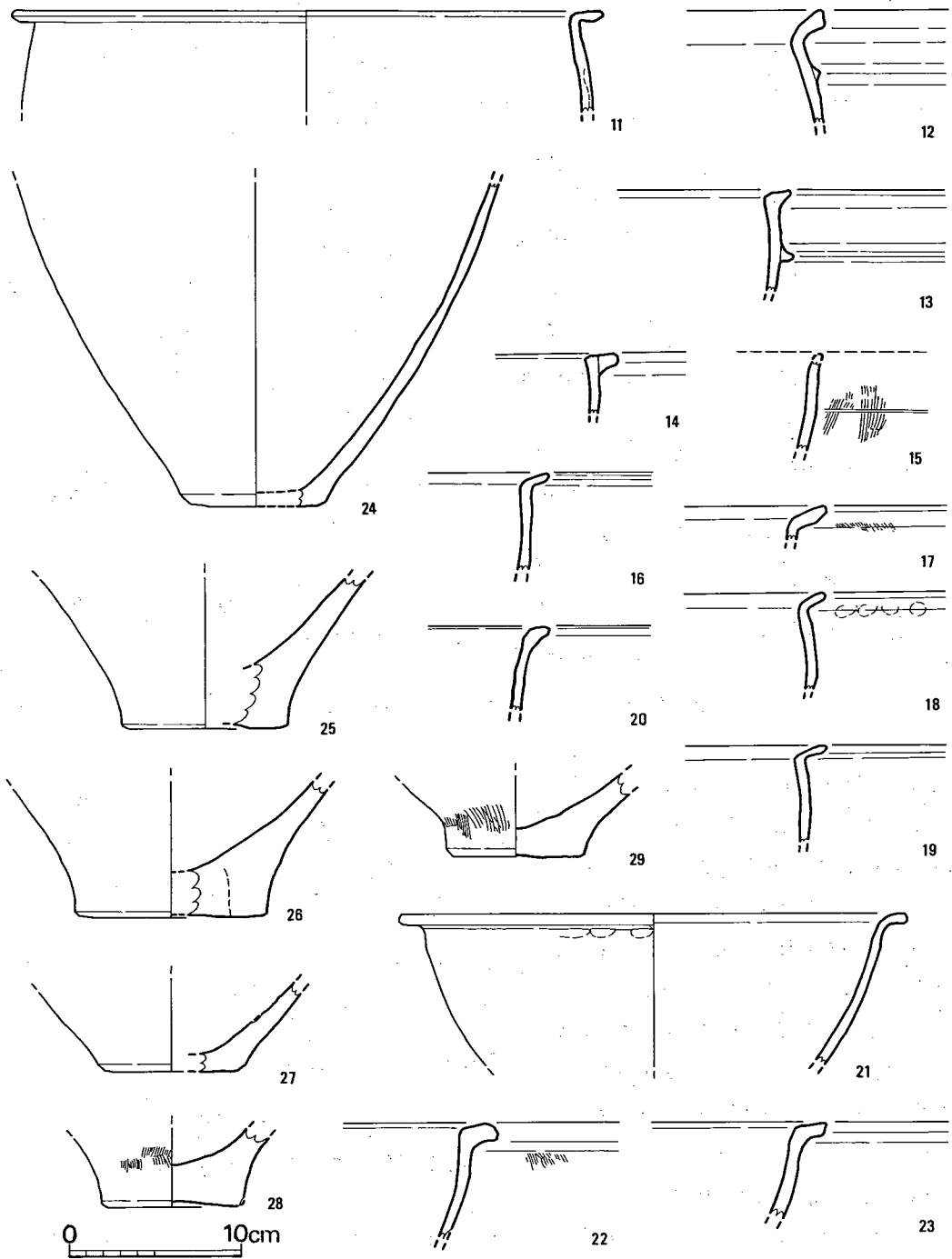
21~23は鉢もしくは高坏の口縁部片で、21の口縁部は折り曲げただけで、22・23は肥厚さす。24は胴部中位~底部にかけての破片で、甕の底部とは異なることから壺になろう。25~43は底部破片である。25・26は大型品の底部で、底径は25が9.8cm、26は11.4cmである。27は壺の底部で、外面はヘラミガキ調整である。28~30は底径が8~9cm程で、甕の底部より大きく、また



第 31 图 4 ~ 7 号土坑实测图 (1/40)

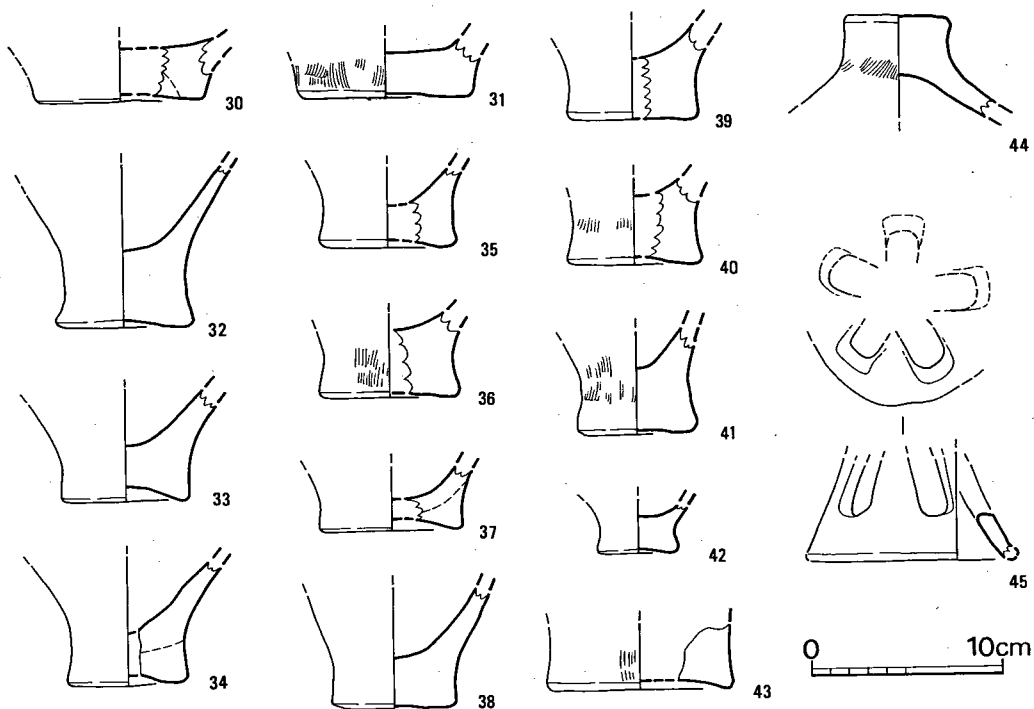


第 32 图 4 号土坑出土土器实测图① (1/4)



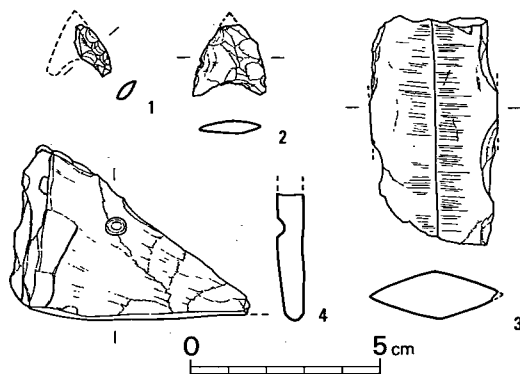
第 33 图 4 号土城出土土器实测图② (1/4)





第 34 図 4号土壙出土土器実測図③ (1/4)

内底部が肉薄であることから壺の底部になろう。32~43は甕の底部である。32~35・37は上底で、32の内底部は3.7cmとかなり厚い。また、内面には炭化物が付着している。37の内底部は肉薄である。40・43は上底と言うよりは、窪む程度。36・41も若干窪む程度で、38・39は平底である。外面調整はハケ目による。42は小型の底部片で、或は蓋の撮部になるか。径は4.4cmである。



第 35 図 土壙出土土器実測図① (1/2)

44は蓋の撮部である。撮径3.8cmで、外面はハケ目調整による。胎土に1mm大の長石・石英を多く含む。焼成は良好で、橙褐色を呈する。45は5箇所に長方形の透かし孔を空けており、器台になろう。復原脚径は11.2cmである。

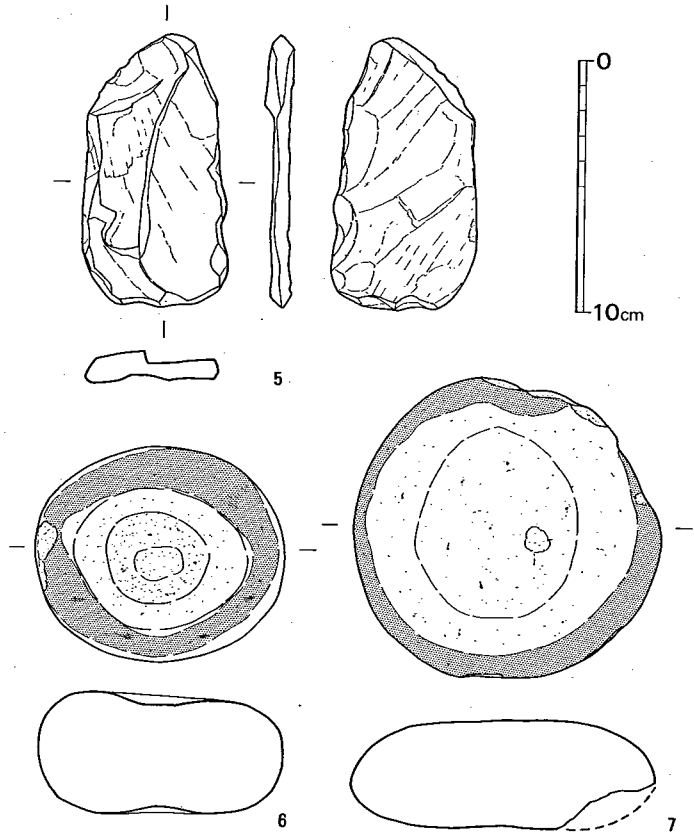
当土壙は、弥生時代前期末から中期初頭にかけて土器が投棄されたものと考えられる。

石器 (2・3・6・7)

2はサヌカイト製の石鏃で、先端部を欠失する。残存長1.9cm、幅1.9cm、重さ1.15gを量る。3は凝灰岩製の磨製石剣で、両端部を欠く。両面には線状の擦過痕が夥しく付く。

6は凹石で、側面には敲打痕がみられる。また、部分的に加熱を受けて黒化している。安山岩製で、長径9.7cm、短径8.5cm、重さ530g。7はすり石で、6同様部分的に加熱を受け、黒化している。径は12.2cmで、重さは780g。安山岩製である。その他に、黒曜石・サヌカイトの剥片も出土している。

土製品 (1) 1は有溝土錘で、長さ4.4cm、径1.6cm、重さは10.1gを量る。



第 36 図 土壙出土石器実測図② (1/3)

5号土 壙 (図版16-3, 第31図)

1号溝のすぐ北側に位置し、ピットと切合っているが、前後関係は不詳。長軸210cm、短軸123cm、深さ29cmの不整長方形を呈し、底面中央には石が入った浅いピットを有する。埋土は暗黒灰色土であった。また、北側には径22cmのピットがある。

出土遺物 (図版35-2, 第38図)

土 器 (1~5) 1は甕の口縁部小片で、口縁部は短く突出する。頸部のやや下位に太めの三角凸帯を貼付する。2~4は甕の底部破片で、何れも内側が窪む。底径は2が6.6cm、3は7.6cm、4は7.0cmである。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。5は蓋で、残高8.4cm、復原口径23.1cmを測る。口唇部は丸く納める。外面はハケ目→ナデで、内面はナデ調整による。胎土に2mm大の長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、暗橙褐色を呈する。

当土壙の時期は、内底部がやや薄目の甕底部から弥生時代中期前半頃と考えられる。

#### 6号土 壙 (図版17-1, 第31図)

4号土壙の3m北側に位置する。長軸94cm, 短軸72cm, 深さ37cmの長円形を呈する小型の土壙である。埋土は暗緑褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。

#### 7号土 壙 (図版17-2, 第31図)

5号土壙の4m西側に位置する。長軸190cm, 短軸72cm, 深さ26cmの不整形を呈するが、本来は140cm程の長円形をなし、南側のピットとは別のものと考えられる。底面はほぼ水平である。

#### 出土遺物 (第38図)

**土 器** (1) 1は甕の口縁部から胴部上位にかけての破片で、復原口径は30.0cmである。口縁部はく字形を呈し、口唇部は丸く納める。胎土に1~2mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は不良で、暗黄褐色を呈する。この1点のみでは時期を決めかねるが、弥生時代中期前葉であろうか。

#### 8号土 壙 (図版17-3, 第37図)

7号土壙のすぐ西側に位置するが、両者は切合い関係にない。長軸200cm, 短軸86cm, 深さ38cmの不整長方形を呈する。底面は西側に緩傾斜しており、西壁ぎわに径28cm, 深さ12cmの小ピットがある。遺物の出土はなく、時期不詳。

#### 9号土 壙 (第37図)

1号溝の1m南側に位置し、7号貯蔵穴・Pit27を切る。長軸211cm, 短軸102cm, 深さ23cmの不整形を呈する。底面はほぼ水平で、中央に径36cm, 深さ11cmの小ピットがある。埋土は黒褐色土で、弥生土器が出土した。

#### 出土遺物 (第38図)

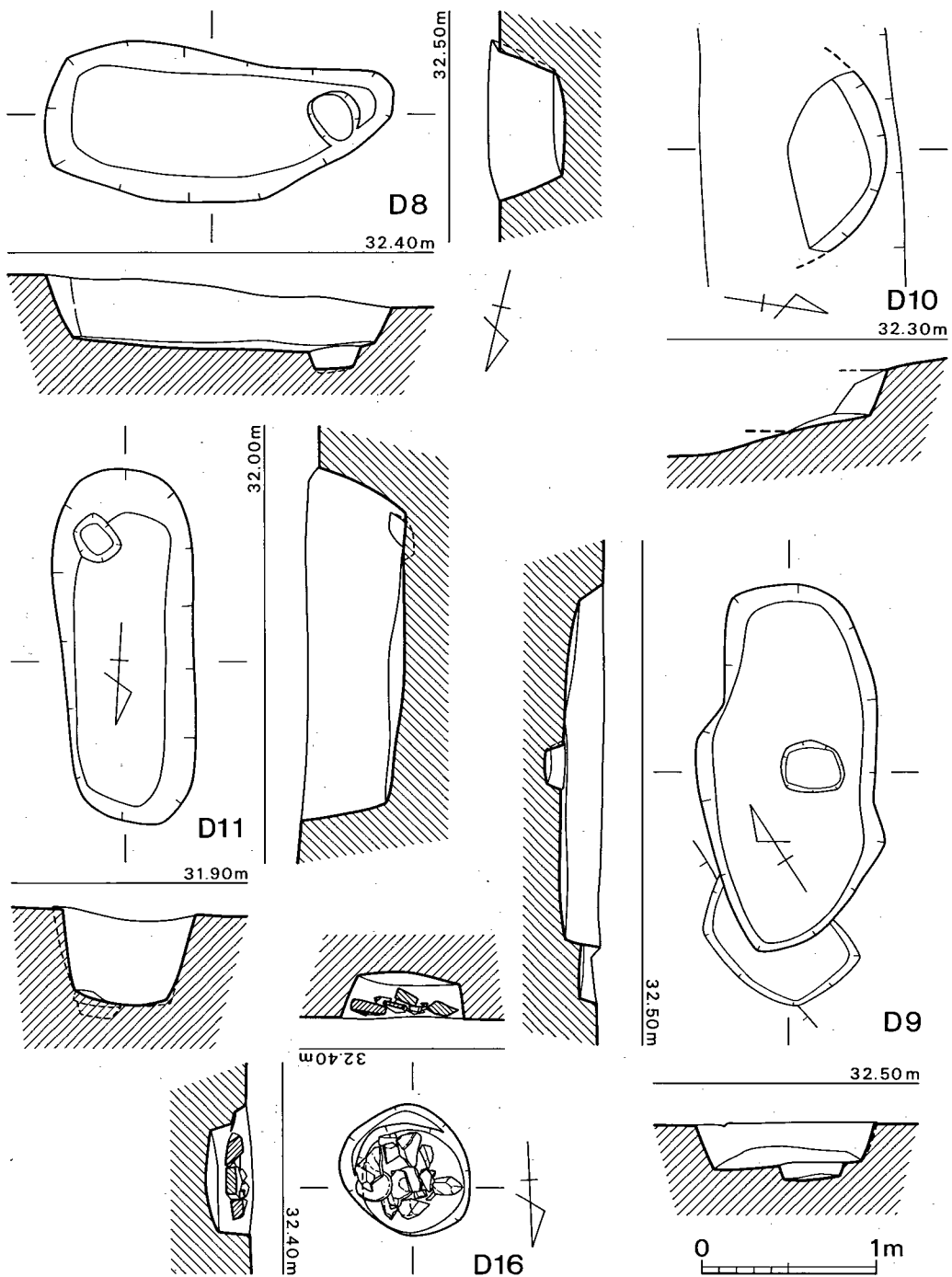
**土 器** (1) 1は甕の底部破片としたが、開き気味であるので蓋の撮部の可能性が高い。胎土に長石・石英・雲母を含む。

#### 10号土 壙 (図版17-4, 第37図)

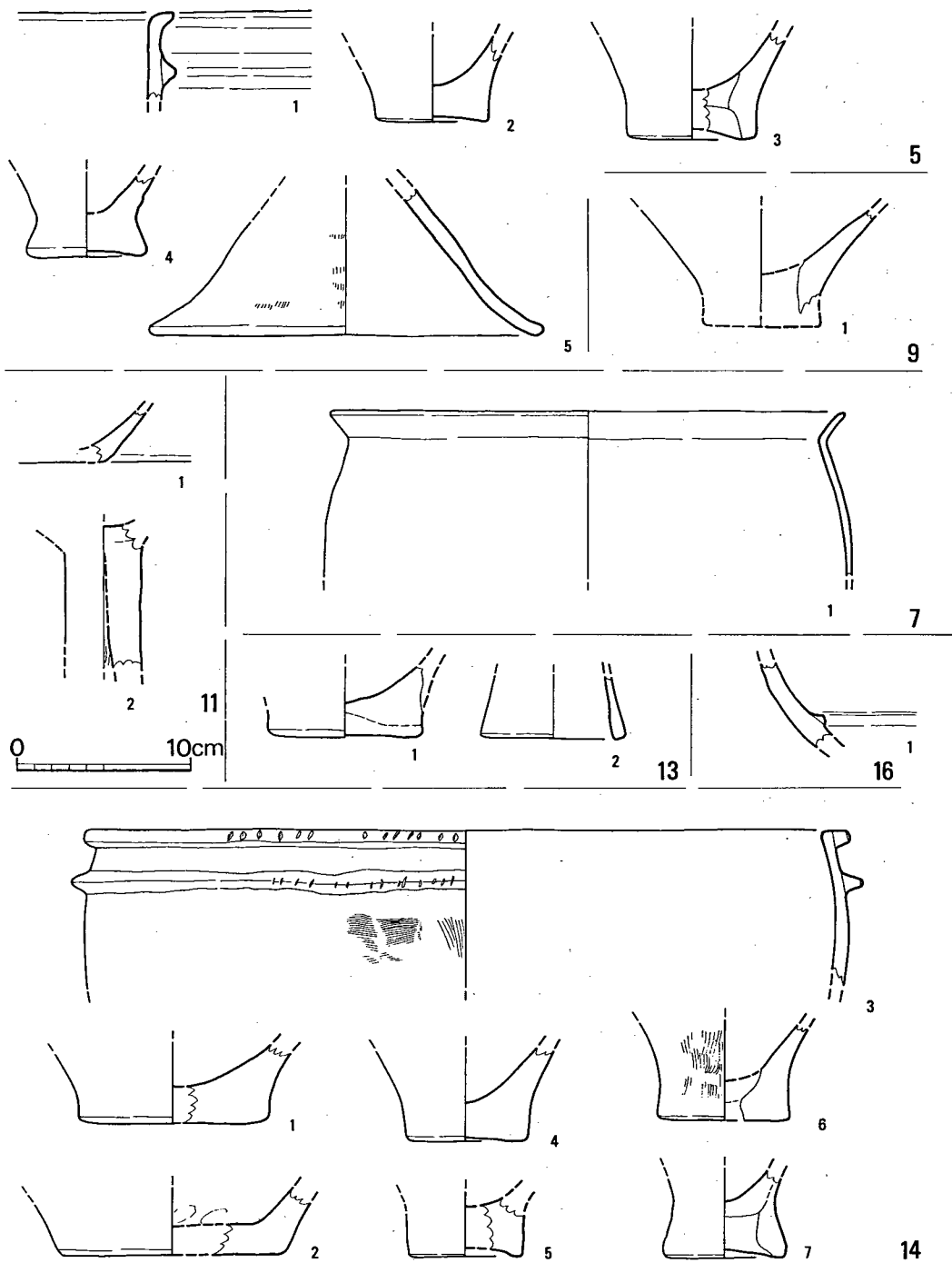
1号溝南側の段落ち肩部で検出した土壙で、北壁側を僅かに残すのみである。埋土は黒褐色土であった。弥生土器の底部細片が出土しているが、図示できなかった。

#### 11号土 壙 (第37図)

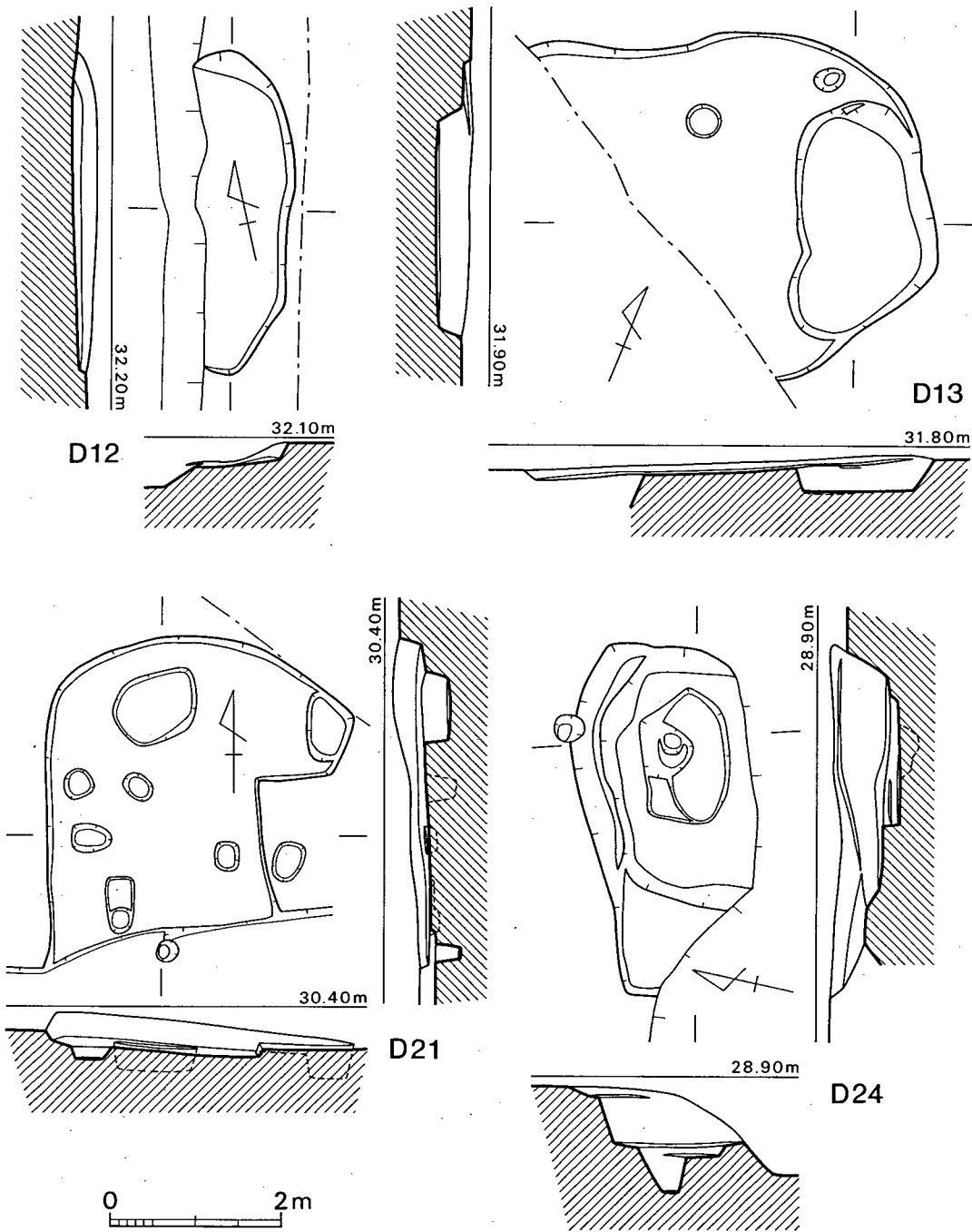
8号貯蔵穴の6m南側に位置する。長軸204cm, 短軸81cm, 深さ56cmの長円形を呈する。床面は南側に緩傾斜しており、南壁には30cm程のピットがある。埋土は暗赤褐色粘質土で、形状か



第 37 图 8~11·16号土壤实测图 (1/40)



第 38 图 5 · 7 · 9 · 11 · 13 · 14 · 16号土坑出土土器实测图 (1/4)



第 39 图 12·13·21·24号土坑实测图 (1/80)

らして土壙墓になるか。

#### 出土遺物 (第38図)

土器 (1・2) 1は壺の底部小片である。2は高坏の脚柱部破片である。脚径4.5cmで、内面にはシボリ痕がみられる。他に須恵器甕の胴部細片が出土している。

#### 12号土壙 (第39図)

水路を挟んで1号墳の西側に位置し、畑地の削平により西壁はカットされる。南北長は378cm、深さは18cmを測る。埋土は黒褐色土であり、弥生土器の壺・甕細片、黒曜石の剥片等が出土したが図示し得るものではない。

#### 13号土壙 (図版18-1, 第39図)

11号土壙の1m西側に位置する。南側は耕地整理の際にカットされ、全貌は不明。東壁沿いに長さ280cm、幅160cm、深さ40cmの土壙があり、黒曜石・水晶の剥片が出土した。

#### 出土遺物 (第38図)

土器 (1・2) 1は甕の底部小片で、接合部で剥離している。底径は9.2cmを測る。2は器台の裾部で、復原径は8.4cmである。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

#### 14号土壙 (図版18-2, 第40図)

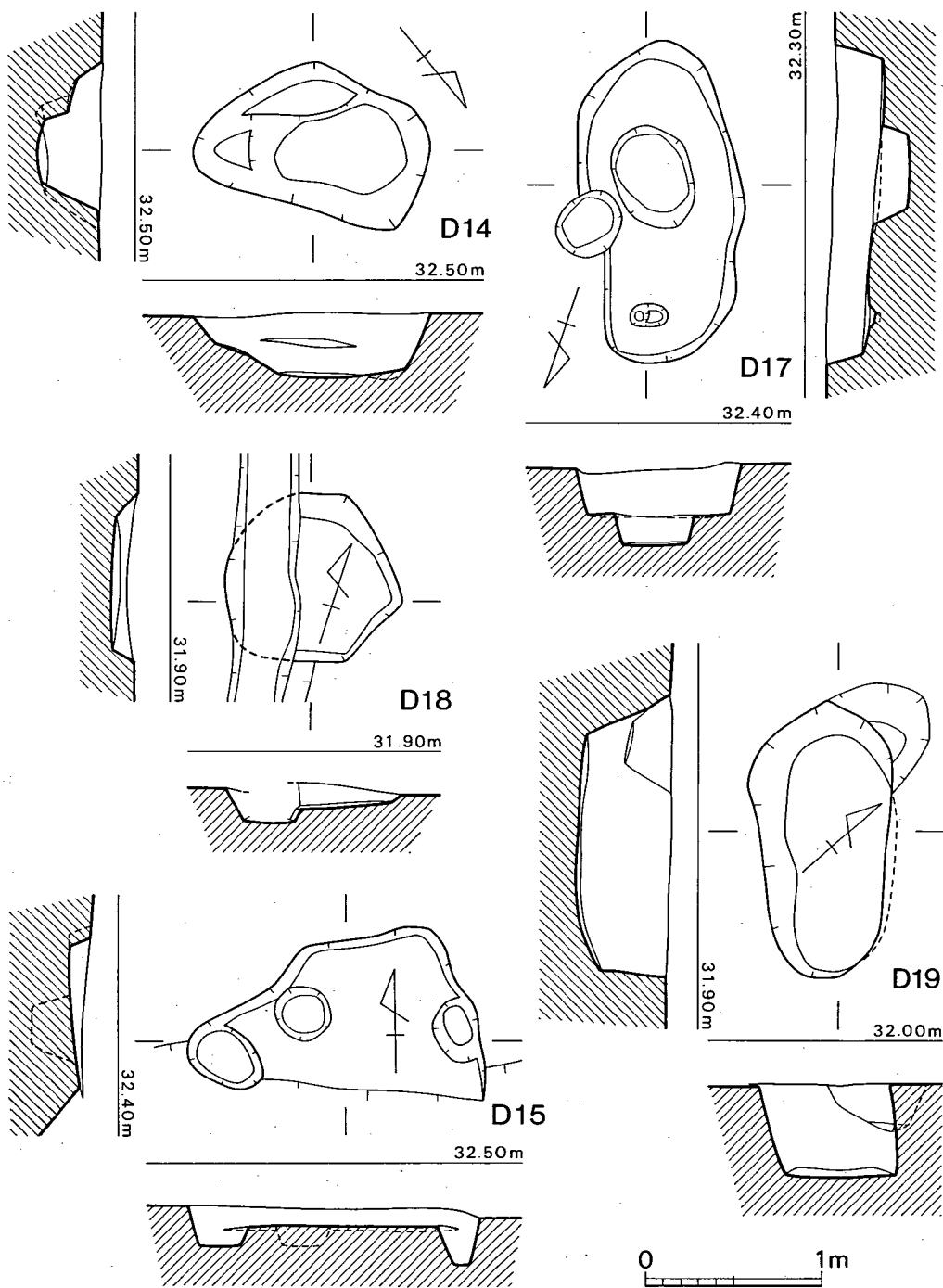
水路を挟んで4号土壙の東側に位置する。不整形を呈し、長軸135cm、短軸80cm、深さ37cmを測る。南側と東側にテラスがある。小規模な割には多くの土器が出土した。

#### 出土遺物 (図版35-3・42-2, 第36・38図)

土器 (1~7) 1・2は壺の底部破片で、平底をなす。底径は1が11.0cmで、2は13.0cmである。胎土に長石・石英・雲母を多く含む。3は大型甕の口縁部破片であり、復原口径は44.0cmを測る。口縁部は粘土帯を貼付して逆L字状としているが、頸部下の三角凸帯とさほど変わらない大きさである。ともにへら先によるキザミ目を施している。胴部外面には煤が付着している。1~2mm大の長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、橙褐色を呈する。

4~7は甕の底部破片で、6を除き若干の内窪みである。6・7は底部の成形状況が判る資料。底径は各々7.1cm, 6.6cm, 7.8cm, 7.2cmである。胎土は長石・石英を多く含み、4には赤褐色粒も含まれる。土壙の時期は、弥生時代中期初頭~前葉であろう。

石器 (5) 短冊形の打製石斧で、側縁は調整剥離を行う。長さ10.8cm、幅5.7cm、重さ100gで、緑泥片岩製。



第 40 图 14·15·17~19号土坑实测图 (1/40)



#### 15号土 壙 (第40図)

4号住居跡の3m南側に位置し、畑地の段カットにより南壁を失う。不整形を呈し、土壙内に小ピットが3個あるが、当土壙に伴うのか不詳。埋土は暗褐色土であった。弥生土器の小片が出土しているが、図示にたえない。

#### 16号土 壙 (図版18-3, 第37図)

3号溝のすぐ南側に位置する。平面形は円形を呈し、径76cm、深さ27cmを測る。南側にテラスを有する。土壙内には角礫が詰まっていたが、床面より10cm程浮いた状態であった。また、埋土には焼土・炭を多く含むが、礫は焼けていない。

#### 出土遺物 (第38図)

土 器 (1) 1は壺の肩部付近の破片で、三角凸帯を貼付する。胎土に5mm大の砂粒を含む。色調は、暗黄褐色を呈する。

#### 17号土 壙 (図版19-1, 第40図)

16号土壙の6m南側に位置する。長軸185cm、短軸94cm、深さ27cmの長円形を呈し、東壁の中央部はピットに切られる。底面は南側に下がっており、中央に径60cm、深さ20cmのピットと北側に12cmの小ピットを有するが、後述する落し穴状遺構のそれとは異なる。埋土は暗緑褐色土であり、遺物の出土はなかった。

#### 18号土 壙 (第40図)

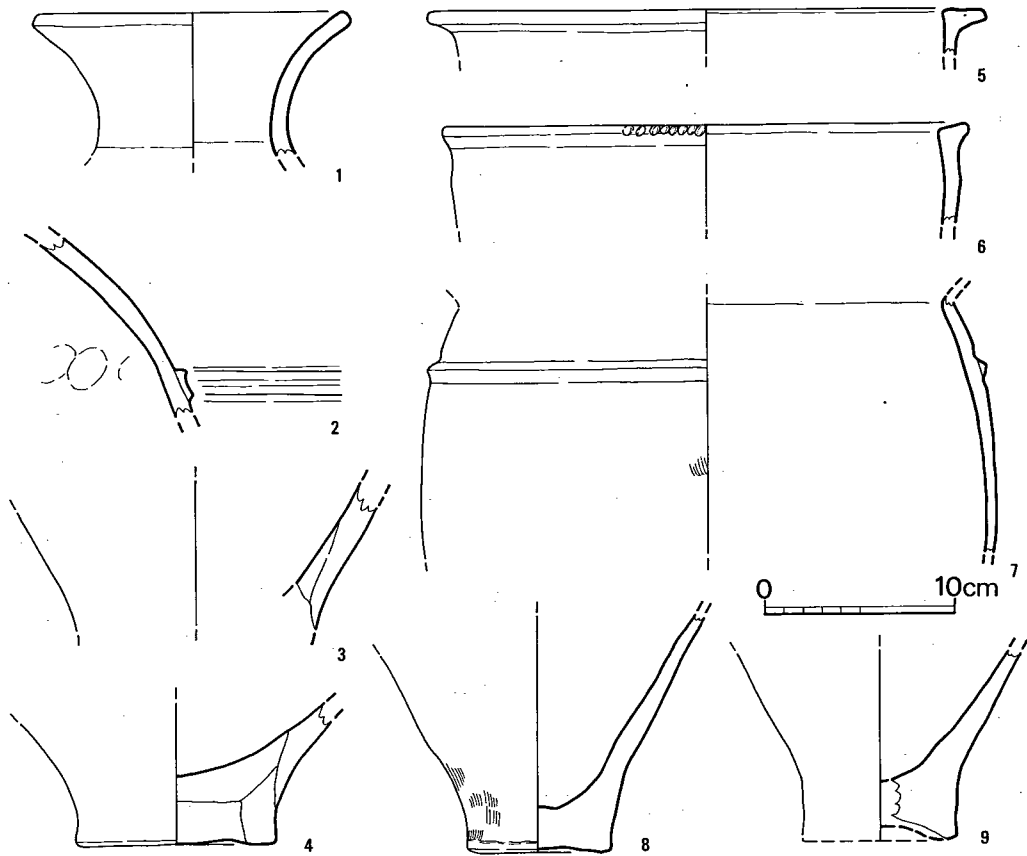
4号溝の1m東に位置し、西壁は畑の側溝に切られる。平面形は不整円形を呈し、長径101cm、短径95cmを測る。深さは15cmと浅目の割には、多くの土器が出土した。

#### 出土遺物 (図版35-4, 第41図)

土 器 (1~9) 1・2は壺で、1は口縁部、2は胴部破片である。1の口縁部は大きく外反し、口唇部は面を持つ。復原口径は16.4cmである。2は幅広のM字形凸帯を貼付する。胎土に長石・石英を多く含む。3・4は底部破片で、4の底径は10.8cmである。胎土に1~2mm大の長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、暗橙褐色を呈する。

5~9は甕で、5・6は口縁部、7は胴部、8・9は底部破片である。5は逆L字形の口縁部で、6の口縁部は小さく突出する。口唇部にはへう先によるキザミ目を施す。7は口縁部を欠くが、く字形を呈するのであろう。頸部下位に三角凸帯を貼付する。8は平底、9は剥離しているが上底を呈するか。ともに長石・石英・赤褐色粒を多く含む。色調は暗黄褐色を呈する。

当土壙の時期は、弥生時代中期初頭であろう。



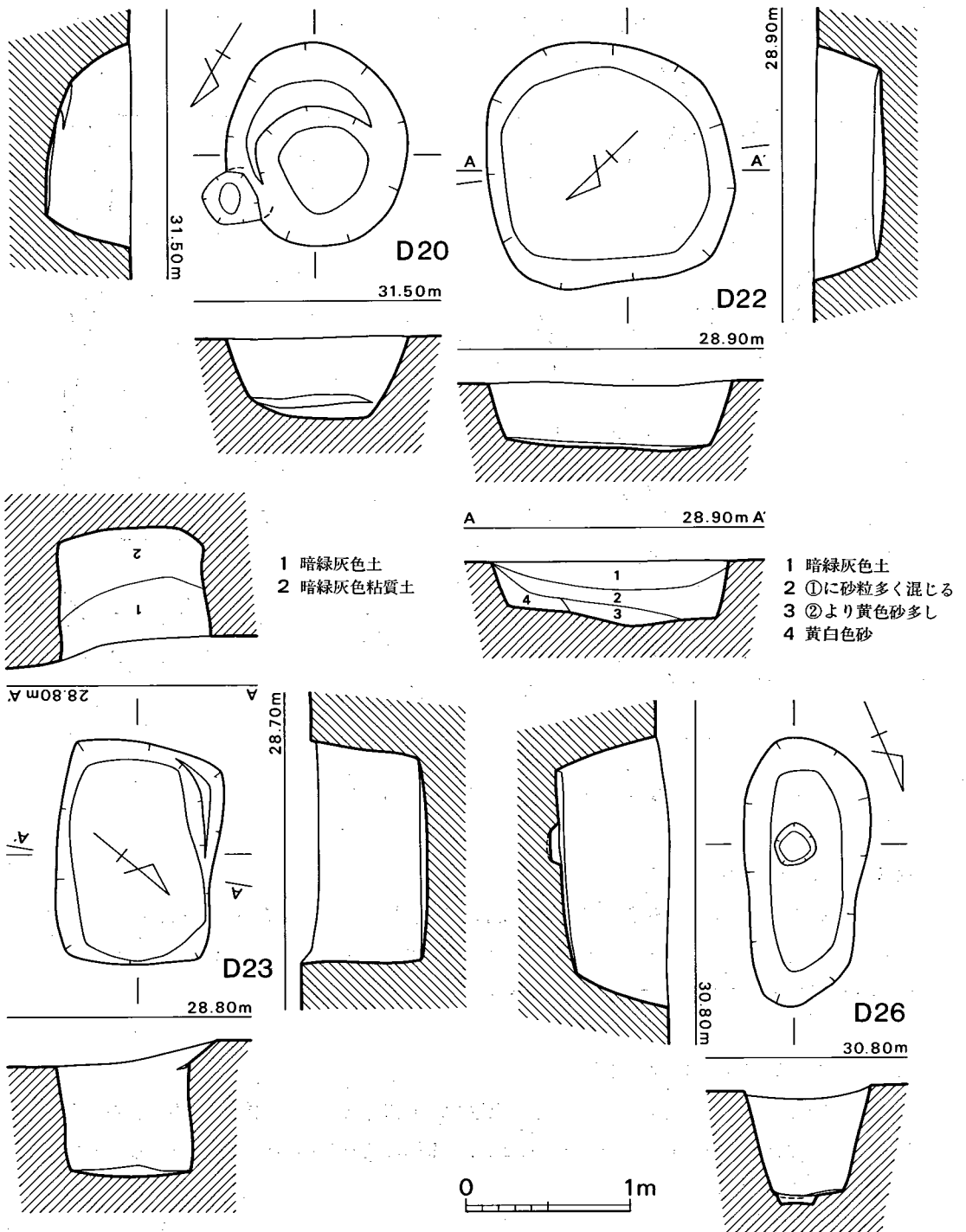
第 41 図 18号土壙出土土器実測図 (1/4)

**19号土 壙** (図版19-2, 第40図)

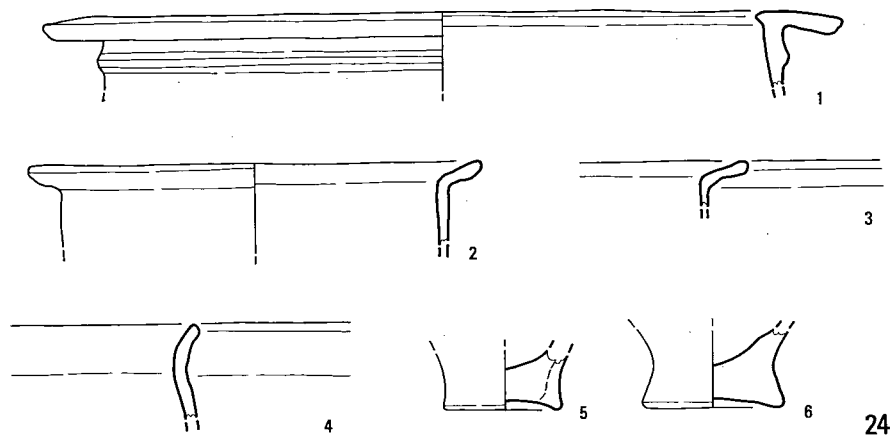
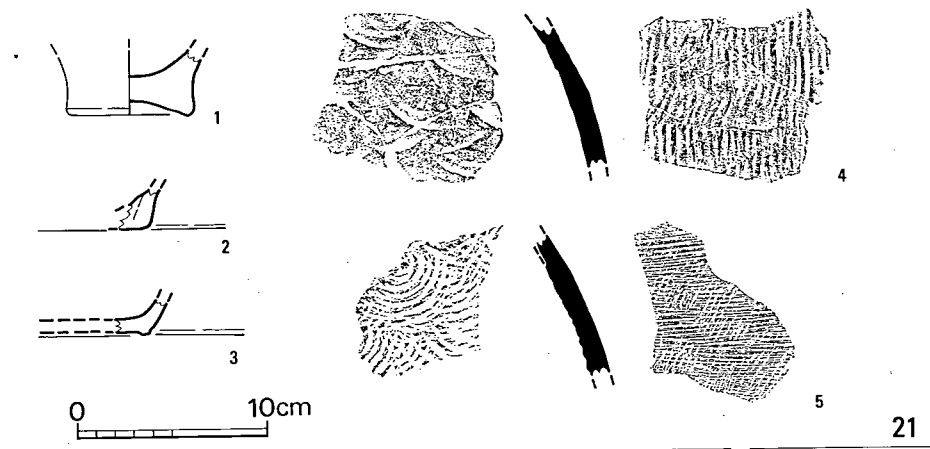
12号貯蔵穴の1m東側に位置する。平面形は長円形を呈し、長軸158cm、短軸74cm、深さ53cmを測る。北側はピットと重複している。底面は若干の起伏があり、北壁はオーバーハングする。埋土は暗緑色土であり、遺物の出土はなかった。

**20号土 壙** (図版19-3, 第42図)

1号住居跡の貼床を剝した際に検出した土壙で、北側のピットは住居跡に伴うもの。円形を呈し、長径125cm、短径110cm、深さ50cmを測る。南側に三日月形のテラスを有する。遺物の出土はなく、時期不詳。



第 42 図 20・22・23・26号土坑実測図 (1/40)



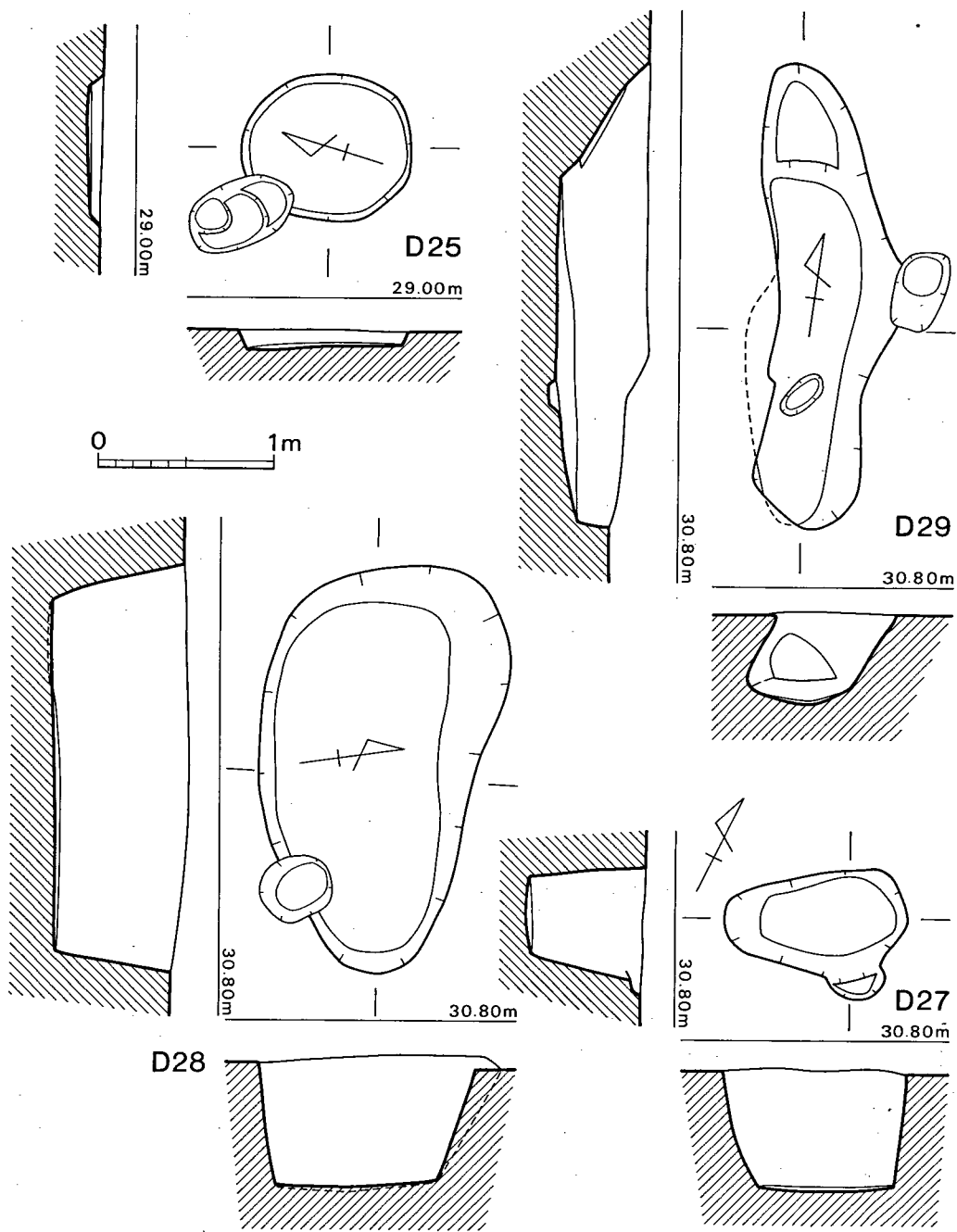
第 43 図 21・24号土壙出土土器実測図 (1/4)

21号土 壙 (第39図)

6号住居跡の6m東側に位置し、南壁を8号溝に切られる。逆L字形を呈し、東西幅は270cmである。30cmと浅く、底面には多くのピットがあるが、当土壙との関連は不詳。遺物は、弥生土器・須恵器・土師器が出土した。

出土遺物 (第43図)

土 器 (1～5) 1・2は弥生土器で、1は上底の甕底部片。2は壺の底部になるか。1の底径は6.8cmである。3は土師器の坏で、低い高台が付く。4・5は須恵器の胴部片である。4は外面が平行タタキ、内面は円弧タタキで、5は外面が平行タタキ→横位のカキ目、内面は同心円タタキによる。弥生土器は混入したのであろう。



第 44 图 25・27~29号土坑实测图 (1/40)

#### 22号土 壙 (図版20-1, 第42図)

調査区の東端部中央で検出した土壙で、平面形は不整円形を呈する。径150cm、深さ40cmを測る。床面はほぼ水平で、壁は緩やかに立上がる。遺物の出土はなく、時期不詳。

#### 23号土 壙 (第42図)

22号土壙の1m西側に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸137cm、短軸95cm、深さ78cmを測る。西側コーナーにテラスがある。底面はほぼ水平で、壁は垂直に立上がる。埋土は暗緑褐色粘質土であった。遺物は皆無で、時期不詳。

#### 24号土 壙 (第39図)

調査区の東端南側に位置し、10号溝に南壁を切られる。東西幅410cm、深さ76cmを測り、西側に1m幅のテラスを有する。底面中央に長さ160cmの段があり、さらにピットを掘り込む。

#### 出土遺物 (図版35-5・40-3, 第35・43図)

土 器 (1~6) 1~3は甕の口縁部片で、1の口縁部は逆L字状に折れ、内側にも突出する。2・3はく字形の口縁。4は緩やかに外反する口縁部片で、鉢になるか。5・6は底部破片。

石 器 (4) 4は石包丁の未製品であろうか。中央には貫通していない円孔があり、全周は自然面を留める。片岩系の石材を使用している。

#### 25号土 壙 (第44図)

24号土壙の2m西側で検出した土壙で、長径97cm、短径84cm、深さ8cmの円形を呈する。弥生土器片が出土しているが、図示不可能。

#### 26号土 壙 (図版20-2, 第42図)

調査区の西側で15号溝の4m西側に位置する。長軸166cm、短軸77cm、深さ63cmの長円形を呈する。当初、落とし穴として掘り下げたが、底面中央のピットは5cmと浅い。遺物は皆無。

#### 27号土 壙 (図版20-3, 第44図)

26号土壙の4m西側に位置し、長さ104cm、幅60cmと小規模であるが、67cmと深い。埋土は暗緑色粘質土であった。遺物の出土はなく、時期不詳。

#### 28号土 壙 (第44図)

26・27号土壙の中間に位置する。長軸234cm、短軸126cm、深さ78cmの不整長円形を呈し、床面はほぼ水平である。当土壙も遺物の出土はなく、時期不詳。

## 29号土壙 (第44図)

27号土壙の3m西側に位置し、南側は現代坑に切られる。長軸266cm、短軸66cm、深さ54cmを測る不整形を呈する。底面は内窪みで、西壁はオーバーハングし、南壁よりにピットを有する。遺物の出土はなく、判断材料に事欠く。

表2 土壙一覧表

(単位cm)

No.	平面形	長軸長		短軸長		深さ	出土遺物	備考
		上面	底面	上面	底面			
1	隅丸長方形	208	198	166	134	50		二段掘り
2	隅丸長円形	270	236	152	135	52	土器・石器	二段掘り
3	長形状	236	112	72	55	26	土器	
4	長方形	302	244	125	99	55	土器・石器	埋土中に炭多し
5	不整長方形	210	179	123	93	29	土器	ピット(1)あり
6	長円形	94	71	72	58	37		
7	不整形	190	107	72	45	26	土器	
8	不整長方形	200	175	86	59	38		ピット(1)あり
9	不整形	211	197	102	85	23	土器	7号貯蔵穴を切る
10								
11	長円形	204	168	81	52	56	土器	ピット(1)あり
12		378	344			18		
13							土器	
14	不整形	135	74	80	51	37	土器・石器	テラスあり、土器多し
15								
16	円形	76	58	75	59	27	土器	角礫が入っている
17	長円形	185	169	94	80	27		ピット(2)あり
18	不整円形	101		95	85	15	土器	
19	長円形	158	135	74	64	53		
20	円形	125	53	110	54	50		1号住居跡に切られる
21	逆L字形					30	土器	8号溝に切られる
22	不整円形	150	125	150	117	40		
23	隅丸長方形	137	122	95	78	78		
24						76	土器・石器	10号溝に切られる
25	円形	97	88	84	74	8		
26	長円形	166	123	77	43	63	土器	中央にピット(1)あり
27	長円形	104	77	60	43	67		
28	不整長円形	234	200	126	95	78		
29	不整形	266	198	66	59	54		中央にピット(1)あり

## 6. 落とし穴状遺構

水路西半部で6基検出したが、当遺跡は全体として削平が著しいため他にも存在した可能性は高い。底面にピットを1本有するものと、数本の小ピットを有するものとの二者がある。

### 1号落とし穴 (図版21-1, 第46図)

7号土壌のすぐ東側で検出した。平面形は長円形を呈し、長径100cm, 短径85cm, 深さ90cmを測る。壁面は中程ですぼまり、底面で広がる。底面中央に径35cm, 深さ16cmのピットを有する。埋土は暗緑褐色粘質土で、弥生・須恵器細片が出土したが、後世の混入であろう。他に黒曜石の剥片が出土した。

### 2号落とし穴 (図版21-2, 第46図)

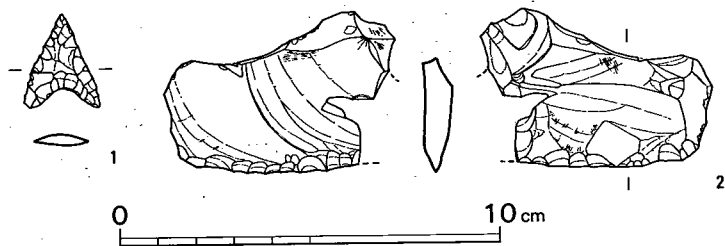
6号土壌の4m西側で検出した。不整円形を呈し、長径100cm, 短径79cm, ピット底までの深さ93cmを測る。壁面は丸みをおびて立上がる。底面には63×54cm, 底面からの深さ27cmの大きめの穴があり、底面はテラス状に残る程度である。埋土は1同様、暗緑褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。

### 3号落とし穴 (図版21-3, 第46図)

13号溝の1m東で検出した。長円形を呈し、長軸111cm, 短軸69cm, 深さ64cmを測る。底面はほぼ水平で、径5cm, 深さ7~10cmの小穴が3個あり、杭痕と考えられる。遺物の出土はない。

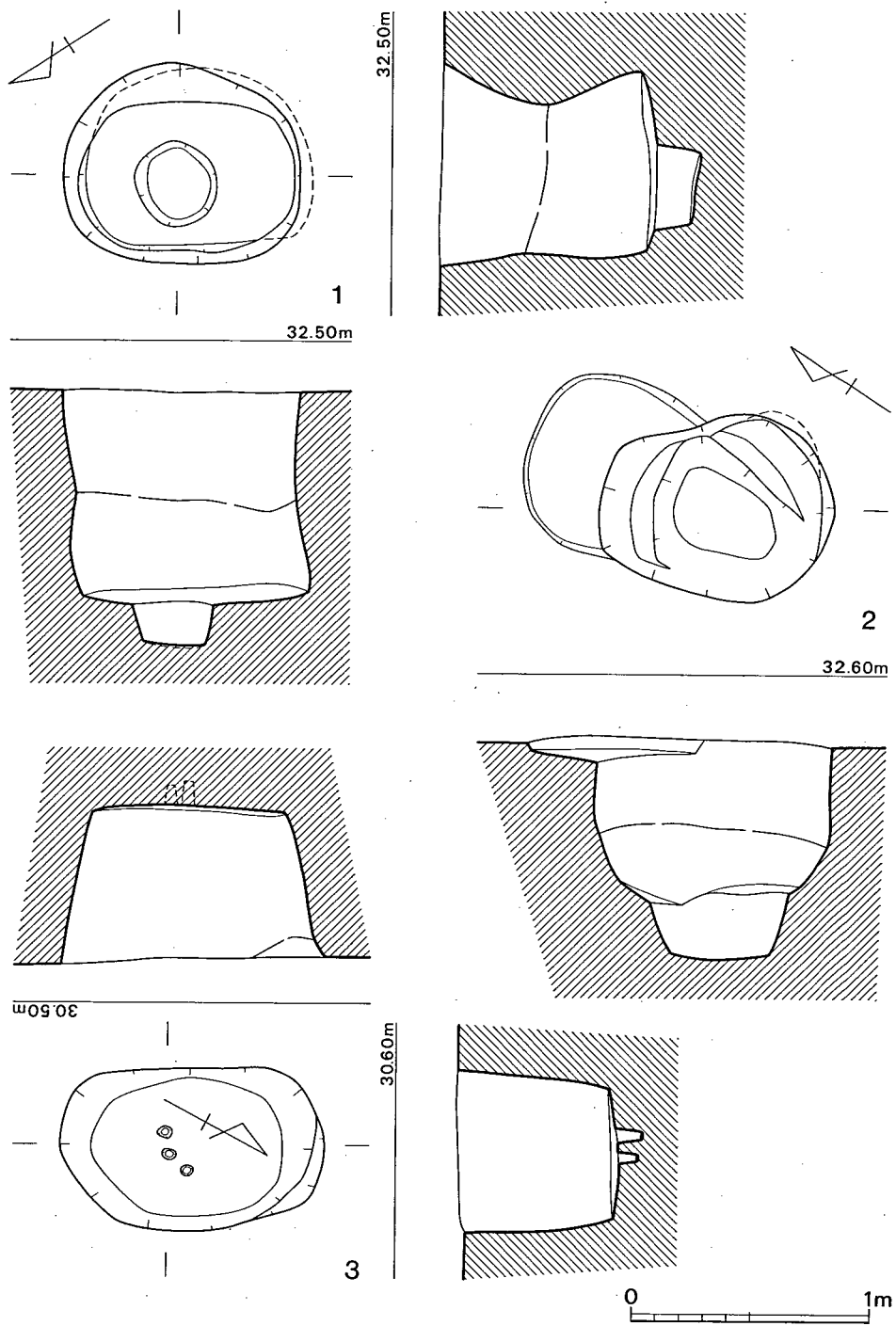
### 4号落とし穴 (図版22-2, 第47図)

調査区の西側で検出した落とし穴で、29号土壌の9m北側に位置する。調査した落とし穴の中では大型の部類に属し、長軸149cm, 短軸74cm, 深さ78cmを測る隅丸長形状を呈する。壁面は緩やかに立上がり、北西壁には底面から40cmの部位に三日月形のテラスを有する。底面の中央には、

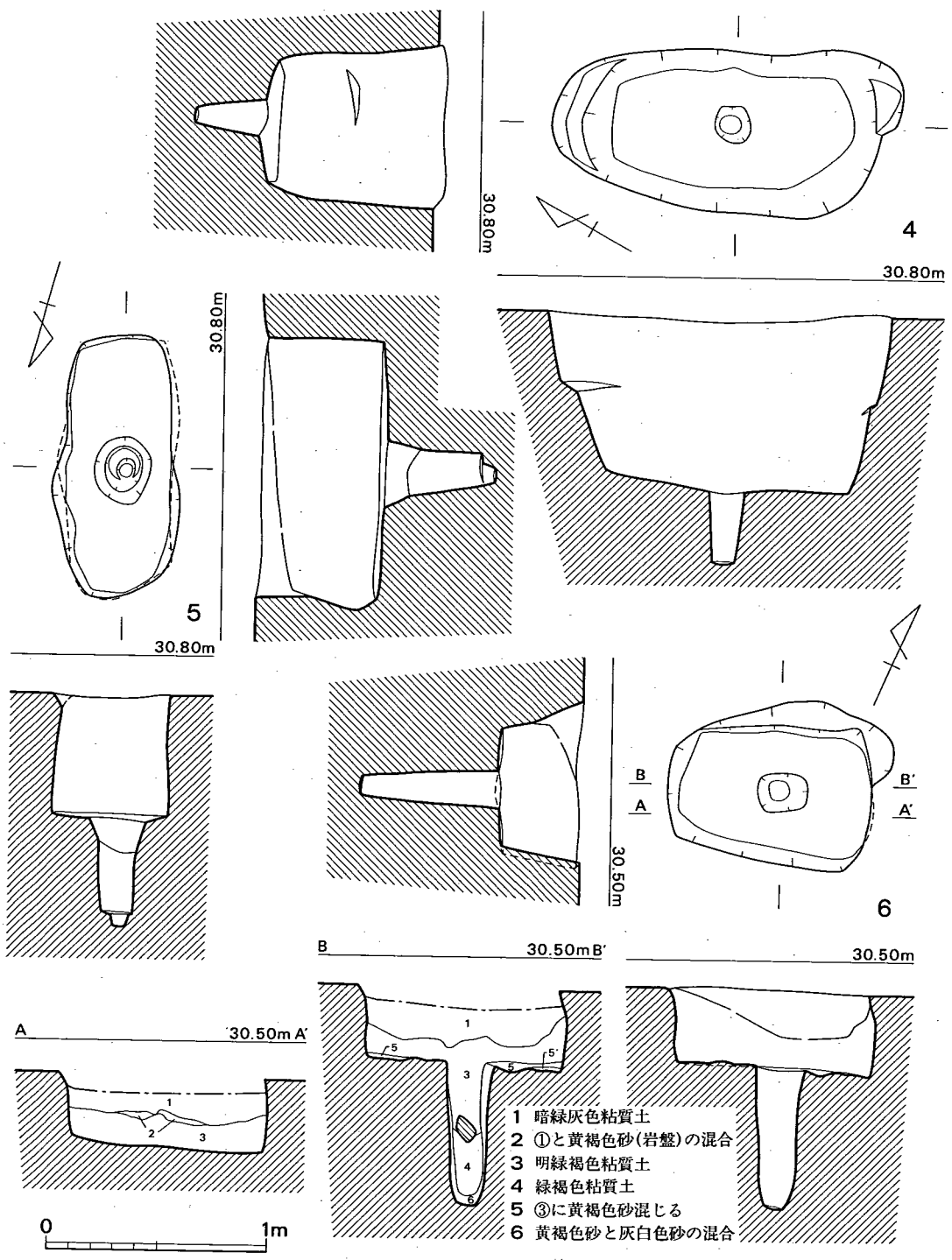


第45図 4号落とし穴出土石器実測図 (1/2)





第 46 図 1 ~ 3 号 落し 穴 状 遺 構 実 測 図 (1/30)



第 47 図 4～6号落とし穴状遺構実測図 (1/30)

径18cm、深さ33cmのピットを掘り込む。埋土は暗緑褐色土であり、石鏃・石匙が出土した。長軸は南北方向にある。

**出土遺物** (図版40-1, 第45図)

**石器** (1・2) 1は黒曜石製の石鏃で、長さ2.5cm、幅2.0cmで、重さは0.9gを量る。姫島産である。2は剥片を利用した横型の石匙で、石材は姫島産の黒曜石。その他にも黒曜石・サヌカイトの剥片も出土している。

**5号落とし穴** (図版22-3, 第47図)

4号落とし穴の5m南側に位置し、両者は主軸方向を等しくする。長軸119cm、短軸58cm、深さ57cmを測る隅丸長方形を呈する。壁面は垂直気味に立上がるが、底面は開口部より若干広がる。底面はフラットで、中央に径31×27cm、深さ41cmのピットを有する。遺物は黒曜石・サヌカイトの剥片が出土したのみ。

**6号落とし穴** (図版23-1~3, 第47図)

スライス調査を行った落とし穴で、5号貯蔵穴の14m南側に位置する。長軸92cm、短軸78cm、深さ35cmの隅丸長方形を呈し、壁面は垂直気味に立上がる。底面はフラットで、中央に径22cmのピットを掘っているが、64cmとかなり深い。ここの落とし穴は、規模に反比例して底面のピットが長くなる傾向にある。埋土は暗緑灰色粘質土を主体とし、⑥は黄褐色砂・灰白色砂の混合で、杭の隙間から流入したのであろう。

また、ピットの中位には礫が入っており、杭の根がための石か。安武土井の内遺跡の9・21・23号土壇(落とし穴)は、ピット付近に小礫があり、杭の根がためと考えられる(註3)。出土遺物はなかった。

表3 落とし穴一覧表

(単位:cm)

No.	平面形	長軸長		短軸長		深さ	ピット		備考
		上面	底面	上面	底面		径	深さ	
1	長円形	100	96	85	74	90	35	16	
2	不整円形	100	45	79	30	65	63	27	
3	長円形	111	81	69	56	64	4~5	7~10	ピット3個あり
4	隅丸長方形	149	109	74	52	78	18	33	石鏃・石匙出土
5	隅丸長方形	119	117	58	50	57	30	41	
6	隅丸方形	92	86	78	55	35	22	64	ピット内に石あり

## 7. 井 戸

調査区の東端部で2基検出した。

### 1号井 戸 (図版24-2, 第48図)

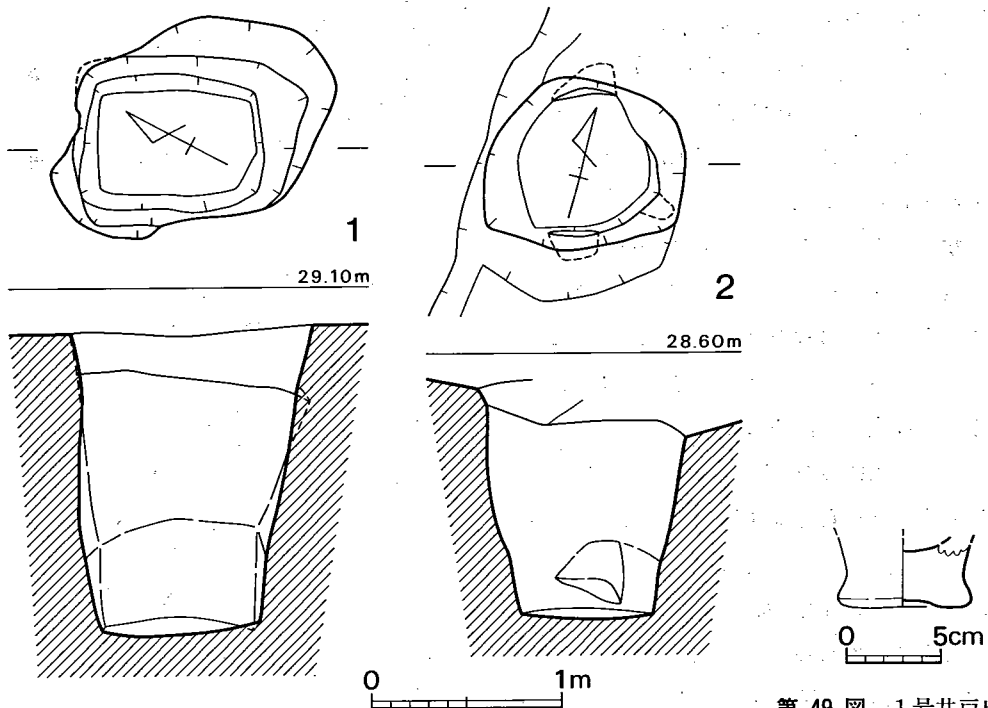
6号住居跡の7m南側に位置し、9号溝と接する。隅丸方形を呈し、長軸128cm、短軸107cm、深さ160cmを測る。硬砂層まで掘り込まれているが、湧水はそれ程でもない。埋土は暗緑灰色土であった。埋土上位から弥生土器が出土しているが、伴うものか不明。

### 出土遺物 (第49図)

土 器 (1) 1は甕の底部片で、底径は7.1cmである。外底面は若干窪む。

### 2号井 戸 (図版24-3, 第48図)

1号井戸の10m東側に位置する。1号落込み以東は、黒褐色土が堆積しており、その下層より検出した。平面形は不整円形を呈し、長径117cm、短径108cm、深さ125cmを測る。当井戸も砂層まで掘り込んでいるが、湧水はほとんどなく、しみだす程度である。遺物の出土はなかった。



第 48 図 1・2号井戸実測図 (1/40)

第 49 図 1号井戸出土  
土器実測図 (1/4)

## 8. 溝状遺構

調査区の全域に存在し、15条検出した。溝の時期は、弥生時代・奈良～中世・近代の3時期に及ぶ。他の遺構との切合い関係は、次のとおりである（矢印は古→新を表す）。

6号貯蔵穴	→	1号溝
9号貯蔵穴	→	2号溝
4号住居跡	→	3号溝?
18号貯蔵穴	→	5号溝
6号溝	→	2号墳?
5号住居跡	→	7号溝
21号土壙	→	8号溝
24号土壙	→	10号溝
2号落込み	→	12・13号溝
4号土壙墓	→	14号溝

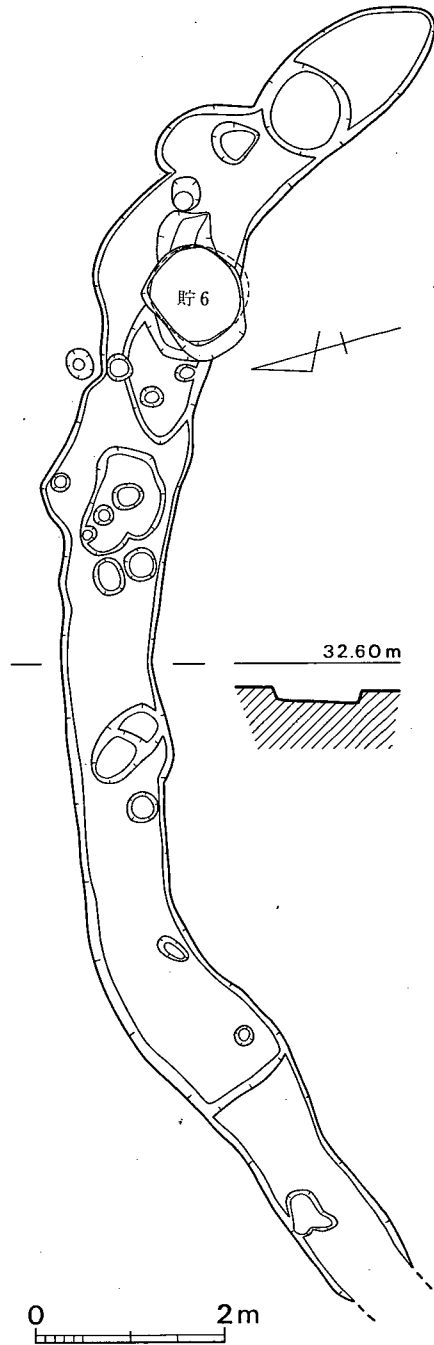
### 1号溝（図版25-1，第50図）

調査区中央の三角地帯で水路の西側に位置し、6号貯蔵穴を切る。円弧状を呈し、現状で長さ13.2m、中央部幅0.94mである。埋土は暗褐色土であり、土器・石器が出土した。

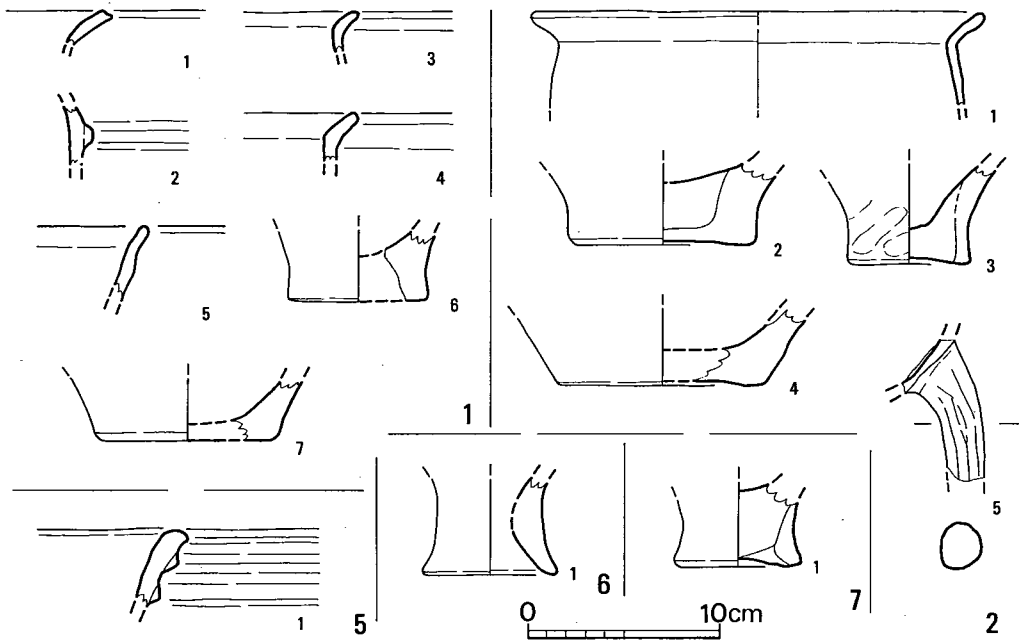
### 出土遺物（図版40-1・2，第51・60図）

**土器（1～7）** 1・3・4は甕の口縁部小破片である。1の口唇部は若干窪み、内面には煤が付着している。4はく字形口縁で、3は外方に曲がる。2は甕の胴部凸帯片で、コ字形の凸帯を貼付する。胎土に長石・石英を含む。5は鉢で、口縁部のやや下を両面より強くヨコナデして頸部とする。

6は甕の底部破片で、復原底径は7.4cm。7は甕の底部破片で、復原底径は9.8cm。胎土に長石・石英・雲母を含み、黒灰色を呈する。ともに東半部埋土中の出土である。時期は弥生時代中期前葉で、



第50図 1号溝実測図 (1/80)



第 51 図 1・2・5～7号溝出土土器実測図 (1/4)

住居跡・貯蔵穴・土壙と並存する。

**石器 (1・7)** 1は石鏃で、長さ1.95cm、幅1.6cm、重さは0.85gを量る。クリーム色を呈し、石材はチャートであろう。7は磨製石剣の茎部破片であり、端部幅2.5cm。挾入部は擦切りによる。頁岩製。

## 2号溝

1号溝の16m南側に位置し、9号貯蔵穴を切る。埋土は緑灰色砂質土で、1号溝とは接続しない。両端部を欠き、現状で「く」字形を呈する。屈曲部に三角形のテラスを有する。幅は1.2mである。弥生土器・須恵器片・瓦器が出土しているが、埋土からみて弥生期の所産ではない。

**出土遺物 (図版36-1, 第51図)**

**土器 (1～5)** 1は甕の口縁部破片で、く字形を呈する。復原口径は24.0cmである。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。2・3は甕の底部片で、底径は2が9.8cm、3は6.8cmである。3の外面にはユビオサエ痕がみられる。また、開き気味であることから蓋の撮部になるか。4は壺の底部破片で、底径は11.0cmである。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。色調は黄灰色を呈する。5は瓦質の鼎で、脚部はヘラナデにより、多面体をなす。胎土に砂粒を含むものの緻密である。脚径は2.5cm。

### 3号溝 (図版25-2, 第52図)

調査区北端中央で検出した溝で、昭和58年度調査分の続きである。西端部はL字形に屈曲し、東側の溝と相まって9号住居跡(S58調査)を意識したものと思われる。埋土中より大量の土器と石器が出土した。

#### 出土遺物 (図版36・40~42, 第53・54・60・61図)

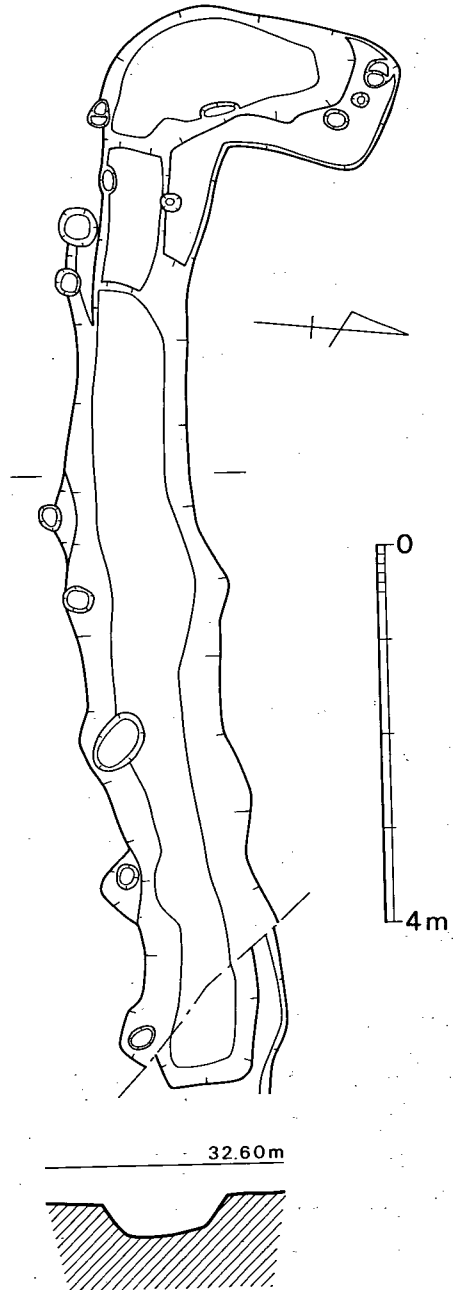
**土器 (1~33)** 1~11は壺で、1・7はラッパ状に開く広口壺の口縁部で、1の口唇部にはへら先による沈線を施す。1の復原口径は24.9cmである。3は幅2.6cmの平坦面を有する口縁部で、平坦面は水平である。口径は22.0cmに復原した。

4は口縁端部を肥厚させた広口壺であるが、前段階程は肥厚しない。復原口径27.6cm。

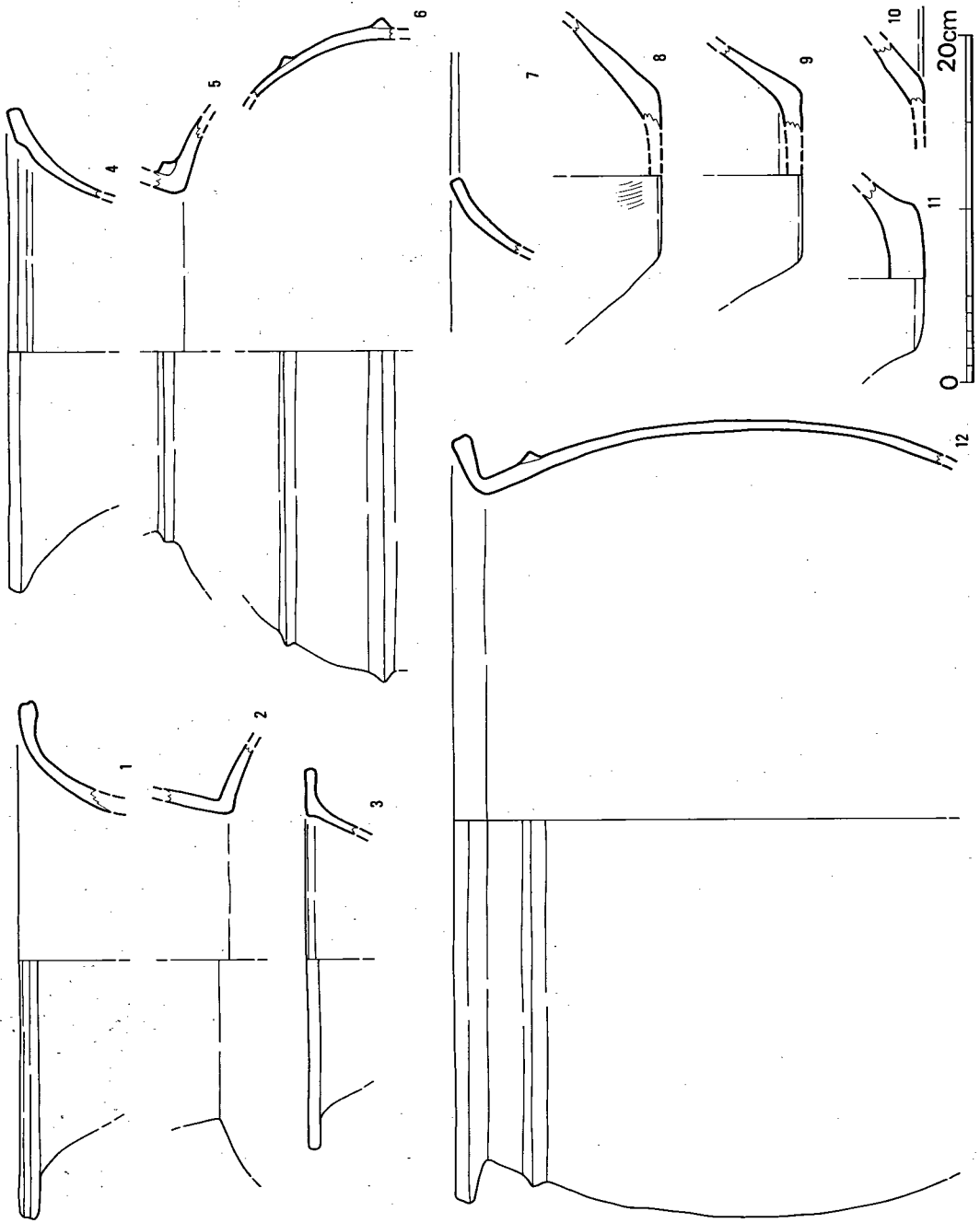
2・5は頸部破片で、5の頸部には三角凸帯を貼付する。6は胴部最大径の部位と頸部と胴部最大径との中間に三角凸帯を貼付しており、無頸壺になるか。胎土は何れも長石・石英を含み、雲母・赤褐色粒を含むものもある。

8~11は底部破片で、底径は8が9.6cm, 9は10.2cmである。胎土に長石・石英を多く含む。11は平底の底部片で、底径は8.4cmである。甕の底部とは異なり、壺の底部になろう。

12~32は甕である。12はく字形口縁の大型甕で、残高28.2cm, 口径43.4cmを測る。口唇部は僅かに肥厚し、頸部のやや下位に三角凸帯を貼付する。胎土に1mm大の長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。13~15は頸部下に三角凸帯を貼付するもの。口唇部は丸く納める。13の口径は34.8cmに復原した。16~21もく字形口縁の甕であるが、頸部下に凸帯を貼付しない。何れも口唇部は丸く納める。胎土に長石・石英・雲母を多く含む。

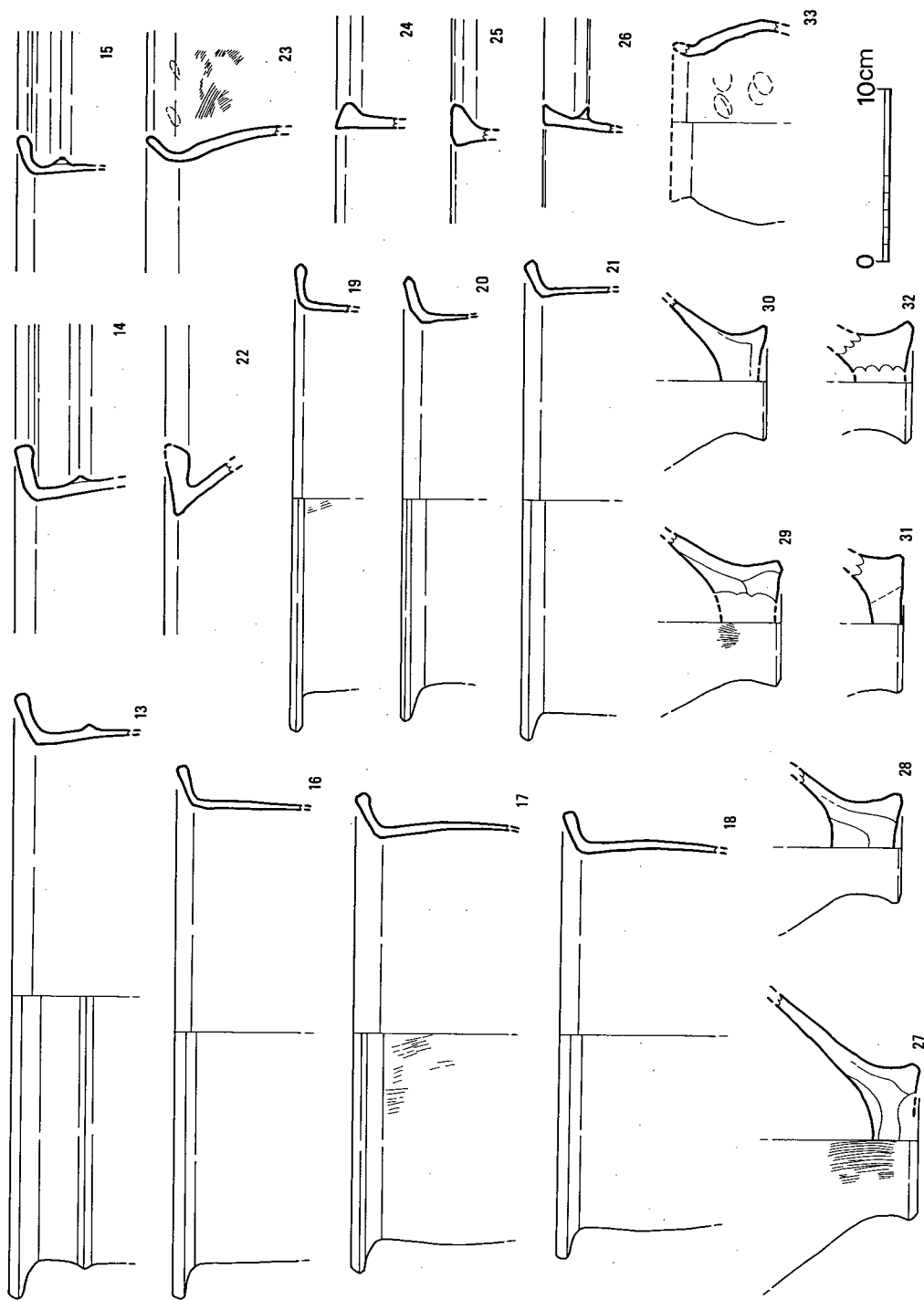


第52図 3号溝実測図 (1/80)



第 53 图 3 号溝出土器类测图① (1/4)





第 54 图 3 号沟出土土器实测图② (1/4)

22～26も甕の口縁部片である。22の口縁部は内側に突出し、胴部は張る。23も胴部に張りをみせる。24は口縁部が三角形を呈する亀ノ甲タイプの甕小片。25は逆L字形で、口唇部は肥厚する。26は口縁部上面に平坦面を有し、そのやや下位にシャープな三角凸帯を貼付する無頸の甕になろう。27～32は甕の底部破片である。27は外面ハケ目、内面ナデ調整による。28は内底部を栓状に詰め込む例。33は小型の椀形土器で、内面には無数の指頭圧痕が付く。

**石器** (6・12・14) 6は西端部出土の石包丁片で、凝灰岩製である。12は中央に稜が走る小片で、石剣になるか。14は短冊形の打製石斧で、長さ10.5cm、重さ160g。

#### 4号溝

18号土塋の1m西側で検出した溝である。かなり削平され、長さ4.8m、幅1.1m、深さ7cm残存する。埋土は暗褐色土であり、弥生土器の小片が出土したが、図示できなかった。

#### 5号溝

1号住居跡の2m東側に位置し、18号貯蔵穴を切る。北西～南東方向に直線的に走る溝で、長さ9.5m、幅0.9m、深さは0.2mと削平により浅い。埋土は暗褐色土であり、土器が出土した。

#### 出土遺物 (第51図)

**土器** (1) 口唇部は稜を有し、その下に三角凸帯を2条貼付しており、見かけ3条凸帯を呈する。壺形を呈するか。長石・石英・雲母を多く含む。

#### 6号溝

5号溝のすぐ東側に位置し、2号墳の墓道と切合い関係にある。両者の埋土は類似しており、前後関係を明瞭にすることはできなかったが、古墳の方が後出するものと思われる。東西方向に走り、長さ14.3m、中央部での幅0.56m、深さ0.21m残存する。埋土中より弥生土器・須恵器甕片が出土した。

#### 出土遺物 (第51図)

**土器** (1) 1は脚台部で、脚径7.2cmを測る。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。

#### 7号溝 (図版6-1, 第11図)

5号住居跡を切って位置する。長さ3.3m、幅0.85m、深さ0.12m残存する。埋土は暗褐色土であり、弥生土器・須恵器片が出土した。

#### 出土遺物 (第51図)

**土器** (1) 1は上底の甕底部片で、底径は6.8cm。胎土に長石・石英を多く含む。

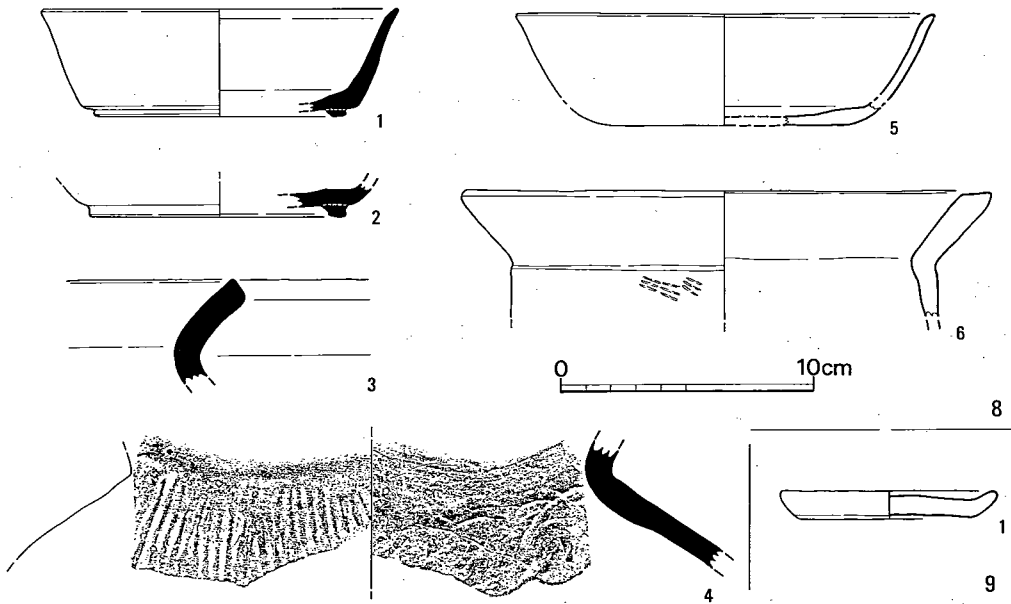
8号溝 (図版25-3)

調査区中央の三角地区東端で検出した溝で、21号土壙を切る。長さ11.3m, 中央での幅1.9m, 深さ0.3m残存する。長軸は東西方向にあり、西側はカットを受ける。また、南側にはピット列があるが、溝との関係は不明。出土遺物には弥生土器・須恵器・土師器がある。

出土遺物 (図版36-3, 第55図)

土器 (1~6) 1~4は須恵器で、5・6は土師器である。1・2は坏身で、低い高台が付く。1の口唇部は若干外反する。口径14.2cm, 高台径10.0cmに復原した。調整は回転ナデで、胎土は砂粒を含むものの良好である。焼成は堅緻で、青灰色を呈する。2の高台径は10.2cmである。3は小型甕の口縁部片でく字形に短く外反する。4は頸部から肩部にかけての破片で、頸部径は19.0cmである。胎土に長石・石英を含むものの緻密である。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。

5は坏で、復原口径16.6cmである。口縁部はやや内湾気味で、口唇部はシャープである。胎土に長石・石英を含むものの緻密で、黄橙色を呈する。6は甕の口縁部破片で、口縁端部は平坦面を有する。頸部には僅かな段がある。調整は内面ヘラケズリ、外面平行タタキによる。胎土に1~3mm大の長石・石英を多く含む。焼成はやや良好で、暗茶褐色を呈する。復原口径は21.0cmである。



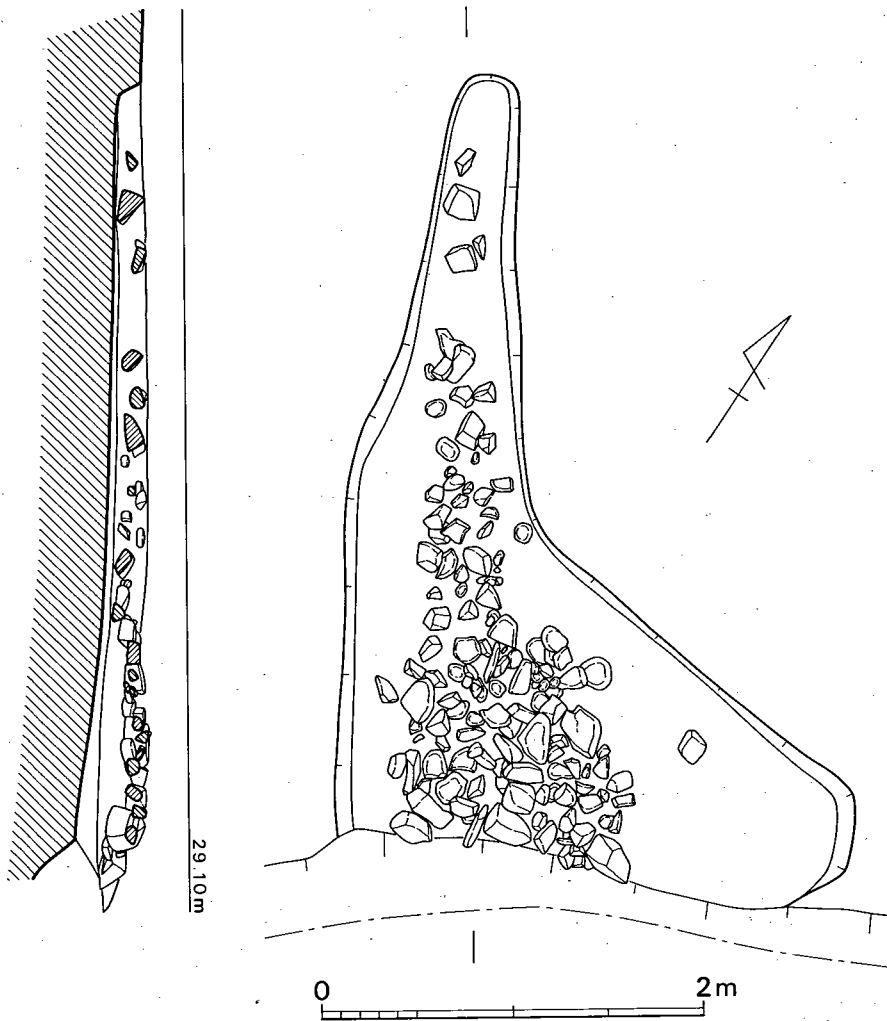
第55図 8・9号溝出土土器実測図 (1/3)

9号溝 (第56図)

調査区の東端部中央に位置し、南側は段カットにより消失する。残存長4.05m, 北側幅0.32m, 南側幅2.72mを測る。上部は削平され、深さは0.2mである。溝内には5~20cm大の礫が底面よりやや浮いた状態で検出されたが、当遺構は如何なる性格を有するか不明。出土遺物には、弥生土器小片・土師器がある。

出土遺物 (図版36-4, 第55図)

土器 (1) 1は土師器の小皿で、器高1.1cm, 口径8.5cm, 底径6.8cmを測る。口唇部は丸く納める。胎土に赤褐色粒を多く含み、暗灰色を呈する。



第56図 9号溝実測図 (1/40)

10号溝 (図版26-1, 第57図)

調査区の東端部南に位置し, 24号土壙を切る。東西に走るが, 区外に進展するため形状・規模は不明。北縁には幅0.6mの犬走り状のテラスがある。埋土下位には, 10~30cm大の川原石が詰まっていた。埋土中より弥生土器・須恵器・土師器・青磁・瓦器及び石斧等の石器類, 土錘が出土した。

また, 溝の東縁には階段状の遺構があるが, 前後関係は不明。

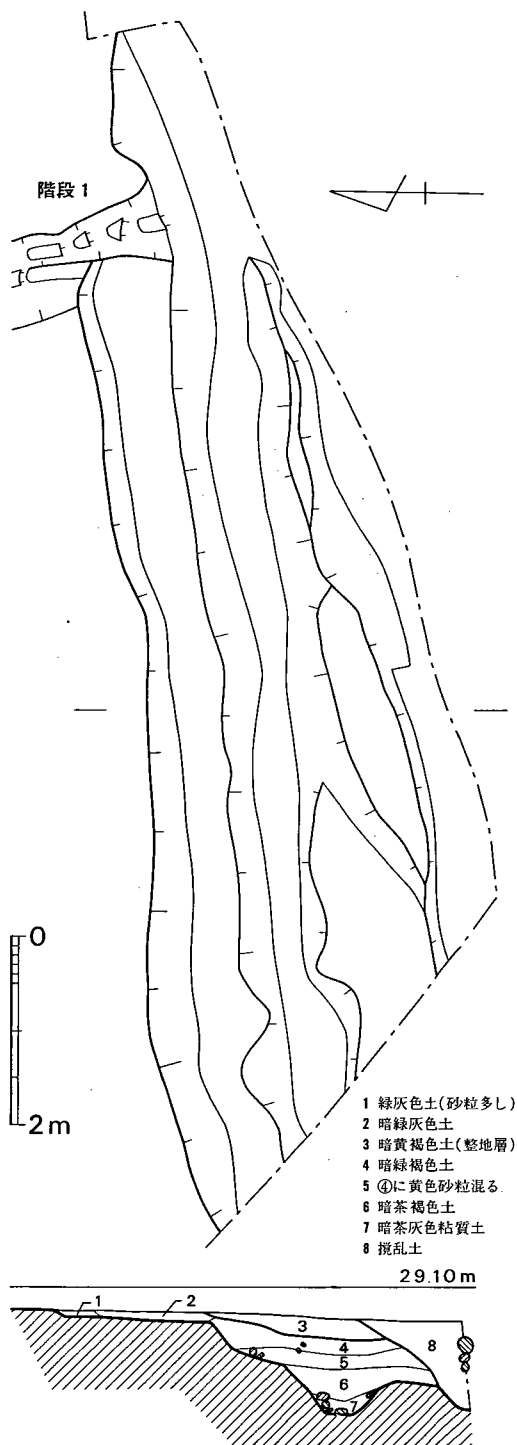
出土遺物 (図版36-5・40~42, 第58~62図)

土器 (1~38) 1~15は須恵器, 16は青磁, 17~21・23は土師器, 22・24は瓦質, 25~38は弥生土器である。

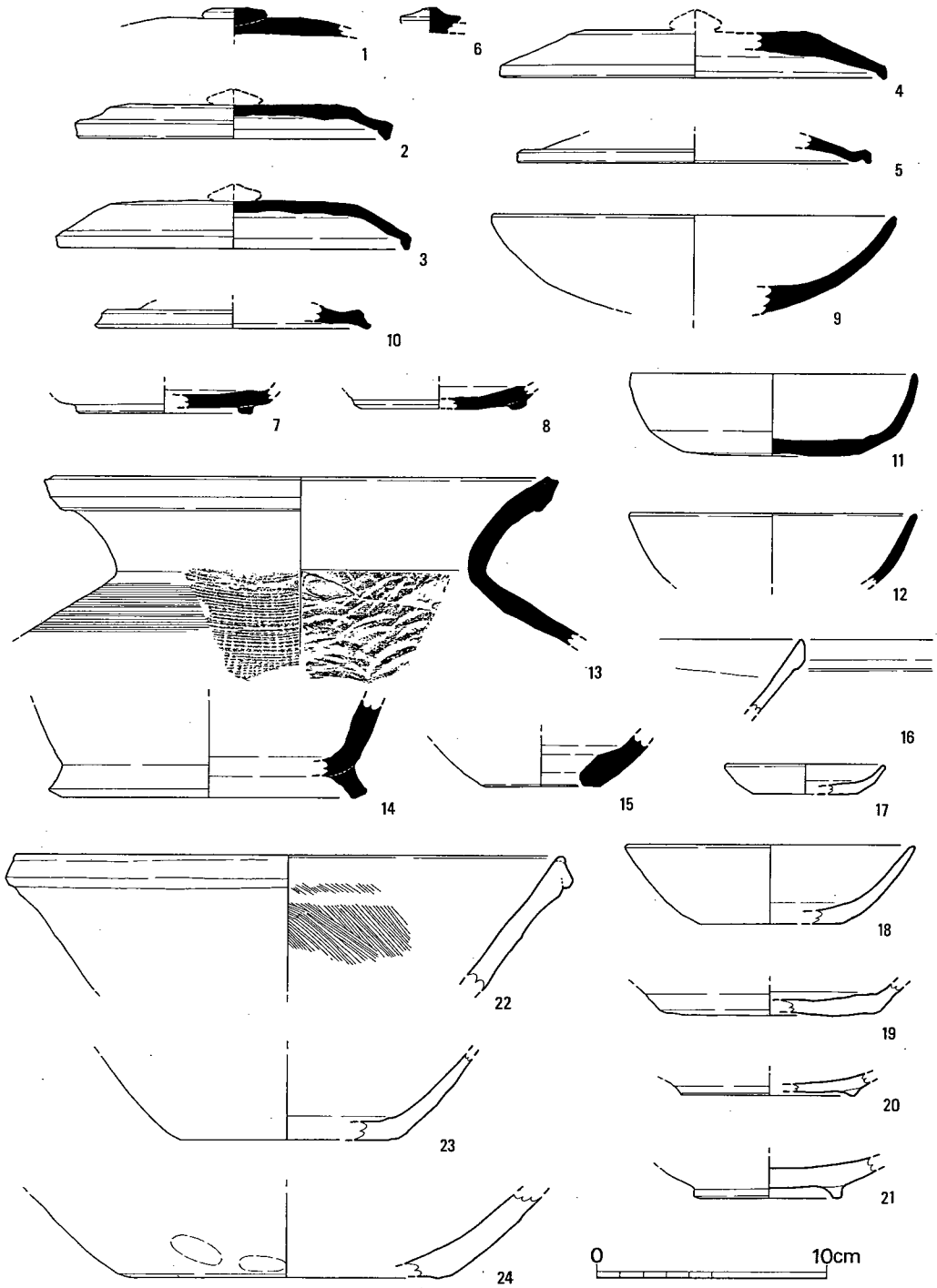
1~6は坏蓋である。1は天井部破片で, ボタン状の偏平な撮を付す。2の口縁部は短く立ち, 天井部は平坦で低い。撮は剥落している。復原口径13.6cmである。3は口径15.4cm, 天井高2.1cmで, 口縁部は短く立つ。口唇部には僅かな面を有する。撮は剥落。4は3と同様な器形を呈する。5の口唇部は小さく屈折する。復原口径15.4cmである。6は坏蓋の撮部で, 擬宝珠形をなす。

7・8は坏身で, 低い高台を付す。8の底部はへたばる。9は口縁部の破片で, 無蓋高坏になるか。復原口径は17.7cm。10は高坏の脚裾で, 端部はへら先による沈線を施す。11は底部が平で, 口径が12.6cmと小さいことから碗とした。口縁部は丸く納め, 回転ナデ調整による。12は口縁部破片で, 碗になるか。

13は小型甕の口縁から肩部にかけての破片で, 口径は22.5cmである。口唇部外面を強くナデ, 稜を有する。口縁部は回転ナデ,



第57図 10号溝実測図 (1/80)



第 58 图 10号沟出土土器实测图① (1/3)

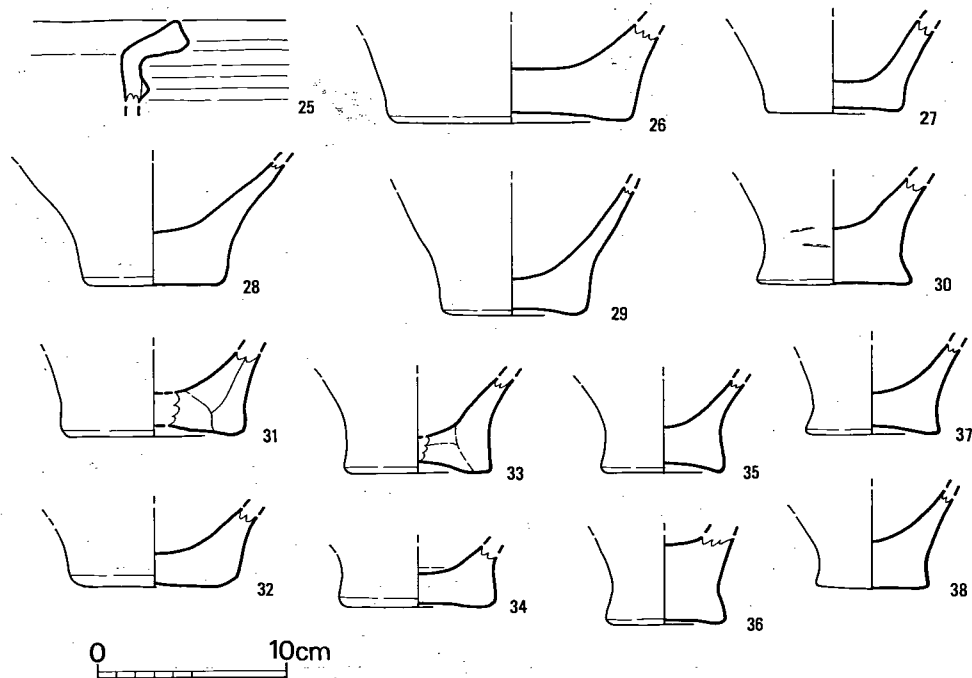
肩部外面は平行タタキ→カキ目，内面は円弧タタキによる。14は壺の底部破片で，ハ字形の高台を付す。15は底部片で，3.5cmの孔を空けていることから甌になろう。

16は玉縁口縁の白磁で，灰白色の胎に淡灰白色の釉掛け。

17は埋土上位出土の土師器小皿で，口径7.0cm，底径4.6cmである。18は下位出土の坏で，口径12.6cm，底径6.2cmを測る。口縁部は緩やかに内湾し，口唇部は丸く納める。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含むが良好である。焼成はやや軟質であるが，暗赤茶褐色を呈する。19は底部破片で，外面はヘラケズリされる。20・21は底部破片で，高台を付す。高台付きの椀になるか。23は復原底径9.6cmの底部破片である。焼成は良好で，暗橙褐色を呈する。

22は瓦質の播鉢で，24cmに復原したが，1/5程度の破片であるため口径は大きくなるかも知れない。また，片口を有していたかは不明。内面は14~16条/cmの細いハケ目，外面はナデ調整である。24は底部破片で，瓦質っぽい感じ。

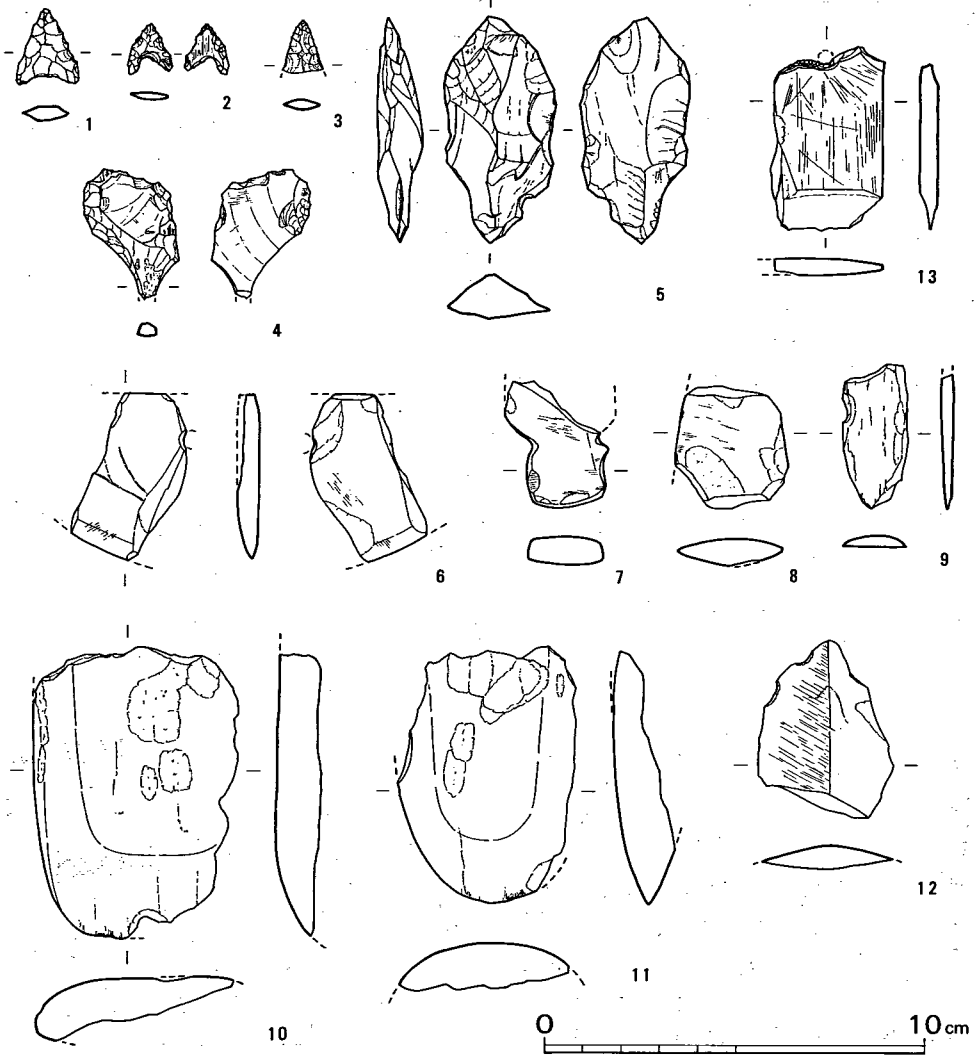
25はく字形甕の口縁部破片で，口縁部は肥厚し，頸部のやや下位に三角凸帯を貼付する。26~38は底部破片である。26はやや大きめの底部で，底径13.0cmである。28・30・32・38は平底，29・34は若干窪む。他は，内窪みの底部片である。36は肉厚であることから蓋の撮になるか。胎土は何れも長石・石英・雲母を含む。



第 59 図 10号溝出土土器実測図② (1/4)

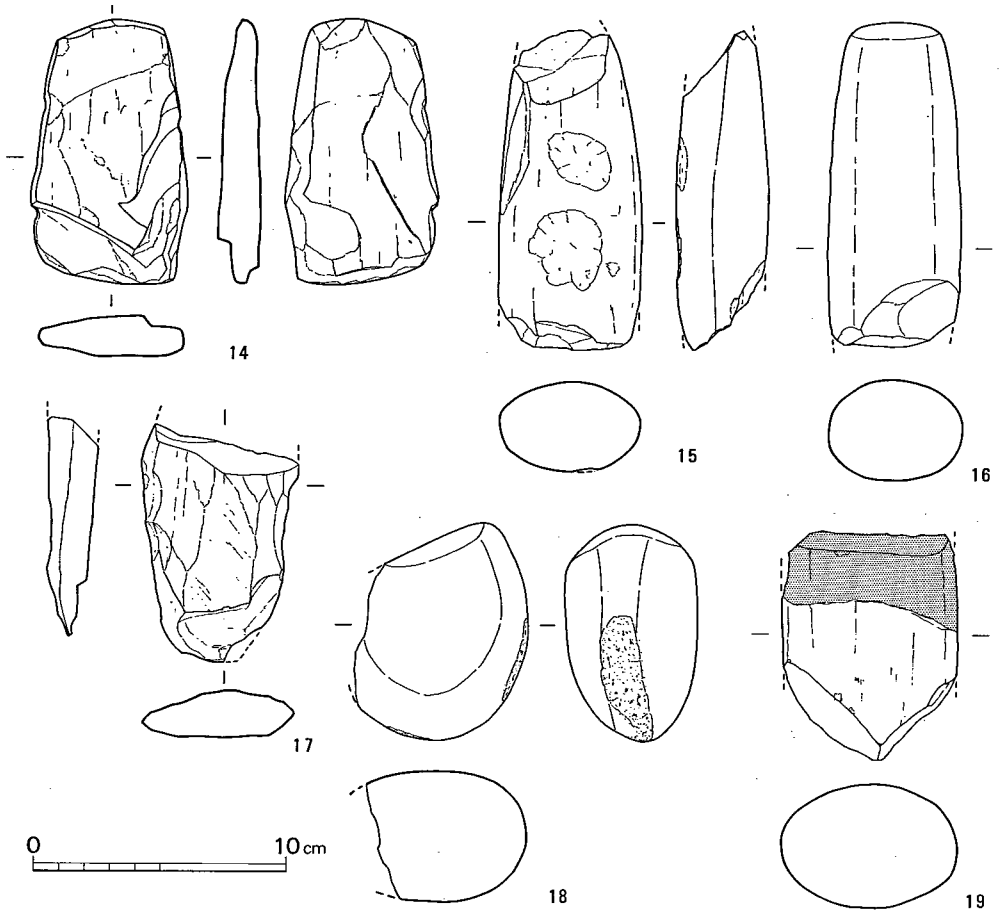
石器 (2・4・8・11・13) 2・3は黒曜石製の石鏃である。2は横長剥片使用の剥片鏃で、長さ1.3cm、幅1.2cm、重さ0.25gを量る。3は欠損品。残長1.4cm。4は黒曜石製の石鏃で、先端部を欠く。残長3.9cm、重さ2.7gである。8は磨製石剣の先端付近の破片で、鏑は不明瞭。頁岩製である。

9～11は石斧の欠損品。9は裏面を研磨しており、転用品。石材は蛇文岩である。10は刃部付近の破片。11は頭部を欠失する。刃部には使用痕が認められる。蛇文岩製。13は扁平で、上部は調整剝離しており、円孔を施していた跡がある。粘板岩製。

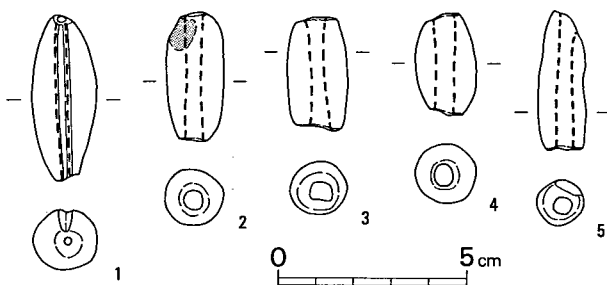


第 60 図 溝出土石器実測図① (1/2)

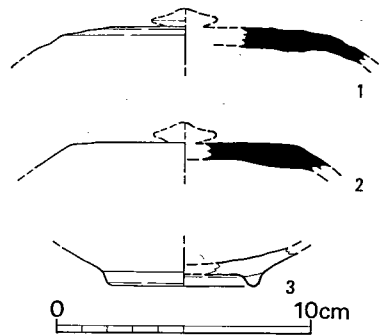




第 61 図 溝出土石器実測図② (1/3)



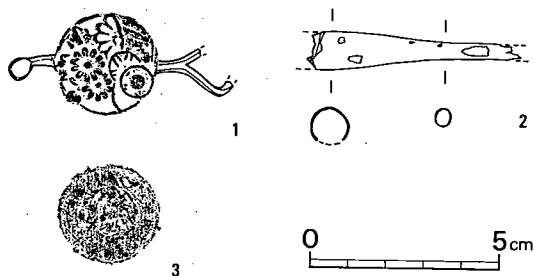
第 62 図 土壙・溝出土土錘実測図 (1/2)



第 63 図 11号溝出土石器実測図 (1/3)

**土製品 (2～5)** 2～5は埋土中出土の土錘である。2は長さ3.4cm, 径1.55cm, 重さ7.1gを量り, 先端部は二次加熱を受け黒変する。3は下端部を欠くが, 現存長3.0cm, 径1.5cm, 重さ6.5gである。4は両端部を欠くが, 長さは3.0cm程であろう。径は1.6cmで, 重さは5.7g。5は両端部を欠き, 残存長3.7cm, 径1.25cm, 重さ5.4gでやや細身の土錘である。何れも胎土に長石・石英・雲母を含み, 褐色～灰褐色を呈する。

**銅製品 (1)** 南端の攪乱土層出土の銅製簪である。身は径2.7cmの円形で, 表には鼓・菊・日輪状の文様が鋳出される。裏面は平坦で, 表の文様の線彫りである。左先端部は耳かきになっており, 右側の留金は一部欠損する。面白いことに, 簪の径は明治時代の一銭と同じである。重さは10.6g。



第 64 図 溝・暗渠出土銅製品実測図 (1/2)

### 11号溝

調査区の北側コーナー部に位置し, 東側は攪乱坑に切られる。残存長4.3m, 中央での幅0.55m, 深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色土で, 須恵器・土師器が出土した。

#### 出土遺物 (第63図)

**土器 (1～3)** 1・2は須恵器坏蓋の天井部破片であり, 撮は剥落している。1の天井部は回転ヘラケズリの後ナデている。焼成は堅緻で, 青灰色を呈する。2はやや軟質で, 淡灰色を呈する。3は土師器の皿で, 低い高台を付す。焼成はやや軟質で, 赤っぽい肌色を呈する。

### 12号溝

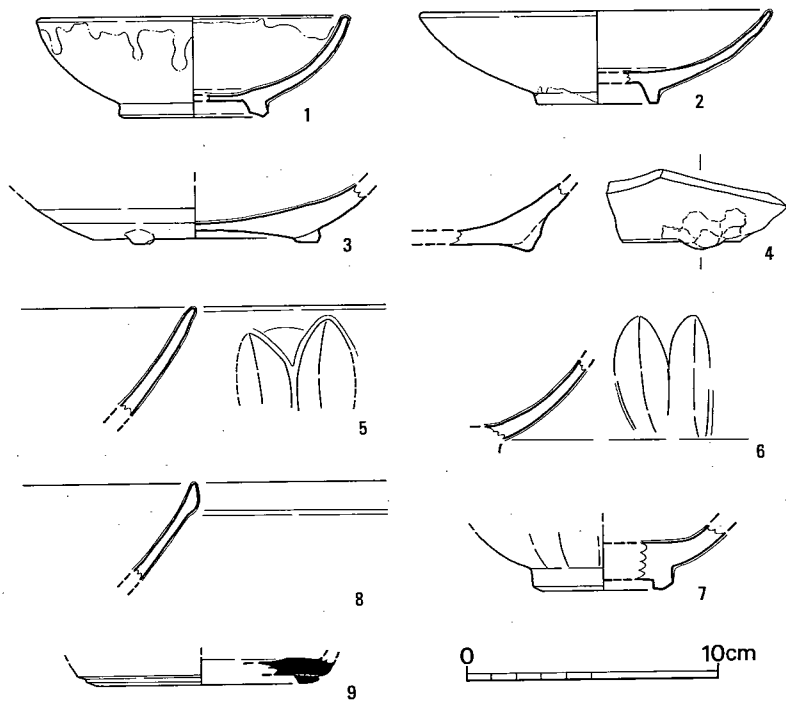
調査区中央の南側に位置し, 2号落込みを切る。長さ4.4m, 幅0.36mの細長い溝で, 削平により深さは0.15mと浅い。遺物は弥生土器片が出土しているが, 図示できなかった。

### 13号溝

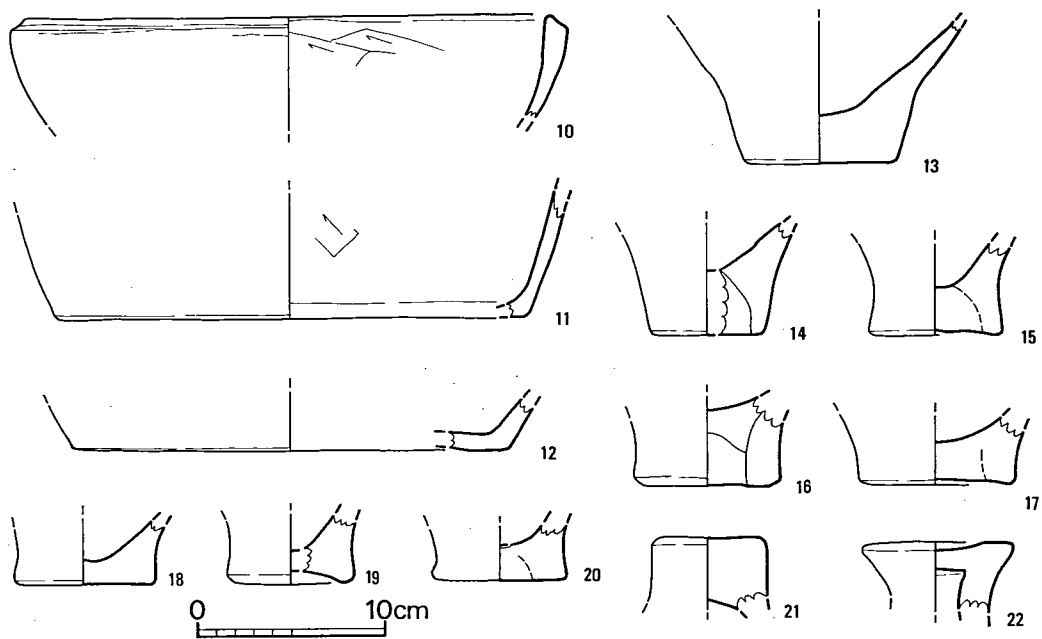
12号溝の2m北側に位置し, 2号落込みを切る。溝の南西側は調査区外に進展する。残存長3.3m, 幅0.6m, 深さ0.2mを測る。出土遺物はなく, 時期不詳。

### 14号溝 (図版26-2)

調査区の西半部を北西～南東方向に走る近代の溝で, 南側でL字形に屈曲する。屈曲部付近で4号土壙墓を切る。南側での幅2.5m, 深さ0.85mで南側に向かって流れていたと思われる。



第 65 图 14号沟出土土器实测图① (1/3)



第 66 图 14号沟出土土器实测图② (1/4)

出土遺物 (図版36-6・40~43, 第60・61・64~67図)

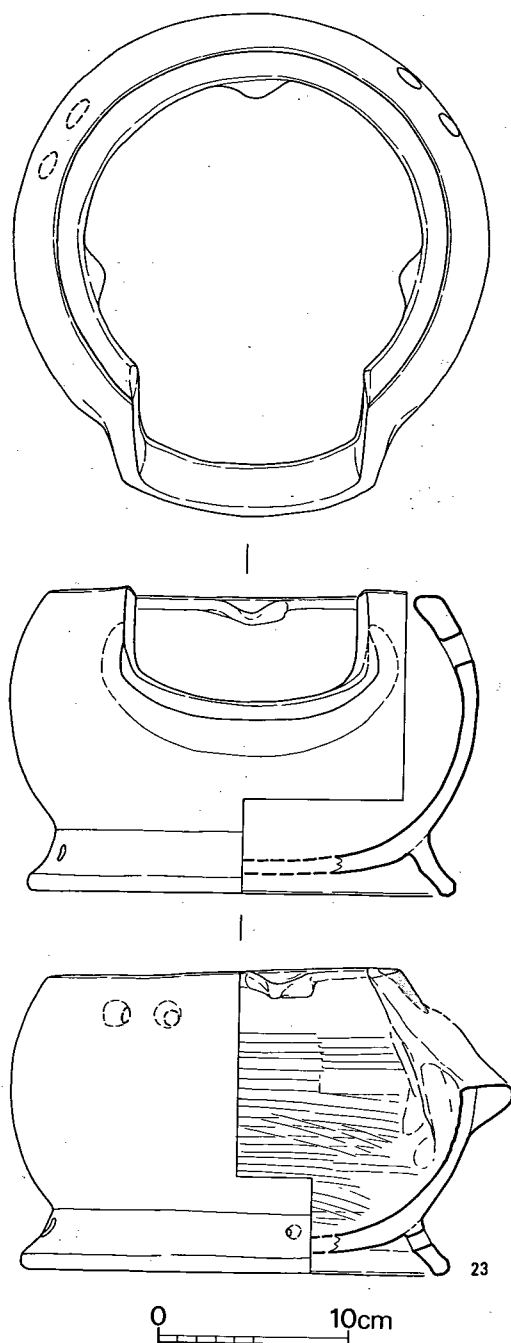
土器 (1~23) 1~3は陶器, 1は碗で高台を付す。灰白色の胎に鶯色の釉掛け。器高4.0cm, 口径12.6cm。2も碗で, 灰白色の胎に淡灰色の釉掛け。3は底部片で, 3箇所粘土を張り付け脚とする。暗黄褐色の胎に内面のみチョコレート色の釉薬を掛ける。4は土師質の底部片で, 粘土玉を貼付し脚としている。

5~7は鎬蓮弁の青磁碗, 8は玉縁の青磁碗片である。9は須恵器の坏身で, 低い高台を付す。

10・11は土師質である。10は口縁部で, 11・12は底部破片である。10の口縁部は内湾しており, 口唇部は小さく立つ。鉢形の器形。11は火舎の底部になるか。12は瓦質の底部片である。

13~22は弥生土器であり, 混入品。13~20は甕の底部片で, 19を除き平底を呈する。底径は13が8.2cm, 15は7.0cmである。21は器肉が厚く, 径がやや小さいことから蓋の撮部になろう。22は蓋の撮部破片で, 端部は外方に突出する。

23は土師質の土風呂である。球形を呈し, ハ字形の脚を付す。口縁部は平坦面を有し, 煤が付着する。焚口は口形に切込み, 粘土帯を貼付し受け部とする。体部には通気孔を2孔一対で2箇所にかけている。また, 脚部にも円孔を空けており, 4~5箇所にあるか。



第67図 14号溝出土土器実測図③ (1/4)

石器 (5・15~18) 5は長さ6.0cm, 幅2.9cm, 重さ16gの断面三角形を呈する。茎を有し, 石槍になるか。サヌカイト製。15・16は磨製石斧で, 15は両端部を欠く。蛇文岩製。16は円柱状を呈し, 先端部は欠失する。輝石安山岩製。17は緑泥片岩製の打製石斧で, 頭部を欠く。18は敲石で, 側縁には敲打痕が付く。

銅 銭 (3) 溝中央埋土出土の一銭銅貨で, 裏面には大日本明治十七年の年号がある。

### 15号溝 (図版26-2)

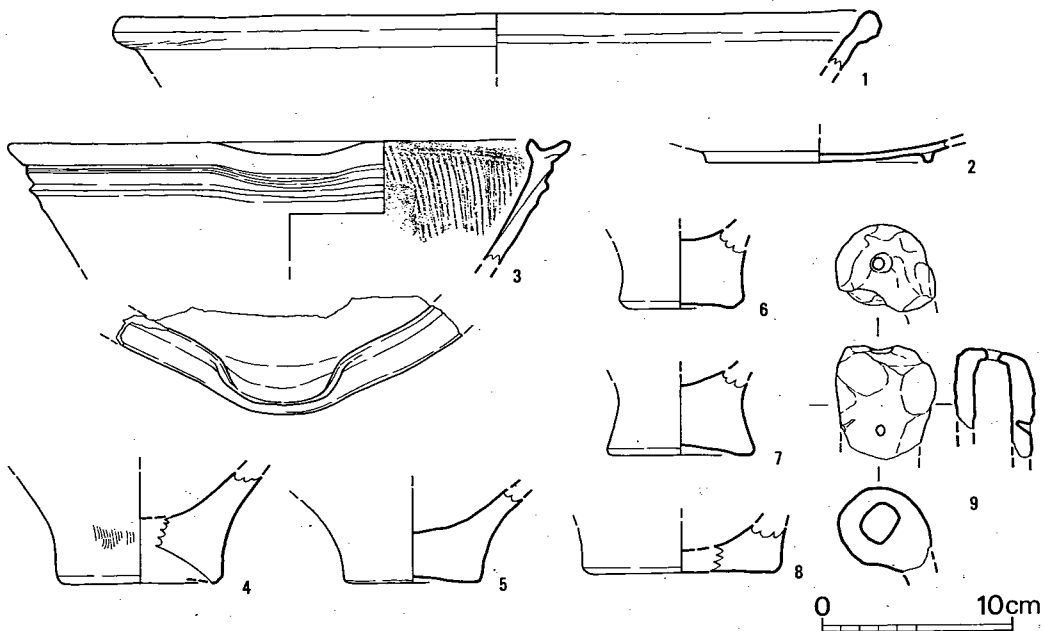
14号溝と5m間隔で平行して走る近代の溝で, 幅3.5m, 深さ0.35m, 残存長36mを測る。中央部には3.5m×2.3m, 深さ1.5mの方形堅穴があり, 人頭大の川原石が投げ込まれていた。集水施設(溜マス)であろうか。14号溝同様, 農業用水路と考えられる。

### 出土遺物 (図版36-7・41-1, 第61・68図)

土 器 (1~9) 1・2は土師質で, 1の口縁部は丸く肥厚する。鉢になるか。2は底部破片で, 低い高台を付す。3は陶器の片口播鉢で, 口縁部にはかえりが付く。内面には櫛状工具による粗い条痕を施す。4~8は弥生甕の底部である。6・7は器肉が厚いことから蓋の撮になるか。5の底径は7.2cmである。

石 器 (19) 安山岩製の磨製石斧で, 両端部を欠く。頭部側は加熱を受け赤変している。

土製品 (9) 9は中空の土製品で, 上部には6mmの円孔を施す。



第 68 図 15号溝出土土器実測図 (1/4)

## 9. 古 墳

水路の東側で2基検出したが、墳丘は完全に削平され、周溝をも留めていない。

### 1号墳 (図版27-1~3, 第69図)

1号住居跡の西側に位置し、2号住居跡・11号貯蔵穴を切る。

石室は石材が抜き去られ、若干の根石と掘方を留めるのみ。石室掘方は長軸3.5m, 短軸2.3mで、深さは北壁で0.45mを測る。抜き跡からみて単室の両袖横穴式石室になろう。

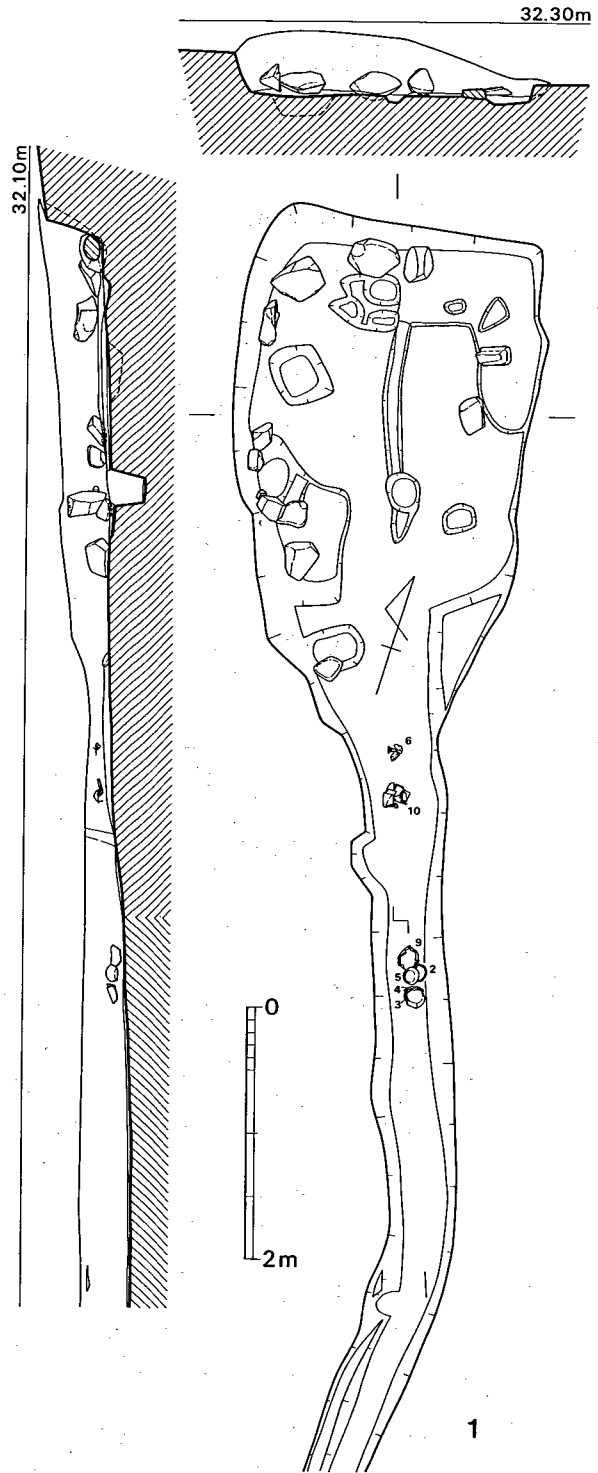
奥壁から2mの所の穴が玄門石の抜き跡で、掘方がすばまる部分までが羨道部と考えられる。墓道は丘陵の南側に延び、15mまで確認した。南端部幅0.35mであり、排水溝としての一面も担っていたものとする。

墓道から浮いた状態で供献土器が2箇所出土した。

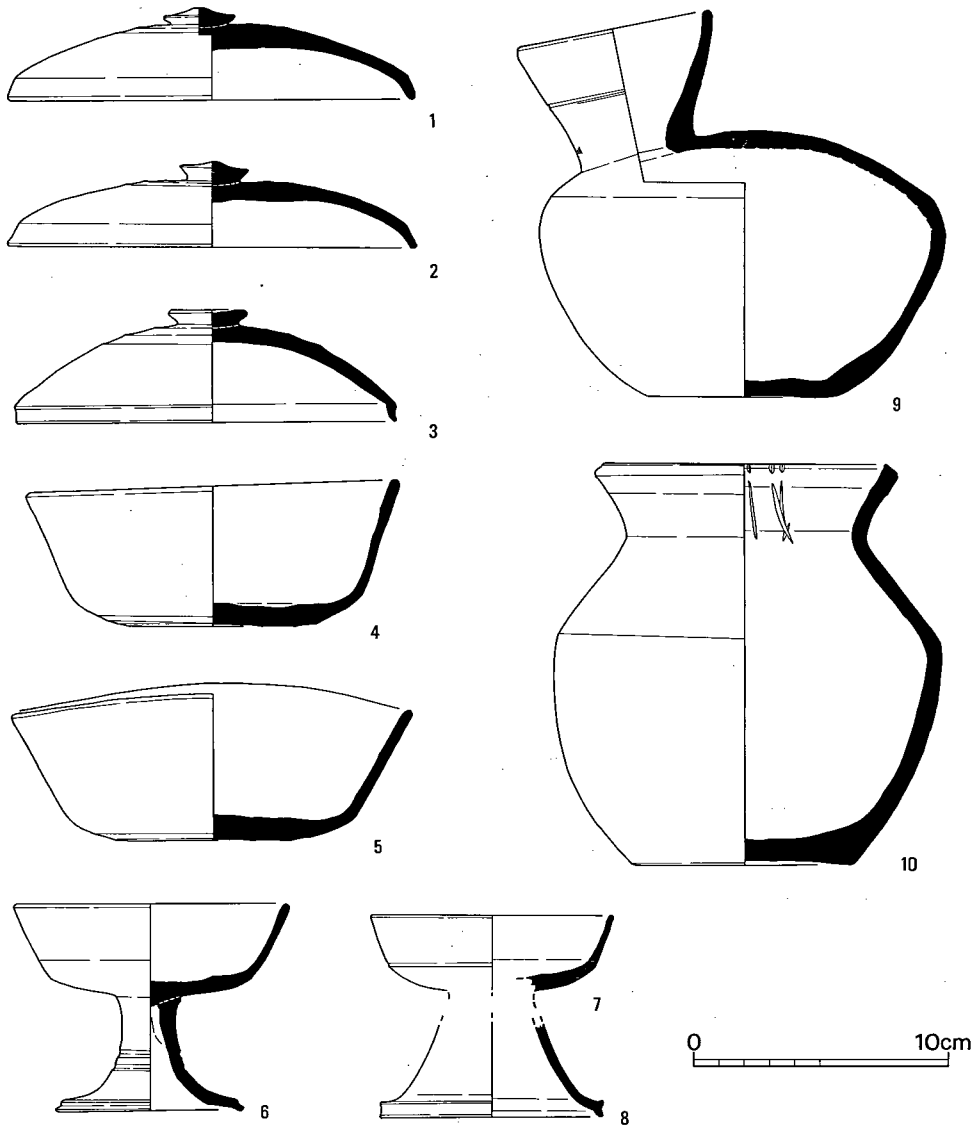
### 出土遺物 (図版37-1, 第70図)

**土 器 (1~10)** 1~3は坏蓋で、口縁部は短く立つ。1・2は天井部に扁平な擬宝珠撮を貼付する。3の撮は内窪みである。口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリによる。

4・5は坏身で、高台は付きない。4・5とも口唇部は丸く納め、調整は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリによる。5は焼け歪により変形する。4は1とセットになるか。



第 69 図 1号墳石室実測図 (1/60)



第 70 図 1号墳出土土器実測図 (1/3)

6は器高8.2cmの高杯で完形品。脚部には2条の沈線文を施す。7は坏部，8は脚部破片である。9は完形の平瓶で，器高15.3cm，口径7.8cm。口縁部と頸部の間に1条の沈線を巡らす。10は短頸壺で，器高15.9cm，口径10.2cm，底径8.8cmを測る。口縁部は短く立ち，肩部には稜を有する。口縁部内面には，×状のへラ記号がある。1～3の杯蓋は，口縁部内面のかえりが消失していることから，墓道出土の遺物は7世紀後半～8世紀前半に供献されたものであろう。

2号墳 (図版27-4, 第71図)

1号墳の20m東側に位置する。1号墳同様、墳丘は完全に削平される。

石室は石材が抜き去られ、若干の根石と敷石を残すのみ。石室掘方は長軸4.6m, 短軸2.5mで、深さは北壁で0.35mを測る。抜き跡からみて単室の両袖横穴式石室と考えられる。敷石の前の抜き跡が、玄門になろう。残存する敷石から玄室長2.2m, 幅1.5mに復原されよう。

敷石は20~40cm大の川原石を並べ、その間を2~10cm程の砂利石で充填している。

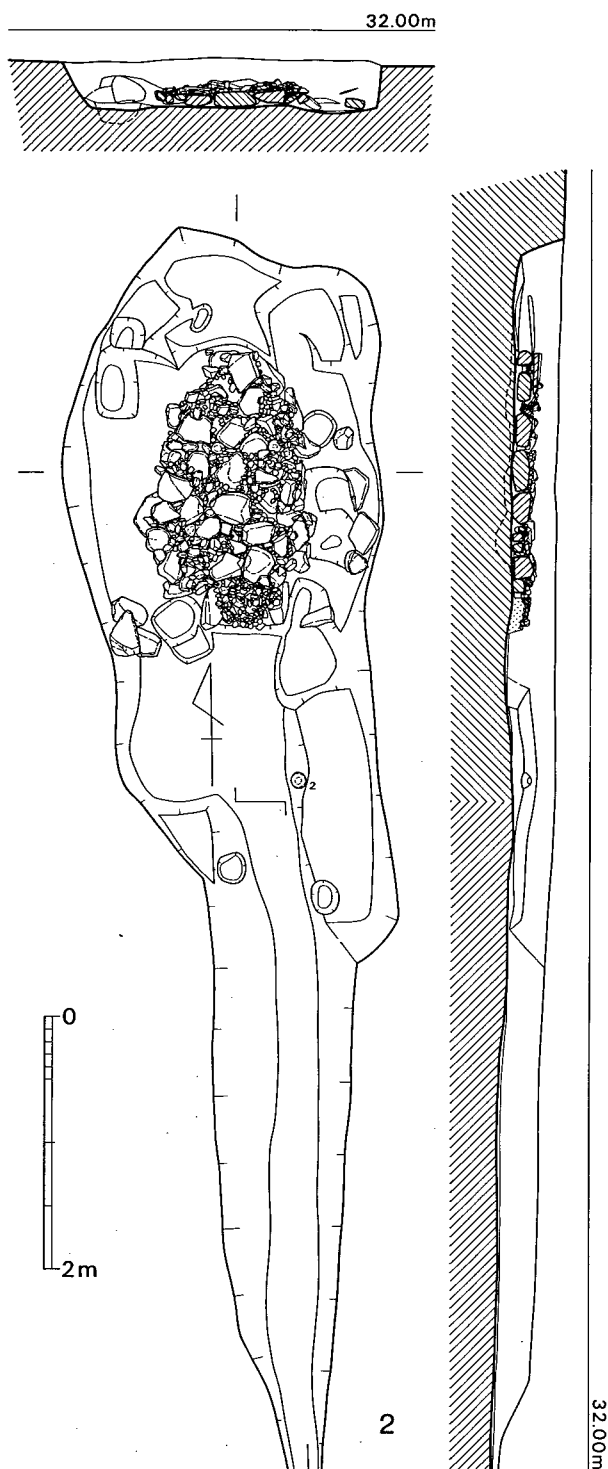
墓道は丘陵の南側に14m延び、6号溝以南には進展せず、6号溝は枝道としての可能性を残す。

出土遺物(図版37-2, 41-1・2, 第72・73図)

土器(1~12) 1~7は須恵器, 8~12は弥生土器である。

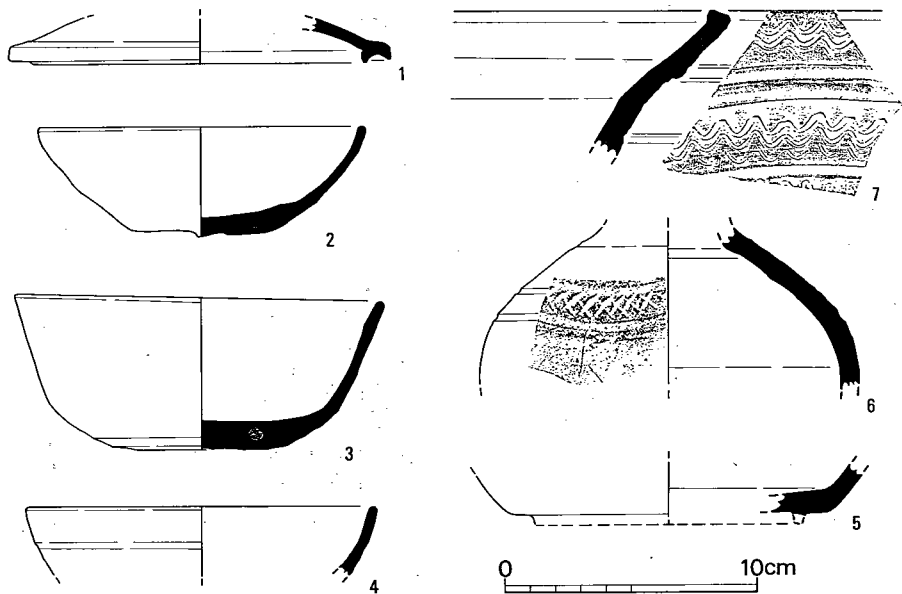
1は坏蓋で、内面にはかえりを有する。2は底部がへらおこし未調整であるので坏身とした。羨道部出土である。口径13.0cm。3は敷石内出土の坏身で、器高6.2cm, 口径14.7cm, 4は碗になるか。

5は高台付きの坏身底部片である。6は胴部小片で、肩部に沈線を2条巡らし、その間をX



第71図 2号墳石室実測図(1/60)





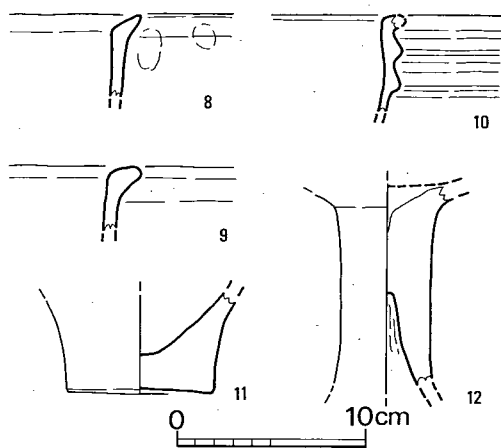
第 72 図 2号墳出土土器実測図① (1/3)

文で充填する。甕になろう。7は甕の口縁部破片で、沈線間の上下は6条の櫛描き波状文を施文する。

8・9は口唇部が肥厚する甕の口縁部小片。10は口縁直下に太目の三角凸帯を2条貼付する。鉢になるか。11は甕の底部破片で、底径は7.6cmである。底部は若干の上底である。12は高坏の脚柱部。基部径は5.5cm。何れも石室埋土の出土である。

1のかえりは口縁端部より出ていることから7世紀後半で、3は8世紀前半であろう。

**石器 (8・11)** 8は石室内出土の砥石で粘板岩製。11は墓道出土の石斧で、加熱を受け黒化する。



第 73 図 2号墳出土土器実測図② (1/4)

## 10. 土 壙 墓

調査区の全体に散在し、4基確認した。前述したように当遺跡は、著しく削平されているので他にも存在していた可能性大である。

### 1号土壙墓（図版28-1，第74図）

16号貯蔵穴のすぐ北側に位置する。検出時は、2.2mの隅丸形状に黒褐色土が入っており、掘り下げた結果、貯蔵穴と重複（墓壙は切合わない）していることが判明した。墓壙は隅丸長方形を呈し、長軸177cm、短軸91cm、中央部での深さ21cmを測る。床面は東側が高い。

また、南壁沿いに須恵器坏身が一点は伏せた状態で、もう一点は置いた状態で出土した。頭位は北東側であろう。また、墓壙内にあるピットは墓とは無関係である。主軸方位は、N58°Eを示す。

### 出土遺物（図版38-1，第75図）

**土 器（1・2）** 1・2は須恵器の坏身で、高台を付す。1は器高5.3cm、口径15.3cm、高台径10.1cmを測る完形品。高台はハ字形を呈する。2は器高5.0cm、口径15.0cm、高台径8.7cmを測る完形品。高台は稜を有し、爪先立つ。ともに焼成は良好で、青灰色を呈する。器面調整は回転ナデによる。1・2とも高台が高いので、7世紀後半頃であろう。

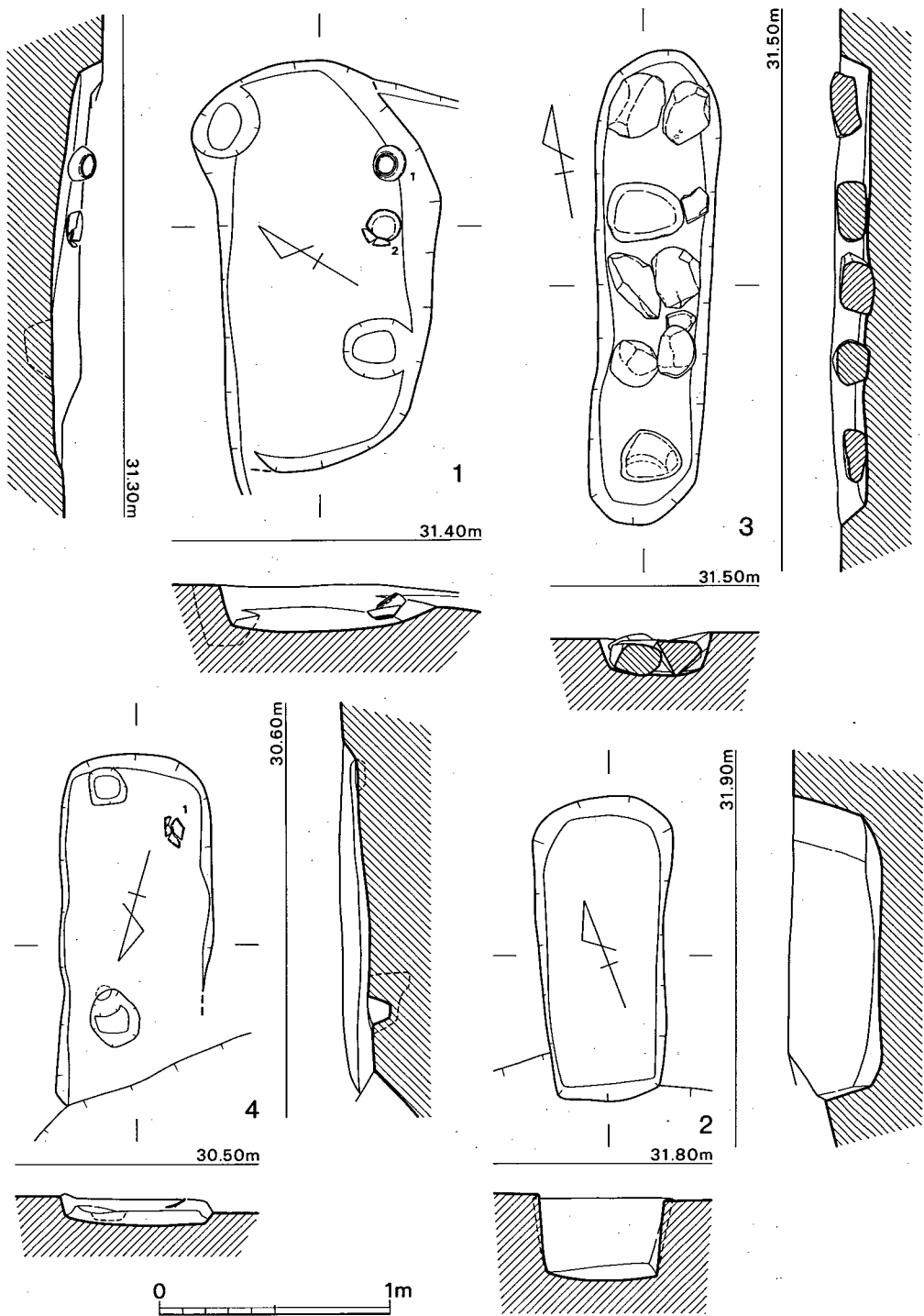
### 2号土壙墓（図版28-2，第74図）

2号墳墓道の2m西側に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸132cm、北側幅62cm、南側幅46cm、深さ38cmを測る。床面はほぼ水平で、幅が広い北側が頭位になろう。規模からして小児用の墓と考えられる。主軸方位は、N22°Eを示す。出土遺物はなく、時期不詳。

### 3号土壙墓（図版28-3，第74図）

2号土壙墓の2m南側で主軸をほぼ等しくして位置する。墓壙は隅丸長方形を呈し、長軸206cm、北側幅54cm、南側幅48cmを測る。2号墓同様、幅が広い北側が頭位になろう。床面は水平で、10~30cm大の川原石を2個対に5列並べてある。また、石のレベルは北側が高くなっているものの直線的であり、棺台としての機能を果たすものと考えられる。また、円礫は熱を全く受けておらず、火葬墓の台石ではない。主軸方位は、N10°Eを示す。

遺物は、埋土中より弥生土器片が出土したが、当土壙墓に伴うものではなく、混入品と考えられる。



第 74 图 1~4 号土坑墓实测图 (1/30)

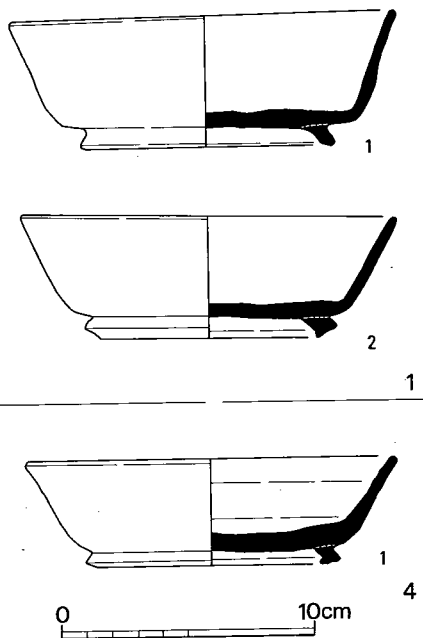
#### 4号土壙墓 (図版28-4, 第74図)

水路西半部中央に位置し、14号溝に北壁を切られる。墓壙は隅丸長方形を呈し、残存長146cm, 南側幅64cm, かなり削平され深さは12cmを測る。南壁寄り須恵器の坏身が出土した。床面は南側が高くなっており、頭位はこちら側になるか。

#### 出土遺物 (図版38-2, 第75図)

土器 (1) 1は須恵器の高台付きの坏身である。器高4.2cm, 口径14.8cm, 高台径10.1cmを測る。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、暗青灰色を呈する。

高台は稜を有するが、1号墓出土のもの程高くない。また器高が低く、口縁部が開いていることから後出するものと考えられる。8世紀前半頃であろう。



第75図 1・4号土壙墓出土土器実測図 (1/3)

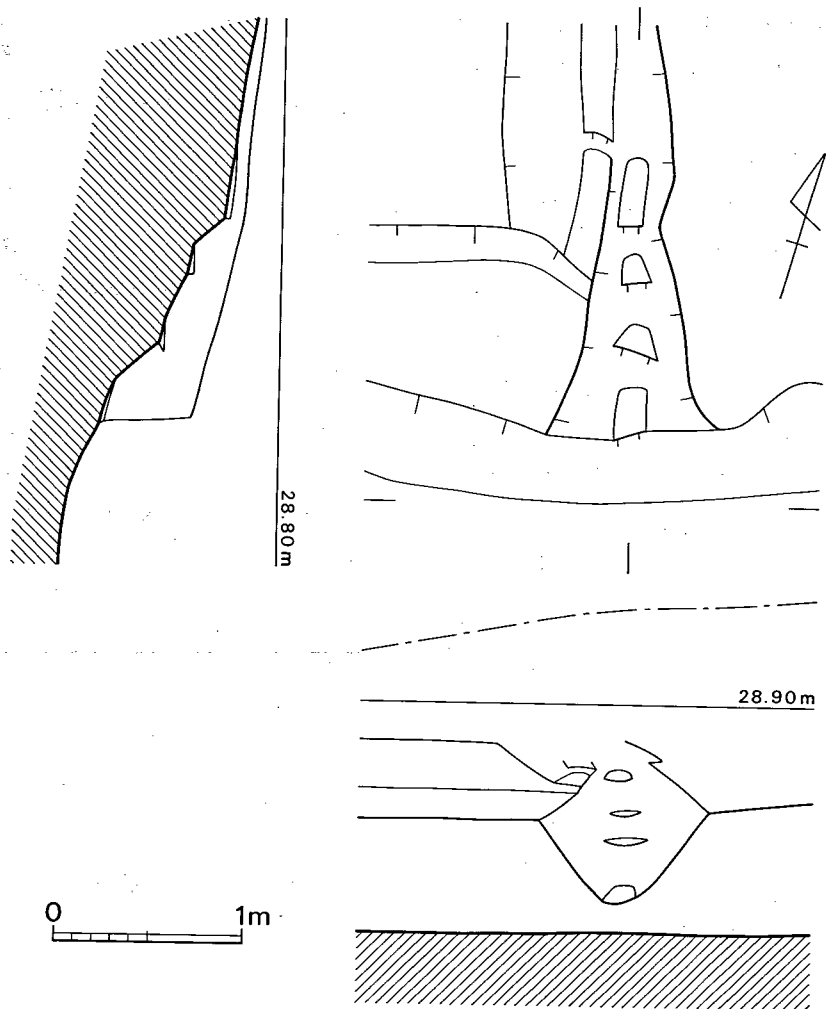
## 11. その他の遺構と遺物

その他の遺構として、落込み・段階状遺構・暗渠があり、ピット出土遺物及び採集遺物等も含めて、ここで説明を加えることとする。

#### 1号階段状遺構 (第76図)

10号溝の北壁に直行して位置するが、両者の前後関係は不明。当遺構の西側にある溝は、現代の地割溝であり、無関係である。現状で幅15~25cm, 奥行き15~36cmの踏み段を4段設けており、踏み段の比高差は16~25cmである。谷部から丘陵部に行くための道の一部と考えられ、急傾斜地を段々にカットして通行の便を図ったのであろう。

この遺構は、朝倉町長島遺跡(註4)、それに近年話題をまいた小郡市一の口遺跡(註5)でも調査されており、丘陵部に立地する遺跡においては、注意を必要とする遺構であり、今後類例を増すものと思われる。



第 76 図 1号階段実測図 (1/40)

### 2号階段状遺構 (第77図)

調査区東端部の中央に位置し、1号落込みに切られる。踏み段は幅25~40cm、奥行き40~90cmで、2段のみ残存する。1号階段との距離は17m離れている。

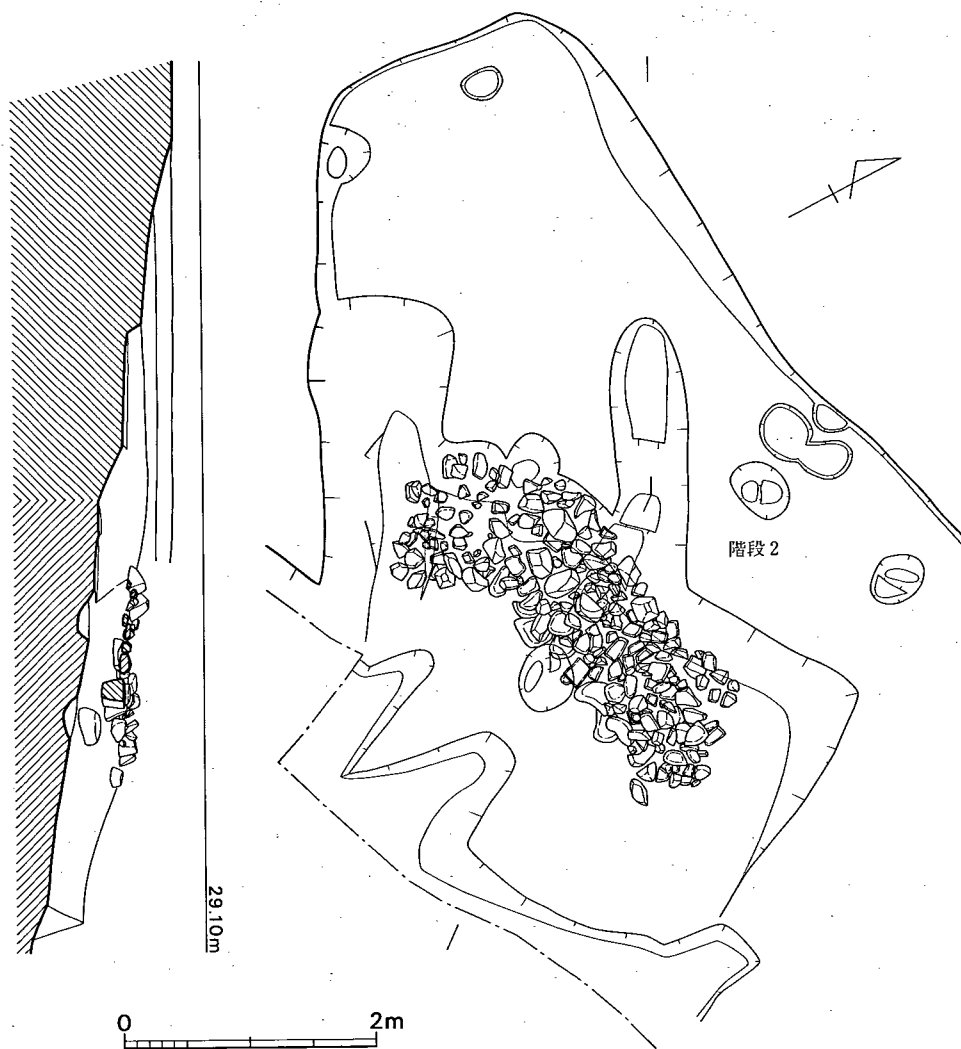
1号落込みに切られていることから、8世紀以前に掘られたものであるが、詳細な時期は判らない。

1号落込み (図版24-1, 第77図)

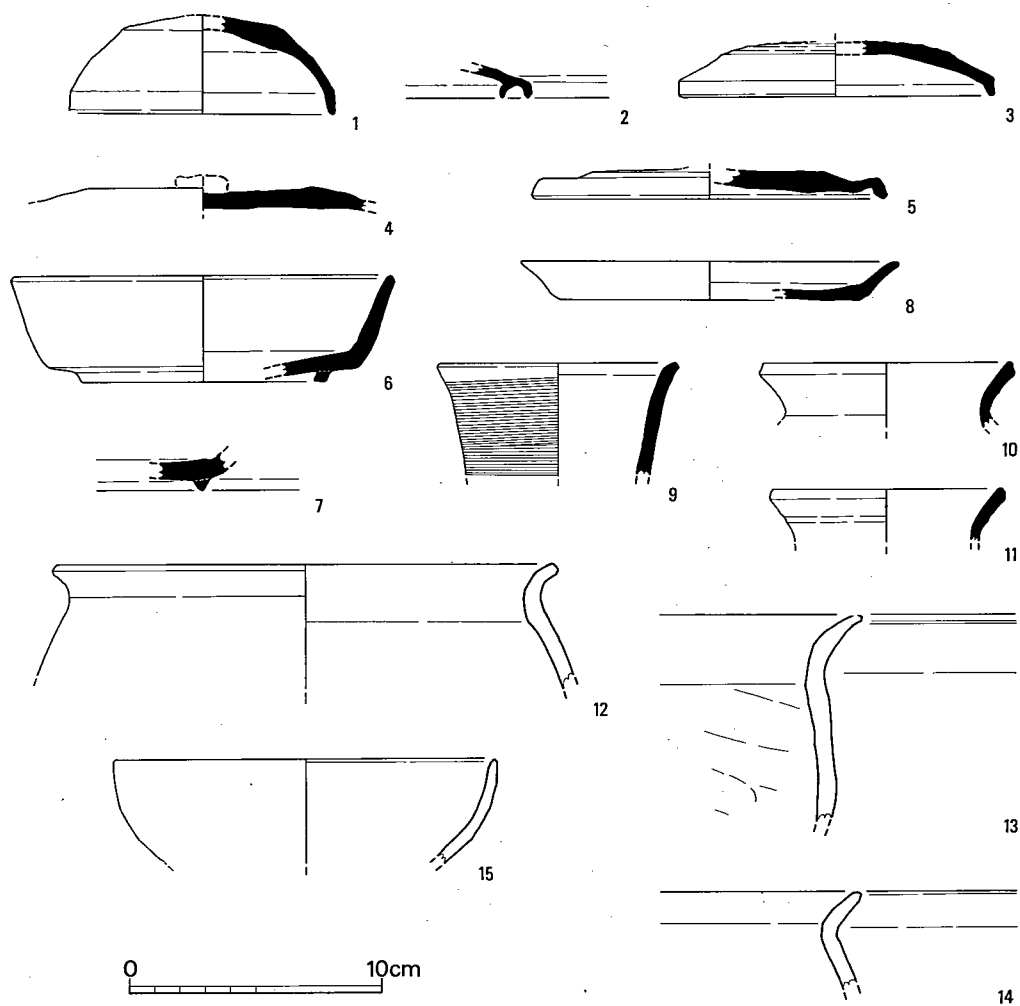
調査区の東端部中央に位置し, 2号階段を切る。大半は調査区外に進展するため詳細は不明である。北西部幅4.6m, 深さ0.6mを測る。底面は南側に傾斜しており, 20~40cm浮いた状態で5~30cm大の円礫群を検出した。出土遺物には, 弥生土器・須恵器・土師器がある。

出土遺物 (図版38-3, 第78・79図)

土器 (1~22) 1~11は須恵器, 12~15は土師器, 16~22は弥生土器である。



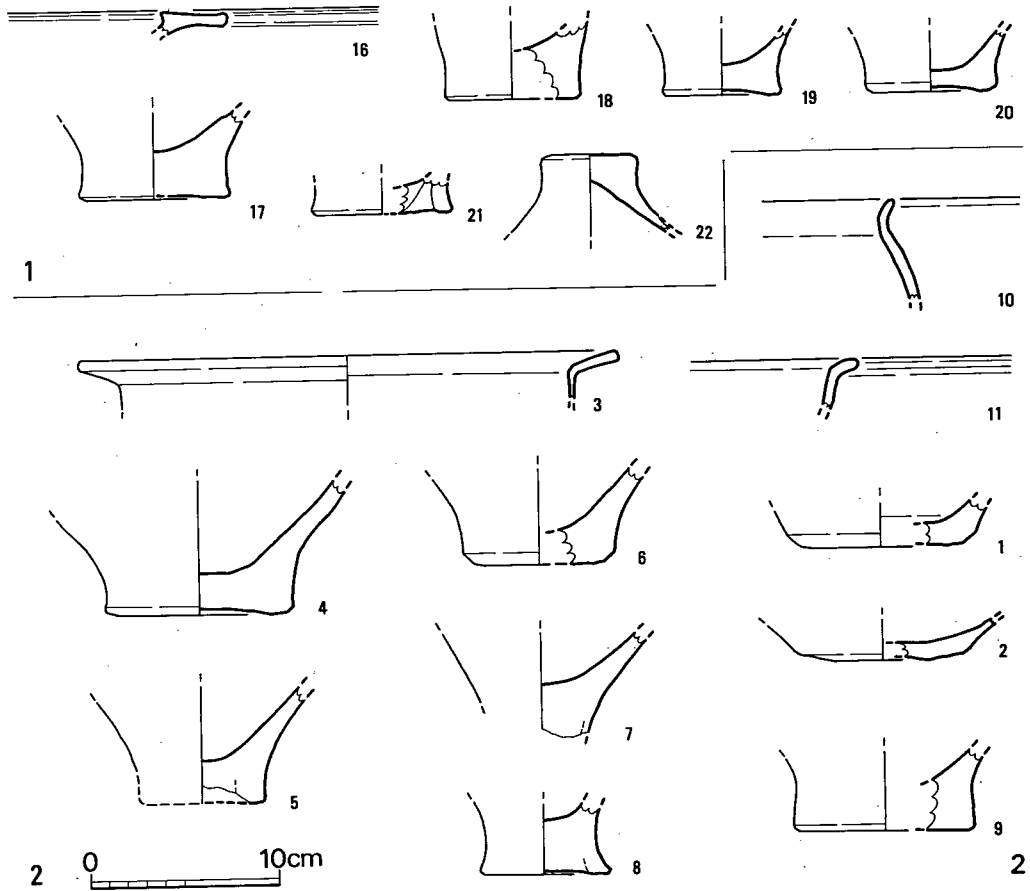
第77図 1号落込み・2号階段実測図 (1/60)



第 78 図 1号落込み出土土器実測図 (1/3)

1～5は坏蓋である。1の天井部はドーム状を呈し、口唇部は丸く納める。口縁部は回転ナデ調整で、天井部はヘラ切り未調整である。焼成は良好で、暗灰色を呈する。復原口径10.3cm。2は口縁部にかえりを有し、口唇部とかえりの端部は水平である。3の口縁部は短く立ち、天井部は低い。撮は剥落している。口縁部が回転ナデで、天井部は回転ヘラケズリ調整による。4は天井部の破片で、撮は剥落する。1～2mm大の長石・石英をかなり含み、粗雑である。5は器高が口縁部とさほど大差なく、一旦屈曲して短く立つ口縁部を有する蓋で、撮は剥落する。口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ、内面は不整方向ナデによる。

6・7は坏身で、低い高台を付す。6の底部はへたばり気味。器高4.2cm、復原口径14.9cmで



第 79 図 1・2号落込み出土土器実測図 (1/4)

ある。8は皿で、口縁部は僅かに外反する。器高1.5cm、口径15.0cm、底径11.8cmを測る。9は外面をカキ目調整(10~11条/cm)した口縁部片で、長頸壺になろう。10・11は短頸壺の口縁部片で、口唇部は短く立つ。

12~14は土師器の甕で、12の口縁部は短く外反する。復原口径は20.0cm。13の口縁部は大きく外反し、頸部の締りは悪い。14はく字形口縁を呈する。ともに胎土に長石・石英を含む。15は椀で、口唇部は丸い。口径は15.2cmである。胎土に長石・石英を含む。焼成は軟質で、暗赤橙色を呈する。

16は広口壺の口縁部破片で、鋤先状をなす。17~21は甕の底部破片で、17・18は平底で肉厚である。17の底径は8.2cm。19~21は上底で肉薄の底部で、底径は19が6.4cm、20は7.0cmである。22は蓋の撮部破片で、撮径は5.1cmを測る。何れも胎土に長石・石英を含む。混入品である。



## 2号落込み (図版22-1)

水路西半部中央の南側に位置し、12~14号溝に切られる。南西方向に傾斜しており、現状で幅18m程残る。埋土は暗褐色土であり、弥生土器が出土した。

### 出土遺物 (図版38-3, 第79図)

**土器 (1~11)** 1・2は底部破片で、壺になろう。3はく字形口縁の甕で、復原口径は28.8cmである。4~9は底部破片である。4の底径は10.2cmと大きい。5・7は外底部を欠く。6・8・9は平底である。6は底径8.0cm, 8は肉厚で、底径6.9cmを測る。10は短頸壺の口縁部破片で、僅かに外反して立つ。口唇部は丸く納める。11は鉢で、口縁部は大きく外反する。

### 暗渠状遺構 (図版29-1~3, 第80図)

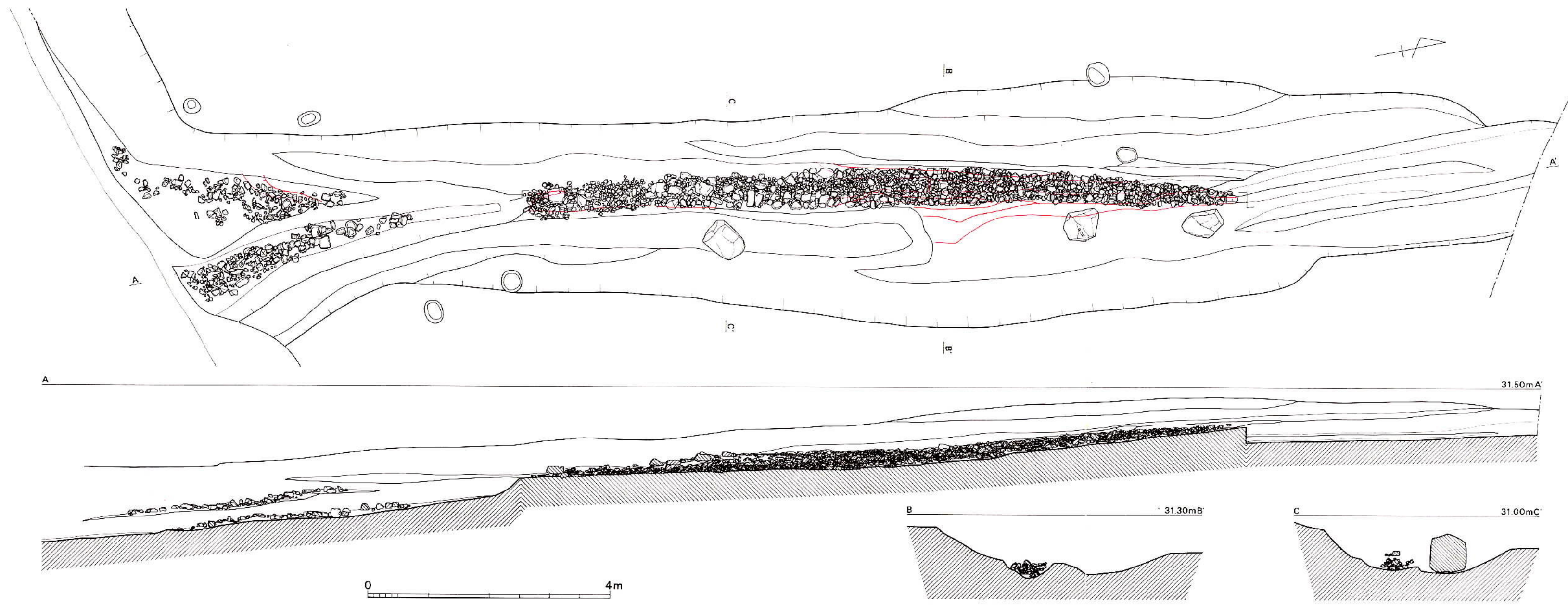
調査区中央の三角地区の東端側に位置する。埋土は緑灰色砂質土で、弥生・奈良時代の埋土とは異なり、一見して新しい時期の所産と思われたが、埋土下位より貯蔵穴・土壙が検出される可能性があるかと判断し掘り下げた。

残存長24m, 中央部での幅4mで南北方向に走る溝状を呈する。底面は南側に傾斜しており、底面を幅0.8m, 深さ0.3m程溝状に掘り下げ、北端部を除き中には2~30cm大の円礫を6~7段積めており、暗渠排水施設と考えられる。また、70cm程の大きな石が3個あり、埋土中より多量の須恵器が出土していることと相まって、これらの円礫は古墳の壁・敷石ではないかと思われる。後ほど判明したことであるが、この暗渠は、農地整備以前の地境の小道と重複していた。出土遺物は、須恵器の他に陶磁器・青磁・瓦器・土師器・弥生土器、石器等がある。

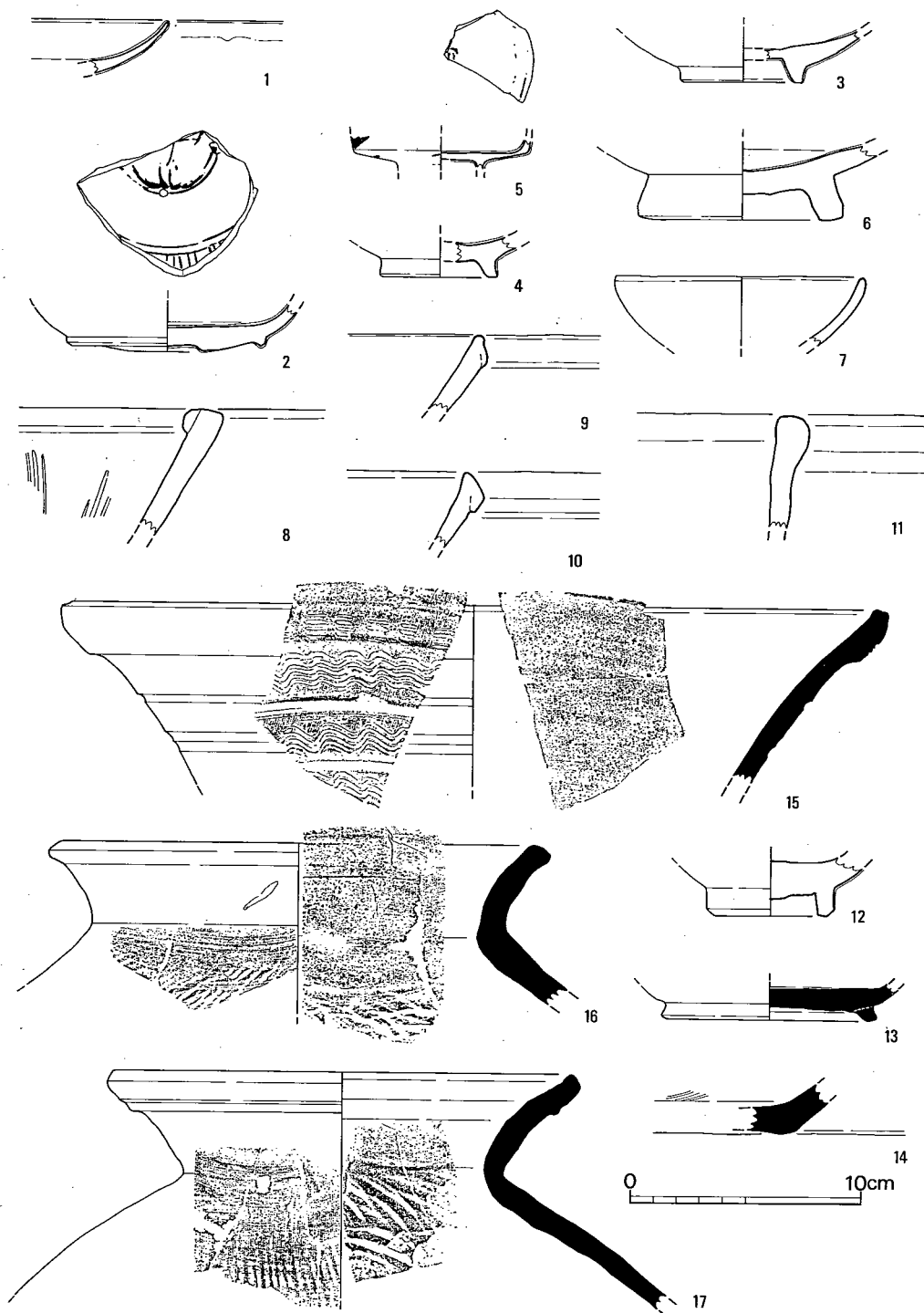
### 出土遺物 (図版38-4・39-2・41-1・42-1・3・43-2, 第81~83図)

**土器 (1~25)** 1~4・6は陶器で、5は磁器である。1は皿の口縁部小片で、淡黄色の胎に暗緑青色の釉掛け。見込は蛇の目状の釉ハギ。2は皿の底部破片で、見込には笹が描かれる。高台は蛇の目凹形高台である。釉薬は透明。3も底部破片で、青灰色の胎にねずみ色の釉掛け。見込みは、蛇の目状の釉ハギを施すことから皿になろう。高台径は5.4cmで、畳付きを削り釉ハギ。4は碗の底部破片で、高台径は5.0cm。胎は黄褐色で、釉は暗黄褐色を呈する。5は暗青色の絵に透明の釉を掛ける。筒形の碗になるか。6は高台径8.8cm, 高台高2.0cmと大きく鉢の底部であろう。灰青色の胎に暗緑褐色の釉掛け。外面は釉掛かりなし。

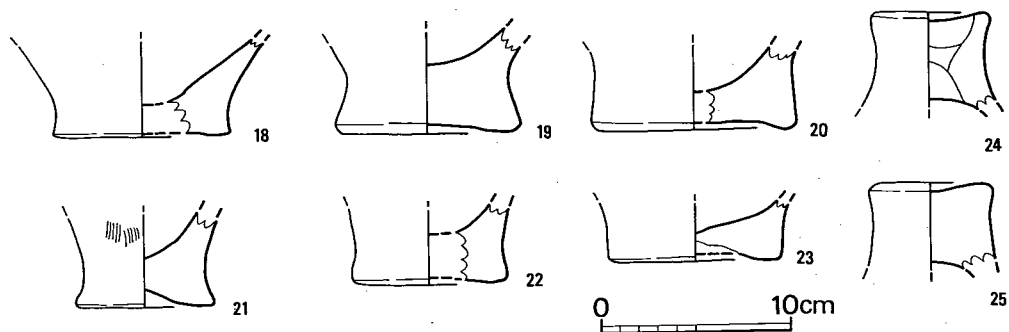
7は土師器の椀で、口唇部は丸く納める。口径10.5cm。8は土師質, 9・10は瓦質の播鉢で、8は口縁内面に断面かまぼこ形の粘土帯を貼付する。胎土は緻密である。11は土師質の口縁部破片で鉢になるか。12は青磁碗の底部破片で、高台径は5.6cmである。釉は暗緑色を呈する。13は坏身で、ハ字形の低い高台を付す。14は須恵質の底部片。15は甕の口縁部破片で、口径35.0cm。口唇部は窪む。口縁部外面は櫛による横線文、頸部は沈線間を櫛描き波状文で施文する。16・17は小型甕の口縁~肩部にかけての破片で、16の口唇部は横に突出するが、17は上方に立つ。



第 80 图 暗渠状遺構実測図(1/60)



第 81 图 暗渠出土土器实测图① (1/3)

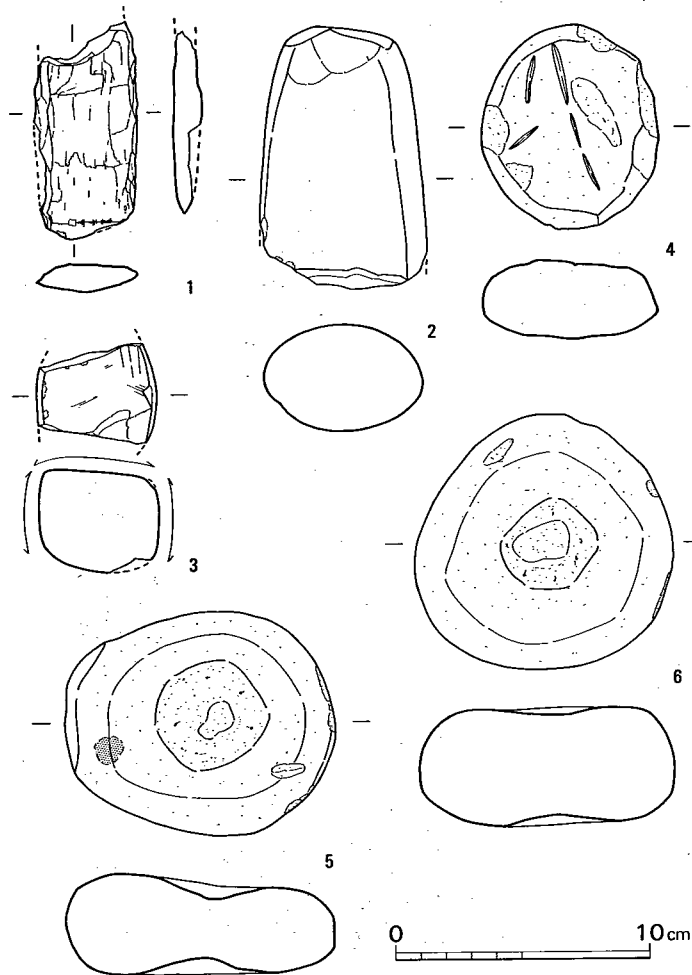


第 82 図 暗渠出土土器実測図② (1/4)

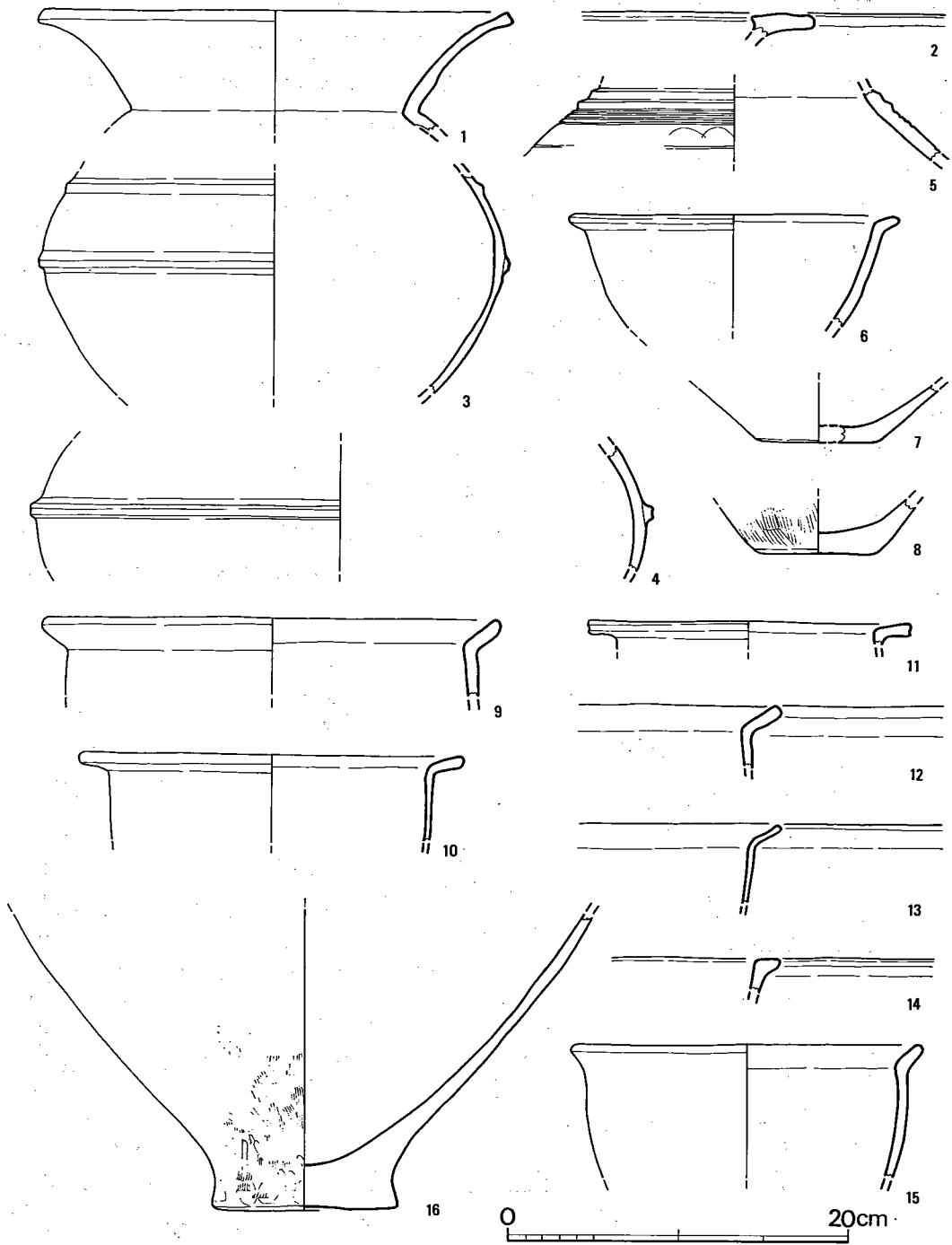
18~23は底部破片で、18はやや開き気味。19~21は肉厚の底部で上底である。24・25は径が小さく肉厚であることから蓋の撮になろう。

**石器 (1~6)** 1は蛇文岩製の打製石斧で、側縁は調整剝離しているが、刃部には研磨が加えられる。2は磨製石斧で、刃部を欠失する。軟質の石材で、安山岩か。3は硬砂岩製の砥石で、砥面は丸い。4は敲石で、上面には線刻がある。輝石安山岩製。5・6は凹石で。5の側縁には敲打痕がある。

**銅製品 (2)** 2は煙管の吹口で、5.6cm残存する。



第 83 図 暗渠出土石器実測図 (1/3)

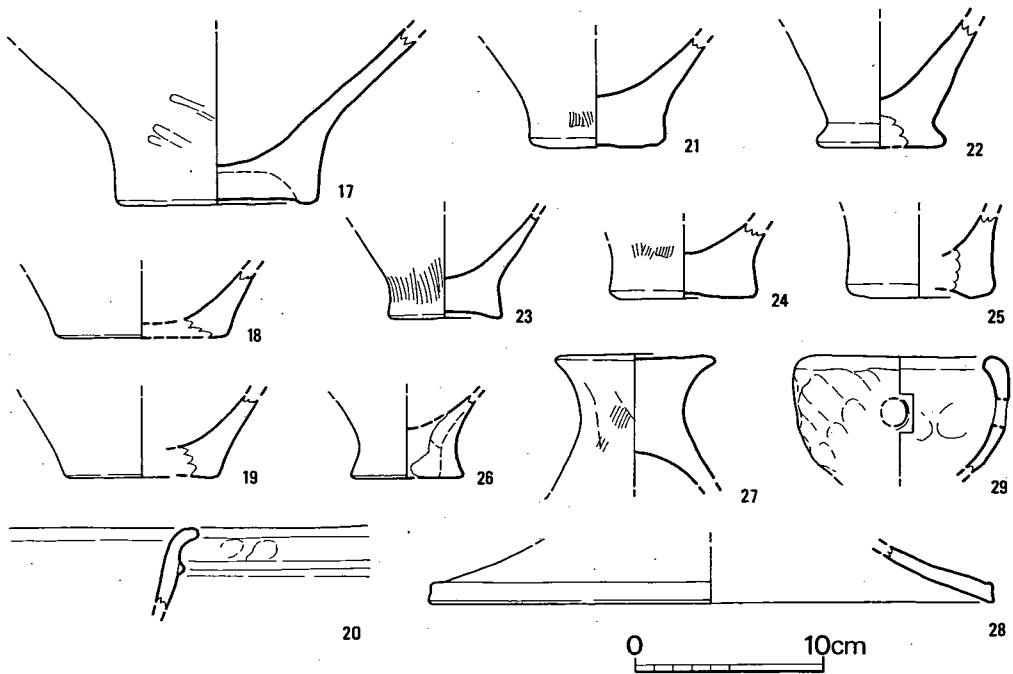


第 84 图 pit出土弥生土器实测图 (1/4)

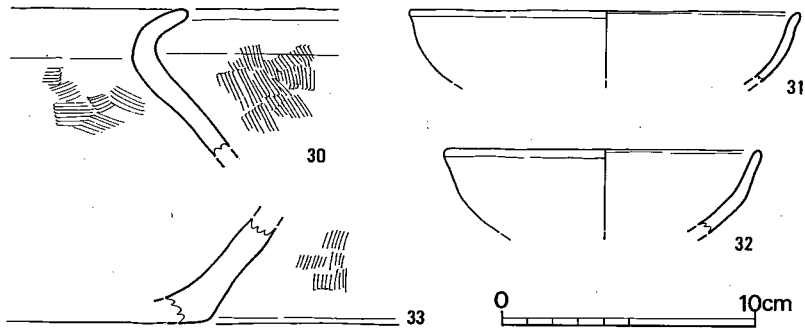
ピット出土遺物 (図版38-5・40-1・3, 第84~86・90図)

ここで取り上げる資料は、ピット出土の遺物である。広末・安永遺跡では、調査区の全域において1000個程のピットを確認したが、そのうち遺物が出土したのは150個程度であった。出土遺物には、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器、黒曜石の剥片等がある。

- P 1 (9) く字形口縁の甕で、口径は27.3cmを測る。
- P 2 (6) 高坏の口縁部破片で、外方に屈曲する。口径は19.6cmである。
- P11 (20) 口縁部破片で、口縁下に三角凸帯を貼付する。口唇部は丸く納める。
- P12 (16) 胴下半部から底部にかけての破片。底径は11.2cm。調整はハケ目→ミガキによる。
- P13 (14) 口縁部小片で、外方に突出する。
- P14 (15) 鉢で、口径20.9cm。口縁部はく字形に屈曲する。口唇部は丸い。
- P17(S 1) 黒曜石製の石鏃。長さ2.25cm。
- P18 (29) 飯蛸壺で、胴部に円孔が空く。口径は10.4cm。
- P23 (24) 底部破片で、底径は8.0cm、外面に黒斑あり。
- P39 (5・21・22・S 7) 5は壺の肩部破片。2条の三角凸帯の下に5条の楕円描き沈線を施し、下位の沈線間を連弧文で充填する。21・22は甕の底部片で、底径は21が7.



第 85 図 pit出土弥生土器・土製品実測図 (1/4)



第 86 図 pit出土土師器実測図 (1/3)

2cm, 22は6.8cm。S7は石包丁の破片で、頁岩製。

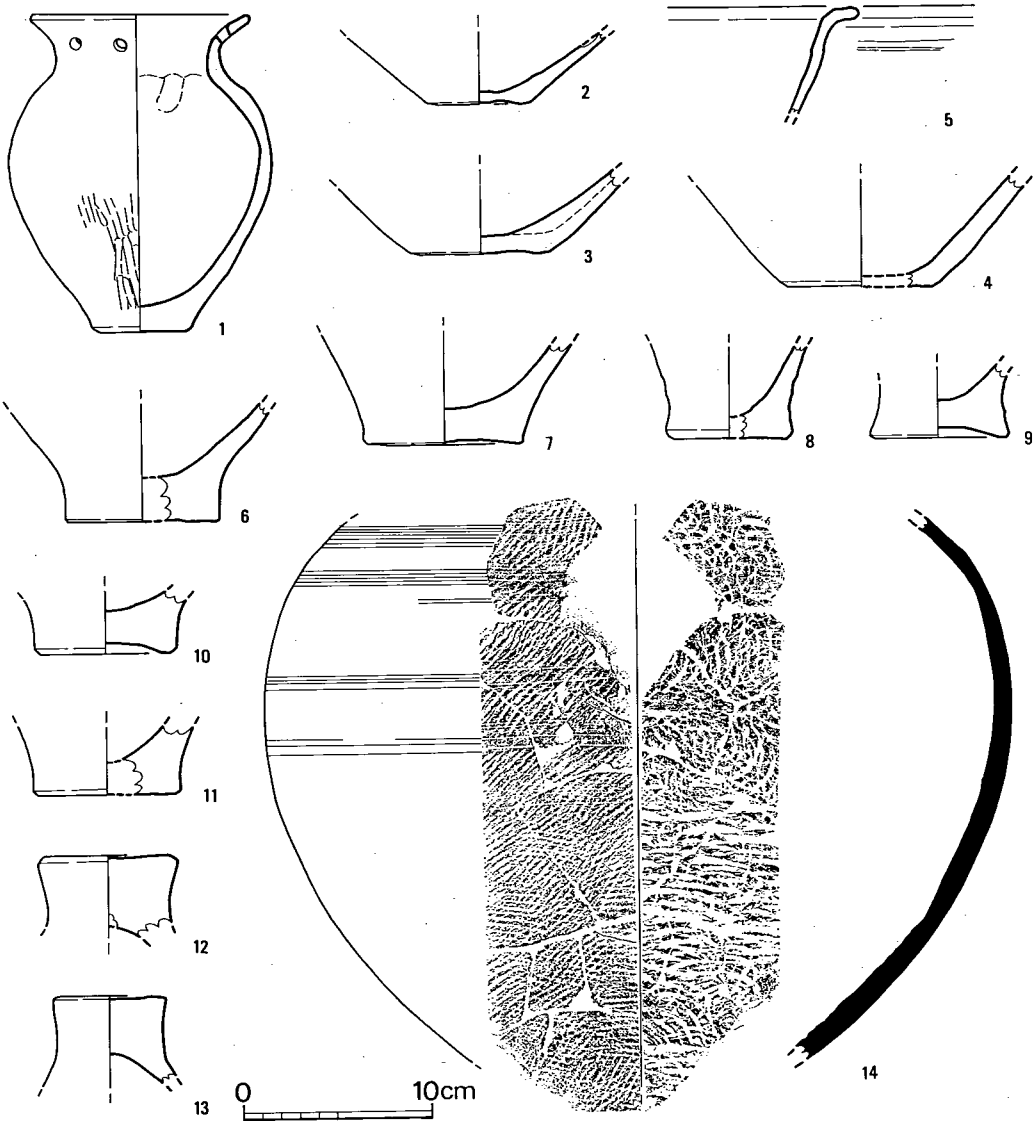
- P48 (17) 平底の底部片で、底径10.6cm。外面はヘラミガキによる。
- P56 (12) く字形口縁の甕で、頸部は強くナデている。外面に煤付着。
- P57 (26) 底部破片であるが、小振りであることから蓋の撮になるか。
- P67 (11) 甕の口縁部破片で、口径は19.0cm。口唇部は窪む。
- P73 (27) 底部が大きく開いているので蓋とした。撮部径は8.5cm。
- P75 (2・3・7・10・23) 2は壺の口縁部破片で、内側に僅かに突出する。3は壺の胴部破片、頸部下と胴部中位に三角凸帯を貼付。7は壺の底部破片で、底径は7.2cm。10は甕の口縁部破片で、口径は23.0cm。23は底部破片で、底径は6.0cm。ハケ目調整による。
- P78 (30) 土師器甕で、口縁部は大きく外反する。内外ともハケ目調整による。
- P79 (13) 甕の口縁部小片。外面に煤付着。
- P84 (1) 広口壺の口縁部破片で、口縁部は大きく開く。口径27.5cm。
- P96 (25) 甕の底部破片。底径は7.8cm。
- P97 (31) 土師器坏の破片で、口径は15.4cm。口唇部は丸い。
- P99 (4) 壺の胴部破片で、胴部にコ字形凸帯貼付。径はもう少し小さくなるう。
- P100 (8) 壺の底部破片で、底径は6.6cm。調整は外面ハケ目、内面ナデ。
- P105 (32) 土師器の坏で、口唇部は丸い。口径12.4cm。
- P106 (18) 平底の底部破片で、底径は9.2cm。
- P121 (19) 平底の底部破片で、底径は8.2cm。
- P126 (28) 蓋の口縁部破片。口径は30.0cm。内面に煤付着。
- P134 (S2) サヌカイト製の石鏝。長さ2.75cm、幅1.5cm、重さ1.2g。
- P143 (33) 瓦質の底部片。外面はハケ目調整。
- P147 (S3) 黒曜石製の石鏝で、先端を欠く。

その他の出土遺物 (図版38-6・39-1・40-1・42-2・43-4, 第87~91図)

ここで取り上げるのは、試掘時出土品・表採品, 及び攪乱坑出土の遺物である。遺構に伴っておらず, 資料的価値は下がるが, 資料紹介ということで挙げる。

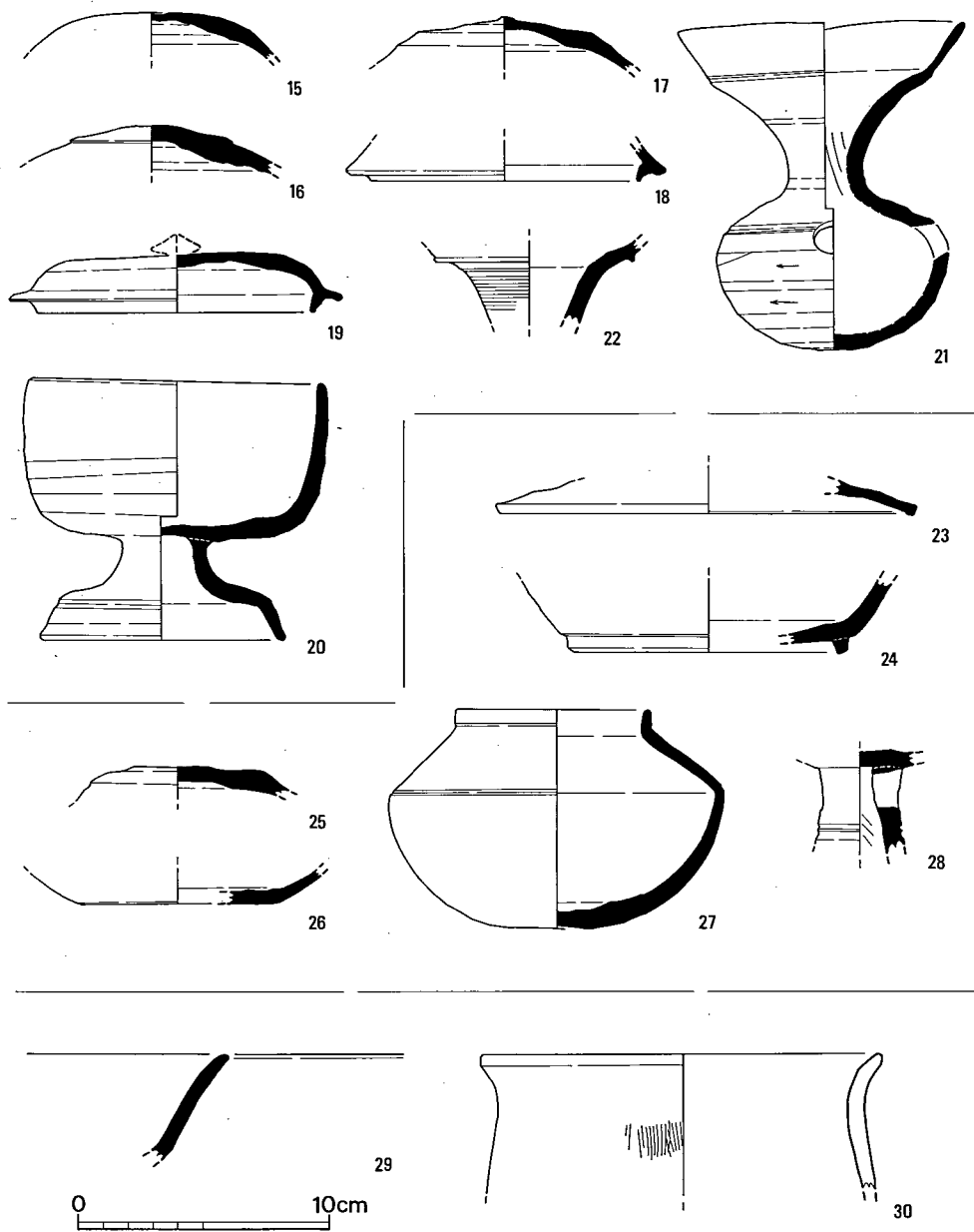
弥生土器 (1~13)

1は試掘時出土の壺で, 器高17.1cm, 口径11.6cm, 底径5.3cmを測る。口縁部は大きく外反



第 87 図 その他出土の土器実測図① (1/4)





第 88 図 その他出土の土器実測図② (1/3)

し、2個一組の円孔を対面に空ける。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整による。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、橙褐色を呈する。2～4は壺の底部破片で、2は試掘時出土。3は宅地付近攪乱坑の出土で、4は昭和58年度調査の取残し分。

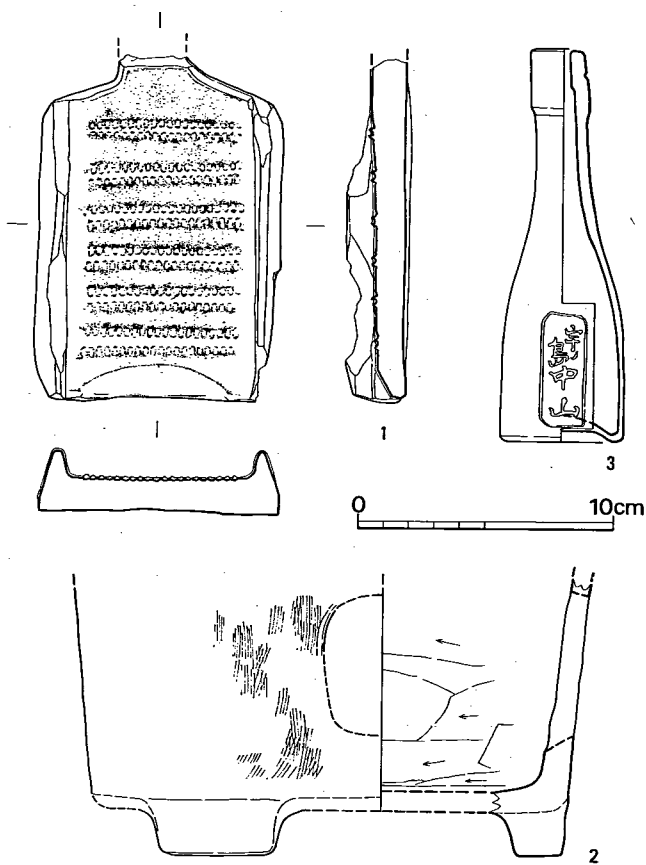
5・7は5号貯蔵穴の東側攪乱坑出土で、58年度調査の8号住居跡にあたる。5は鉢で、7は甕の底部で、肉薄の平底をなす。6は底径8.2cmを測る底部破片で、旧2号墳とした15号貯蔵穴北側の攪乱坑の出土。8は調査区中央にある現代の畝出土の甕底部片。9は11号溝北側の攪乱坑出土の甕底部で、底径は7.2cm。10・11は底部片で、4号溝東側の旧1号土壙とした攪乱坑の出土。12・13は蓋の撮部破片で、12は2号墳東側の攪乱坑の出土で、13は15号溝南側の段落ち出土。  
**須恵器 (14~29)**

主として、15号貯蔵穴北側の攪乱坑(旧2号墳)と4号溝東側の攪乱坑(旧1号土壙)の出土である。15~22は、旧2号墳の出土。15~19は坏蓋の破片である。16の天井部外面にはへら記号がある。17の天井部中央は盛り上がり、乳頭状の撮が退化したものか。18・19は口縁部内面にかえりを有するもの。19は撮が剥落している。かえり径11.2cmである。20は無蓋高坏で、坏部は椀形で、脚部は甕の口縁状を呈する。器高10.5cm、口径11.5cm、脚径9.8cmである。21・22は甕で、21の頸部はよく締まる。器高13.1cm、口径11.4cm。

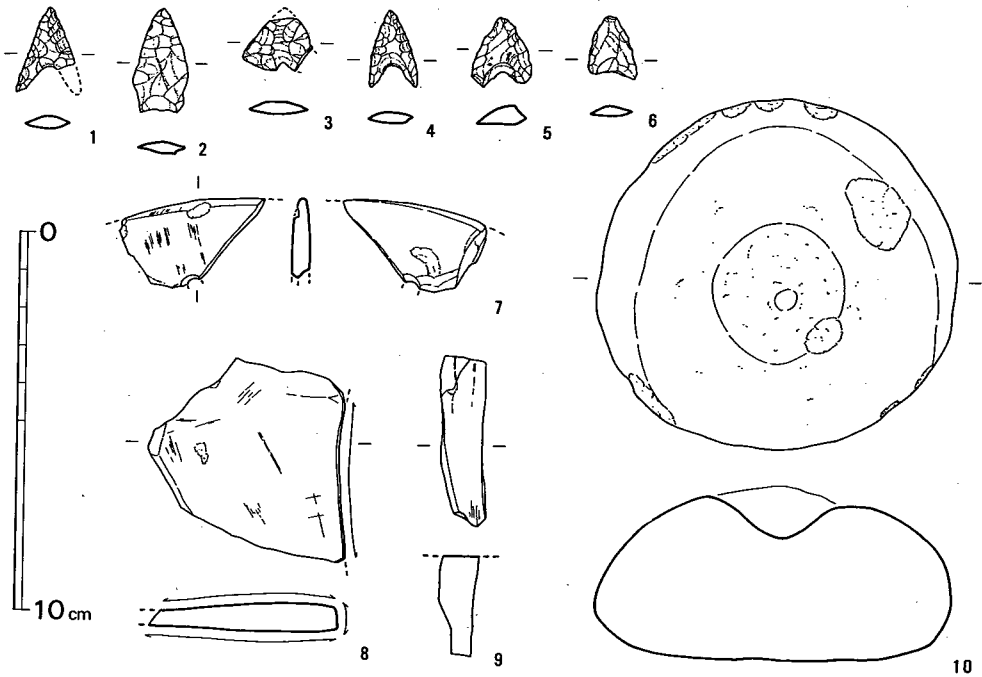
14・23~28は、旧1号土壙の出土である。14は甕の胴部破片で、球状を呈する。外面は平行タタキの後で部分的にカキ目を施す。内面は中位が円弧タタキで上下位が同心円タタキによる。23は口縁部破片であるが、口径が18.0cmと大きいことから皿の蓋になるか。口唇部は短く立つ。

24は高台付き坏身の底部片で、高台径は11.1cm。25は坏蓋になるか。26は身として実測したが、蓋になるかも知れない。27は無頸壺で、口縁部は短く直立し、胴部中位には沈線を巡らす。器高8.7cm、口径7.7cm。28は高坏の脚柱部破片で、長方形のスカシを2箇所に空ける。

29は11号溝北側の攪乱坑出土で、坏身の口縁部片であろう。



第 89 図 その他出土の遺物実測図 (1/3)



第 90 図 pit・その他出土石器実測図① (1/2・1/4)

土師器 (30)

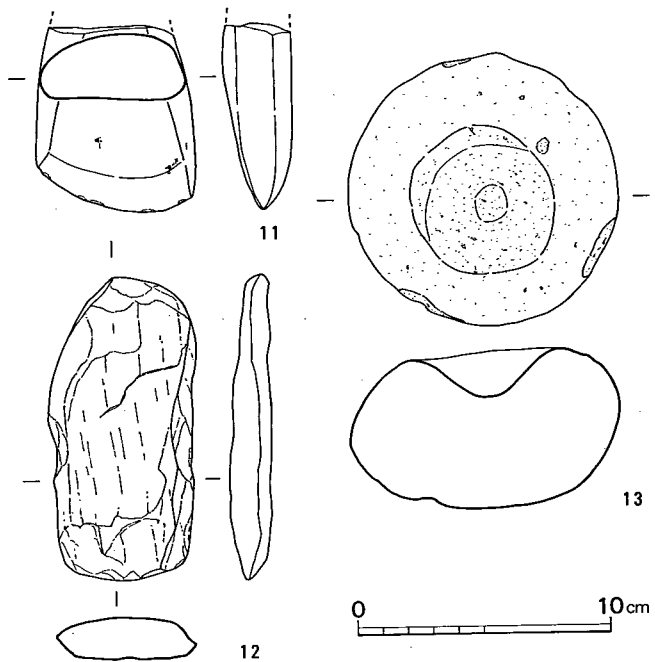
30は11号溝北側の攪乱坑出土の小型甕の口縁部破片である。

石 器 (4～6・8・10・12・13)

4・5は黒曜石の石鏃で表採品。6は2号墳東攪乱坑出土の石鏃。12は打製石斧で、水路西側の採集品。緑簾片岩製。10～13は29号土壙を切る攪乱坑出土の凹石で、安山岩製。

その他 (1～3)

1は宅地付近の攪乱坑出土の陶器製下ろし板。2は5号落し穴西側の攪乱溝出土の七輪。3はガラス瓶で宅地付近の攪乱坑出土 (註6)。



第 91 図 その他出土石器実測図② (1/3)

- 註1 築城町教育委員会 1984 安永遺跡（築城町文化財調査報告書第1集）
- 註2 ピットの中には、建物としてもよいものがある（付図参照）。
- 註3 福岡県教育委員会が昭和63・平成元年度に調査を実施。調査担当の木下・水ノ江氏の御教示による。なお、平成2年度の報告予定である。
- 註4 福岡県教育委員会が昭和62年度に調査を実施。現在、整理中である。
- 註5 小郡市教育委員会が平成元年度に調査を実施。現地説明会の際に実見させて頂いた。
- 註6 神戸ハーバーランド遺跡報告によると、大正の中頃～大戦頃のガラス瓶としている。兵庫県教育委員会 1987 神戸ハーバーランド遺跡（兵庫県文化財調査報告第52冊）



椎田バイパス路線航空写真（広末・安永遺跡上空）

## IV 各 論

### 1. 広末・安永遺跡の集落構成

#### (1) はじめに

広末・安永遺跡は、弥生時代中期の住居跡・貯蔵穴・土壙・溝状遺構を主体とする集落遺跡であり、ここでは昭和58年度調査の安永遺跡の成果を踏まえた上で、当遺跡における集落のあり方について触れてみたい。なお、昭和58年度調査、昭和63・平成元年度調査の弥生時代遺構は、下記のとおりである。

一次調査（昭和58年度）	住居跡	9軒
	土壙	165基（貯蔵穴・pit含む）
	溝	1条
	甕棺墓	1基
二次調査（昭和63・平成元年度）	住居跡	5軒
	貯蔵穴	18基
	土壙	18基
	溝	2条

#### (2) 住居跡の復原

次に、各住居跡の規模・柱配置等から住居跡の地割りについて考えてみたい。

住居跡の図上復原は、同心円を描いたシートを用い、柱穴が同心円上に乗るように操作し、中心点を求める。求めた中心点を軸とし、コンパスで各柱穴を結んだ円を描く。柱穴はほぼ一定間隔で配されているので、デイベイダーで柱間間隔を反転させ、割り振ってゆく。柱穴で径が大きくかつ深いものを主柱穴とし、それ以外の柱穴を支（補）柱穴、入口部に関する柱穴に分ける。また、住居の中心点～柱穴間と柱穴～周壁までの距離の比率を求める。

以上の様な操作で、住居の柱配列を復原した(第92図)。入口部に関しては、柱穴の配列状況及び旧地形を考慮して復原した。なお、第92図の網掛けは、主柱穴を示す。

### 1) 平面形

住居跡の平面形は、円形が大半を占めるが、広末2・3号住居跡は隅丸方形を呈する。

### 2) 分類

住居跡の規模により大中小のⅠ～Ⅲ類とそれ以外のⅣ類に分類した。

Ⅰ 類 (小型) ……………径7m前後の住居跡で、周壁と柱穴の距離の比率は1:2で、広末2・3号住居跡、安永1・4号住居跡が該当する。

Ⅱ 類 (中型) ……………径8～9m前後の住居跡で、周壁と柱穴の距離の比率は1:1, 1:2で、広末4号住居跡、安永5・8号住居跡が該当する。

Ⅲ 類 (大型) ……………径10m前後の住居跡で、周壁と柱穴の距離の比率は1:2, 1:3, 2:3で、広末1号住居跡、安永2・3号住居跡が該当する。

Ⅳ 類……………上記に属さない不整形を呈する住居跡 (安永6号住居跡)。

興味深いことに、Ⅰ類住居跡の径は、Ⅲ類住居跡の柱穴内にすっぽり納まる。また、広末1・2・4号住居跡の棟持ち柱の柱間は、住居の中心点から柱穴までの距離にほぼ等しい。また、住居の中心点から柱穴までの距離と柱穴から周壁までの距離の比率は、1:1, 1:2, 1:3, 2:3という様にある一定の法則がみられ、長さの基準になるものが存在したことが考えられる。

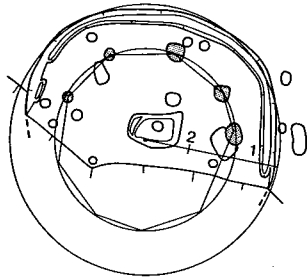
### 3) 円形住居跡の地割り

住居を築造する際、住居の規模となる円を描くには、紐と棒切れが有れば事足り、住居跡を掘削する適当な場所に中心点の杭を打ち、紐を結び付け、紐の先端に付けた棒切れで地面を一周する。描いた円を基に掘削すると竪穴部になる。

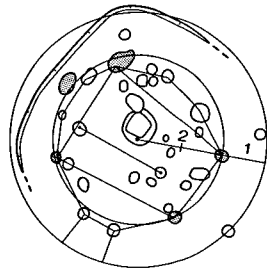
次に柱穴の配置であるが、先にも述べた様に柱穴と周壁は同心円に乗ることから、中心点から一定の比率で竪穴部に円を描き、柱穴配置の目印とする。後は、竪穴部の規模に応じて、主柱・支柱、棟持ち柱を立てる位置に柱穴を掘る。また、馬田氏によると三雲遺跡・トラノ尾遺跡における弥生前期末～期中葉の円・方形住居跡は、秦・前漢尺 (1尺27.65cm) を基準単位とする規格によって構築したものとされている (註1)。

### (3) 貯蔵穴・土壇について

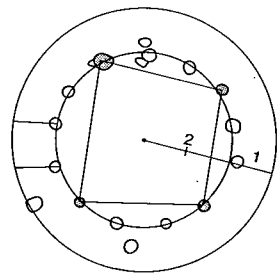
安永遺跡では、165基の土壇が調査され、4種類に分類しているが (註2)、その中には貯蔵穴・ピットを含んでおり、弥生時代以外の土壇も存在するようである。広末遺跡では貯蔵穴18基・土壇18基を検出した。調査地は大規模な削平・掘削を受け、また、未調査地を残しているため、全容は把握できない。以下、判明した事実をもとに若干の問題点に触れてみたい。



廣末3号住居跡  
(比率1:2)

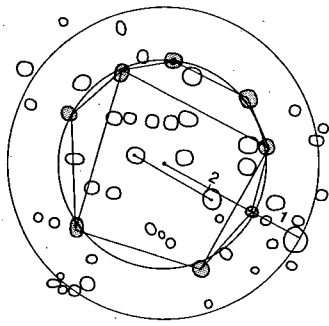


廣末2号住居跡  
(比率1:2)

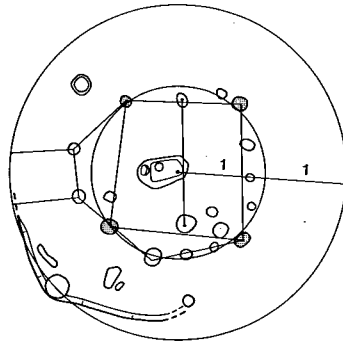


安永4号住居跡  
(比率1:2)

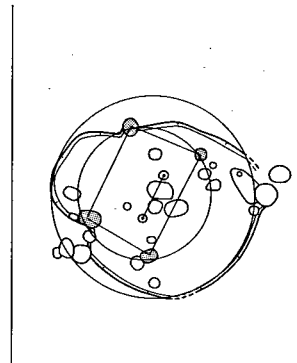
**I 類**



廣末4号住居跡  
(比率1:2)

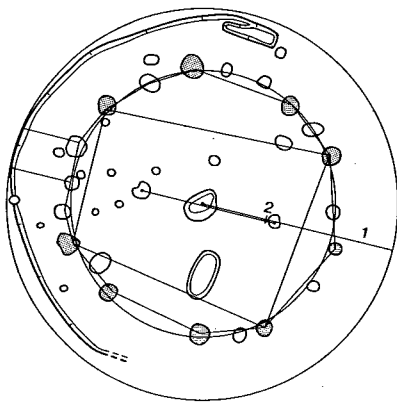


安永5号住居跡  
(比率1:1)

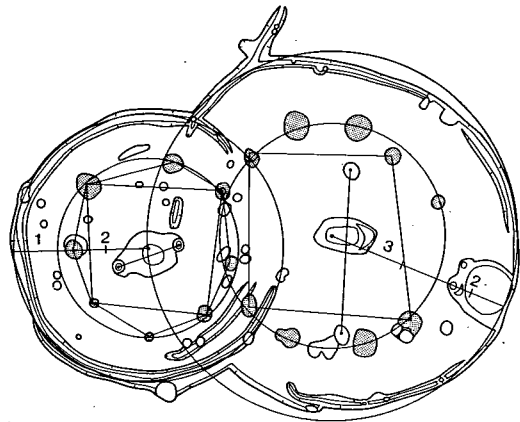
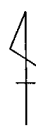


**IV 類** 安永6号住居跡

**II 類**



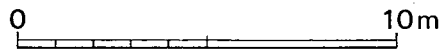
廣末1号住居跡  
(比率1:2)



安永2号住居跡 (I類)  
(比率1:2)

安永1号住居跡  
(比率2:3)

**III 類**



第 92 図 廣末・安永遺跡住居跡分類図 (1/200)

### 1) 貯蔵穴について

円形を呈する3・6・8・11・14号貯蔵穴は、径100~140cmと小型で、5号貯蔵穴は径165cmとやや大きい。隅丸長方形を呈する貯蔵穴も小型の16号と、長軸が180~230cmを測る大型の1・7・12・18号貯蔵穴の二者が存在する。広末遺跡では、平面形が円(方)形・隅丸長方形を呈し、埋土が黒褐色・暗緑褐色を呈するものを貯蔵穴とし、不整形を呈するものを土塋として一応分類したが、規模・形態・性格上土塋とした方が妥当なものがある。

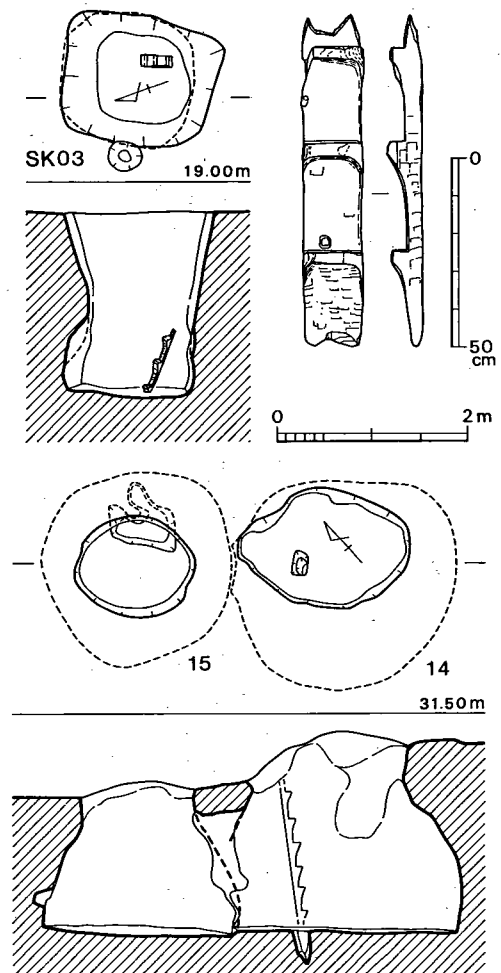
貯蔵穴とした1号からは多量の土器が浮いた状態で出土した。また、13号からは焼土・炭とともに焼けた石が出土しており、廃棄土塋とした方が妥当であろう。6・8・11号は径100~120cmと小規模であり、遺物の出土はなかったが、その形状からして貯蔵穴としてよからう。

### 2) 床面の小ピットについて

従来、袋状竪穴(貯蔵施設)の底面中央にみられる小ピットは、上部施設(覆い屋根)の柱穴・湿気抜きのための穴とされていたが、近年、新潟県下谷内遺跡(註3)、京都府温江遺跡(註4)の土坑内から梯子が検出されたことは大変意義深い。特に、温江遺跡SK03からは、土坑底面に梯子が斜めに突き刺さった状態で検出しており、梯子の使用状況及び床面小ピットを考える上で参考となる。

当県では、袋状竪穴・土坑等からの梯子の出土例は確認されていないが、底面に小ピットを有する袋状竪穴(貯蔵穴)は数多く調査されている。

門田遺跡門田地区14号袋状竪穴は、床面が不整形円形を呈し、現状での深さ225cmを測る。床面中央のやや北西側に径24×16cm、深さ36cmの小ピットを有する(註5)。第93図に梯子使用状況の復原図を示したが、この小ピットは、北西壁に向かって斜めに穿たれており、梯子を掛けるための穴と考えられる。当遺跡の14号貯蔵穴底面にある小ピットも梯子を掛けるための穴とみてよからう。



第93図 温江遺跡・門田遺跡貯蔵穴(1/80)



しかし、底面に小ピットを有しない貯蔵穴が存在するのも事実で、梯子の使用頻度の違いによるものなのか。単なる梯子の圧痕のみでは、検出が難しい。また、常時梯子を入れていたか、使用時のみに入れていたかが問題であり、後者であるとすれば、共同体内における共同管理下にあった貯蔵穴同様、梯子もまた共同管理のもとにあったことが推察される。

また、所謂落し穴状遺構との違いは、形態はさる事ながら床面ピットの大きさ・深さ・数から判別できる。つまり、落し穴状遺構のそれは、径20～30cm、深さ20～70cmの穴を床面中央に1ないし2個設けるか、径5～10cm、深さ10～30cmの穴を数個設けており、貯蔵穴のそれとは明らかに異なる。

梯子は高床倉庫・竪穴住居・袋状竪穴等の脚が届かない高い（深い）施設への出入りに使用する道具であり、遺構が削平されていたとしても床面小ピットの存在から逆に袋状竪穴・土坑等の深さある程度類推することが可能であろう。また、形態的に類似した土坑と貯蔵穴とを判別する際の手がかりとなろう。加えて、プラント・オパール、花粉分析、土壌水洗選別法等の土壌分析は、貯蔵施設か単なる土坑かを判断する有効な手段と言えよう。

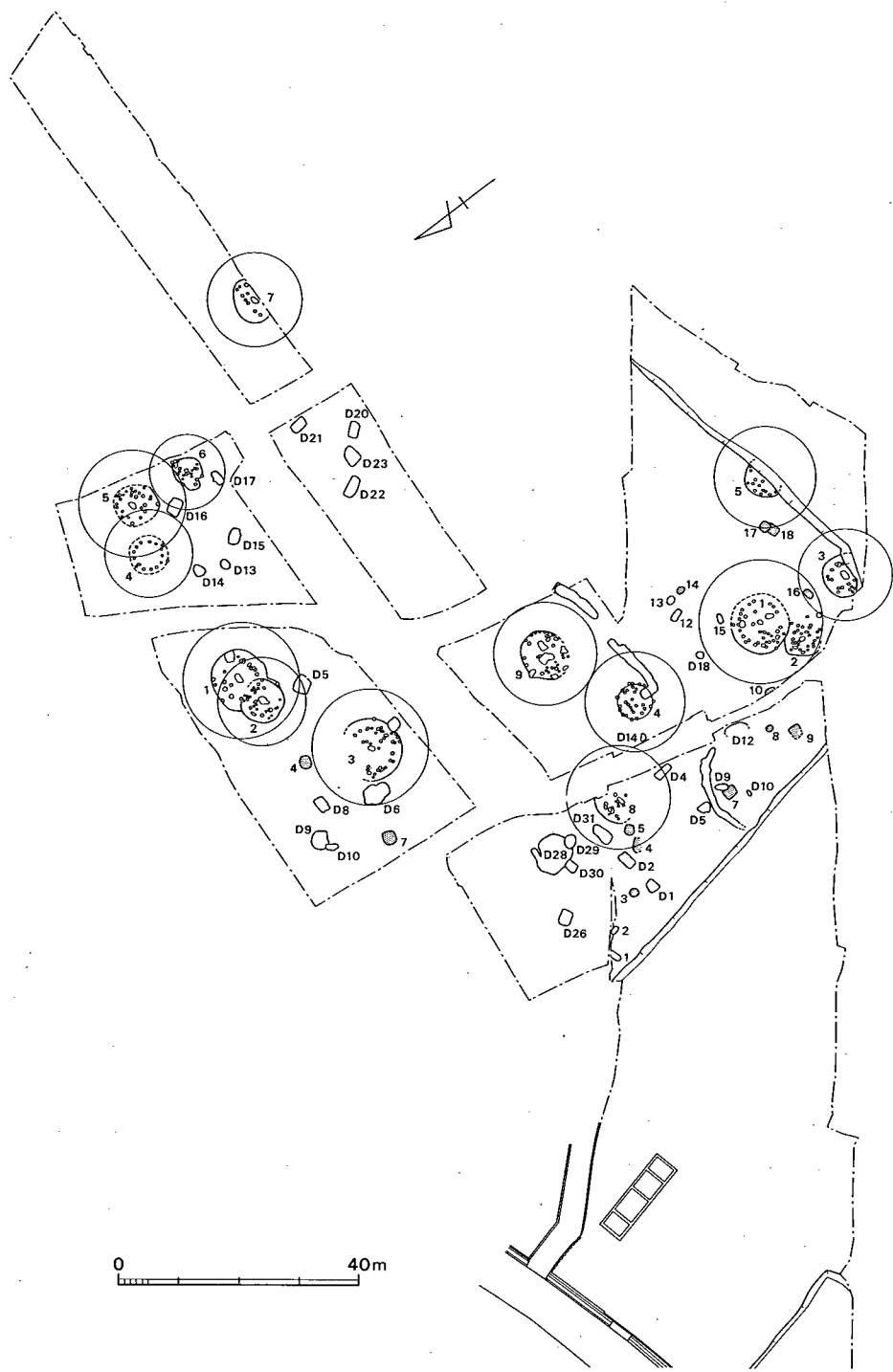
#### (4) おわりに

今回は、終始当遺跡内での検討に留まり、他遺跡との比較検討を十分に行っていないが、住居と貯蔵穴・土壙との相関関係について触れ終わりとした。

円形住居跡の進展過程は、中央土壙を挟んで位置していた棟持ち柱が次第に離れ、住居壁側に寄ってくる(註6)。この結果、竪穴部の拡大=居住空間の増大が起り、住居内における収容人員の増加をもたらす。Ⅲ類とした広末1号・安永1・8号住居跡は、直径10mを越す大型の住居跡である。安永遺跡の報告では、1号住居跡はⅠ類の2号住居跡に切られるとしているが、1号住居跡の柱穴が2号住居跡の下部周溝?を切っており(第92図参照)、また2号住居跡出土の高坏の脚部は短く、前期末の様相を呈することから両者の切合い関係が逆転する可能性がある。この様に考えると、Ⅰ・Ⅱ類からⅢ類への推移が考えられる。

また、各住居跡の周辺には貯蔵穴・土壙が配されており、仮に住居跡の中心点を軸として各住居跡の直径に値する円を描き、円内に納まる貯蔵穴と住居の出土遺物を相互に検討すると、広末住3-貯16、広末住5-貯18、安永住8-広末貯4、安永住3-D4の関連が窺え(第94図参照)、一軒の住居に対して一基の貯蔵穴を有していた事が理解できよう。住居群は環状に配され、中央部には空白地帯がみられる。

当遺跡の弥生集落は中期で終焉し、後期には低地部の十双遺跡に集落されてゆくのであろう。



第 94 図 広末・安永遺跡弥生時代遺構配置図 (1/1200)

## 2. 落とし穴状遺構再考

### (1) はじめに

広末・安永遺跡では、6基の落とし穴状遺構(註7)を検出した。また、安武士井の内遺跡では30基の落とし穴状遺構が調査され、京築地域において最初の調査例となった。筆者は以前、横断道第7集の中で落とし穴状遺構について若干触れたことがあり(註8)、以後落とし穴の調査例も増え、筆者の落とし穴に対する認識も変化しており、再度愚考を弄した次第である。

### (2) 研究略史

落とし穴の最初の調査例は、宮坂親子による長野県城之平遺跡の調査で、底面にピットを有する土坑が23基検出された(註9)。その後、多摩ニュータウンで類例が調査され(註10)、また函館空港建設に伴う調査では、溝状の土坑(トラップピット)が発見された(註11)。

1970~71年には、神奈川県霧ヶ丘遺跡の調査がなされ、124基の土坑が検出された(註12)。「落とし穴」とする根拠として今村氏は、1. 埋土が自然堆積の様相を示し、人為的に埋められた形跡が無いこと。2. 分布が広い範囲にまばらに散っており、特定の地域に集中していない。3. 長軸の方向が地形と強い相関関係を有する。4. 付近に同時期の遺物が少ない。5. 底部の施設が陥穴に伴う何らかの仕掛と考えると理解できる。6. 他遺跡の類例が丘陵地帯に多く発見されている点を挙げられている。

これに対して、村田氏は霧ヶ丘遺跡の土坑の規模が小さいことからイノシシを捕獲対象としたのではない。タヌキ・キツネ等の小動物を捕獲する土坑としても、小動物では縄文人の食料源にはなりえない。また、イノシシは臭覚力と狡智にたけた習性をもち、陥穴になかなか落ちてくれない。として、今村氏の説に反対されている(註13)。

その後、高度経済成長に伴う大規模開発により発掘調査件数が急増し、底面にピットを有する土坑及び溝状土坑(Tピット)は、北海道・東北・関東・中部・甲信越・山陰・山陽地方の各地において類例を増している。九州においては、数年前より検出しており、貯蔵穴・土壙・竪穴・墓として報告されながらも出土遺物がなく、その時期・性格に関しては不明とされてきた。しかし、佐々木氏が下原遺跡で検出された床面にピットを有する土坑を「落とし穴」と指摘したのに始まり(註14)、福岡県内では一連の横断道調査報告の中で武田氏による形態分類(註15)、小田による県内例の集成(註16)、平嶋氏の考察(註17)等がある。

近年では、小郡市北松尾口I遺跡(註18)、久留米市安武遺跡群(註19)の大規模な調査例があり、速水氏は北松尾口遺跡における落とし穴の配列から追込みによる狩猟法を想定されている。

また、富永氏は九州各県の落し穴を集成・形態分類され、その配置状況及び年代にまで言及され、九州における落し穴の研究は、やっと緒についたという状況である。

### (3) 形態分類と立地

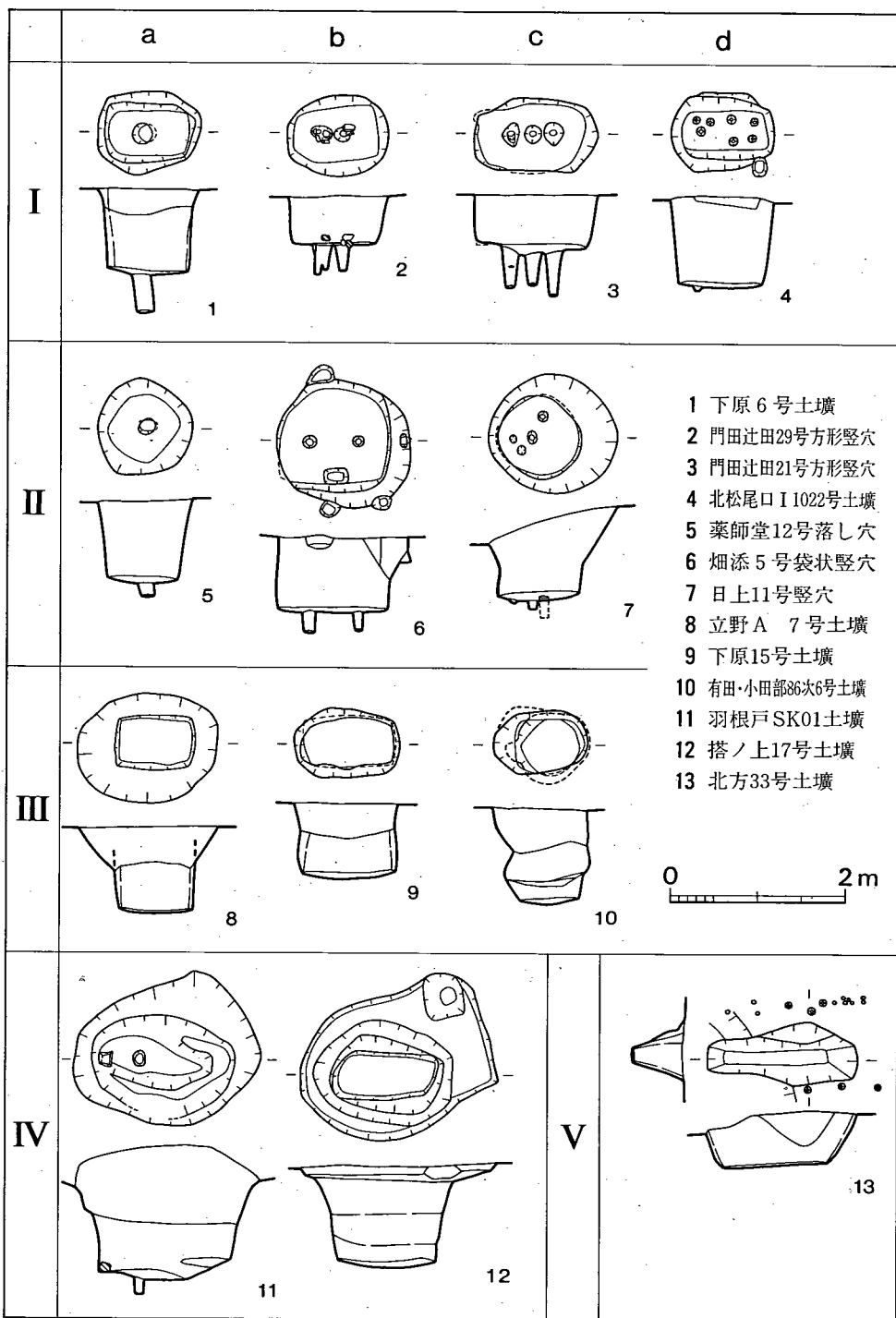
従来の調査例から、底面ピットには杭を立てていたことが証明され(註20)、落し穴と認定する際の重要な根拠となっている。筆者の1986年当時の形態分類では、底面ピットを固定式の槍と認識し、底面ピットを有することを落し穴の第一条件としたためピットを有さないタイプは除外した(註21)。しかし、ピットを有するタイプもピットを有さないタイプも埋土・配置状況に差異はなく、同様の性格を有するものと考えられ、今回はⅠ～Ⅴ類に分類した。

- Ⅰ 類……方形ないし長方形を呈する。底面ピットの数により a～d の 4 種類に細分可能で、底面中央に径 20～40cm、深さ 20～80cm のしっかりしたピットを有する a～c 類と浅い数個の小ピットを有する d 類がある。
- Ⅱ 類……上・底面とも円形を呈し、底面中央に径 10～20cm、深さ 15～35cm のしっかりしたピットを有するもので、底面ピットの数により a～c の 3 種類に細分した。
- Ⅲ 類……底面にピットを有さないタイプで、上面が大きく開くもの(a類)、壁面がオーバーハングするもの(b類)、円形を呈するもの(c類)に分類した。
- Ⅳ 類……不整形を呈する大型のもので、底面にピットを有するもの(a類)と有さないもの(b類)がある。
- Ⅴ 類……細長い長方形を呈し、溝状の落し穴と考えられる。

以上の 5 類に分類したが、「落し穴」は動物を落し込ませて捕獲することを目的として掘られるので、上面形は動物が穴に落ち易いよう円形に大きく開き、底面は落ち込んだ動物の動きを束縛するためにすばめ、かつ底面に付設した杭—固定式の槍で殺傷効果を高める。つまり、立野 A 8 号土壙・薬師堂東 8 号落し穴・上清水 15 号土壙例がⅠ類本来の形態を示すものとする。

また、Ⅰ類は底面での長さ 80～130cm、幅 50～100cm と規模が小さく、タヌキ・キツネ・ウサギ等の小動物を捕獲対象としていたのであろう。羽根戸 SK01 土壙・畑添 5 号袋状堅穴・日上 11 号堅穴は、削平されてはいるが上面長が 2m を優に越え、中型動物—イノシシ・シカ等の捕獲を目的としたものと考えられる。また、三国の鼻 51 号土壙墓は、上面長 226cm、検出面からの深さは 160cm とかなり深く、30・41 号土壙墓も墓とするには深すぎるため、落し穴としておく。

Ⅲ類は底面ピットを有さないタイプであるが、規模・形態的にはⅠ類と変わりはなく、両者の相違はピットの有無のみであり、底面に付設されたピットが重要な意味を帯びてくる。北海道江別市東野幌第 4 遺跡では、底面の小ピット内に立った状態で杭を検出している(註22)。また、群馬県月夜野町村主遺跡 8 号陥し穴では、縦スライスによる土層観察の結果、底面より 3



第 95 図 落とし穴分類図 (1/80, 6・7・13は1/120)

本の杭痕を検出しており、先端の鋭利な「逆茂木」であるとされている(註23)。当県においても、柿原遺跡・薬師堂東遺跡・北松尾口遺跡Ⅰ地点で杭痕が確認されている。広末・安永遺跡では、1基(6号)のみスライス調査を行い土層観察を詳細にしたが、明瞭な杭痕は確認していない。ただ、第47図の6層は地山の黄褐色砂と粘性を有する灰白色砂の混合で、杭との隙間に入り込んだ様な堆積を呈していた。

以上みてきた様に、底面ピットは先端部を尖らせた杭を立てていたことは明白である。今村氏は底面の無数の小ピットを「このような棒は動物に傷を負わせるためというより、落ちた動物が跳ね上がる姿勢をとらせないための仕掛であろう」とし、「棒の数が1～3本と少ないものは傷を与えることを目的としたもの」とされている(註24)。また、ピット内に石を有する門田遺跡辻田地区・日上遺跡・高津尾遺跡・安武土井の内遺跡例は、ピット内に数本の杭を立てた例からしても、杭の根締め役割を果たしたものと考えられる。

Ⅰ・Ⅱ類とⅢ類との大きな相違点は、杭を有する一獲物を殺傷する、杭を有しない一生きたまま捕獲するかの点で、これは捕獲対象動物の差異によるものか、或は生きたまま捕獲することに意義があり、今後Ⅲ類の落とし穴は動物飼育の問題と関連してくるものと思われる。Ⅴ類とした北方遺跡33号土壇は、上面での長さ259cm・幅106cm、底面での長さ179cm・幅24cm・深さ90cmを測る溝状の土壇で、断面形は逆台形を呈する。土壇の両側には小ピットがみられ、報告者によると「土壇と併せて動物捕獲のための落とし穴ではないか」とされているが(註25)、このことが事実とすれば、九州において初めての溝状落とし穴の検出例である。

溝状落とし穴は北海道から中部地方にかけて主に検出されており、岩手・青森の東北地方においては溝状落とし穴が主流で、円形・楕円形落とし穴を含めた全体の80%を占めるとされている(註26)。また、溝状落とし穴は、その形状からシカを捕獲の対象としたものと考えられており、小井田Ⅲ遺跡・安比内Ⅰ遺跡・水神遺跡・荒屋Ⅱ遺跡(註27)の様に、7～14基を一群として配した場合の追込み猟はかなりの成果を挙げたものと考えられるが、数人程度では大規模な追込み猟は不可能で、ムラを挙げての共同狩猟によるものと推測される。また、これには狩猟犬も重要な役割を果たしたであろう事は推測に難くない。何れにしても、九州地区においては溝状落とし穴の絶対量が少なく、捕獲対象物の違いと言うよりは狩猟法の相違とみるべきか。

次に、県内の落とし穴の立地であるが、これには狩猟方法・獣道の問題が深く関わってくるが、一般的に丘陵・台地・扇状地・河岸段丘・低位丘陵に立地し、標高では7～91mに位置し、10～50mの検出例が最も多い。九州地方は他地域の様相に比して、10～20m前後の低台地・下位段丘・低位丘陵上の検出例が多いとの富永氏の指摘があるが(註28)、これには平野部と山間部の開発度合を考慮しなければならず、平野部・低～中位丘陵上においては調査が進展しているが、山地・山間部においては殆ど調査がなされていないのが現状であり、高所部分における調査がなされれば高所における検出例も自ずと増加するものと考えられる。

また、落とし穴はその性格上、同時期の集落遺跡とは近接しないという特徴を有する。落とし穴からの出土遺跡は極少で、大半の落とし穴は遺物を有さない。このことが落とし穴たる由縁とされているが、時期決定に事欠く。県内では遺物を出土した落とし穴に12遺跡があり(表4参照)、押型文土器・条痕文土器、石鏃・削器・石匙等の石器、弥生土器、土師器等が出土しているが、切合い関係・周囲の状況から勘案して弥生土器・土師器は恐らく混入したものであろう。

上ノ宿遺跡1号陥し穴・庄屋野遺跡SK30からは縄文早期押型文土器、北松尾口遺跡I地点1003号土壙からは条痕文土器が出土し、有田・小田部遺跡86次6号土壙からは石鏃・石斧とともに縄文後～晩期の土器が出土している。しかし、落とし穴は使用状況そのものに意義があり、遺物が出土したからといって短絡的に時期決定する訳にはゆかないが、ある程度の日安にはなろう。また、落とし穴埋土中におけるアカホヤ(Ah)火山灰の有無は、有効な時期判定になろう(註29)。とまれ落とし穴は、縄文時代における普遍的な狩猟の一形態とみなすことができよう。

#### (4) 落とし穴の配列

落とし穴の研究では、その配列状態を抜きには語れないが、何れの報告書・論文に目を通して、落とし穴を検出した現時点でのグルーピング・配列のタイプ化及び線引きがなされており、あたかも数基～数十基の落とし穴が同時並存したかの錯覚に陥る。出土遺物が皆無に近く、例え遺物が出土したとしても短絡的に時期決定ができない落とし穴の性格上、同時並存の証明はかなりの困難を伴うが、安直なグルーピング・線引きは差し控えるべきであり、報告者自身が大きな落とし穴に陥りかねない。しかしながら、配列状態の比較・検討は不可避であり、詳細な検討が望まれる。

落とし穴の配列は、捕獲対象動物・狩猟方法・獣道・設定場所の条件等により形態・配列に種々のパターンが存在したものと考えられ、富永氏は落とし穴の配置をI型(独立タイプ)・II型(並列タイプ)・III型(散在タイプ)の3タイプに分類し、I・III型の配置は受動的猟法一狭義の罾、II型の配置は能動的猟法と位置づけられている。付け加えるならば、落とし穴とその周辺に存するピットも考慮する必要があるが、実証は難しかろうが追込み猟の柵列として落とし穴と有機的に関連しないだろうか。

#### (5) おわりに—今後への展望

1972年に新幹線建設にともない調査がなされた門田遺跡では、弥生時代の生活環境並びに栽培植物・食料植物の実態を把握する目的で、花粉分析、プラント・オパール分析及び土壌の水洗選別が実施され、興味ある結果が得られており、ここで紹介したい(註30)。プラント・オパ

ール分析は、谷部・住居跡・貯蔵穴について行われ、その中には落し穴とした18・21号方形竪穴も含まれており、貯蔵穴との比較・検討の対象になる。分析の結果、貯蔵穴からはイネ・タケ・ススキ・チガヤ・ヨシ・マコモ・ジュズダマ・モロコシ(?)等が検出されており、18・21号方形竪穴からはタケ・ススキ・チガヤ・ヨシ・マコモが検出され、イネはまったく検出していない。また、貯蔵穴からはイネ・マメ・ドングリ等の炭化種子を検出しているが、方形竪穴からの検出は皆無であった。これは、両者の性格の相違を現したものと考えられ、イネをまったく検出していない18・21号方形竪穴は、稲作以前の所産と考えられる。

特に、タケ・ススキ・チガヤ・ヨシ・マコモの検出は、古環境復原と併せて、落し穴の上部隠蔽物と考えられるのではないかと。また、庄屋野遺跡SK31・39でもプラント・オパール分析がなされ、タケ亜科(ネザサ節など)・ウシクサ属(主にススキ)・ヨシ属が検出され、イネやキビ等イネ科栽培植物に由来するプラント・オパールはまったく検出されず(註31)、門田遺跡と同様な分析結果となった。

以上のように、花粉分析、プラント・オパール分析、土壌分析、土壌水洗選別法、脂肪酸分析等の自然科学分析は、貯蔵穴・土壙・竪穴・落し穴・土壙墓といった遺構の性格判断に有効であり、併せて遺構の縦スライス調査による土層の詳細な検討が必要で、筆者を含めた調査担当者の遺構に対する注意を喚起したい。

今回の小考は、周到な準備・詳細な比較検討を以てしたのではなく、短期間の内にまとめたもので、考えの雑駁・地名表の遺漏は免れないが、筆者の疑問とする点は述べたつもりであり、今後とも資料の充実を図ってゆきたい。

表 4 県内落し穴地名表

No.	遺跡名	所在地	立地	標高	タイプ(数)	備考
1	広田遺跡1区	糸島郡二丈町吉井字広田	丘陵裾部	13m	I a(1)	石鏃、弥生土器片出土(混入?)
2	有田・小田部遺跡第5次	福岡市早良区小田部2-704	低位丘陵	12m	I a(1)	黒曜石剝片出土
3	有田・小田部遺跡第43次	福岡市早良区有田2-7-8	独立丘陵	7m	I a(1)	
4	有田・小田部遺跡第86次	福岡市早良区小田部5-143	低位丘陵	8m	I a(2) III c(1)	石鏃・石斧・土器片(縄文後～晩期)
5	有田・小田部遺跡第107次	福岡市早良区有田1-31-1	低位丘陵	14m	I a(1)	
6	羽根戸遺跡	福岡市西区羽根戸	丘陵上	90m	IV a(1)	
7	柏原遺跡群A2遺跡	福岡市南区柏原	河岸段丘	46m	III a(1)	
8	門田遺跡門田地区	春日市大字上白水字門田	中段段丘	30m	I b(1)	
9	門田遺跡辻田地区	春日市大字上白水字辻田	中段段丘	33m	I a(3) I b(7) I c(1)	タケ・ススキ・チガヤ・マコモ・ヨシ検出
10	西平塚遺跡	春日市大字小倉字平塚185	丘陵上	32m	I a(2) III a(2) III b(2)	*中央ビットを水抜き穴とする
11	畑添遺跡	筑紫野市大字武蔵字畑添	舌状台地	63m	II b(1)	
12	剣塚遺跡群	筑紫野市大字杉塚	独立丘陵	44m	I a(1)	K14(板付IIb式)に切られる
13	道場山遺跡2地点	筑紫野市大字武蔵	丘陵上	55m	I d(2)	



14	下原遺跡	甘木市大字一ツ木字下原	扇状台地	30m	I a(2) III a(5) III b(3)	直線的に配列 (2列)
15	立野遺跡A地区	甘木市大字下浦字立野	低台地	23m	I a(2) III a(1)	直交的に配列
16	立野遺跡C地区	甘木市大字下浦字立野	低台地	23m	I a(4) III a(3) III b(1)	
17	宮原遺跡	甘木市大字下浦字宮原	低台地	22m		
18	柿原古墳群S地区	甘木市大字柿原字若山	丘陵斜面	52m	III a(1)	弥生土器細片出土 (混入?)
19	柿原古墳群E地区	甘木市大字柿原字若山	丘陵斜面	63m	I a(1)	壁に窪みあり
20	柿原古墳群F地区	甘木市大字柿原字若山	丘陵斜面	61m	I a(3) I d?(1) IV a(1)	羨棺 (中期前葉) に切られる
21	塔ノ上遺跡	甘木市大字牛鶴字塔ノ上	低位丘陵	32m	I a(1) III a(5) IV b(1)	
22	金川・中島田遺跡	甘木市大字中島田52	扇状台地	30m	III a(3)	
23	上ノ宿遺跡	朝倉郡朝倉町山田字上ノ宿	丘陵上	57m	I a(1) III a(1)	押型土器出土
24	鎌塚遺跡	朝倉郡朝倉町菱野字鎌塚	丘陵上	57m	I a(2)	
25	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡字正尻	低台地	17m	I a(1)	弥生土器片出土 (混入?)
26	薬師堂東遺跡	小郡市大字井上字東山ノ後	低位台地	19m	I a(1) II a(3) III a(1)	
27	井上北内畑遺跡	小郡市大字井上字尾辺田	低位丘陵	17m	I a(1)	
28	千潟遺跡	小郡市大字千潟字船底	台地上	25m	I a(5) III a(3) III b(1)	
29	乙隈天道町遺跡	小郡市乙隈・夜須町四三島	低台地	23m	I a(2) III a(3)	
30	力武宮脇遺跡	小郡市大字力武字宮脇	低位丘陵	19m	I a(1) III a(2)	
31	三国小学校遺跡	小郡市大字力武1013	舌状丘陵	24m	I a(2)	
32	吹上南立石遺跡	小郡市大字吹上1045	河岸段丘	24m	I d(1) III a(1)	
33	吹上赤土遺跡	小郡市大字吹上字赤土	河岸段丘	23m	III a(3)	
34	北松尾口I遺跡	小郡市大字三沢字北松尾口	丘陵斜面30~40m		I a(2) I b(2) I d(1) III(8)	条痕土器出土
35	三国鼻遺跡	小郡市大字津古字三国	丘陵上	41m	I a(1) III a(3)	
36	津古土取遺跡	小郡市大字津古字土取	丘陵上	44m	I a(2)	
37	辻遺跡	三井郡大刀洗町大字高橋	低位丘陵	17m	I a(2) I d(2) III a(1)	
38	庄屋野遺跡	久留米市安武町安武本庄屋野	低台地	10m	I a(8) III a(4)	押型土器, 石核出土
39	穴口遺跡	久留米市安武町安武本穴口	低台地	10m	I a(4) I d(4) II a(8)	削器・黒曜石剥片出土
40	古牟田遺跡	久留米市安武町安武本古牟田	低台地	9m	I d(2) II a(4)	削器出土
41	田佛遺跡	筑後市大字北牟田字田佛	丘陵裾部	9m	I a(4) III b(1)	
42	赤坂遺跡	飯塚市大字潤野字赤坂	独立丘陵	33m	I a(1)	
43	日上遺跡	嘉穂郡穂波町大字椿字日上	丘陵上	47m	II b(1) II c(1)	ピット内より凝灰岩礫(根締め)出土
44	影塚南遺跡	嘉穂郡桂川町大字土師字影塚	丘陵上	42m	I a(1)	
45	冥加塚遺跡	田川郡川崎町原字冥加塚	丘陵上	51m	I a(3) II a(1)	*中央ピットを水抜き穴とする
46	向山遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字向山	丘陵上	30m	I a(1)	
47	汐井掛遺跡	鞍手郡若宮町大字沼口	丘陵上	76m	I a(1)	土墳墓と重複
47	香月遺跡	北九州市八幡西区香月	独立丘陵	18m	I a(2)	
48	北方遺跡	北九州市小倉南区北方	河岸段丘	14m	I a(1) V(1)	
49	高津尾遺跡	北九州市小倉南区高津尾	丘陵上	48m	I a(2) III a(2)	石鎌出土
50	井手尾遺跡	北九州市小倉南区石田	丘陵上	41m	I b(1) III a(1)	

51	上清水遺跡	北九州市小倉南区横代	低位丘陵 23m	I a(4) II a(2) V(1)	
52	安武士井の内遺跡	築上郡築城町大字安武1395	丘陵上 32m	I a(5) III a(2) IV a(1)	ピット内に根締め石あり
53	広末・安永遺跡	築上郡築城町大字広末481	低位丘陵 32m	I a(4) I d(1) III c(1)	石鏃・石匙出土

- 註1 福岡県教育委員会 1990 福岡東バイパス関係埋蔵文化財調査報告
- 註2 築城町教育委員会 1984 安永遺跡(築城町文化財調査報告書第1集)
- 註3 三浦純夫「大型土坑の機能について—能登半島の弥生時代を中心として」 石川県埋蔵文化財センター 1983 竹生野遺跡
- 註4 京都府埋蔵文化財調査研究センター(働) 1990 京都府遺跡調査概報第37冊
- 註5 福岡県教育委員会 1977 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集
- 註6 山本輝雄「日本原始家屋と復元に関する一考察」 1985 福岡考古第12号
- 註7 九州では、「落し穴」の研究は日が浅く、一般的でないため「落し穴遺構」という表現を用いたが、筆者はこの遺構を「落し穴」と認識している。
- 註8 小田和利「I. おわりに」 福岡県教育委員会 1986 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—7—
- 註9 尖石考古博物館 1966 蓼科(尖石考古博物館研究報告叢書第2冊)
- 註10 今村啓爾「土坑性格論」 論争・学説日本の考古学2 1988 有山閣
- 註11 註10に同じ
- 註12 霧ヶ丘遺跡調査団 1973 霧ヶ丘
- 註13 村田文夫「おとし穴」 季刊考古学創刊号 1982 有山閣
- 註14 佐々木隆彦「(3)下原遺跡土壌群の用途について」 福岡県教育委員会 1983 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—2—
- 註15 武田光正「土壌群について」 福岡県教育委員会 1984 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—5—
- 註16 註8に同じ
- 註17 平嶋文博「落し穴遺構」 福岡県教育委員会 1988 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—13—
- 註18 小郡市教育委員会 1989 北松尾口遺跡I地点(小郡市文化財調査報告書第54集)
- 註19 久留米市教育委員会 1989 安武地区遺跡群II(久留米市文化財調査報告書第60集)
- 註20 江別市教育委員会 1981 東野幌4・元江別3(江別市文化財調査報告書Ⅻ)  
菊地実「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題」 研究紀要4 1987 群馬県埋蔵文化財調査事業団(働)
- 註21 註8に同じ
- 註22 註20に同じ
- 註23 註20に同じ
- 註24 註12に同じ
- 註25 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1986 北方遺跡(北九州市埋蔵文化財調査報告書第48集)
- 註26 田村壯一「陥し穴状遺構の形態と時期について」 紀要Ⅶ 1987 若手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター(働)
- 註27 註26に同じ
- 註28 註19に同じ
- 註29 町田洋「縄文時代の環境—火山活動—」 縄文文化の研究1 1982 有山閣
- 註30 井上裕弘氏の御教示による。福岡県教育委員会 1978 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集下巻
- 註31 註19に同じ

※地名表の出典は各報告書により、未報告のものは割愛した。

## V 総 括

広末・安永遺跡は、弥生時代中期初頭～中葉の住居跡・貯蔵穴・土壙・溝を主体とする集落遺跡である。以下、判明した事実を箇条書きにしてまとめたい。

1. 検出した遺構には、落し穴・住居跡・建物跡・貯蔵穴・土壙・溝・井戸・横穴式石室墳・土壙墓・落込み・暗渠等で、バラエティに富んでいる。
2. 出土遺物には、弥生土器・須恵器・土師器・青磁・磁器・陶器等の他に、石鏃・打製石斧・磨製石斧・石剣・石包丁・砥石・すり石・凹石・台石等の石器、土製品（土錘）・石製垂飾品、銅製品（銅銭・簪）等がある。
3. 弥生時代の住居跡は1～2基の貯蔵穴を伴っているが、弥生期の遺構は中期中葉で終焉し、短期間の集落といえる。
4. 古墳は石室が破壊されているが、単室の横穴式石室であり、墓道が谷部に進展する。
5. 縄文時代に帰属すると考えられる落し穴の発見は、京築地方の最初の発見となった。

以上を取りまとめると、縄文時代狩猟場 → 弥生時代集落 → 古墳時代墳墓群 → 奈良時代墓地群 → 近現代集落の変遷がみられた。

末筆となったが、厳寒から猛暑に至るまで発掘調査に従事して頂いた地元作業員の方々に改めて感謝したい。また、安永遺跡と広末遺跡が完全に整合し得たのは、故酒井仁夫氏の調査意欲であり、故人の冥福をお祈りします。



在りし日の酒井さん

# 圖 版



1 広末・安永遺跡周辺航空写真（西上空から）

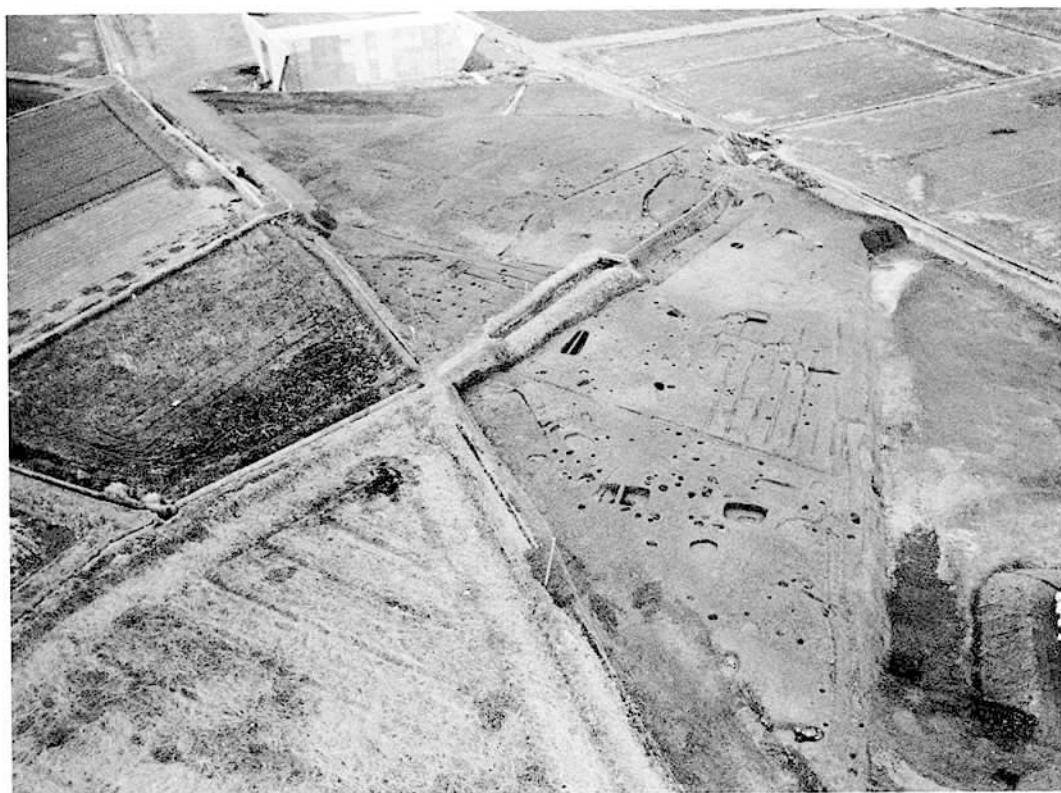


2 広末・安永遺跡周辺航空写真（東上空から）

図版2



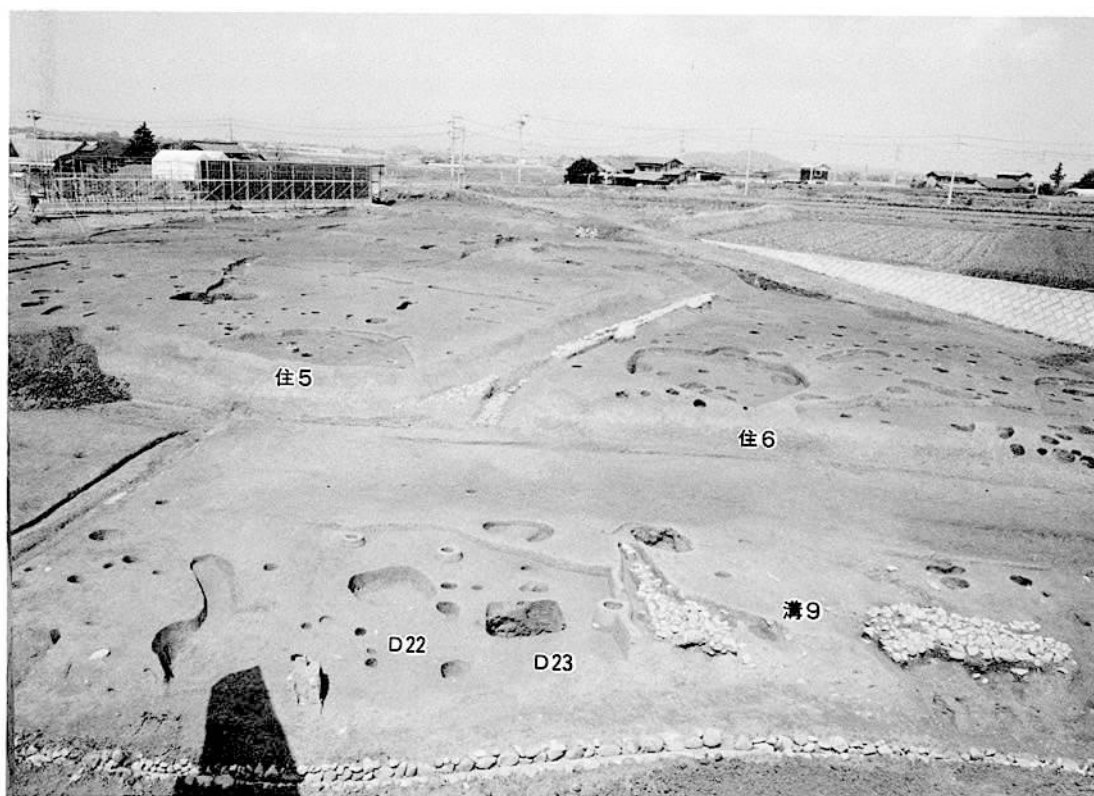
1 水路部分空中写真（東から）



2 水路部分空中写真（西から）



1 水路東半部全景（西から）



2 水路東半部全景（東から）

図版4



1 1号住居跡（東から）



2 2号住居跡（東から）





1 3号住居跡（東から）



2 石包丁出土状況



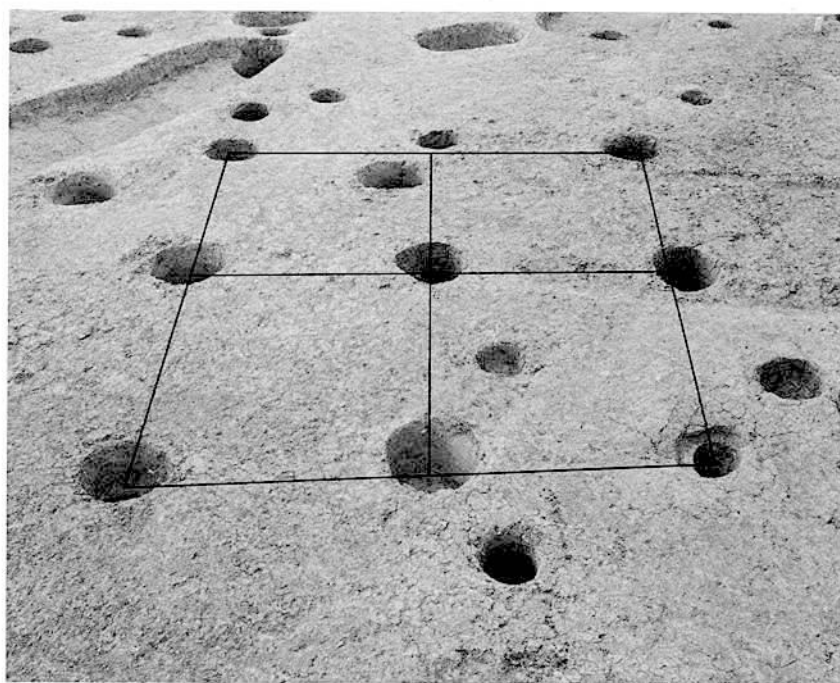
3 4号住居跡（西から）



1 5号住居跡（北から）



2 6号住居跡（北から）



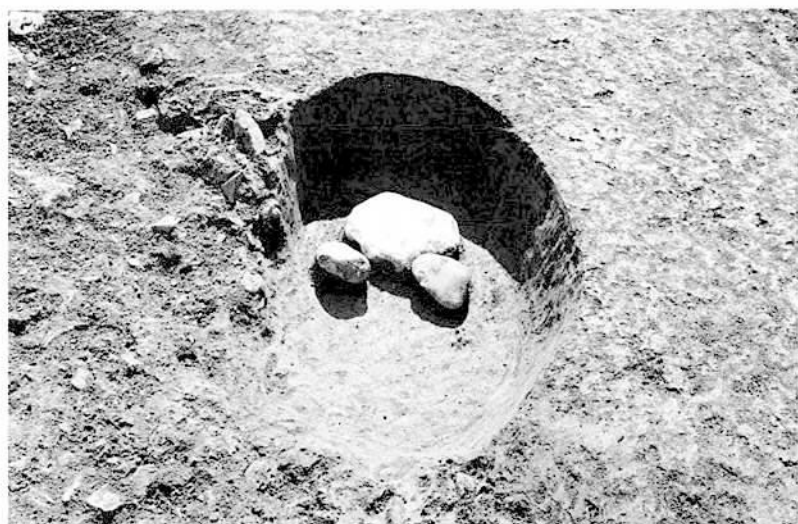
1 1号建物跡（北から）



2 水路西側貯蔵穴・土壙群（北から）



1 1号貯蔵穴（西から）



2 2号貯蔵穴（北から）



3 3号貯蔵穴（南から）



1 4号貯蔵穴 (東から)



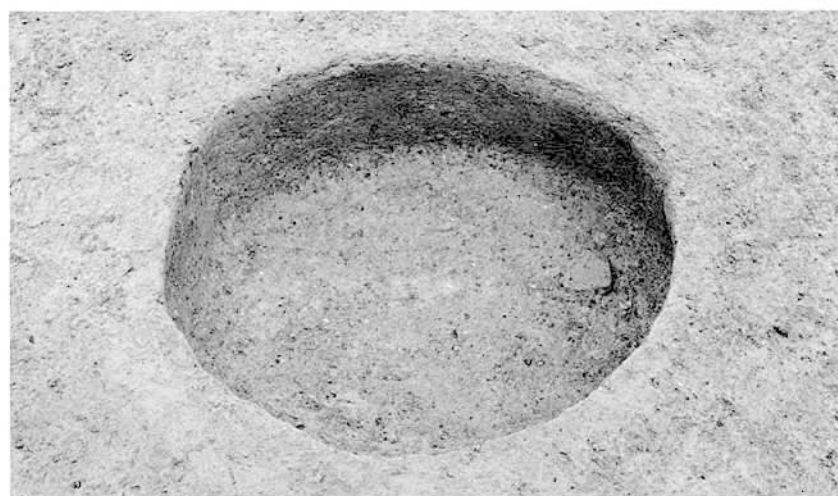
2 5号貯蔵穴 (東から)



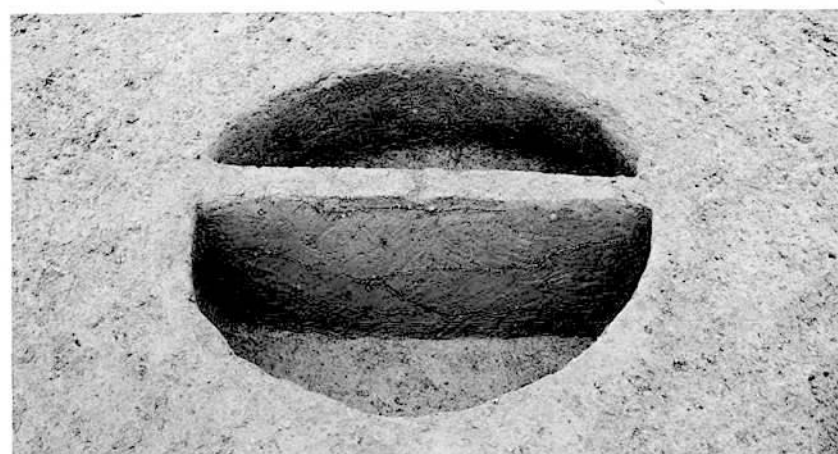
3 6号貯蔵穴 (北から)



1 7号貯蔵穴（西から）



2 8号貯蔵穴（東から）



3 8号貯蔵穴土層断面  
（東から）



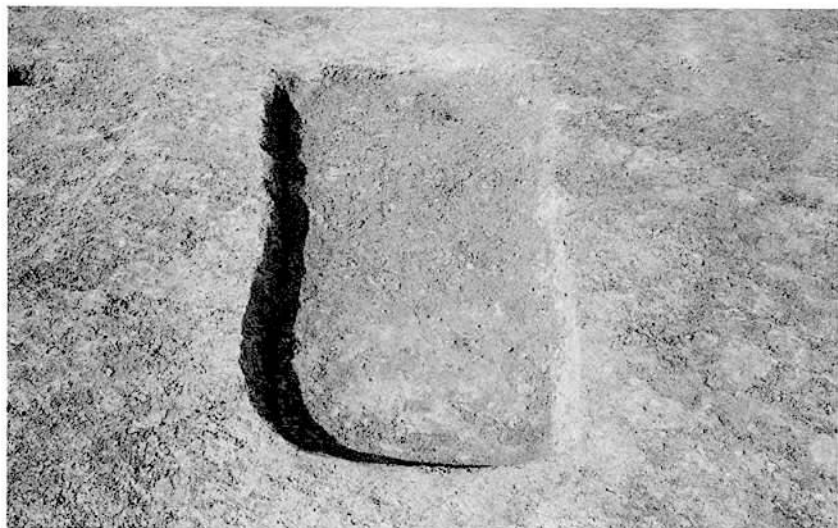
1 9号貯蔵穴 (西から)



2 10号貯蔵穴 (東から)



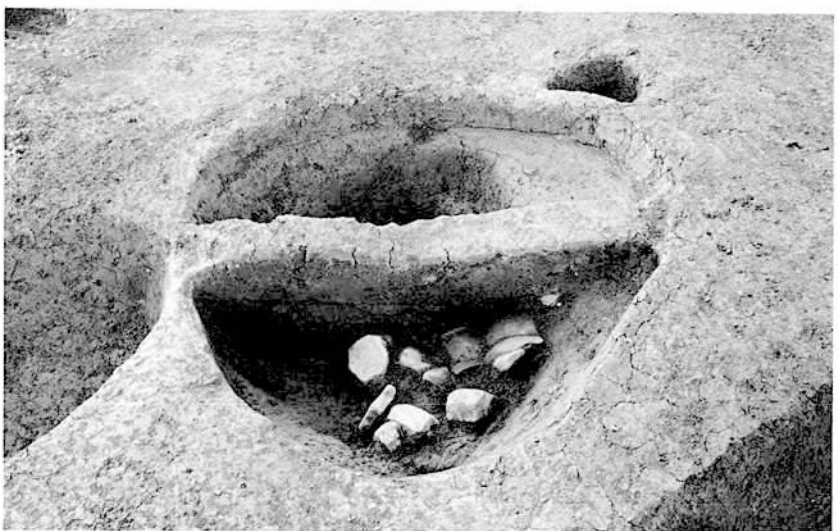
3 11号貯蔵穴 (東から)



1 12号貯蔵穴 (南から)

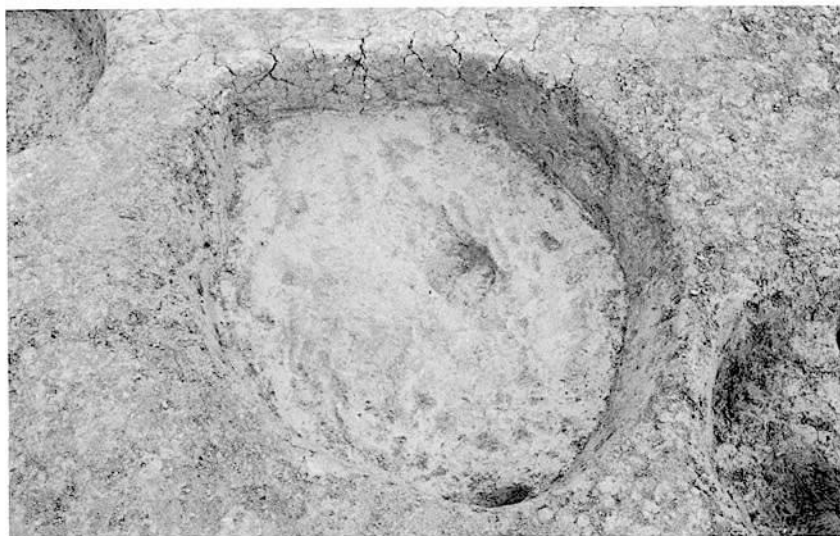


2 13号貯蔵穴 (南から)



3 13号貯蔵穴土層断面  
(東から)





1 14号貯蔵穴 (南から)



2 15号貯蔵穴 (東から)



3 16号貯蔵穴 (西から)



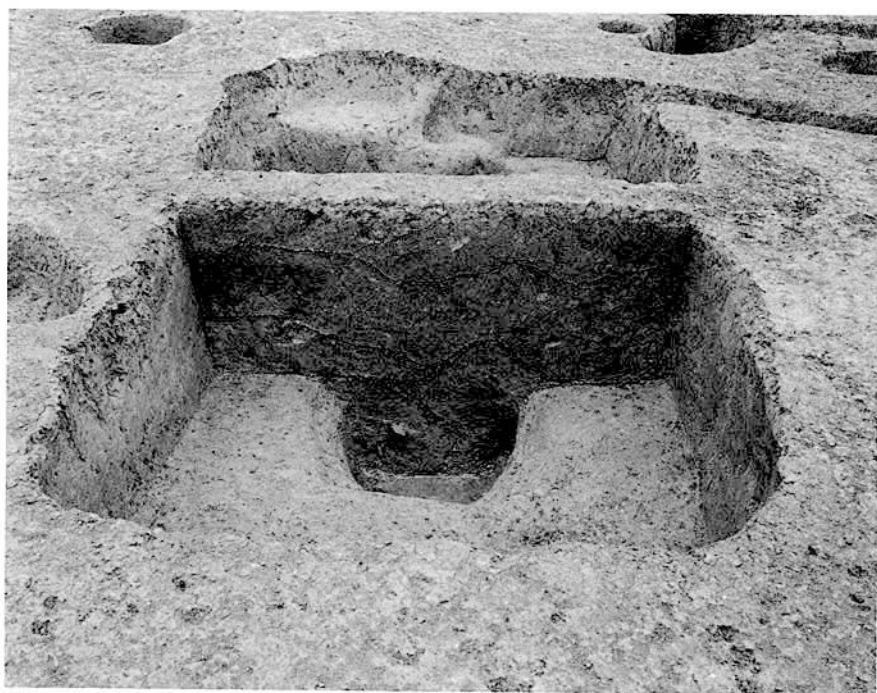
1 17・18号貯蔵穴（東から）



2 1号土壙（東から）



1 2号土壙（西から）



2 2号土壙土層断面（西から）



1 3号土壇（西から）



2 4号土壇（北から）



3 5号土壇（東から）



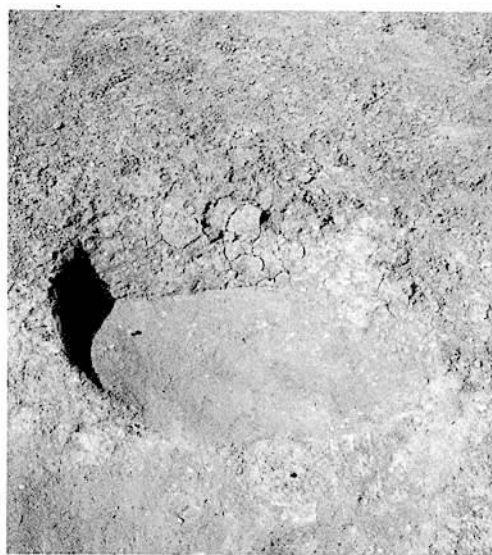
1 6号土壙（東から）



2 7号土壙（北から）



3 8号土壙（東から）

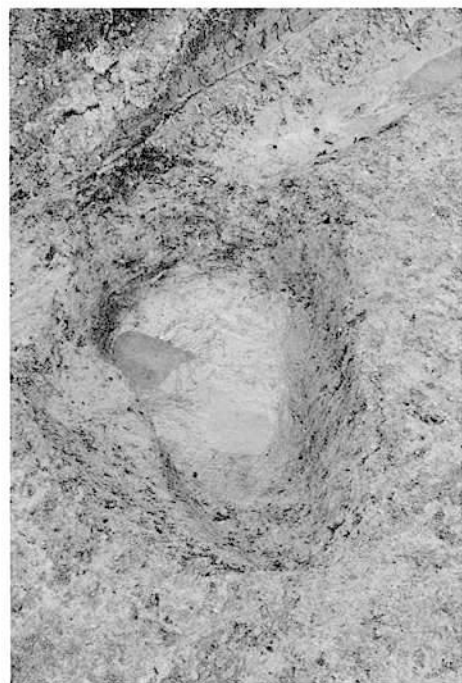


4 10号土壙（南から）

図版18



1 13号土壙（北から）



2 14号土壙（東から）



3 16号土壙（東から）



1 17号土壙（北から）



2 19号土壙（西から）



3 20号土壙（東から）



1 22号土壙（東から）



2 26号土壙（北から）



3 27号土壙（東から）





1 1号落とし穴 (北から)



2 2号落とし穴 (北から)



3 3号落とし穴 (北から)



1 調査区西端部全景（東から）



2 4号落とし穴（北から）

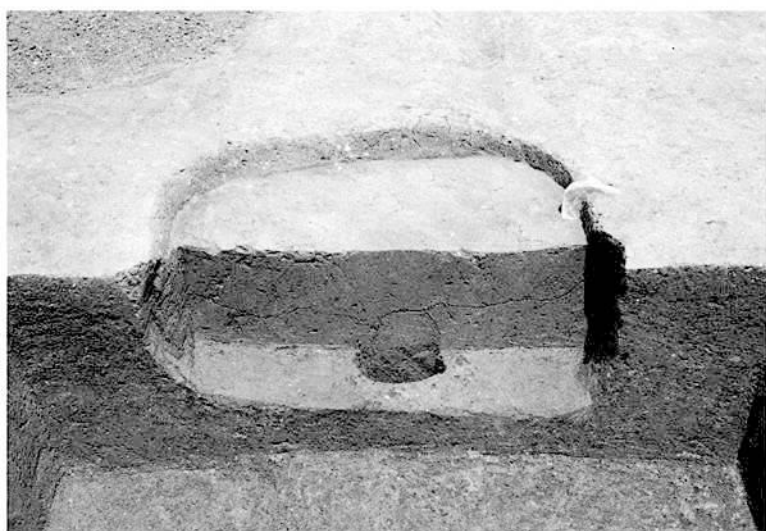


3 5号落とし穴（北から）

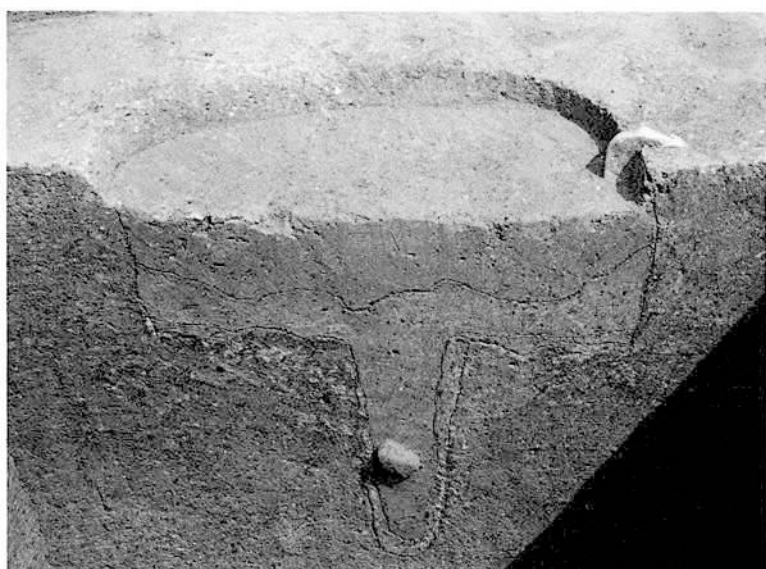
1 6号落とし穴検出状況



2 6号落とし穴土層断面①



3 6号落とし穴土層断面②





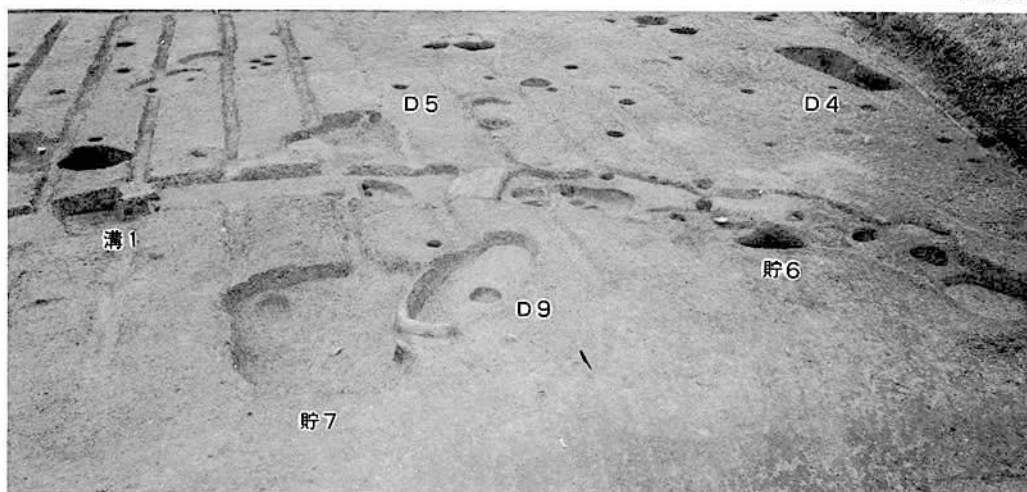
1 調査区東端部全景（東から）



2 1号井戸（北から）



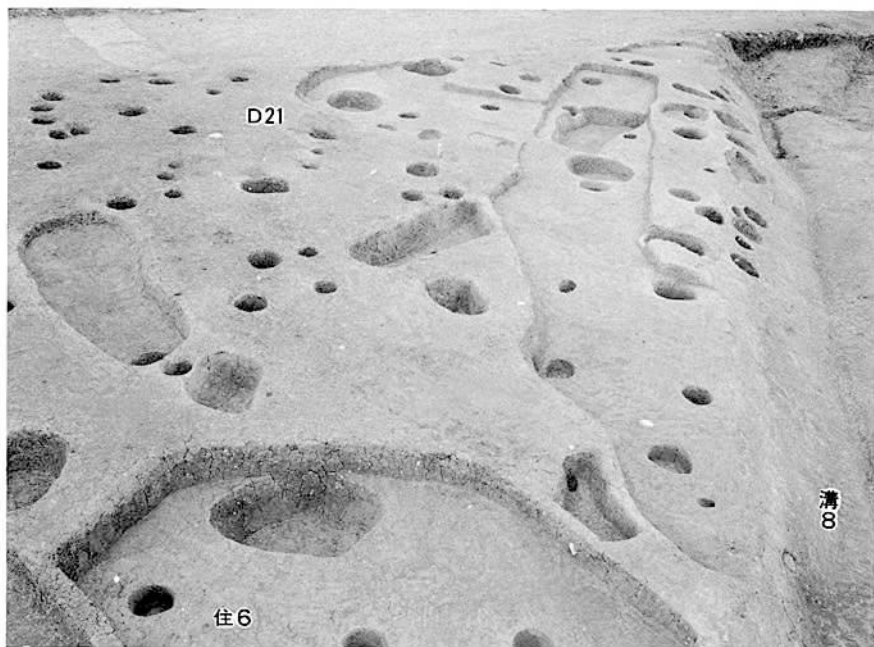
3 2号井戸（東から）



1 1号溝 (南から)



2 3号溝 (北から)



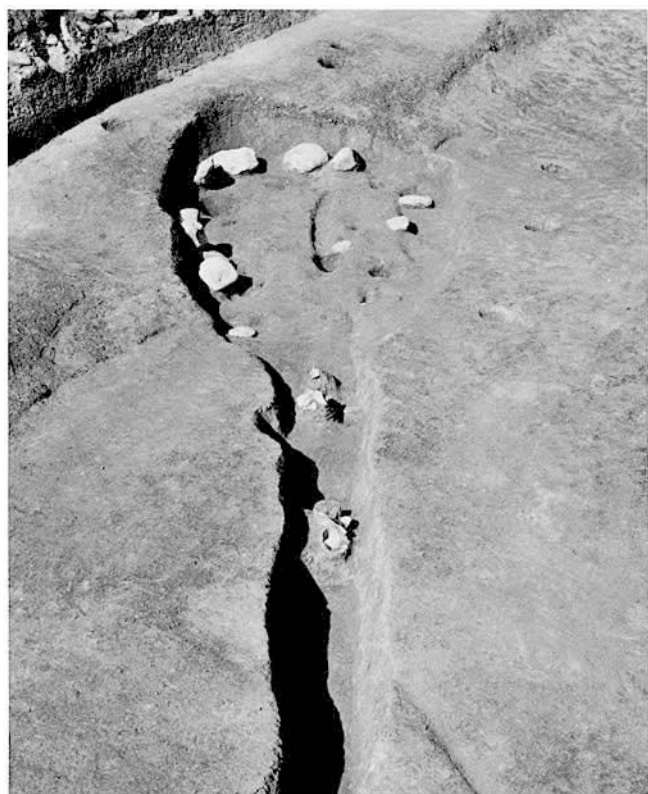
3 8号溝 (西から)



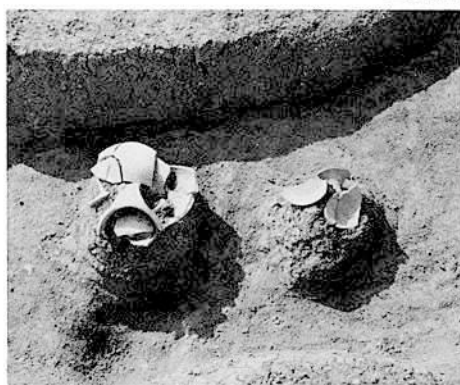
1 10号溝土層断面（西から）



2 14・15号溝（北から）



1 1号墳 (南から)



2 遺物出土状況①



3 遺物出土状況②



4 2号墳 (南から)



1 1号土壙墓 (西から)



2 2号土壙墓 (南から)

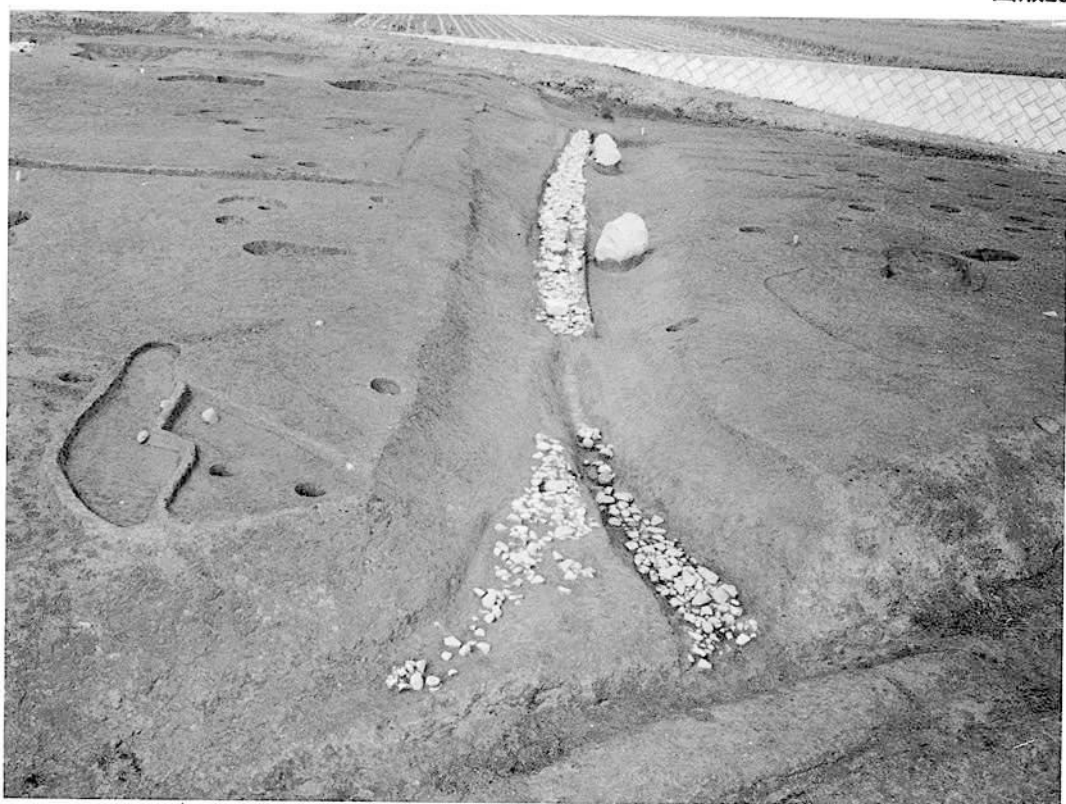


3 3号土壙墓 (南から)



4 4号土壙墓 (南から)





1 暗渠 (南から)



2 暗渠 (北から)



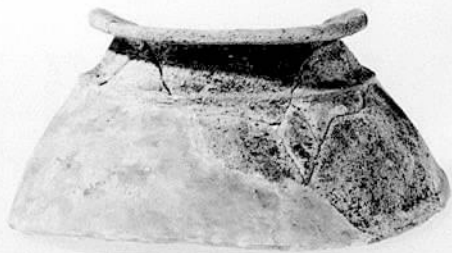
3 暗渠完掘状況 (南から)



2



1 2



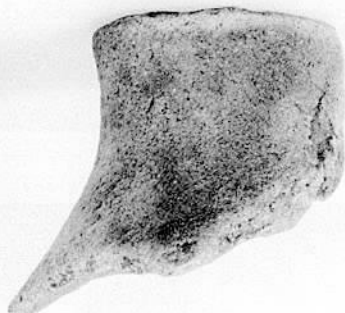
4



8



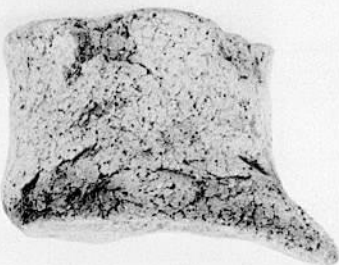
10



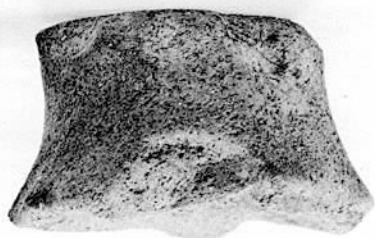
22



23



24



25



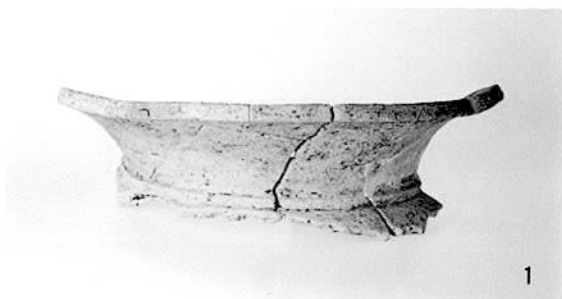
3

4

1 1号住居跡出土土器  
4 5号住居跡出土土器

2 2号住居跡出土土器

3 3号住居跡出土土器



1



7



6



9

1



10



2



5



8



6



4

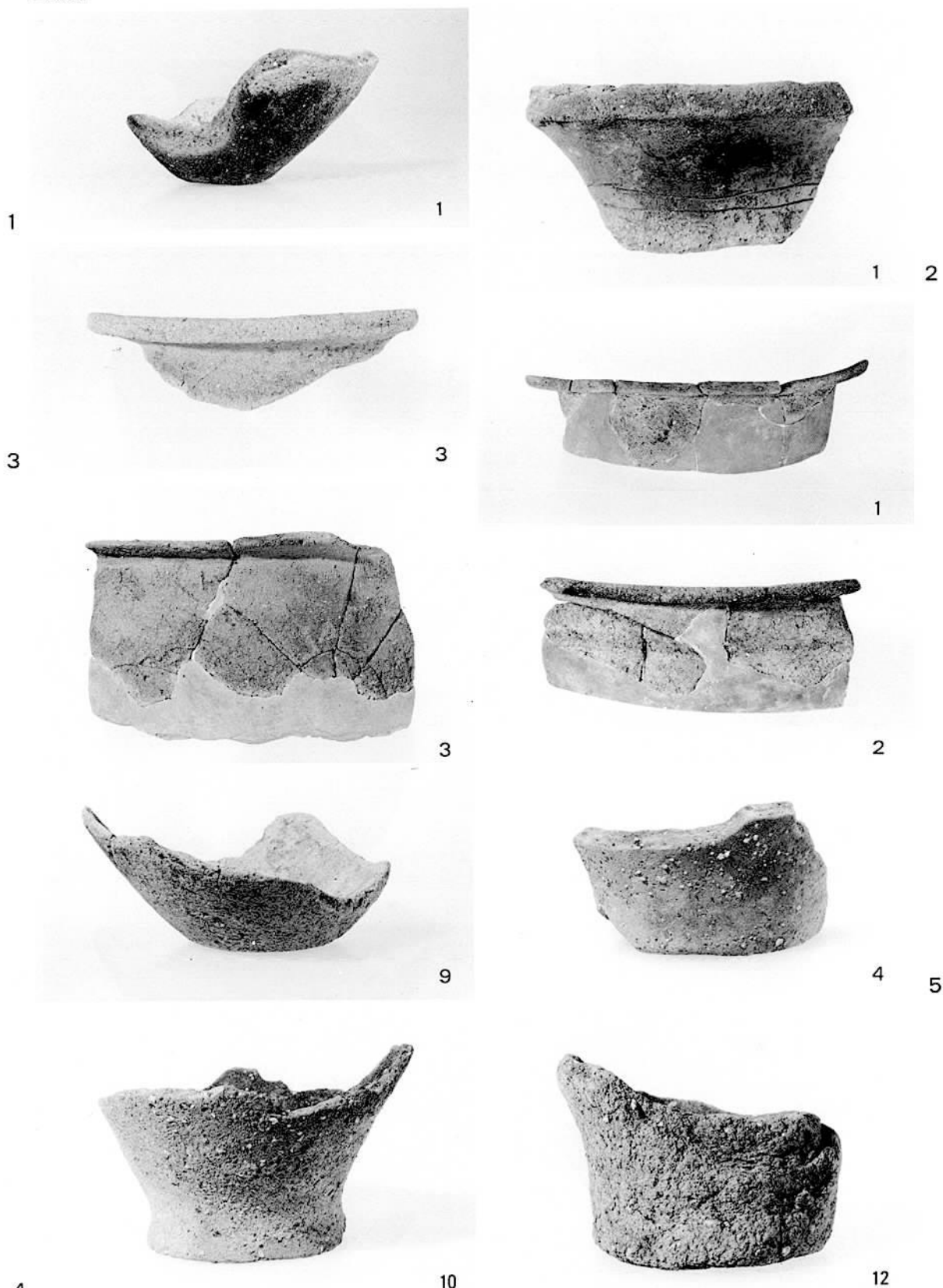
3

2

1 1号贮藏穴出土土器

2 3号贮藏穴出土土器

3 4号贮藏穴出土土器



4  
1 5号贮藏穴出土土器  
4 13号贮藏穴出土土器

10  
2 7号贮藏穴出土土器  
5 14号贮藏穴出土土器

3 9号贮藏穴出土土器

12



2



4

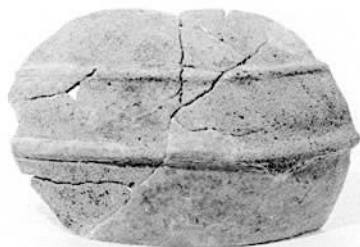
1



1



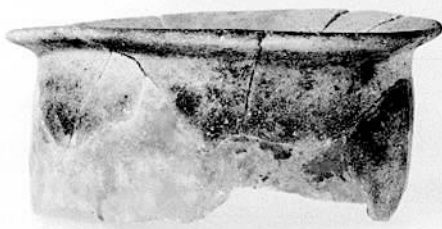
2



1



2



1



6

2



3



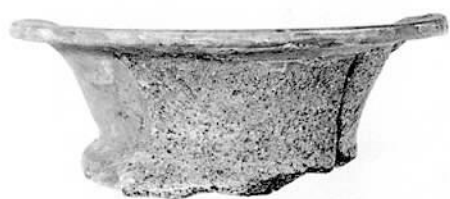
5

3

1 16号贮藏穴出土土器

2 17号贮藏穴出土土器

3 18号贮藏穴出土土器



1



6



1



3



7



1



9

1



4



6



29

2

1 3号土坑出土土器

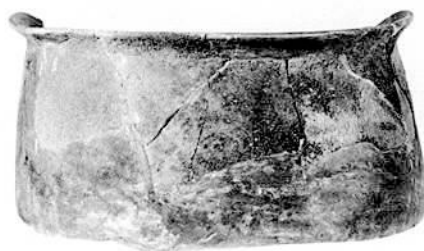
2 4号土坑出土土器①



9



24



10



45

1



2

2



3

3



1



8



4

4



1

5

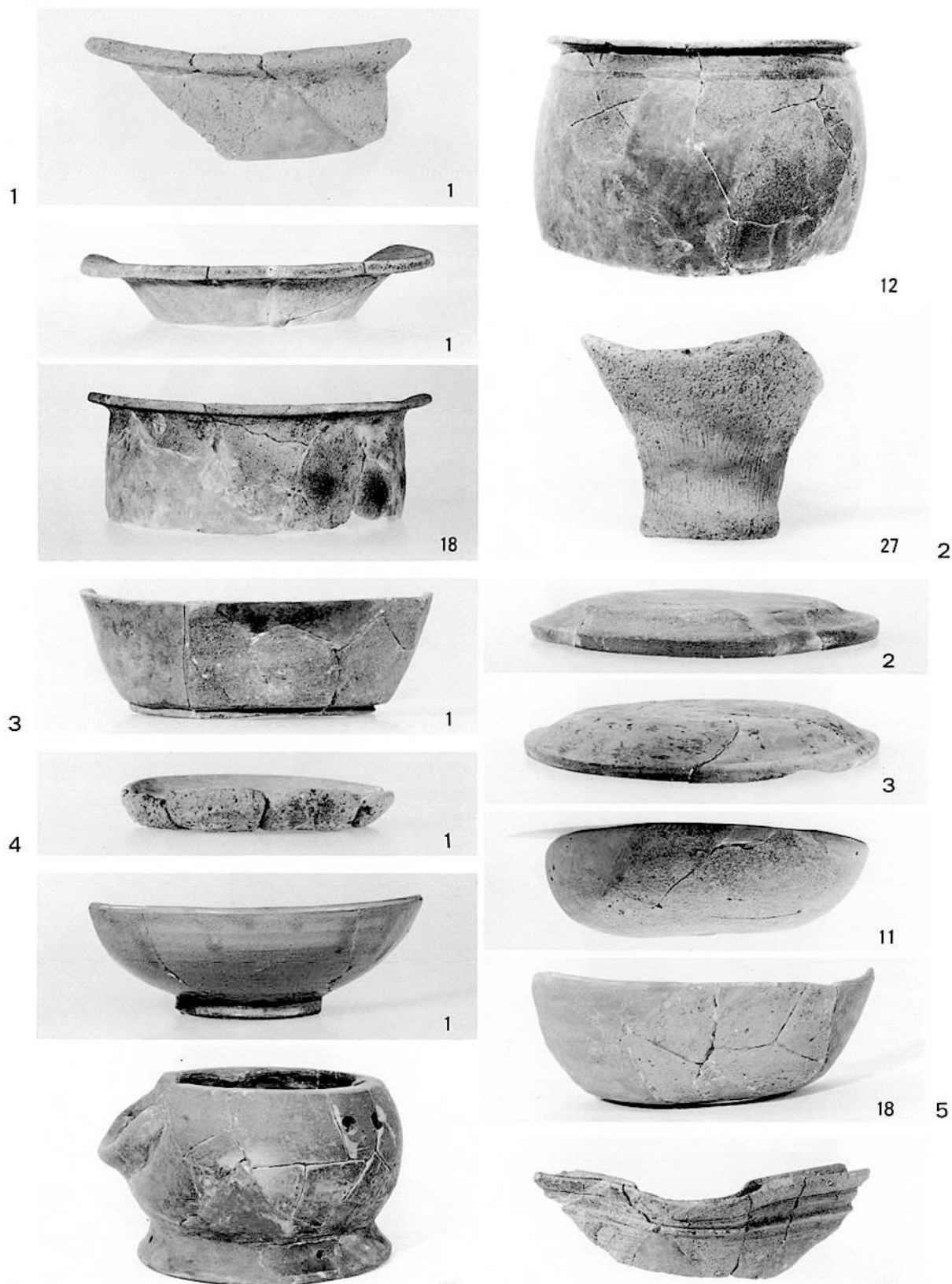
1 4号土壙出土土器②

2 5号土壙出土土器

3 14号土壙出土土器

4 18号土壙出土土器

5 24号土壙出土土器

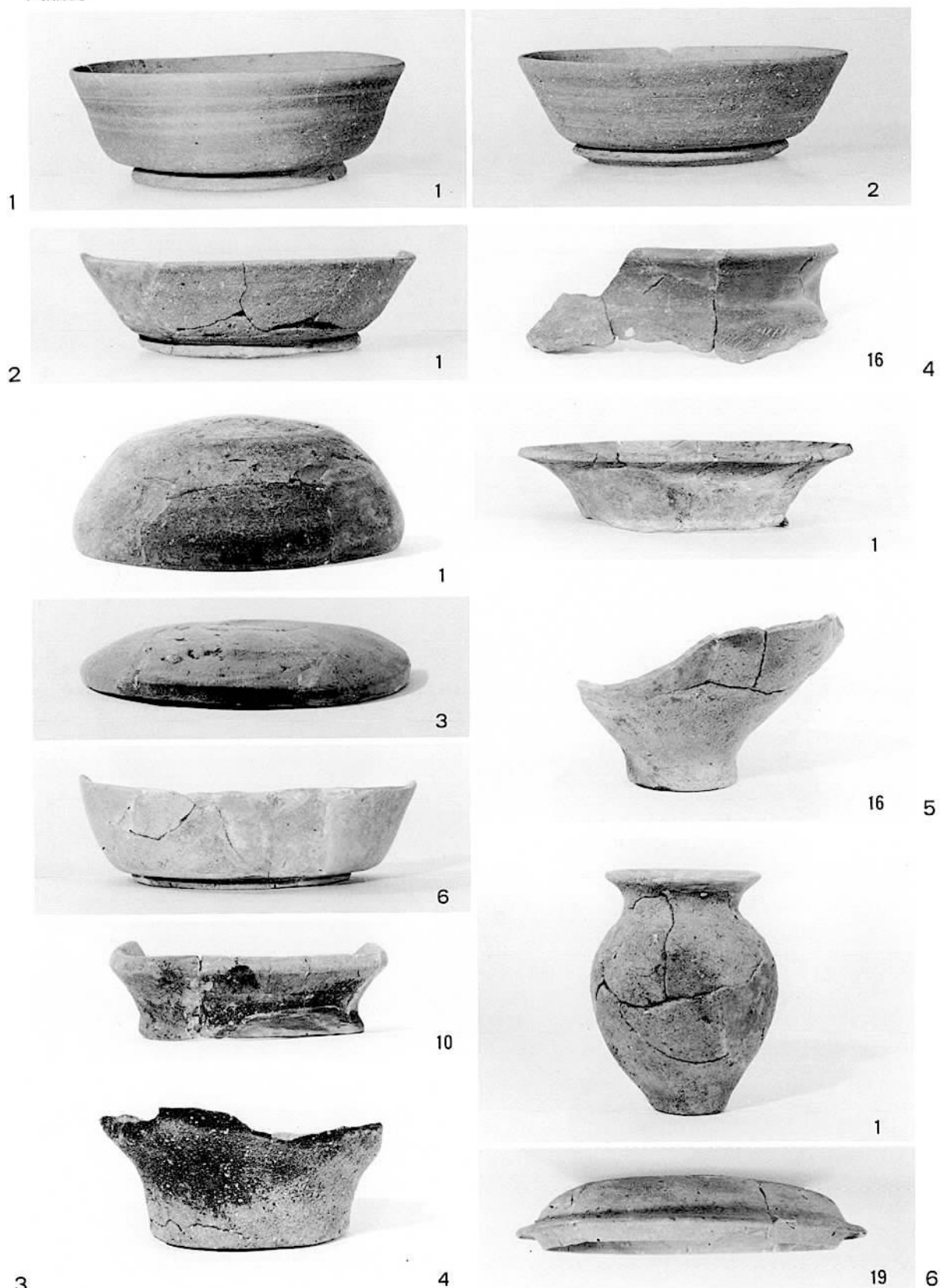


1 2号沟出土土器 2 3号沟出土土器 3 8号沟出土土器 4 9号沟出土土器  
 5 10号沟出土土器 6 14号沟出土土器 7 15号沟出土土器





1 1号墳出土土器 2 2号墳出土土器



1 1号土壙墓出土土器  
 2 4号土壙墓出土土器  
 3 落込み出土土器  
 4 暗渠出土土器  
 5 pit出土土器  
 6 その他出土の土器①



7



20



3



21

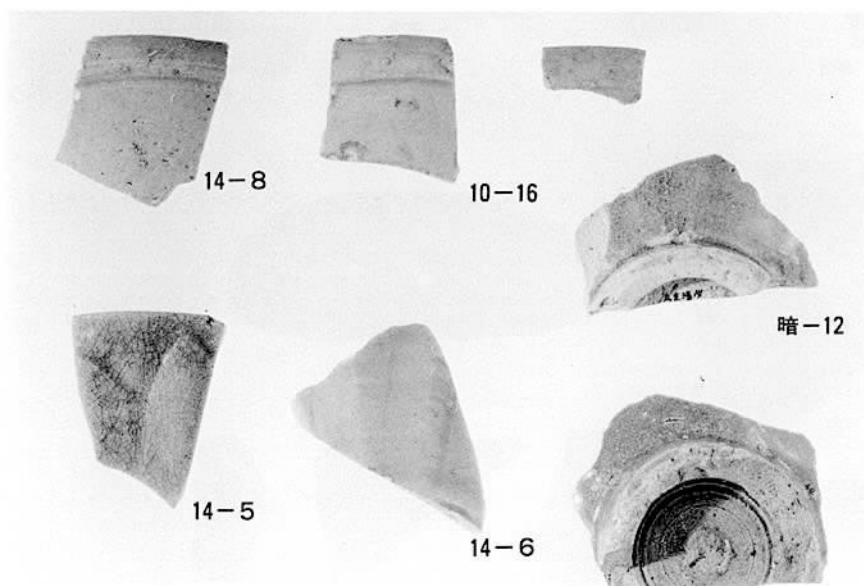


27



1

1



14-8

10-16

暗-12

14-5

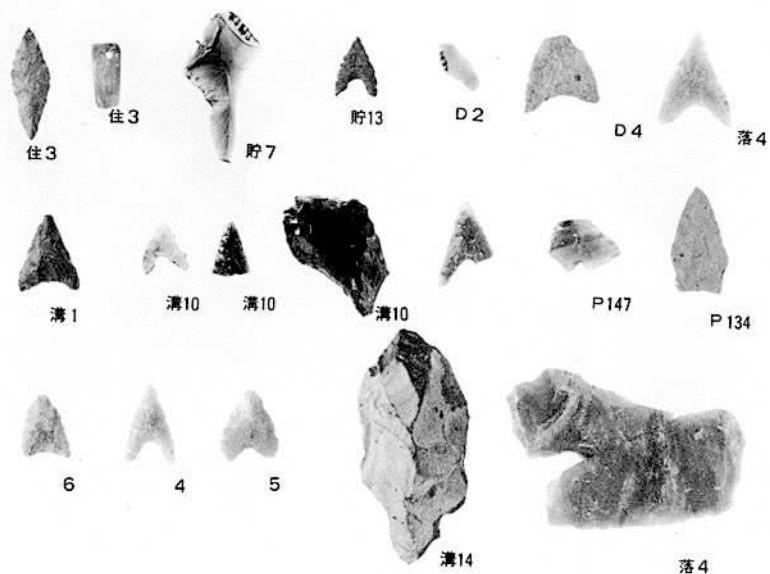
14-6

14-7

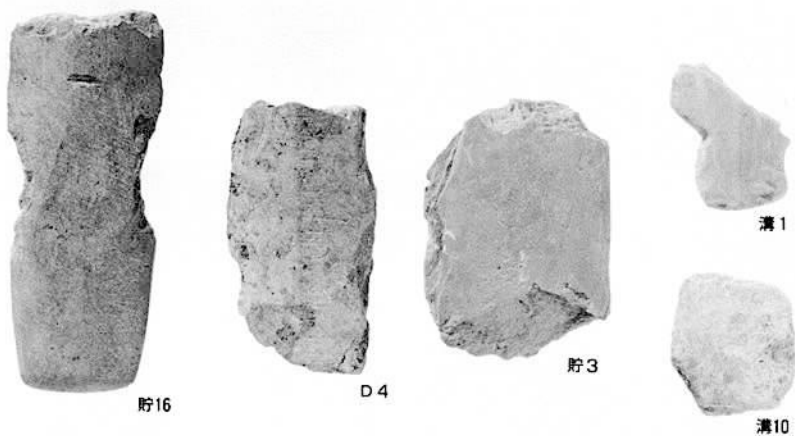
2

1 その他出土の土器②

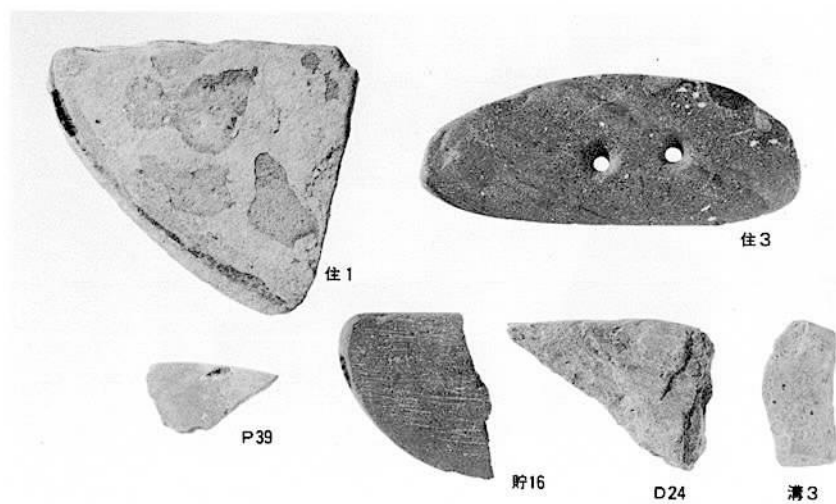
2 溝・暗渠出土青磁



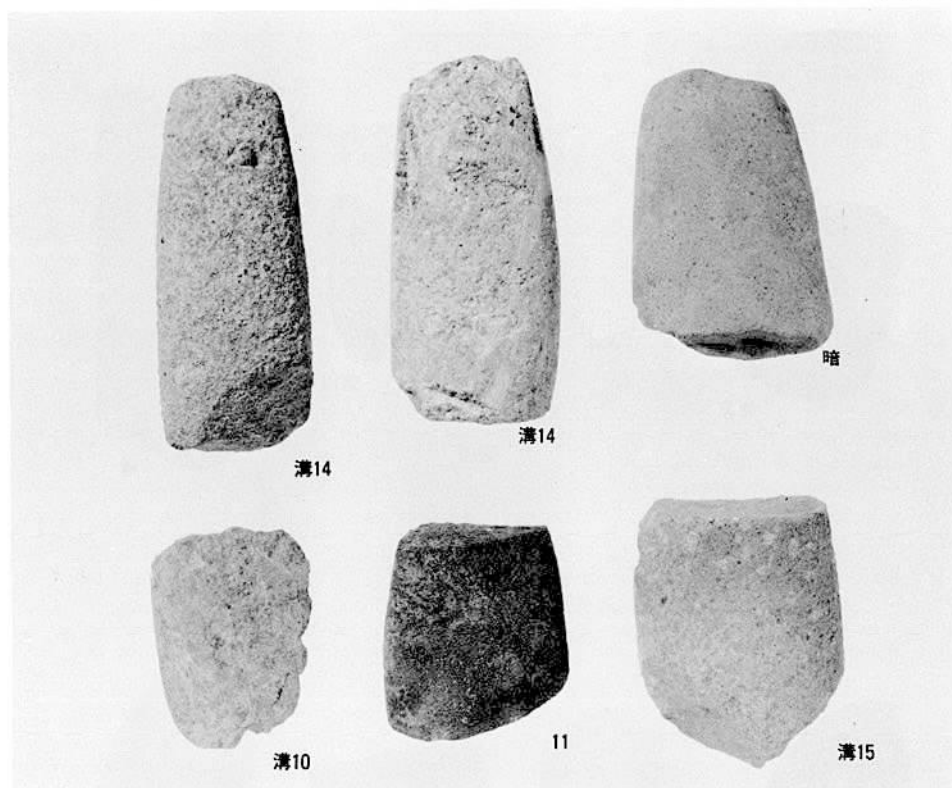
1 広末・安永遺跡出土石器①



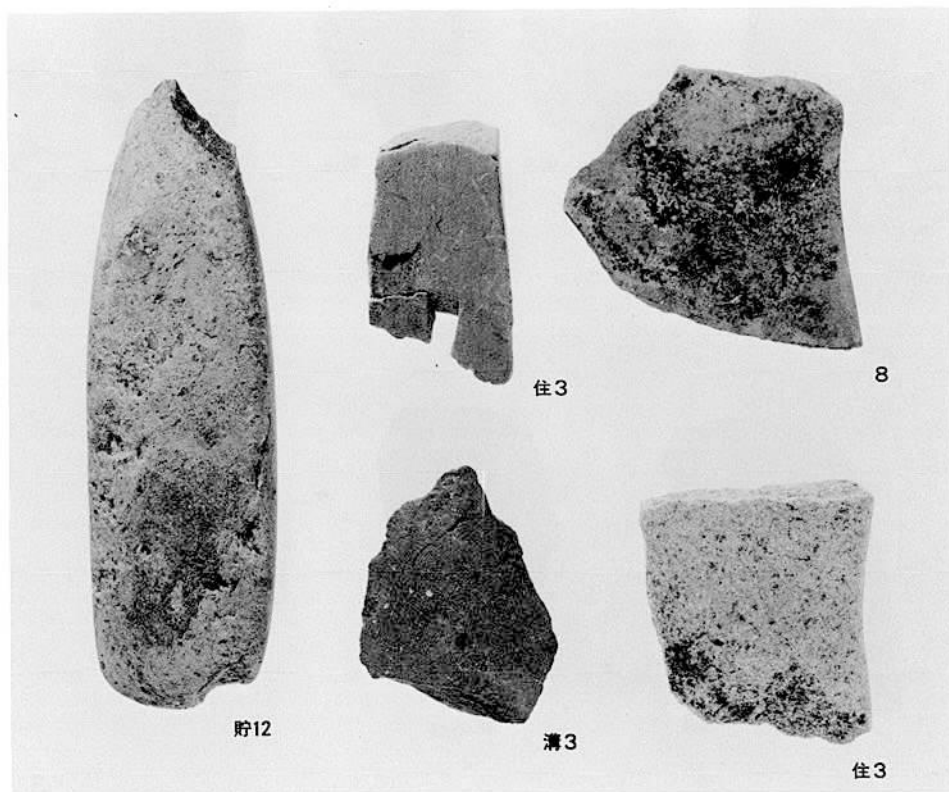
2 広末・安永遺跡出土石器②



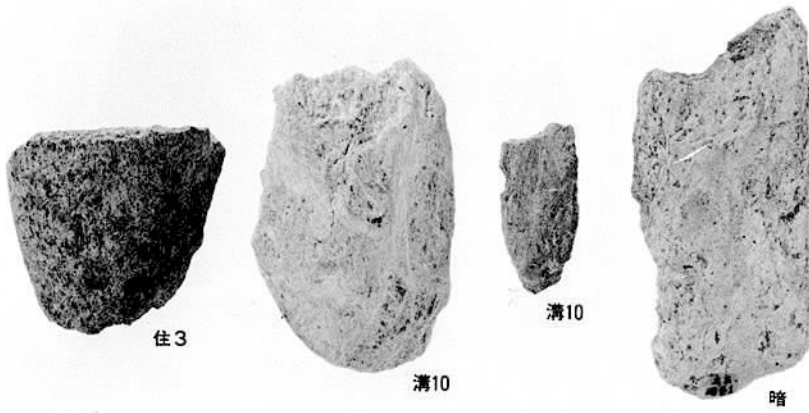
3 広末・安永遺跡出土石器③



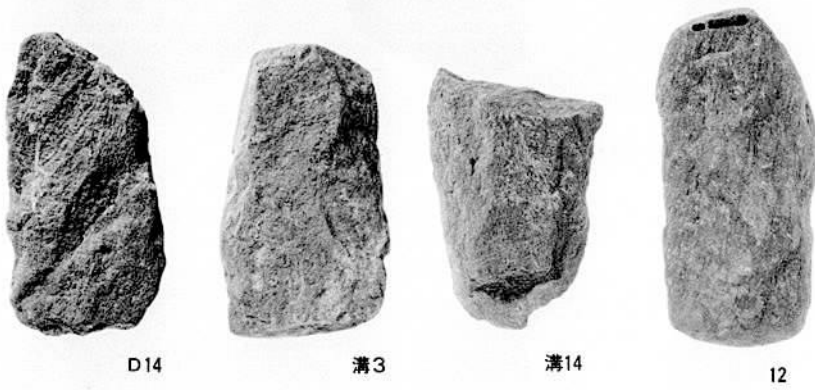
1 広末・安永遺跡出土石器④



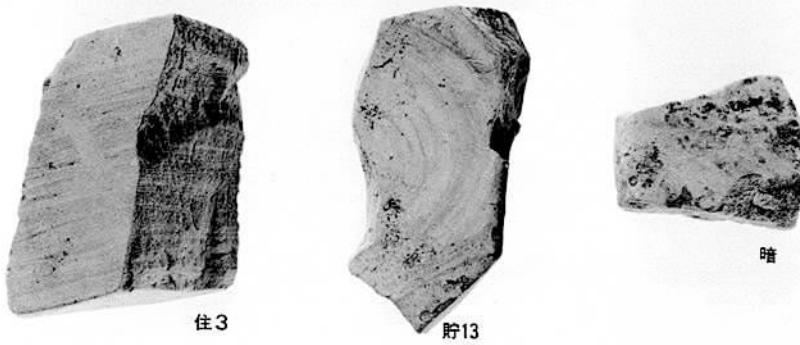
2 広末・安永遺跡出土石器⑤



1 広末・安永遺跡出土石器⑥



2 広末・安永遺跡出土石器⑦



3 広末・安永遺跡出土石器⑧



D4

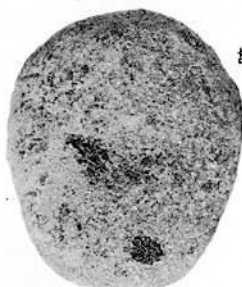
D4



暗6



薄14



暗



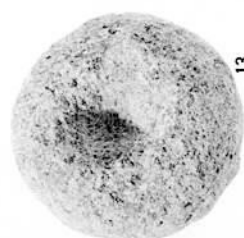
暗

1

2



住3



13



10

3

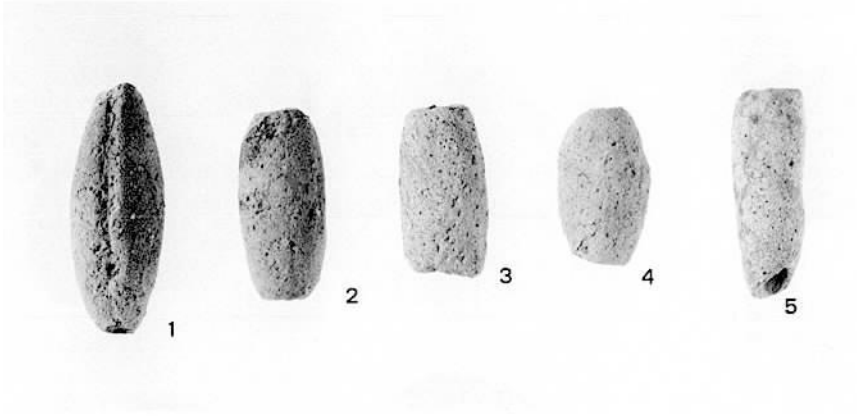
4

1 広末・安永遺跡出土石器⑨

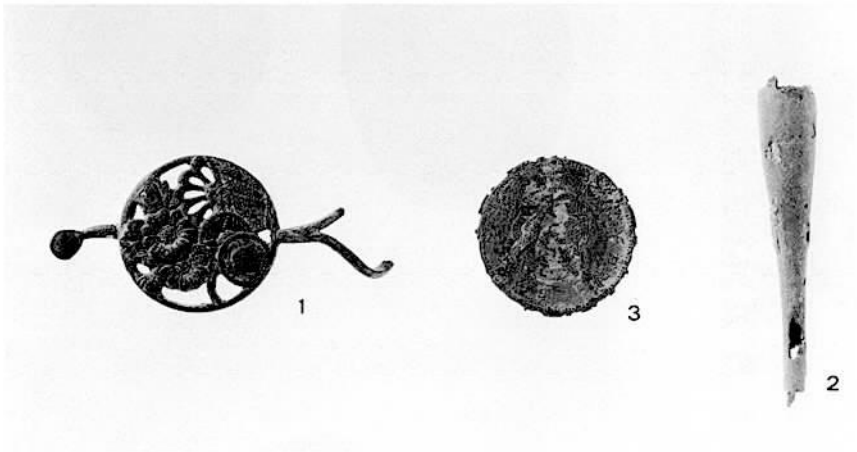
3 広末・安永遺跡出土石器⑪

2 広末・安永遺跡出土石器⑩

4 広末・安永遺跡出土石器⑫



1 土壙・溝出土土錘



2 溝・暗渠出土銅製品



3 遺跡周辺採集五輪塔



福岡県行政資料

分類番号	所属コード
J H	2 1 3 3 0 5 1
登録年度	登録番号
H 2	3

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告－5－

平成3年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1-8

椎田バイパス関係  
埋蔵文化財調査報告

— 5 —

広末・安永遺跡

付 図



付 図 広末・安永遺跡遺構配置図(1/400)